

# 京都府遺跡調査概報

## 第 75 冊

1. 松ヶ崎遺跡
2. 京都縦貫自動車道関係遺跡
3. 長岡京跡左京第366次・中福知遺跡

1 9 9 7

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、通常発掘調査成果を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成7・8年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、京都府道路公社の依頼を受けて行った松ヶ崎遺跡、京都縦貫自動車道関係遺跡(宮津谷地区古墳状隆起、桑原口遺跡、大俣城跡)、長岡京跡左京第366次・中福知遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、網野町教育委員会・宮津市教育委員会・舞鶴市教育委員会・向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・大山崎町教育委員会・(財)京都市埋蔵文化財研究所などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理 事 長 樋 口 隆 康

## 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 松ヶ崎遺跡
2. 京都縦貫自動車道関係遺跡(宮津谷地区古墳状隆起、桑原口遺跡、大俣城跡)
3. 長岡京跡左京第366次・中福知遺跡

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 松ヶ崎遺跡	竹野郡網野町大字木津	平8.5.8～ 8.9	京都府土木建 築部	村田 和弘
2. 京都縦貫自動車道関係遺跡 桑原口古墳群	宮津市字喜多	平7.6.15～ 7.12	京都府道路公 社	奥村清一郎 尾崎 昌之
城山谷古墳群	宮津市字小田地内	平7.5.23～ 6.2		石井 清司
小田大谷古墳	宮津市字小田地内	平7.6.5～ 6.8		森島 康雄
小田蛭子谷古墳	宮津市小田地内	平7.6.7～ 6.21		大岩 洋一
桑原口遺跡	宮津市今福字桑原口	平7.6.23～ 12.15		
大俣城跡	舞鶴市大字大俣	平6.9.14～ 平7.9.8		
3. 長岡京跡左京第366次・中福 知遺跡	向日市上植野町池ノ尻・大門 ・釜桂・樋爪	平7.4.24～ 12.22		京都府土木建 築部住宅課

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

# 目 次

1. 松ヶ崎遺跡発掘調査概要-----	1
2. 京都縦貫自動車道関係遺跡平成7年度発掘調査概要-----	13
(1) 宮津谷地区古墳状隆起-----	15
(2) 桑原口遺跡-----	18
(3) 大俣城跡-----	31
付載 大俣城跡出土の炭窯と炭焼きについて-----	67
3. 長岡京跡左京第366次・中福知遺跡発掘調査概要-----	77
付載1 平安時代後期井戸 S E 36663寄生虫卵・花粉分析・種実同定-----	112
付載2 奈良時代自然流路 S X 36604及び杭列 S X 36675検出杭材の樹種同定-----	121
付載3 古墳時代前期・土坑 S K 36672長岡京跡出土植物遺体の植物珪酸体分析-----	123
付載4 古墳時代前期堆積層5・13層における花粉分析-----	125

# 挿 図 目 次

1. 松ヶ崎遺跡	
第1図	遺跡分布図-----1
第2図	調査地位置図-----3
第3図	調査トレンチ配置図-----4
第4図	第3トレンチ遺構図-----5
第5図	出土遺物実測図(1)-----6
第6図	出土遺物実測図(2)-----7
第7図	弥生土器拓影-----8
第8図	出土遺物実測図(3)-----9
第9図	出土木製品(1)-----9
第10図	出土木製品(2)-----10
第11図	過去の調査による遺跡範囲と今回の調査地-----11
第12図	今回の調査成果による遺跡範囲推定図-----11
2. 京都縦貫自動車道関係遺跡	
第13図	調査地位置図-----14
(1)宮津谷地区古墳状隆起	
第14図	桑原口古墳群位置図-----15
第15図	城山谷古墳群・小田大谷古墳位置図-----16
第16図	小田蛭子谷古墳位置図-----17
(2)桑原口遺跡	
第17図	調査地周辺遺跡分布図-----19
第18図	宮津の埋谷接峰面図-----20
第19図	桑原口遺跡トレンチ配置図-----20
第20図	桑原口遺跡B地区平面図-----21
第21図	S H07実測図-----22
第22図	S H06実測図-----22
第23図	S H04実測図-----23
第24図	S B26実測図-----24
第25図	S X02遺物・流木出土状況-----25
第26図	桑原口遺跡出土遺物実測図(1)-----27

第27図	桑原口遺跡出土遺物実測図(2)	-----	28
第28図	桑原口遺跡出土遺物実測図(3)	-----	29
<b>(3)大俣城跡</b>			
第29図	大俣城跡と周辺の遺跡	-----	32
第30図	調査地配置図	-----	34
第31図	A地区地形測量図(調査前)	-----	31
第32図	A地区地形測量図(調査後)	-----	37
第33図	縦断面図	-----	39
第34図	横断面図	-----	39
第35図	主郭・帯曲輪平面図	-----	40
第36図	S B 01平面図・断面図	-----	41
第37図	S B 02平面図・断面図	-----	41
第38図	S B 03・S D 01・S A 04平面図・断面図	-----	42
第39図	S B 04・S D 02平面図・断面図	-----	43
第40図	帯曲輪盛り土部分土層断面図	-----	44
第41図	曲輪Ⅲ・土塁・竪堀4～6(畝状竪堀)平面図	-----	46
第42図	曲輪Ⅳ・Ⅴ平面図	-----	47
第43図	虎口平面図	-----	48
第44図	竪堀4～6(畝状竪堀)断面図	-----	49
第45図	横堀・土塁平面図	-----	50
第46図	横堀・土塁断面図	-----	51
第47図	大俣城跡出土遺物実測図(1)	-----	52
第48図	大俣城跡出土遺物実測図(2)	-----	53
第49図	大俣城跡出土遺物実測図(3)	-----	54
第50図	大俣城跡出土遺物実測図(4)	-----	55
第51図	大俣城跡出土遺物実測図(5)	-----	56
第52図	大俣城跡出土遺物実測図(6) 金属製品	-----	58
第53図	大俣城跡出土遺物実測図(7) 銭貨	-----	59
第54図	大俣城跡出土遺物実測図(8) 石製品	-----	60
第55図	中世墓平面図・断面図	-----	61
第56図	A地区中世墓出土遺物実測図	-----	61
第57図	A'地区遺構平面図	-----	62
第58図	A'地区出土遺物実測図	-----	63
<b>3. 長岡京跡左京第366次・中福知遺跡</b>			
第59図	調査地位置図	-----	77

第60図	トレンチ配置図-----	78
第61図	第1トレンチ実測図-----	79
第62図	出土遺物実測図(1)-----	80
第63図	第2トレンチ実測図-----	80
第64図	第3トレンチ実測図-----	81
第65図	第4トレンチ遺構配置図-----	82
第66図	第4トレンチ土層断面図-----	83
第67図	第4トレンチ井戸S E 36668実測図-----	84
第68図	第4トレンチ井戸S E 36663実測図-----	84
第69図	第4トレンチ井戸S E 36660実測図-----	85
第70図	出土遺物実測図(2)-----	86
第71図	出土遺物実測図(3)-----	87
第72図	出土遺物実測図(4)-----	88
第73図	出土遺物実測図(5)-----	89
第74図	出土遺物実測図(6)-----	90
第75図	出土遺物実測図(7)-----	91
第76図	出土遺物実測図(8)-----	92
第77図	第4トレンチ杭列実測図-----	93
第78図	第4トレンチ杭列断ち割り断面図-----	94
第79図	出土遺物実測図(9)-----	95
第80図	出土遺物実測図(10)-----	96
第81図	出土遺物実測図(11)-----	96
第82図	第4トレンチ北壁土層断面図-----	97
第83図	第4トレンチ東壁土層断面図-----	97
第84図	第4トレンチ古墳時代前期遺構配置図-----	98
第85図	第4トレンチ溝S D 36673断面図-----	99
第86図	出土遺物実測図(12)-----	100
第87図	第5トレンチ実測図-----	101
第88図	第5トレンチ中世素掘り溝実測図-----	102
第89図	第6トレンチ実測図-----	103
第90図	第7トレンチ実測図-----	104
第91図	第8トレンチ実測図-----	105
第92図	旧小畑川河道と杭列位置関係図-----	107

# 付 表 目 次

2. 京都縦貫自動車道関係遺跡	
(3)大俣城跡	
付表1	A地区出土土器組成表-----57
付表2	出土銭貨一覧表-----59
3. 長岡京跡左京第366次・中福知遺跡	
付表3	土器観察表-----110

# 図 版 目 次

1. 松ヶ崎遺跡	
図版第1	(1)調査前風景(東から) (2)第1トレンチ完掘状況(東から) (3)第2トレンチ調査風景(東から) (4)第2トレンチ完掘状況(東から)
図版第2	(1)第3トレンチ調査風景(東から) (2)第3トレンチ内護岸施設検出段階(拡張前、北東から) (3)護岸施設検出状況(拡張前、北東から) (4)第3トレンチ拡張及び土留め工事風景(西から)
図版第3	(1)第3トレンチ護岸施設(拡張後、西から) (2)護岸施設(北から) (3)第4トレンチ完掘(拡張前、東から) (4)第4トレンチ拡張及び土留め工事風景(南東から)
図版第4	(1)第4トレンチ調査風景(拡張後、南西から) (2)第4トレンチ完掘状況(拡張後、西から) (3)木製品出土状況(第4トレンチから) (4)関係者説明会風景(西から)
図版第5	出土遺物(1)
図版第6	出土遺物(2)
図版第7	出土遺物(3)
図版第8	出土遺物(4)



## 2. 京都縦貫自動車道関係遺跡

### (1) 宮津谷地区古墳状隆起

図版第9 (1) 桑原口1号墳発掘状況(東から) (2) 城山谷古墳群発掘状況(北から)

### (2) 桑原口遺跡

図版第10 (1) 遺跡全景(東から) (2) B地区トレンチ全景(北から)  
図版第11 (1) B地区トレンチ全景(東から) (2) 竪穴式住居跡SH07(北東から)  
図版第12 (1) 竪穴式住居跡SH06(南から) (2) 竪穴式住居跡SH04(北から)  
図版第13 (1) 掘立柱建物跡SB26(西から) (2) SB26柱根  
図版第14 (1) 川跡SD15(南から) (2) 落ち込みSX02(南から)  
図版第15 (1) SX02遺物出土状況 (2) SD15土器出土状況

### (3) 大俣城跡

図版第16 (1) 調査前全景(南東から) (2) 調査後全景(北東から)  
(3) 調査前遠景(南東から) (4) 調査後遠景(南東から)  
図版第17 (1) SB01全景(西から) (2) SB02全景(北東から)  
図版第18 (1) SK01完掘状況(北西から) (2) SK02完掘状況(北から)  
図版第19 (1) SB03全景(北から) (2) SB04全景(南西から)  
図版第20 (1) 通路状遺構1(南から) (2) SX01検出状況(南西から)  
(3) 帯曲輪盛り土部分断ち割り(北西から)  
(4) 帯曲輪盛り土部分土層断面(南西から)  
図版第21 (1) 土師器皿出土状況 (2) 土師器皿出土状況  
図版第22 (1) 虎口全景(北西から) (2) 虎口門柱跡(北から)  
図版第23 (1) 虎口近景(南から) (2) 虎口通路屈曲部(北東から)  
図版第24 (1) 階段状遺構(南東から) (2) 曲輪Ⅲ西側土塁開口部(南西から)  
図版第25 (1) 曲輪Ⅲ西側土塁閉塞状況(南西から)  
(2) 曲輪Ⅲ西側土塁開口部通路底(南西から)  
図版第26 (1) 竪堀1(北西から) (2) 竪堀1～3(北西から)  
図版第27 (1) 横堀遠景(南東から) (2) 横堀近景(南東から)  
図版第28 (1) 横堀屈曲部(西から) (2) 横堀屈曲部(南東から)  
図版第29 (1) 竪堀7(北西から) (2) 竪堀8検出状況(北東から)  
図版第30 (1) 中世墓遺物出土状況(南西から) (2) 炭窯(南東から)  
図版第31 (1) A'地区遺構面全景(西から) (2) A'地区SK04遺物出土状況  
図版第32 A地区出土遺物(土師器皿)  
図版第33 (1) A地区出土遺物(土師器壺・灰釉) (2) 同上外面  
図版第34 (1) A地区出土遺物(天目茶椀・鉄釉瓶) (2) 同上外面  
図版第35 (1) A地区出土遺物(国産陶器・中国産陶器) (2) 同上外面

- 図版第36 A地区出土遺物(白磁皿・鉄釉茶入・在地産播鉢)
- 図版第37 (1) A地区出土遺物(白磁・青磁) (2) 同上外面
- 図版第38 (1) A地区出土遺物(染付) (2) 同上外面
- 図版第39 (1) A地区出土遺物(染付) (2) 同上外面
- 図版第40 (1) A地区出土遺物(在地産播鉢) (2) 同上外面
- 図版第41 A地区出土遺物(在地産播鉢)
- 図版第42 (1) A地区出土遺物(在地産播鉢) (2) A地区出土遺物(錢貨)  
(3) A'地区出土遺物(鉄滓)
- 図版第43 (1) 銅製品(1) (2) 銅製品(2) (3) 鉄製品(1) (4) 鉄製品(2)
- 図版第44 A地区出土遺物(石製品)
- 図版第45 A地区中世墓出土遺物(白磁皿・土師器皿)
- 図版第46 (1) A'地区出土遺物 (2) 同上外面

### 3. 長岡京跡左京第366次・中福知遺跡

- 図版第47 (1) 第1トレンチ完掘状況(南東から) (2) 第1トレンチ土層堆積状況(北東から)
- 図版第48 (1) 第2トレンチ完掘状況(南から) (2) 第2トレンチ土層堆積状況(西から)
- 図版第49 (1) 第3トレンチ近世耕作溝検出状況(東から)  
(2) 第3トレンチ近世耕作溝検出状況(南から)
- 図版第50 (1) 調査地遠景(東から) (2) 調査地遠景(北から)
- 図版第51 第4トレンチ空中写真(上方が北)
- 図版第52 (1) 第4トレンチ平安時代後期井戸S E 36663検出状況(北から)  
(2) 第4トレンチ平安時代後期井戸S E 36663断ち割り(西から)  
(3) 第4トレンチ平安時代後期井戸S E 36663曲物検出状況(西から)
- 図版第53 (1) 第4トレンチ平安時代後期井戸S E 36668検出状況(西から)  
(2) 第4トレンチ平安時代後期井戸S E 36660完掘状況(南から)
- 図版第54 (1) 第4トレンチ平安時代後期ピット群検出状況(南西から)  
(2) 第4トレンチ平安時代後期ピット柱痕検出状況(北から)
- 図版第55 (1) 第4トレンチ平安時代溝S D 35313屈曲部検出状況(東から)  
(2) 第4トレンチ平安時代溝S D 35313屈曲部検出状況(北から)
- 図版第56 (1) 第4トレンチ長岡京期溝S D 36606検出状況(南から)  
(2) 第4トレンチ長岡京期溝S D 36606完掘状況(南から)
- 図版第57 (1) 第4トレンチ長岡京期落ち込みS X 36669遺物出土状況(南西から)  
(2) 第4トレンチ四条条間小路周辺整地層遺物出土状況(南から)
- 図版第58 (1) 第4トレンチ偶蹄目足跡検出状況(西から)  
(2) 第4トレンチ偶蹄目足跡検出状況(西から)  
(3) 第4トレンチ偶蹄目足跡検出状況(北から)

- 図版第59 (1)第4トレンチ奈良時代杭列空中写真(南西から)  
(2)第4トレンチ奈良時代杭列空中写真(北東から)
- 図版第60 (1)第4トレンチ奈良時代杭列S X36675検出状況(北東から)  
(2)第4トレンチ奈良時代杭列S X36675検出状況(北東から)  
(3)第4トレンチ奈良時代杭列S X36675検出状況(南東から)
- 図版第61 (1)第4トレンチ奈良時代杭列S X36604・S X36675検出状況(西から)  
(2)第4トレンチ奈良時代杭列S X36675検出状況(北東から)  
(3)第4トレンチ奈良時代杭列S X36604・S X36675検出状況(北東から)
- 図版第62 (1)第4トレンチ奈良時代杭列S X36604検出状況(南西から)  
(2)第4トレンチ奈良時代杭列S X36604・S X36675断面(東から)  
(3)第4トレンチ奈良時代杭列S X36675断ち割り(南西から)
- 図版第63 (1)第4トレンチ土層堆積確認用断ち割り坑断面(西から)  
(2)第4トレンチ北壁Y=-26,440付近土層堆積状況(南から)
- 図版第64 (1)第4トレンチ古墳時代前期溝S D36671・S D36673検出状況(南から)  
(2)第4トレンチ古墳時代前期溝S D36671・S D36673検出状況(北から)
- 図版第65 (1)第4トレンチ古墳時代前期溝S D36673完掘状況(南から)  
(2)第4トレンチ古墳時代前期溝S D36671完掘状況(南から)
- 図版第66 (1)第4トレンチ古墳時代前期S D36673断面(南西から)  
(2)第4トレンチ作業風景
- 図版第67 (1)第4トレンチ古墳時代前期溝S D36671完掘状況(北西から)  
(2)第4トレンチ古墳時代前期遺構検出状況(南西から)
- 図版第68 (1)第5トレンチ完掘状況(北から) (2)第5トレンチ完掘状況(南から)
- 図版第69 (1)第6トレンチ近世耕作溝検出状況(西から)  
(2)第6トレンチ近世耕作溝完掘状況(西から)
- 図版第70 (1)第8トレンチ全景(北東から) (2)第8トレンチ土層堆積状況(南から)
- 図版第71 出土遺物(1)
- 図版第72 出土遺物(2)
- 図版第73 出土遺物(3)
- 図版第74 出土遺物(4)
- 図版第75 平安時代後期井戸S E36663花粉・寄生虫卵・孢子遺体I(付載1)
- 図版第76 平安時代後期井戸S E36663花粉・寄生虫卵・孢子遺体II(付載1)
- 図版第77 平安時代後期井戸S E36663出土種実(付載1)
- 図版第78 奈良時代流路S X36604・杭列S X36675出土木材樹種の顕微鏡写真I(付載2)
- 図版第79 奈良時代流路S X36604・杭列S X36675出土木材樹種の顕微鏡写真II(付載2)  
(1)試料1(流路S X36604) (2)試料2(杭列S X36675)

(3) 試料 3 (流路 S X36604)      (4) 試料 4 (杭列 S X36675)

(5) 試料 5 (流路 S X36604)      (6) 試料 6 (杭列 S X36675)

図版第80 古墳時代前期・土坑 S K36672出土植物遺体の機動細胞珪酸体(付載 3)

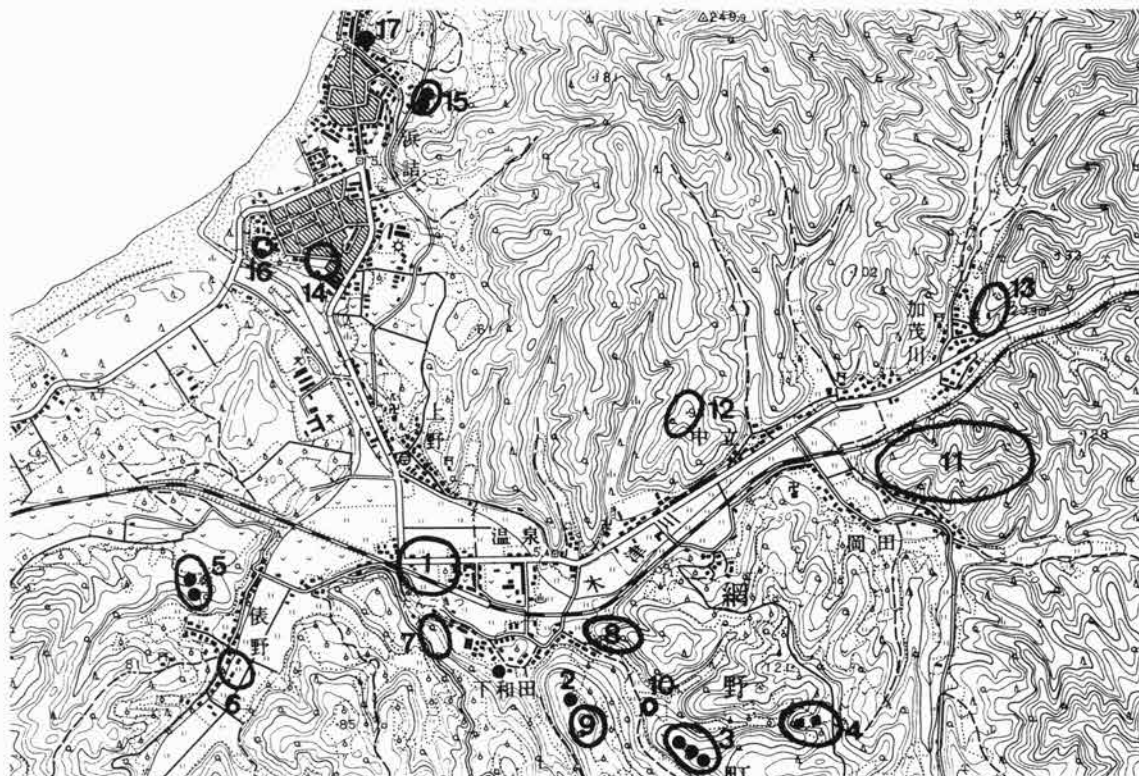
図版第81 古墳時代前期堆積層 5・13層の花粉・孢子遺体(付載 4)

# 1. 松ヶ崎遺跡発掘調査概要

## 1. はじめに

この度、国道178号線の道路改良工事が計画され、周知の遺跡である松ヶ崎遺跡の一部がかかることから、発掘調査をすることとなった。事業名は、国道178号丹後リゾート関連道路改良事業で、発掘調査は、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。所在地は、竹野郡網野町大字木津である。

今回の調査は、国道178号線の北側の道路幅拡張部分である対象面積約500m<sup>2</sup>のうち、約280m<sup>2</sup>を調査した。調査は平成8年5月8日に開始し、同年8月8日に関係者説明会を実施し、同年8月9日に現地調査を終了した。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長伊野近富と同調査員村田和弘が担当し、概要報告は村田が執筆した。調査期間中は、京都府教育委員会・網野町教育委員会をはじめとして、発掘作業に協力・参加していただいた地元の方々や学生諸氏にお世話になった。<sup>(注1)</sup>



第1図 遺跡分布図(1/25,000)

- |          |            |            |           |            |
|----------|------------|------------|-----------|------------|
| 1. 松ヶ崎遺跡 | 2. 女布谷西古墳群 | 3. 女布谷古墳群  | 4. 天王山古墳群 | 5. 丹ノ谷古墳群  |
| 6. 俵野廃寺  | 7. 大森城跡    | 8. 下和田A城跡  | 9. 下和田B城跡 | 10. 売布神社経塚 |
| 11. 木津城跡 | 12. 中館城跡   | 13. 木津熊谷砦跡 | 14. 浜詰遺跡  | 15. 浜詰古墳群  |
| 16. 浜詰経塚 | 17. はやし古墳  |            |           |            |

なお、調査に係わる費用は、全額京都府峰山土木事務所が負担した。

## 2. 位置と環境

松ヶ崎遺跡は、京都府竹野郡網野町大字木津に所在するが、旧行政区によると木津村字松ヶ崎に当たり、現在もその付近は通称で松ヶ崎と呼ばれている。網野町は、丹後半島の北西に位置し、日本海に面している。西は久美浜町、東は丹後町、南は峰山町・弥栄町に接している。この遺跡は、木津小字熊谷、大向付近に端を発して同町浜詰で日本海に注ぐ長さわずか5kmの小流、木津川沿いの南約120mの沖積地に位置している。現在は、遺跡範囲内を国道178号線が通り、周辺は宅地と水田地帯となっている。地形は、南に低丘陵があり、南から北に向かってなだらかに傾斜している。

松ヶ崎遺跡の周辺遺跡としては、南の丘陵には、大森城跡や下和田城跡などの中世山城跡、丘陵裾に下和田古墳(古墳時代後期)があり、西には、丹ノ谷古墳群や俵野廃寺(奈良時代)、北方約1.2kmには、縄文時代後期の浜詰遺跡がある(第1図)。さらに、西方約3kmには国史跡の函石浜遺跡がある。

## 3. これまでの調査

松ヶ崎遺跡は、昭和36年5月に電話線架設工事の際、土器片が発見され、続いて昭和37年春に、地元の方が土壌検査の際に出土した遺物を橘中学校に届けられ、この付近から遺物が出土することが明らかになった。この地が旧行政区画で木津村字松ヶ崎であったことから「松ヶ崎遺跡」と名付けられた。そして、遺跡の一部(A・B地点)が埋め立てられ今後の調査が困難になるため、京都府教育委員会文化財保護課が遺物散布の事実確認のもと、網野町教育委員会に現地調査を依頼し、当時網野高校教諭であった釋龍雄氏の指導のもと網野高等学校郷土史研究クラブが発掘調査を行った。

これまでに、調査は、第1次昭和37年6月(A・B地点)、第2次昭和38年4月(C～I地点)、第3次昭和39年4月の3度(J～L地点)にわたって行われた(第2図)。その結果、A・C・G地点は沼地地帯、B～J・L地点は遺物が多く出土する範囲であると確認されている。

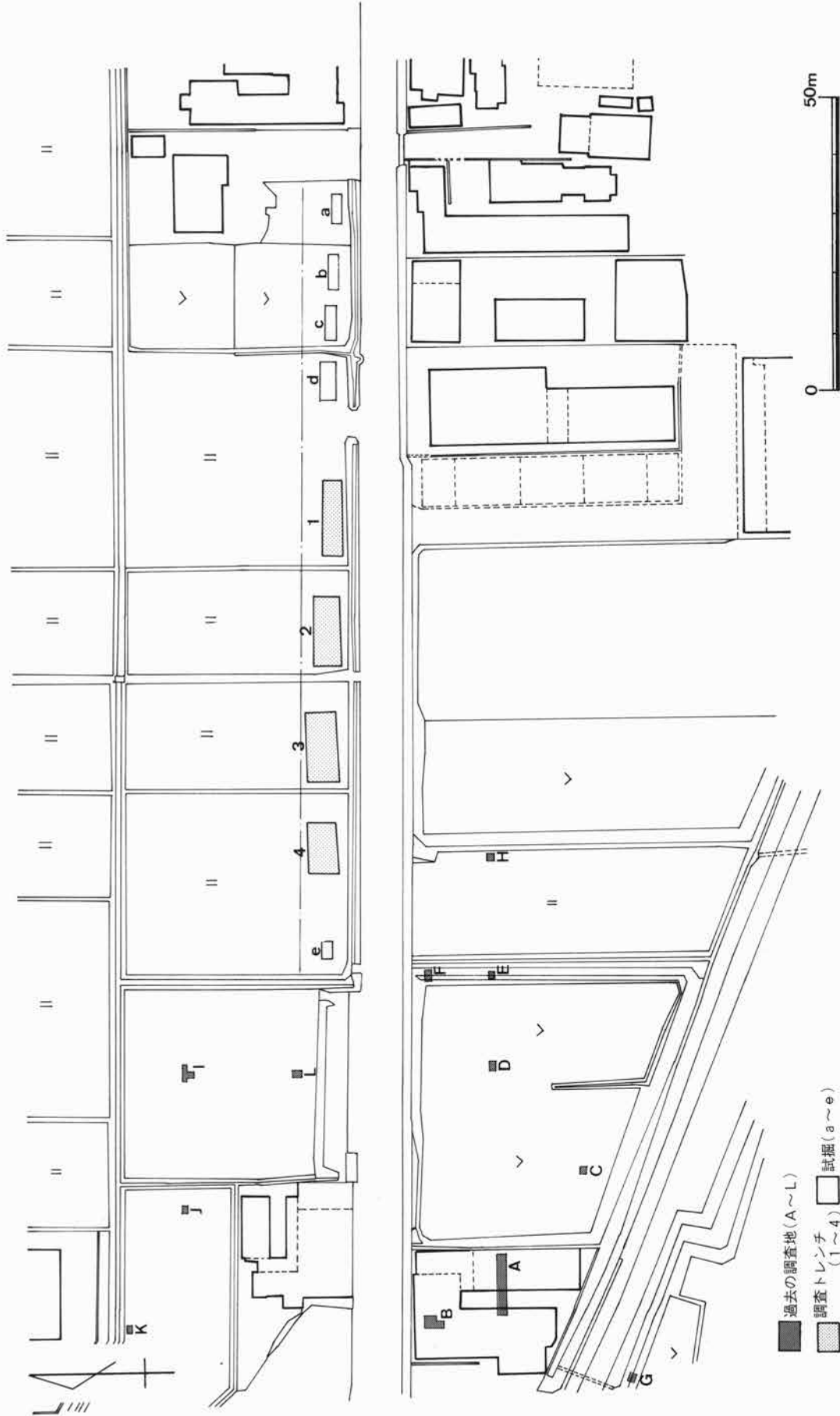
出土した遺物は、弥生時代前期から中期にかけての土器や石器類、木材片、果実の種子などである。このようなことから、この遺跡は、沼地部分に隣接する弥生時代前期から中期の集落遺跡であると推定されている。<sup>(注2)</sup>

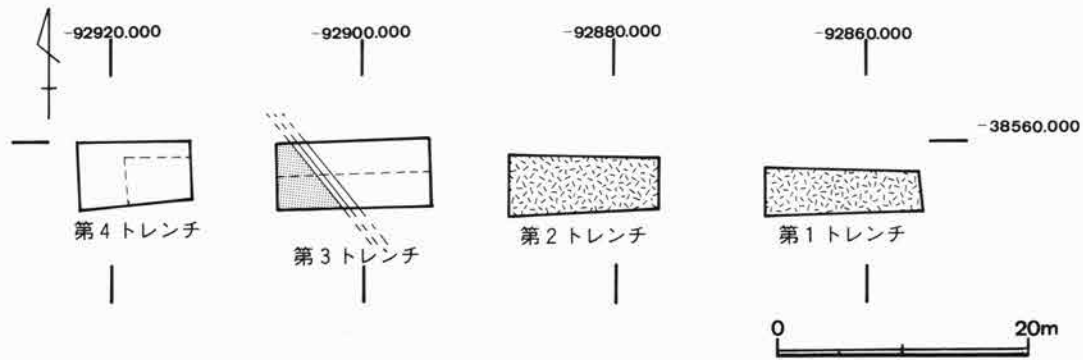
今回は4度目の調査となり、実に32年ぶりの現地調査となった。過去3度の調査地より東側で調査を実施することになり、遺跡の東側の状況が確認できると期待された。

## 4. 調査概要

### (1) 調査経過

調査は、まず、調査対象地内に重機掘削による9か所の試掘グリッドの設定からはじめた。





第3図 調査トレンチ配置図

試掘グリッドのa～d地点では、地表面から約2.0mまで掘り下げたが、厚さ約1.5mの盛り土の下の黒色粘土層では遺物は確認できず、盛り土を掘り下げるとすぐに水が大量に湧いてくるという状況であった。e地点は、過去の調査地に近接しているにもかかわらず、水田の床土を取り除くと、灰色砂層の堆積を確認した。この砂層には遺物は含まれず、地表より2m以上掘り下げても同様の砂層であった。e地点も他と同様に、水が湧いてくるという状況であった。

その他の4か所から土器や木材片などが混入している遺物包含層を確認したので、グリッドを拡張し新たに調査トレンチとした(第3図)。

調査トレンチは、東側から1～4のトレンチ番号をつけた。なお、遺構・遺物が確認されなかった試掘グリッド(a～e)では水が湧き崩落の恐れがあるので、写真撮影後に即時に埋め戻した。

## (2)各トレンチの調査

調査は、面的に徐々に掘り下げていった。いずれのトレンチでも、水が大量に湧いてくるという状況の中、常時排水をしながら調査を行った。

なお、第3・4トレンチは、それぞれ遺構と大量の土器片が確認できたため、さらに広く確認調査するため土留め工事を行い拡張した。

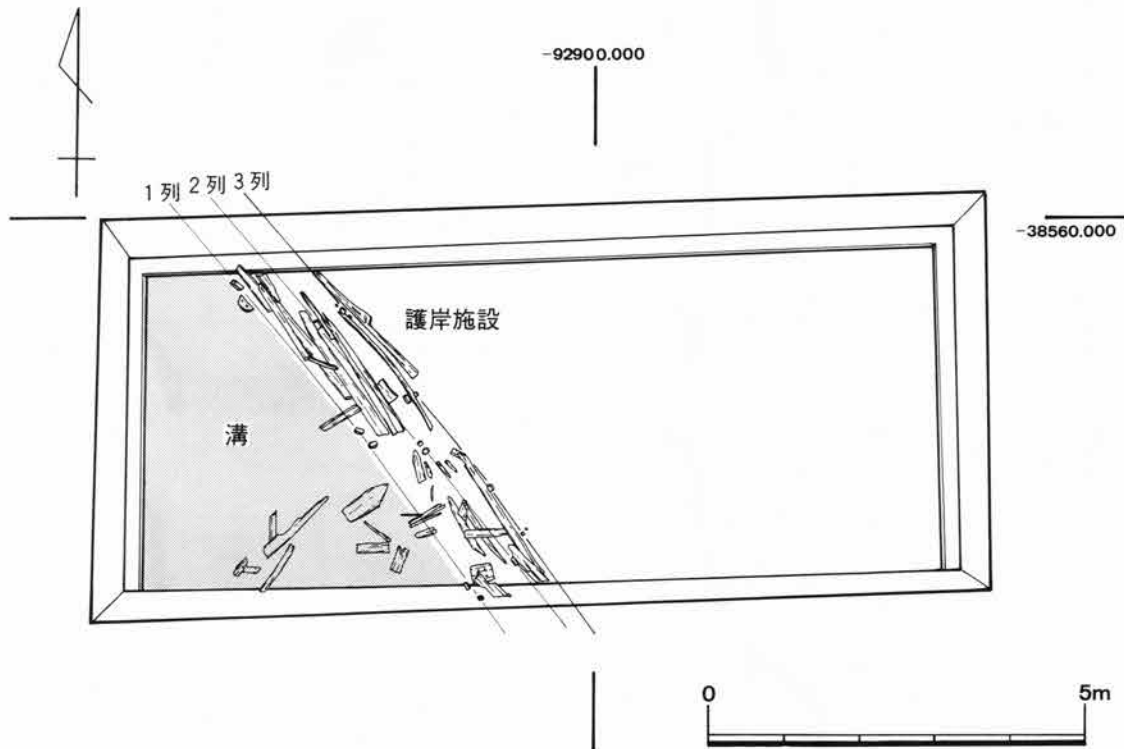
各トレンチの発掘調査の詳細は、以下のとおりである。

**第1トレンチ** このトレンチは、調査対象地の東端で設定した。現地は、約1.5mほどの盛り土がされていた。その下層は、水分を含んだ軟らかい黒色粘土層の堆積で、水が大量に湧き出た。その層には、微量の枝木片があるものの、土器などの遺物は含まれていなかった。

**第2トレンチ** 調査前は水田であった。地表下約0.9mで少量の木材片や土器などを含んだ黒褐色粘土層を確認した。この層でも、遺物は含むものの軟質であった。さらに、下層は、第1トレンチと同質の黒色粘土層であった。第1・2トレンチの調査中、泥の腐蝕したにおいが強烈であった。軟質の粘土の堆積状況や泥のにおいから、かつて沼地であったと考えられる。

**第3トレンチ** 水田面より約0.9mの深さで、須恵器の杯などの奈良時代後期と思われる遺物を含む、厚さ約0.1mの暗灰褐色の砂質層の堆積を確認した。その層からは、土器片のほかに祓ひとがたなどの祭祀に用いられる木製の人形の上半身部分が1点出土した。その直下層の東側で、弥生時





第4図 第3トレンチ遺構図

代前期～中期の遺物を含む黒褐色砂層を確認し、西側でそれと同時期と思われる溝の堆積層を検出した。溝の東側に沿って、木製の細長い板と杭を使い氾濫を防ぐ護岸をしていたと思われる施設を検出した(第4図)。

東側半分で確認した黒褐色砂層は厚さ約0.1mで、その層を掘り下げると遺物を含まない黒灰色の硬い粘土層を検出した。

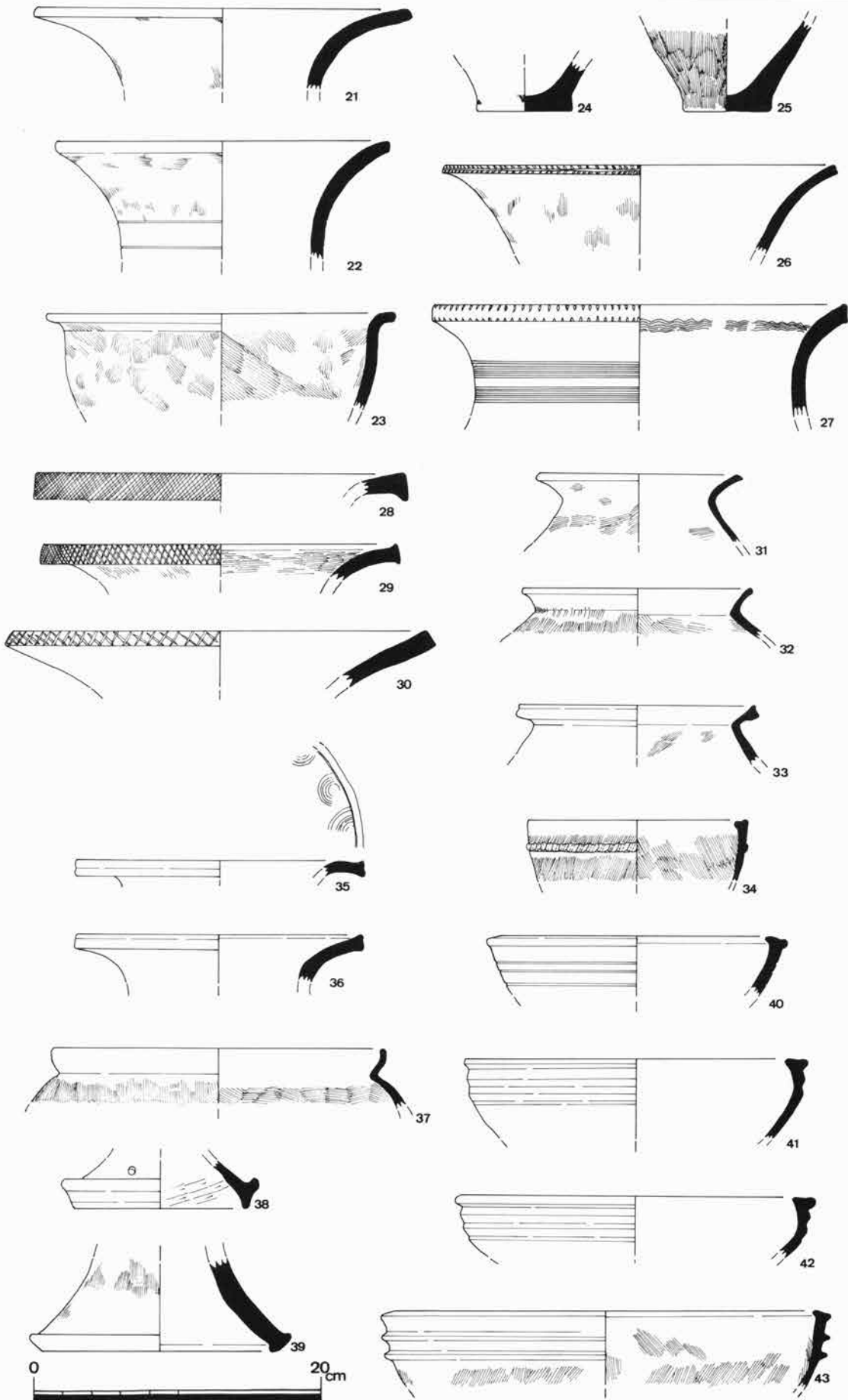
西側の溝は、南北方向で、深さ約0.2mを測り、砂によって埋没していた。幅については、西側トレンチ内では、西側に用水路があるため拡張できず、確認できなかった。この堆積層には、弥生土器や田下駄などの木製品、護岸施設に使用されていたと思われる矢板などの木材が大量に含まれていた。木材は、加工されているものや枝木などが含まれていた。溝は、南側が丘陵、北側が海で、地形が南から北へ低くなっているのので、南から流れてきた溝と判断できる。

護岸施設は、トレンチの西側の端で溝の東側に沿って検出した。細長い板と杭は南北方向に異なる時期の3列の杭列が存在していたと思われる。内側の2列(1列・2列)は、加工された角杭列と部分的に細長い板が杭列に挟まった状態で出土した。一番外側の板と杭列(3列)は、板を立てて埋め込み、内側と外側の両側から杭で固定している。一部氾濫の影響からか、板が東側に反った状態であった。部分的には、外側に加工されていない丸太の木材を置いて補強している。外側の板と杭列が頑丈につくられていることから、幾度かの氾濫によって内側の第1・2列の護岸が破壊された後に、第3列目の補強した護岸施設をつくったと考えられる。

第4トレンチ 水田面から約0.6mの深さで、厚さ約0.1mの奈良時代後期と思われる遺物包含層を確認し、さらに、その下層に厚さ約0.2mの弥生時代前期～中期の遺物を大量に含む堆積層



第5図 出土遺物実測図(1) 1/4



第6図 出土遺物実測図(2) 1/4

を確認した。弥生時代の包含層を取り除くと、第3トレンチと同じような黒灰色の硬い粘土層を確認した。この安定した地盤は、西から東へ若干ながら傾斜している。

奈良時代後期の層からは、木製の農工具が1点出土した。弥生時代前期～中期の層からは、少量の木材片と大量の土器片が西側で集中して出土した。

当初、このトレンチ内で第3トレンチの西側で検出した溝の西側部分や護岸施設が検出できるかと期待していたが、トレンチ内では検出できなかった。また、第3トレンチと第4トレンチの土壌の質が異なっており、おそらく、第3トレンチと第4トレンチの間の調査ができなかった部分に存在するのであろう。

今回の調査では、土壌が泥化していて明確な遺構面は確認できなかった。また、溝の時期についても、弥生時代のいつ頃であるのかを確定するのは困難である。

### (3)出土遺物(第5～10図)

今回の調査によって出土した遺物は、大きく分けると土器片・石器類・木製品・護岸に使用された木材片・自然遺物である。

**土器** 出土した土器は、大量の弥生土器と微量の奈良時代後期の土器に分けられる。弥生土器は、前期から中期(第Ⅰ～Ⅳ様式)に至るまでのものが大量に出土した。弥生土器のほとんどは、第3トレンチの大溝内と第4トレンチの包含層から集中して出土した。奈良時代後期の土器は、第2・3トレンチから出土した。

弥生土器は、第Ⅰ～Ⅳ様式の土器が一括して包含層から出土し、ほとんどが破片である。器種としては、甕と壺の破片が多い(第5・6図)。

1～25までは、Ⅰ様式中段階に属するもので、甕が多い。出土遺物全体の割合で70%を占める。特に、19の甕は、口縁部から底部が復原でき、内面の底部には穀物の炭化物が大量に付着している。26・27は、Ⅱ様式で出土数はごく少ない。28～34は、Ⅲ様式に属する土器である。35～43は、

Ⅳ様式のもので、割合はⅠ様式につぐ出土量で鉢類が多い。20は、土器片を再加工した有孔円盤である。拓影の1～3は、弥生土器の文様が明確な破片である(第7図)。

奈良時代の包含層から出土した土器は、奈良時代後期の須恵器の杯である(第8図)。44は、第2トレンチから出土した。45は、第3トレンチから出土した。いずれも、破片

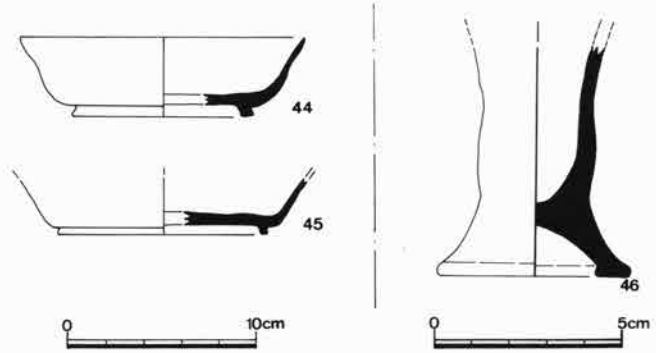


第7図 弥生土器拓影 1/2

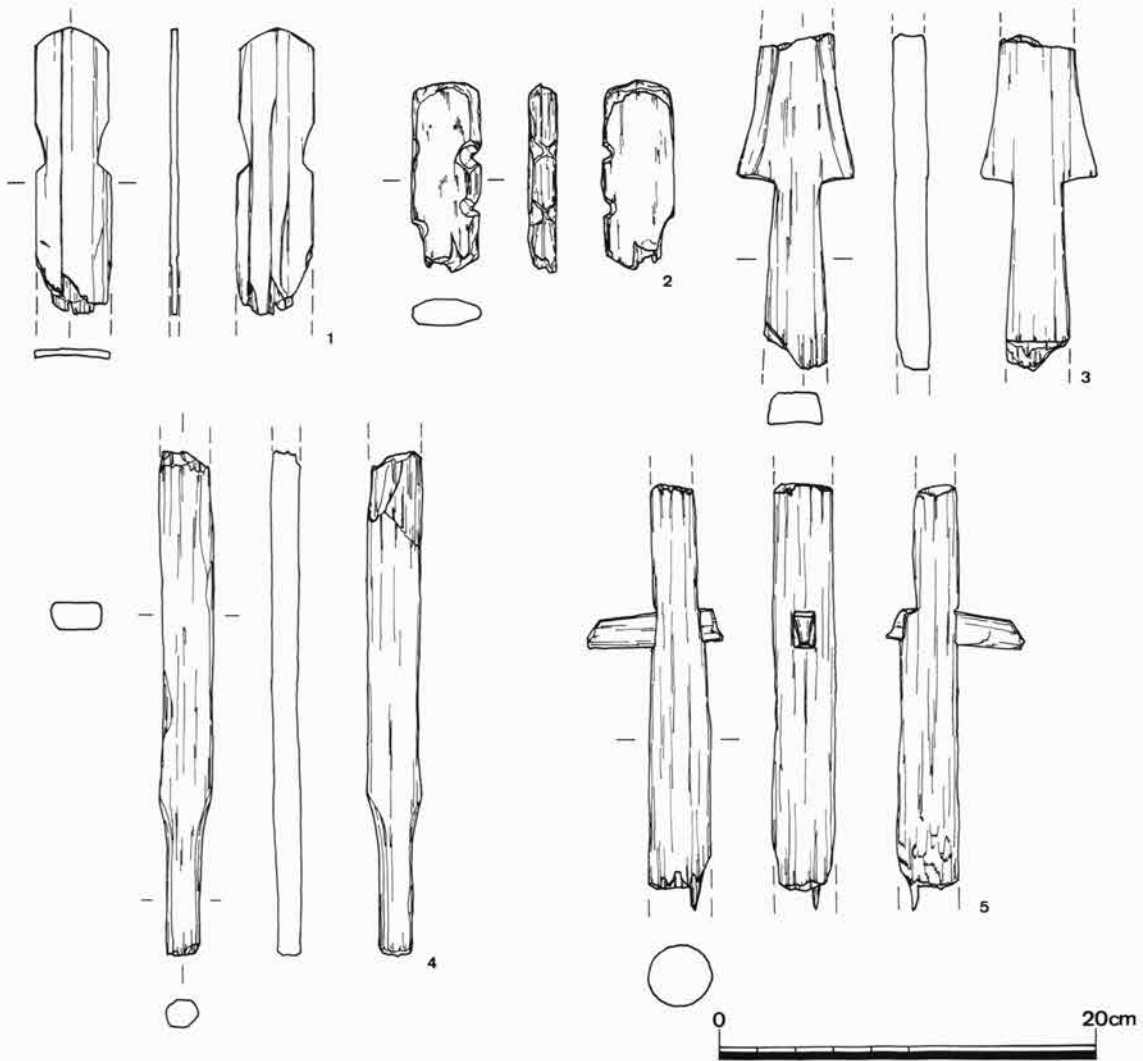
での出土である。また、第3トレンチの奈良時代の包含層から、46の製塩土器の支脚部分が1点出土した。形態からみて、6世紀後半のものと思われるが、この時期の遺物は、他に出土していない。

**木製品** この遺跡からは、数多くの木材片や流木、木製品が出土したが、ここでは特徴のある製品を掲載した(第9・10図)。

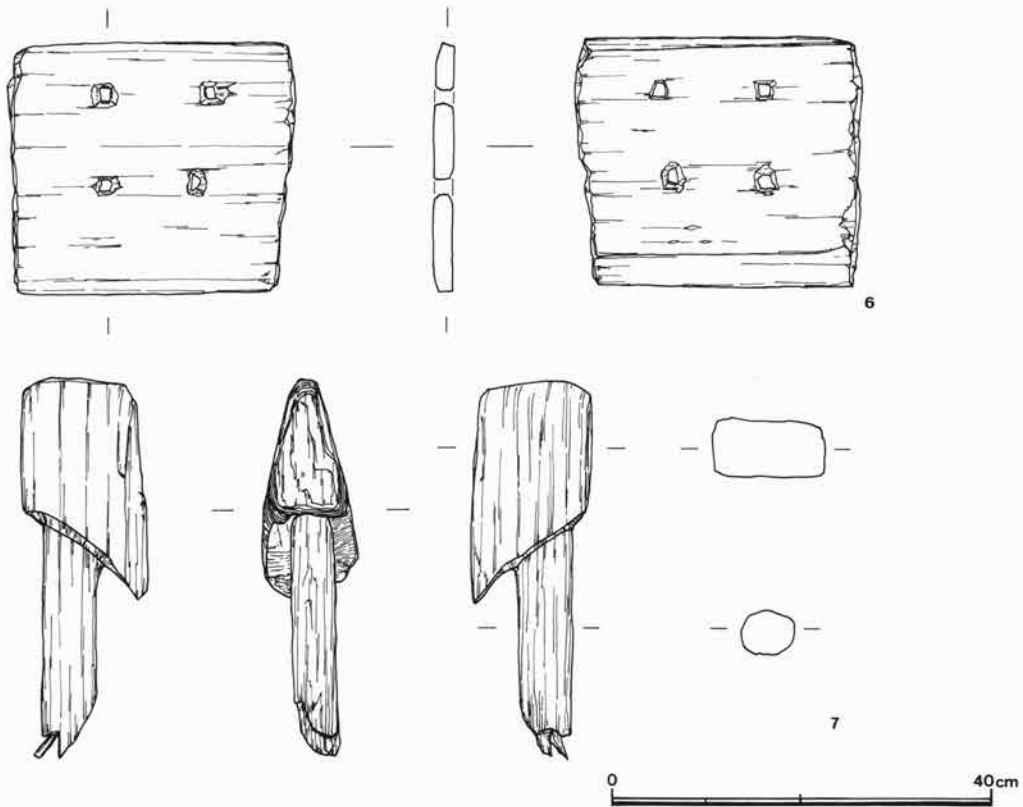
1は、奈良時代後期の包含層から出土した人形ひとがたの上半身部分である。2は、第3トレンチから出土した火鑽臼の一部で、使用痕跡である火鑽穴が4か所ある。3は、用途不明品で先端と柄の部分が欠けている。4も不明品で、柄と思われる部分が細くなっている。5も不明品であるが、木材をくりぬいて組み合わせている。6は、護岸施設に伴って出土した田下駄である。これは、



第8図 出土遺物実測図(3)



第9図 出土木製品(1) 1/4



第10図 出土木製品(2) 1/8

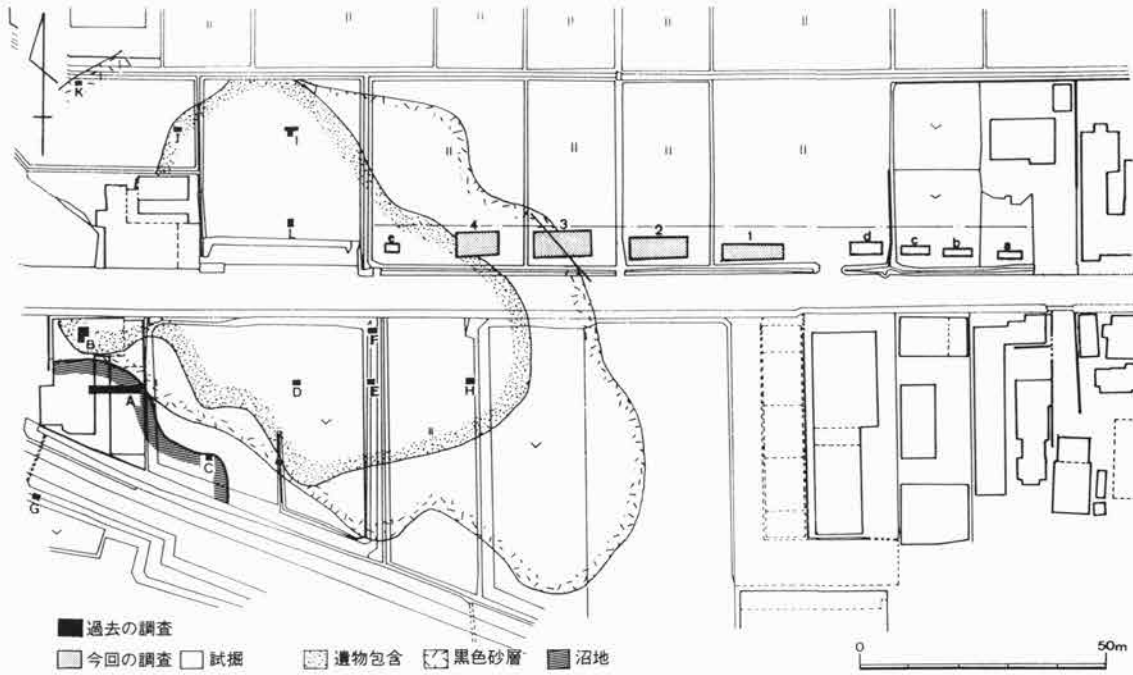
四孔単独型足板と呼ばれる型式である。7は、農工具で、おそらく、牛などに引かせて水田を耕す道具であったと思われる。

石器 今回の調査では、弥生時代の石鍬が2点出土した(図版第6の19)。

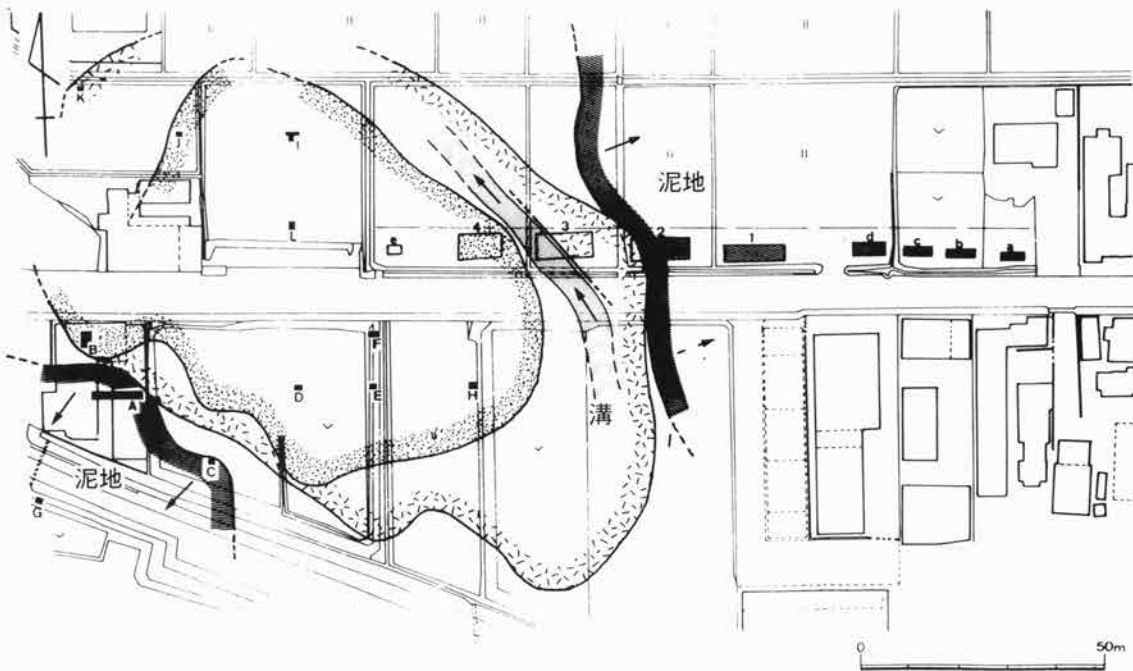
## 5. ま と め

今回の調査成果を、過去3度にわたる成果と合わせて考えてみたい。過去の調査では、資料収集と遺跡の範囲確認のためA～L地点の広域にわたる試掘調査が行われた。その結果、第11図に示す遺物包含層の広がり<sup>(注3)</sup>と沼地を確認している。

今回の調査によって、第2トレンチから東側が遺跡の東端であることを確認した。また、南側の丘陵の谷部分から流れてきたと思われる流路を検出し、その流路の東側では、板と杭による3列の護岸施設を検出した。これらの成果をもとに、遺跡の広がり<sup>(注3)</sup>と新たに確認されたものを第12図に示した。若干ではあるが、遺物包含層が東に広がっていることがわかる。今回の調査で、流路と護岸施設が検出できたことで、新たに流路と泥地の間について考えねばならない。なぜ、泥地に近い東側を護岸する必要があるのかは、今後の課題であろう。調査地の南側の数か所で、網野町教育委員会が立会調査をされたが、遺構・遺物は確認されていない。したがって、南側はまだ未調査であるが、これ以上範囲が広がるとは考えにくい。西側は、今後の道路拡張に伴って調査が実施され、遺構や遺跡の範囲が確認されるであろう。遺跡全体の広がりはまだ確認されてお



第11図 過去の調査による遺跡範囲と今回の調査地



第12図 今回の調査成果による遺跡範囲推定図

らず、居住域についても未確認である。今後の調査による確認に期待したい。

遺物としては、弥生時代(第Ⅰ～Ⅳ様式)と奈良時代後期に分かれ、量としては弥生時代の遺物がほとんどである。遺物が包含層からの出土であるため、遺跡の正確な時期の比定が困難である

が、今回の包含層出土遺物を観察し、検討すると、遺跡は、弥生時代の土器編年でいう第Ⅰ様式の中段階に第一の画期、第Ⅲ～Ⅳ様式に第二の画期があるように思われる。今後の西側での調査で、居住域が検出され、時期が確認されることを待ちたい。

その他、製塩土器が出土したことは、興味深いことである。また、新たにこの周辺で奈良時代の集落遺跡が存在する可能性も考えられ、調査の際は注意が必要であろう。この周辺は、多くの遺跡が存在するところであり、その遺跡などとの関連もこれからの検討すべき点である。

(村田和弘)

注1 調査参加者(敬称略)

江野道和・小國喜市郎・金親満夫・城下 勇・谷口勝江・永埜ヤス子・野口美乃・堀圭一朗・福田和浩・森 秀雄・山崎頼人・山本 絹

また、「2. 位置と環境」と「3. これまでの調査」は山崎頼人(奈良大学文化財学科3回生)と共同で執筆した。

注2 釋 龍雄・林 和廣「京都府網野町松ヶ崎遺跡調査報告」(『史想』第14号 京都教育大学考古学研究会) 1968.12

注3 注2の文献中の第2図松ヶ崎調査実測関係図を現在の地形図と合成し一部加筆した。

参考文献

『京都府弥生土器集成』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989

『木器集成図録』近畿原始篇 史料第36冊 奈良国立文化財研究所 1993



## 2. 京都縦貫自動車道関係遺跡 平成7年度発掘調査概要

### はじめに

この調査は、京都縦貫自動車道建設事業に伴い、京都府道路公社の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって、平成4年度から継続的に実施している。平成7年度は、宮津市桑原口古墳群・城山谷古墳群・小田大谷古墳・小田蛭子谷古墳・桑原口遺跡、舞鶴市大俣城跡の計6遺跡の発掘調査を実施した。

桑原口古墳群、城山谷古墳群、小田大谷古墳、小田蛭子谷古墳の諸遺跡は、京都府教育委員会及び宮津市教育委員会による詳細分布調査によって新たに確認されたもので、古墳状隆起計7地点を対象とする試掘調査を実施した。この概要では、宮津谷地区古墳状隆起として、まとめて報告する。

桑原口遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡で、昭和45年に発掘調査が行われ、円形住居跡・方形住居跡・溝などの遺構に伴い、弥生時代末期頃から古墳時代前期初頭に属する良好な土器資料が出土している。現在、遺跡の中央部を北近畿タンゴ鉄道の路線が南北に横切っており、鉄道路線の西側をA地区、東側をB地区と仮称し、両地区の試掘調査を先行して行い、引き続きB地区の面的調査を実施した。この概要では、B地区の調査成果を中心に報告する。なお、A地区の面的調査については、経費と調査期間の都合上、平成8年度に実施することとなった。

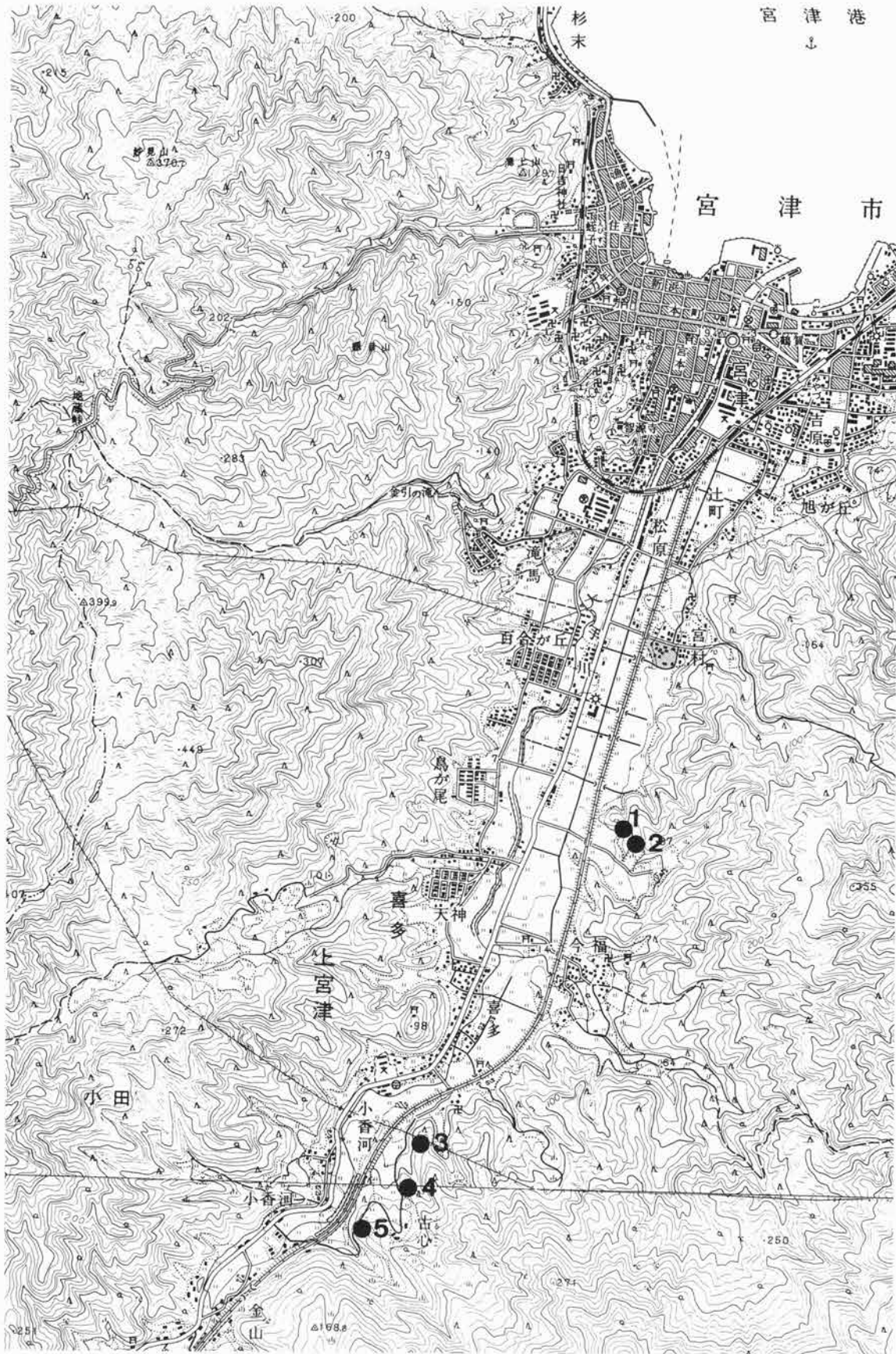
大俣城跡の調査は、平成6年度に一部着手した主郭部分(A地区)とその外周部の全面調査を行い、主郭・帯郭・虎口・竪堀・掘立柱建物跡などの遺構が良好な遺存状態のもとに検出され、戦国時代末期のこの地方の城郭史を研究する上で、貴重な成果を挙げることができた。

平成7年度の調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、同主任調査員石井清司、同調査員黒坪一樹・尾崎昌之・大岩洋一が担当し、多くの方々の参加協力を得て実施した<sup>(注1)</sup>。調査経費は、全額京都府道路公社に負担していただいた。

調査を行うにあたっては、京都府教育委員会・宮津市教育委員会・舞鶴市教育委員会の指導・助言を得たほか、京都府道路公社建設事務所には種々便宜をはかっていただいた。また、大俣城跡の調査を行うにあたって、各機関の有識者から専門的立場での有意義な御教示を得た<sup>(注2)</sup>ほか、京都府立丹後郷土資料館井之本泰氏には大俣城跡の山麓で検出された炭焼窯跡に関連して玉稿を賜った。記して厚く御礼申し上げる。

この調査概要は、各遺跡の調査担当者がそれぞれ分担して執筆した。文責は文末に記した。

(奥村清一郎)



第13図 調査地位置図(1/25,000)

1. 桑原口1号墳    2. 桑原口2号墳    3. 城山谷古墳群    4. 小田大谷古墳    5. 小田蛭子谷古墳

## (1) 宮津谷地区古墳状隆起

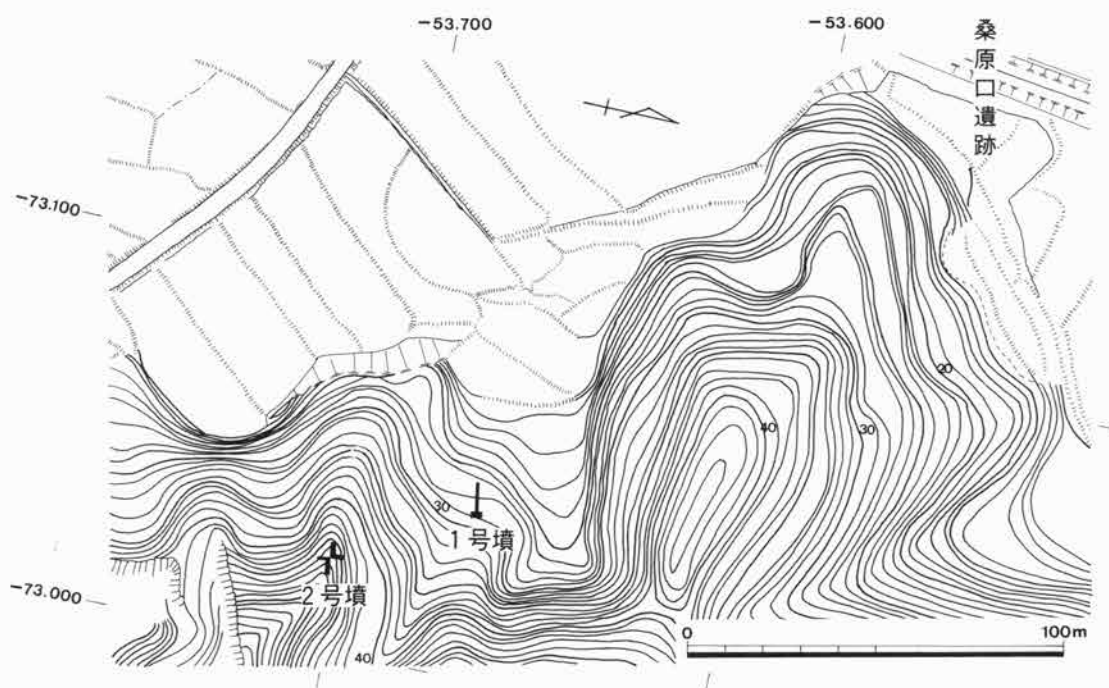
## 1. 桑原口古墳群

調査地は、宮津市字喜多地区に所在する。桑原口遺跡の南方の丘陵上にあり、1号墳としてマークされた地点は、丘陵腹部の階段状に削平された平坦面の一画に相当する。花崗岩2石が崖面に露出しており、横穴式石室の基底石の可能性が考えられた。2号墳は、舌状にのびる丘陵支脈の稜上のわずかな高まりである。調査は平成7年6月15日に着手し、7月12日に終了した。調査面積は、約30 $\text{m}^2$ である。

1号墳では、露出している2石の花崗岩を中心に約13 $\text{m}^2$ の試掘トレンチを設定して、調査に着手した。その結果、これらの花崗岩は、付近の基盤層を形成しており、開墾の時に掘り出されたものであることが判明した。2号墳では、約17 $\text{m}^2$ の試掘トレンチを設定して掘り下げたところ、表土層直下で地山面を検出、人為的な徴候は全く認められなかった。

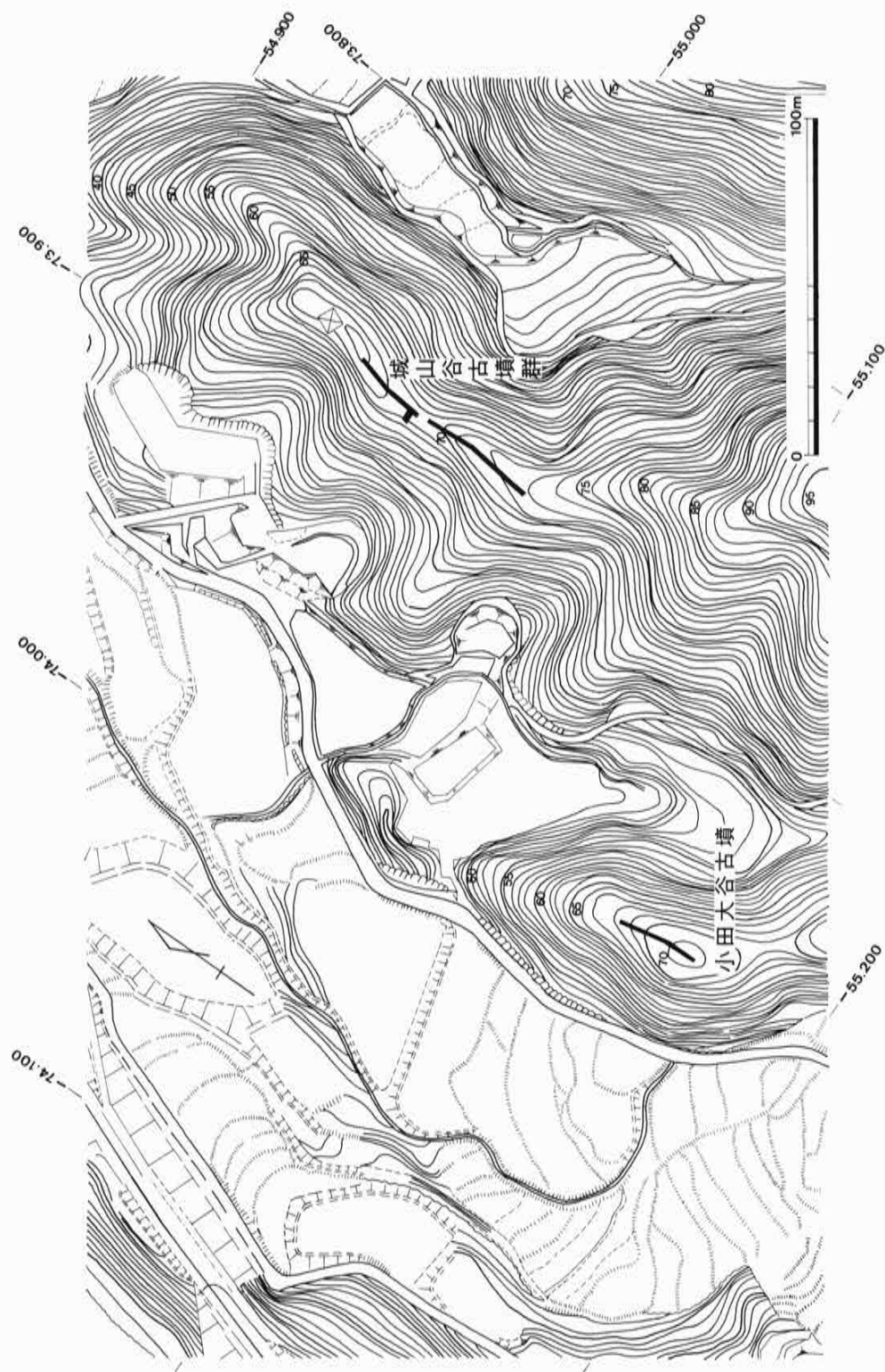
## 2. 城山谷古墳群

調査地は、京都府宮津市字小田地内に所在する。小田大谷古墳の約250m北側に位置し、南北に張り出した丘陵性山地の稜線上にあたる。調査は平成7年5月23日に着手し、平成7年6月2日に終了した。調査面積は約40 $\text{m}^2$ である。この稜線上に3か所の古墳状隆起が認められたので、それらを貫くように幅1mのトレンチを設定して掘削を行った。基本層位は第1層黒色土、第2



第14図 桑原口古墳群位置図

層黄褐色粘質土、第3層黄白色砂礫層(花崗岩の地山)の3層からなる。これらの地形・土層は、いずれも人工によるのではなく、自然の侵蝕・堆積作用によって生成されたと考えられる。

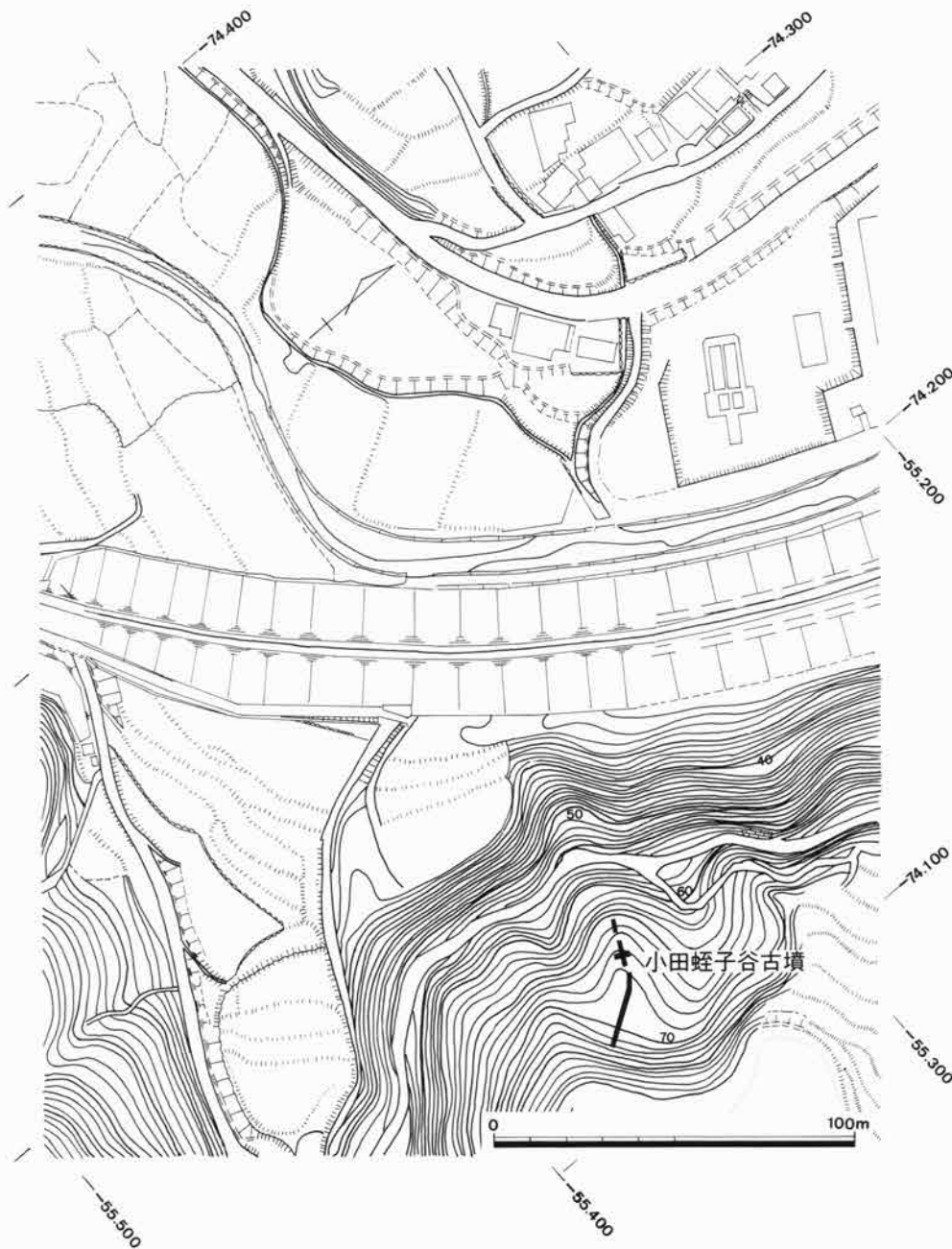


第15図 城山谷古墳群・小田大谷古墳位置図

### 3. 小田大谷古墳

調査地は、宮津市字小田地内に所在する。城山谷古墳と同じく、大手川右岸に張り出した南北にのびる丘陵性山地の稜線上に位置する。調査期間は平成7年6月5日～6月8日までである。調査面積は約30m<sup>2</sup>である。丘陵稜線上の比較的ゆるやかな平坦地に幅1mのトレンチを設定して掘削を行った。基本層位は、第1層黒色土、第2層赤褐色粘質土、第3層黄白色砂礫層(花崗岩の地山)からなる。平坦部にわずかな古墳状隆起が認められたが、主体部などの痕跡は存在しなかった。古墳ではなく、自然地形と考えられる。

(尾崎昌之)



第16図 小田蛭子谷古墳位置図

#### 4. 小田蛭子谷古墳

調査地は、宮津市字小田地内に所在する。この地も大手川右岸に張り出す丘陵性山地の先端部に位置する。調査期間は、平成7年6月7日から6月21日までである。調査面積は約30m<sup>2</sup>である。丘陵性山地の稜線上の中央部にゆるやかな平坦地があり、これに直交するような「十」字形のトレンチを設定して掘削を行った。トレンチ中央部に集石状遺構を検出した。石室に伴うものかを確認するために精査を行ったところ、花崗岩の岩盤が塊状に露出しているのを確認した。主体部などの痕跡もなく、古墳とは認められなかった。(黒坪一樹)

#### 5. まとめ

本調査は、宮津市字喜多～小田地区に所在する古墳状隆起を対象として、平成7年5月23日～平成7年7月12日まで実施したものである。西側の谷部に向かって張り出した丘陵性山地に点々と位置している古墳状隆起すべてが開墾の跡または自然地形であることを確認した。

(尾崎昌之)

### (2) 桑原口遺跡

#### 1. はじめに

調査地は、宮津市今福字桑原口に所在し、大手川がつくる沖積地と丘陵裾部に広がる小段丘上に位置する。桑原口遺跡は、1970年に国鉄宮守線(現、北近畿タンゴ鉄道)の建設に伴い、京都府教育委員会が調査を実施している。<sup>(注3)</sup>調査の結果、弥生時代末頃から古墳時代初期にかけて営まれた集落跡であることが判明した。

今回の調査は、集落跡の広がりや遺跡の範囲の確認を主な目的として実施した。調査の便宜上、鉄道路線を挟んで西側をA地区、東側をB地区と呼称する。今回はA、B両地区の試掘調査とB地区の本調査を実施した。調査面積は約700m<sup>2</sup>である。

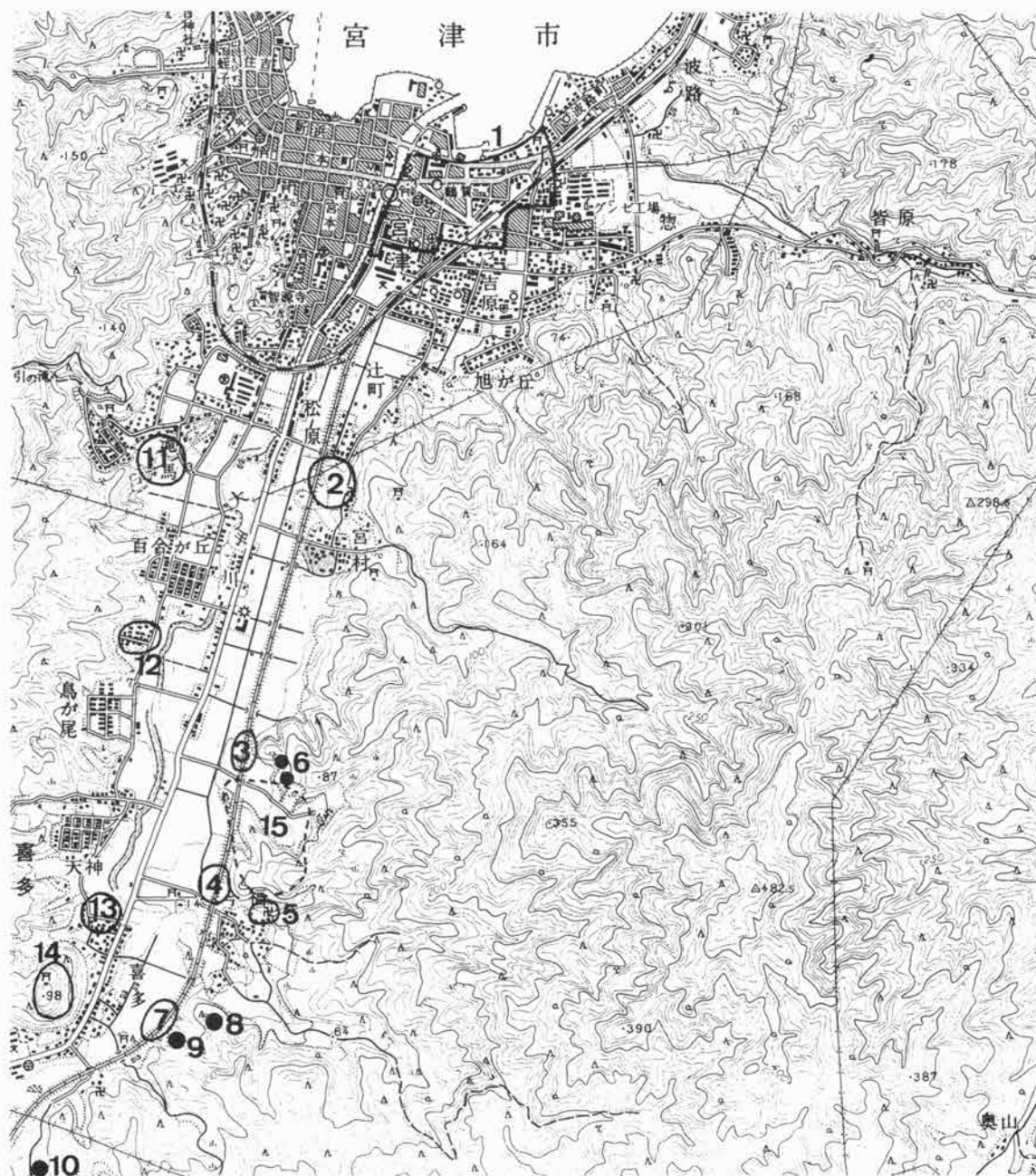
調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、同主任調査員石井清司、同調査員尾崎昌之が担当した。調査期間中、京都府道路公社をはじめ京都府教育委員会、京都府立丹後郷土資料館、宮津市教育委員会、上宮津自治連合会、中嶋利雄氏の協力を得た。また、地元の方々には炎天下のなか作業員として従事していただいた。それぞれのご好意に対して記して感謝申し上げます。

#### 2. 位置と環境

京都府北部の宮津湾に面する宮津市は、日本三景の一つである天橋立を有する観光都市である。調査地は、大手川の流域である宮津谷に位置する。山が多く、平地は狭く南北に長いという景観

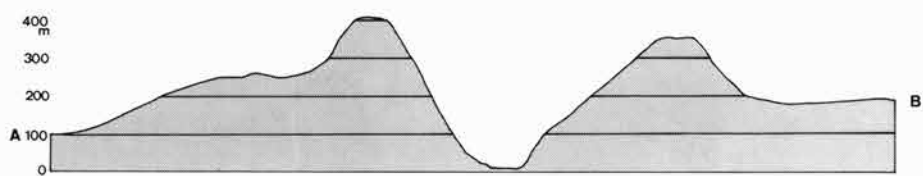
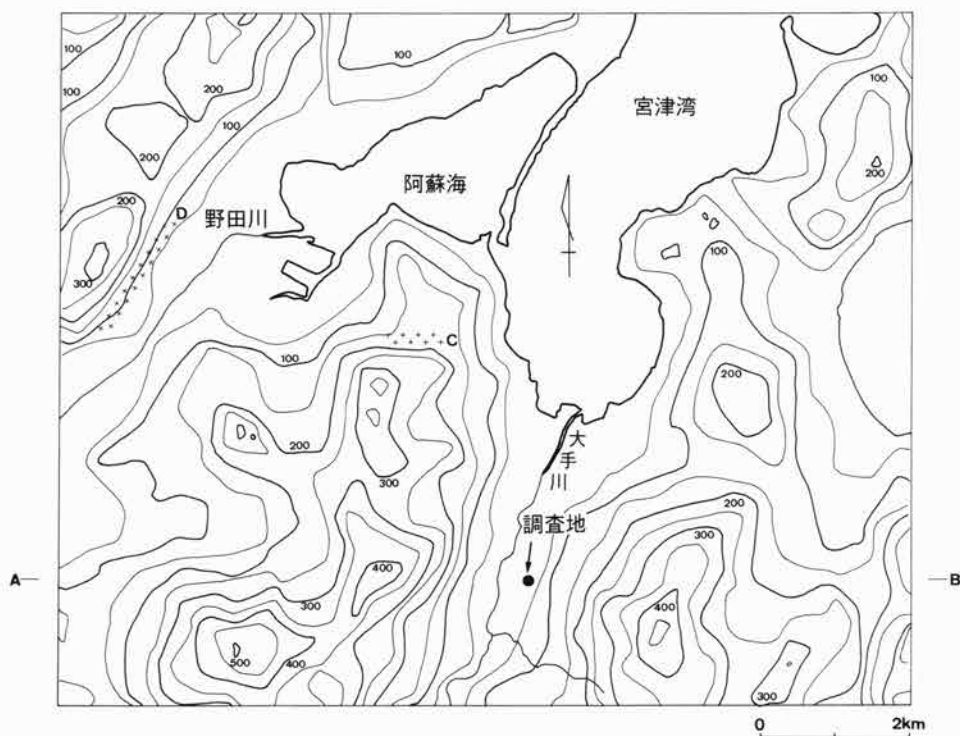
を有する。この宮津谷を形成した大手川は、宮津市南方の普甲峠北方に源を発し、江戸期参勤交代の往還であった宮津街道沿いに北流し、宮津市街地を貫流し、宮津湾に注ぐ。延長約3.3km・流域面積約28.2km<sup>2</sup>を測る。

宮津市全体を鳥瞰するため、宮津(1/2.5万)の地形図を使い接峰面図(第18図)を作成した。大手川の兩岸に広がる丘陵性山地はゆるやかで定高性をもつといえる。等高線がゆるやかに描かれるのも、付近一帯が花崗岩地帯であることを示している。また、このことが平野部における大手川の緩勾配をつくる原因ともなっている。西側の山裾部にも注目したい。この図では判読できな

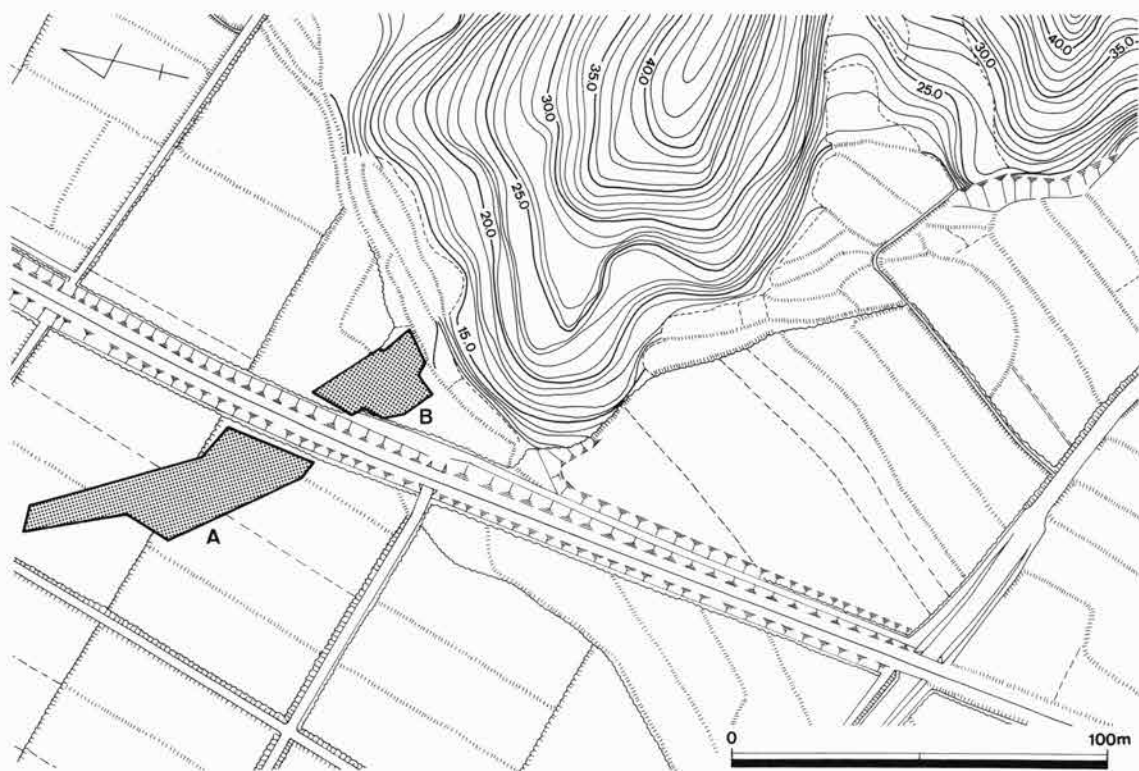


第17図 調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

- |           |          |           |           |             |
|-----------|----------|-----------|-----------|-------------|
| 1. 宮津城跡   | 2. 宮村遺跡  | 3. 桑原口遺跡  | 4. 荒木野遺跡  | 5. 今福城跡     |
| 6. 桑原口古墳群 | 7. 杉本遺跡  | 8. 城山谷古墳群 | 9. 小田大谷古墳 | 10. 小田蛭子谷古墳 |
| 11. 滝馬A遺跡 | 12. 福田遺跡 | 13. 喜多遺跡  | 14. 上宮津城跡 | 15. 今福古墳群   |



第18図 宮津の埋谷接峰面図



第19図 桑原口遺跡トレンチ配置図

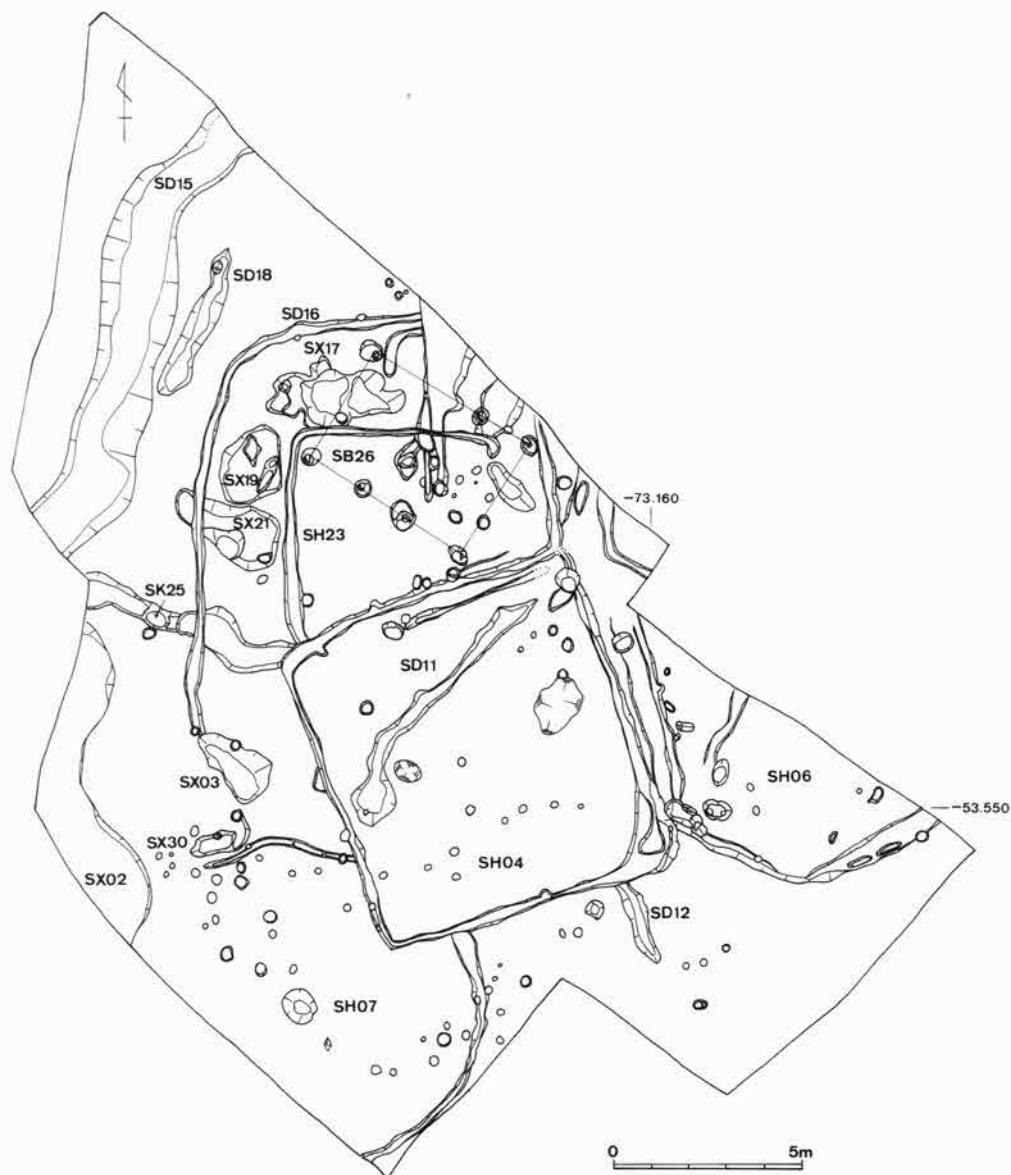


いが、ところどころに小扇状地状地形が見られ、昭和40年代の宅地開発の場となった。

図中のC・D地点も注目される。特に、D地点は山田断層として著名であり、これが若狭のリアス式海岸の西端を示す。また、沿岸部も注目される。大手川、野田川の河口部はともに三角州を形成している。それは、例えば野田川を河口から南西方向に上ると谷部が狭くなっていることから傍証できよう。

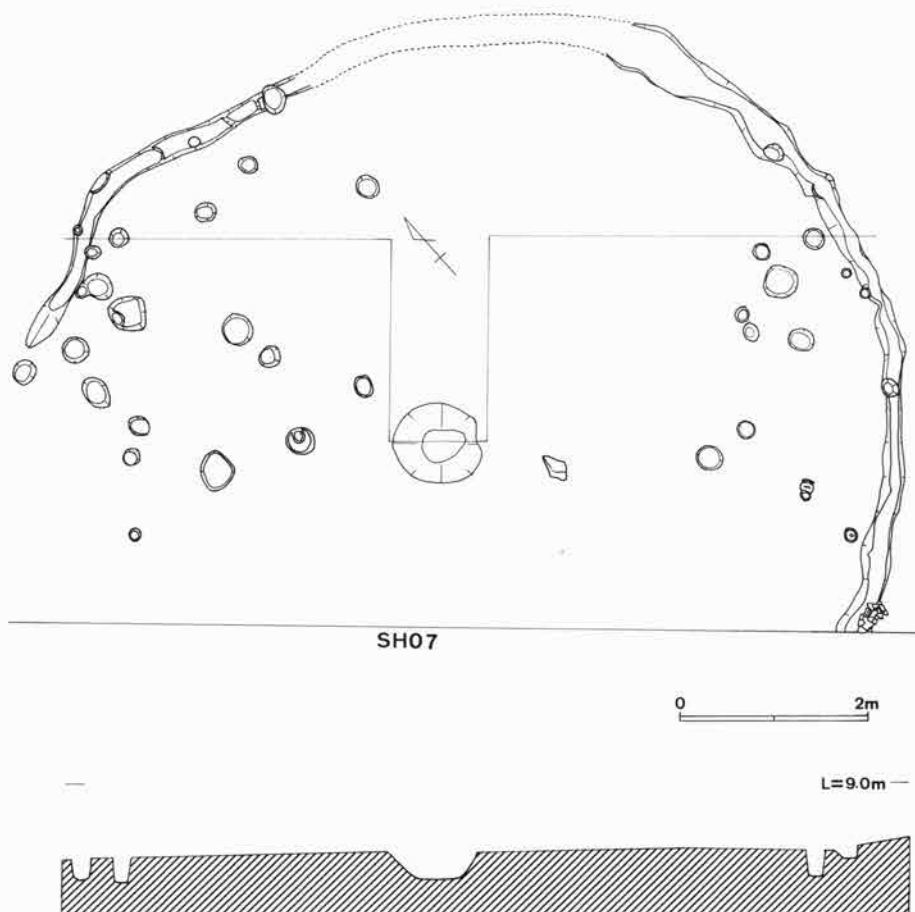
次に、宮津谷に絞って歴史的環境を簡単にみたい。宮津谷で最古の遺跡としては、弥生時代中期末から後期頃の宮村遺跡がある。ただ、同遺跡では、溝や土坑のみの検出で遺跡の性格を特定できるものはない。弥生時代後期頃になると薬師遺跡、桑原口遺跡が挙げられる。ことに、後者は竪穴式住居跡の検出で知られる。

古墳時代に入ると今福古墳群を見る程度で、分布は希薄になる。奈良から平安時代には掘立柱

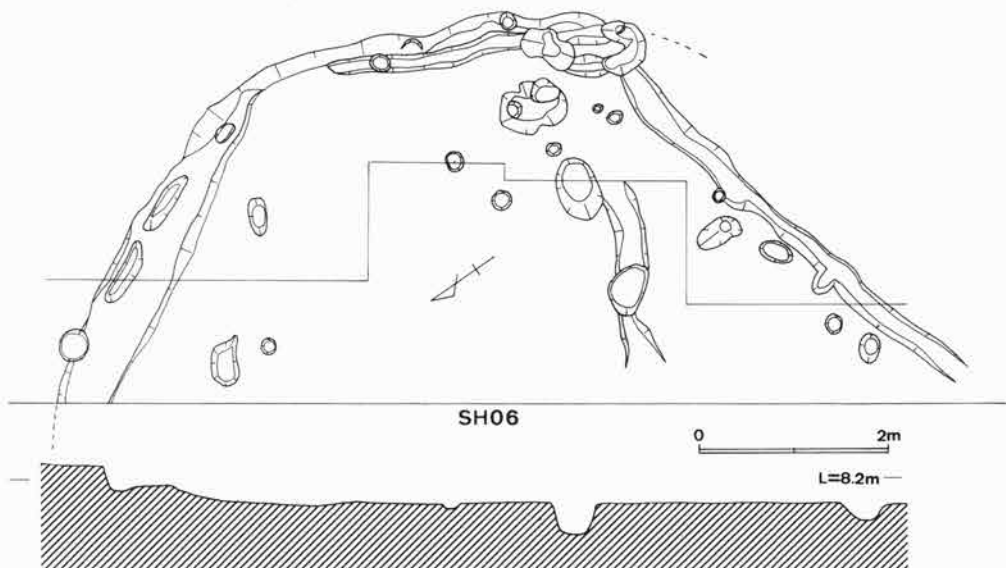


第20図 桑原口遺跡B地区平面図

建物跡や富寿神宝が出土した荒木野遺跡がある。さらに、中世になると上宮津城跡などの山城が築かれる。全体に未解明な部分が多いのが現状である。



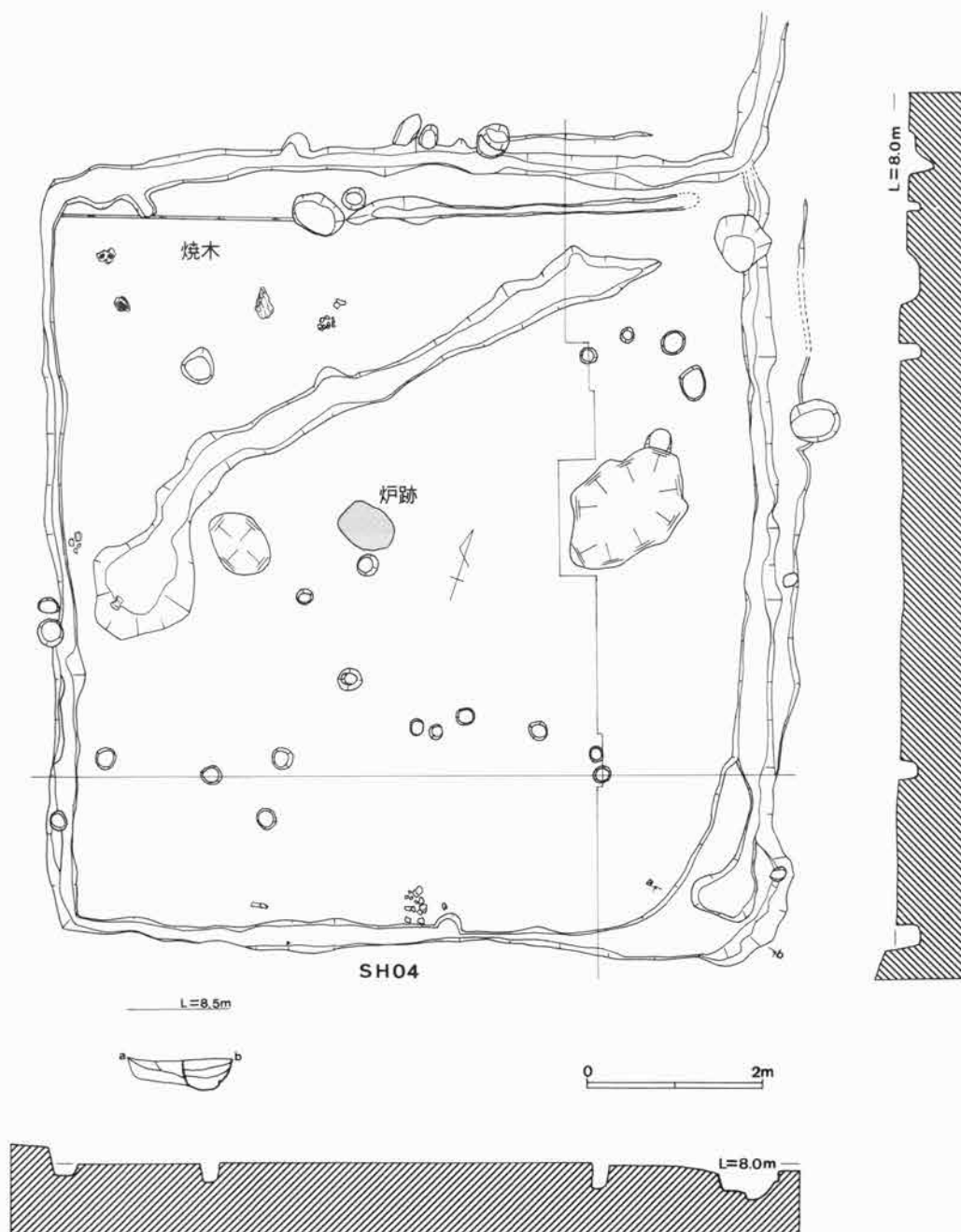
第21図 S H07実測図



第22図 S H06実測図

### 3. 調査経過

平成7年6月23日から水田部と東に続く丘陵突端部付近に試掘トレンチを設定して調査を実施した。その結果、水田部の地表下1～1.2mに弥生時代末頃から古墳時代後期頃の包含層(黒灰褐色土)が広く堆積していることが明らかとなった。この包含層下の灰色シルト層が遺構面にあたる。このことから、調査地一帯を包含層直上まで重機掘削することとなった。その後、人力掘削に入り、遺構検出に努めた。11月22日に関係者説明会を実施し、12月15日までに埋め戻し作業を完了し、現地調査を終了した。



第23図 SH04実測図

4. 検出遺構

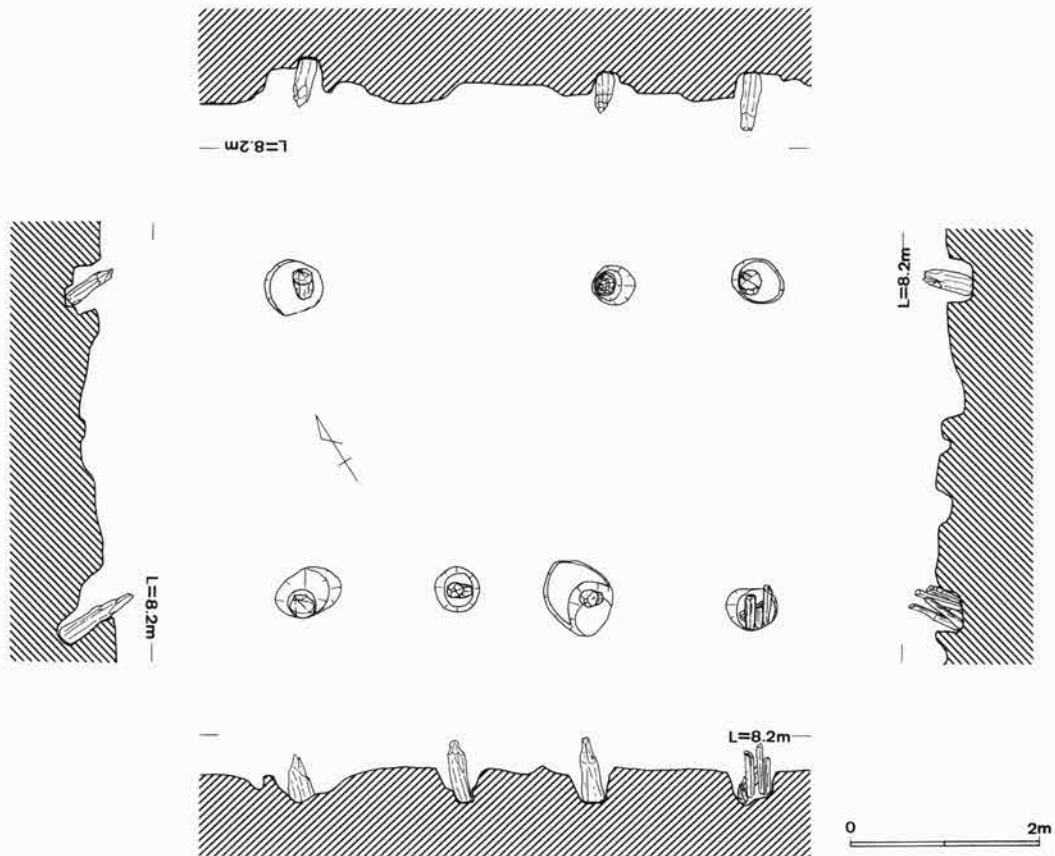
B地区からは竪穴式住居跡4基(SH07・SH06・SH23・SH04)・掘立柱建物跡1棟(SB26)・流路跡(SD15)・溝(SD16)・土坑(SX17・SX19)・ピットなどを多数検出した。B地区は、標高約8～8.2mのレベルにあり、全体的に東から西側にゆるやかに傾斜する。以下、各遺構ごとに概略を報告する。

SH07 トレンチ南端で検出した直径約9mの円形住居跡で、北東部はSH04に切られている。周壁溝は約20～40cm・深さ約20cmを測り、ほぼ半周する。床面中央に焼けた礫があり、炉跡の一部と見られる。床面南端に台付鉢や壺などがまとまって出土した。弥生時代後期末葉頃に属する。

SH06 トレンチ南東端で検出した。平面形はいびつな円形で、直径約10mを測る。西側でSH04と重複している。住居跡の南東部の壁面は垂直気味に立ち上がるが、北西側は残りが悪く周壁溝しか残存していなかった。ただ、床面が南東側で2段になっていることから、建て替えが行われていた可能性がある。南側周壁溝から把手付鉢が出土した。弥生時代後期末葉頃に属する。

SH23 トレンチ北側で検出した。一辺約5.4mの方形住居跡になる。支柱穴は4本で、周壁溝が「L」字状に残存している。

SH04 トレンチ中央部で検出した。平面形は方形で、9m×8.2mの大きさである。周壁溝は完周し、北東隅で住居跡外に続く。排水溝としての機能を備えていたと考えられる。南東隅で周壁溝の幅が約1.1mにも広がる。この土層断面の観察から、最初の周壁溝が排水・湧水に耐え



第24図 S B26実測図

られなくなり、拡幅されたものと考えられる。床面北西部で焼け焦げた板材がところどころ出土している。ここからは、甕の口縁部や砥石などが出土した。

**S B 26** トレンチの北端で検出した。1間×3間の掘立柱建物跡である。竪穴式住居跡S H 23と重複している。直径約40～60cm・深さ約80cm前後の掘形を設け、そこに幅20cm前後・残存長1m前後の杉を柱にしている。所属年代を決定する資料に欠けるが、弥生時代終末期に属すると推定される。

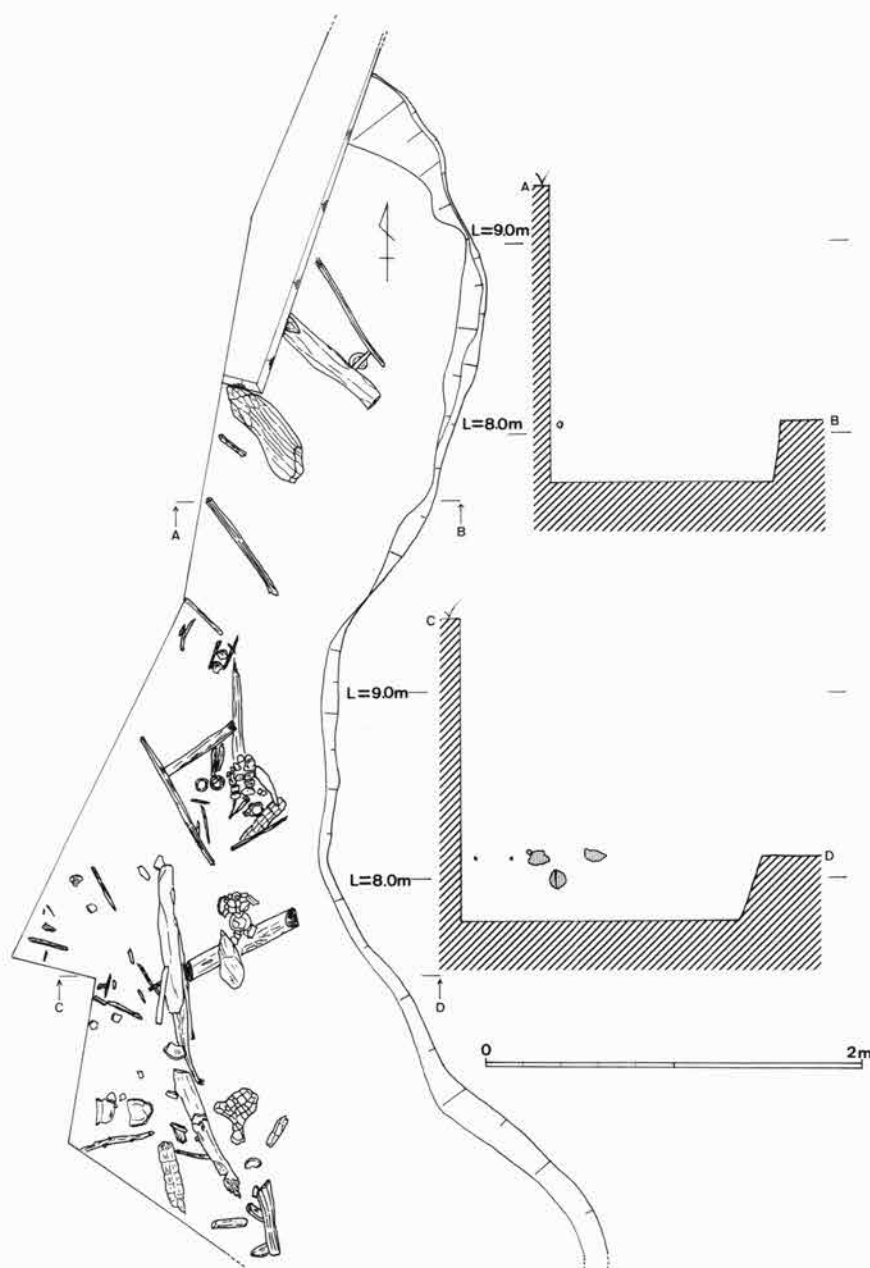
**S D 15** トレンチ西端で検出した。検出長約11m・幅2m前後の浅い流路跡である。流路南端では護岸に用いた杭や横板を検出した。南側で甕が2個体出土した。古墳時代中期後半頃に属する。

**S X 02** トレンチ南西隅で検出した。埋土上面で流木が乱雑に出土した。その間に小型丸底壺・高杯片が出土した。検出長約8m・幅0.8～1.6mを測る。この遺構は、出土土器から、S D 15に続く可能性が高い。

**S X 03** S H 04とS X 02の間で検出した。平面形は楕円形で、長軸約2.2m・短軸約1mを測る。布留式土器がまとまって出土した。

**S X 21** S H 23の西隣りで検出した。平面形は楕円形である。土坑西側の肩部で弥生時代末頃の銅鏃が1点出土した。

(尾崎昌之)



第25図 S X 02遺物・流木出土状況

## 5. 出土遺物

桑原口遺跡B地点ではコンテナバットに72箱分の土器が出土している。その内、遺構に伴うものが14箱で、58箱は包含層から出土した。これは、包含層である黒灰褐色土と竪穴式住居跡を主体とした遺構の埋土が近似しているため、遺構検出面が灰色シルト層まで下げないと見分けがつかなかったことから、包含層として取り上げた中には検出遺構に帰属する可能性を含んでいると思われる。出土遺物は、未整理部分が多いため、今回はその一部を報告する。

S X20出土遺物(1・4) 1は、ナデ肩の体部で口頸部が筒状の頸部から口縁端部を直立気味に立ち上げた複合口縁形を呈し、口縁部外面には4条の擬凹線文がめぐる。4は、笠形を呈した蓋で、内面には横方向のハケ調整が認められる。

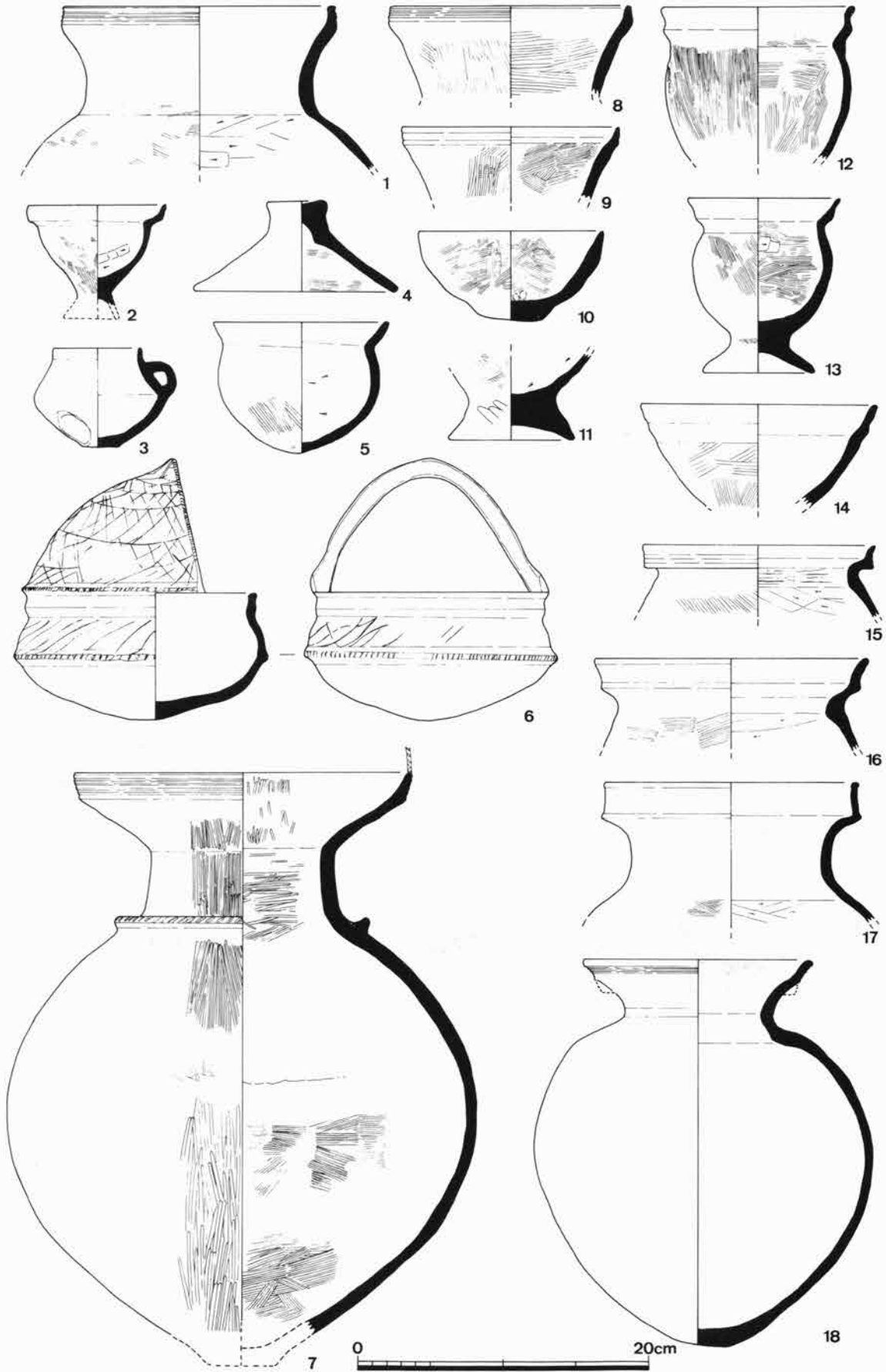
S H06出土遺物(2・3) 2は、口縁部が「く」の字形に屈曲した後斜め上方に立ち上がる複合口縁形を呈し、底部には裾広がりの短い脚が付くと思われる。3は、半球形を呈する体部で、口縁部が短く直立気味に立ち上がり、肩部に縦位の把手を貼り付けている。体部下半には焼成後に打ち欠いた跡がある。

S H07出土遺物(5・6・10~18) S H07からは、周壁溝のほか、埋土内から比較的まとまって土器が出土した。ただ、前述したように、包含層と埋土の識別が困難であったため、一部包含層からの混入品が混ざっている可能性が考えられる。6は、半球形の体部を持ち、覆い部を設けた手焙り形土器である。覆い部外面と体部上半部にはヘラ描きの文様が施されている。10は、半球形の体部で底部が突出気味の平底を呈した鉢である。15は、複合口縁形を呈した甕で、口縁部外面には3条の擬凹線文を施している。12・13・16は、ナデ肩の体部で複合口縁形を呈するが、口縁部外面に擬凹線文を施さない。そのうち、13は、底部に裾開きの短い脚部がつく。壺18は、肩部の張った球形の体部で、口頸部が「く」の字形に屈曲した後、斜め上方に立ち上がる複合口縁形を呈する。口縁部外面には擬凹線文を施しているが、一部擬凹線文を施した部分が剝離している。14は、斜め上方に立ち上がる深い杯で、口縁部が複合口縁形を呈した高杯である。5は、半球形の体部で口縁部が単純「く」の字形に外反する。17は、筒状の頸部から口縁部が直立気味に立ち上がる二重口縁形を呈する。5とともにS H07の上面包含層からの混入の可能性が考えられる。11は、甕あるいは鉢の脚部と思われる。

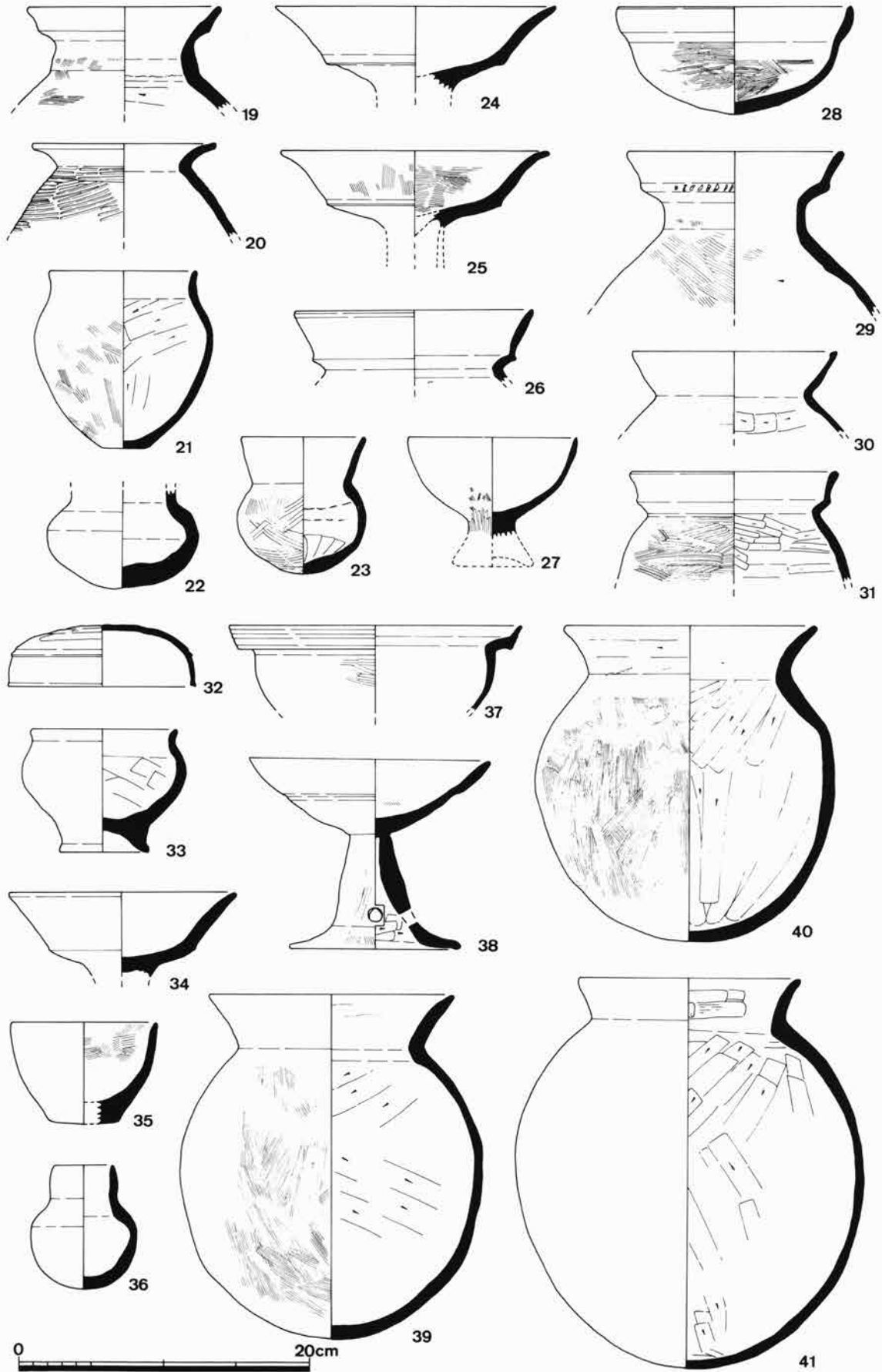
S H23出土遺物(8・9) 壺の口縁部片で、斜め上方に高く立ち上がる頸部から口縁端部が短く屈曲し、口縁端部外面には凹線文がめぐる。

S K25出土遺物(7) 7は、球形の体部で、口頸部が筒状の頸部から口縁部が斜め上方に立ち上がった後、直立気味に短く立ち上がる複合口縁形を呈し、口縁部外面には6条の擬凹線文がめぐる。体部と頸部の境にはキザミ目文を施した突帯文を、口縁端部の上端にはキザミ目文を加飾している。口縁部内・外面と体部外面の下半部にはいねいなヘラミガキ調整を施している。

S X02出土遺物(19~25) S X02からは、弥生時代後期末と古墳時代前期の土器が混在して出土している。21は、ナデ肩を呈した体部で、口頸部が直立気味に短く立ち上がり、底部が丸底気味の平底となっている。19は、筒状の頸部から斜め上方に屈曲しながら立ち上がる二重口縁形を



第26図 桑原口遺跡出土遺物実測図(1)



第27図 桑原口遺跡出土遺物実測図(2)



呈する。20は、単純「く」の字形を呈し、体部外面にはやや粗いタタキ目が認められる。22・23は、球形の体部から口縁部が斜め上方に長く立ち上がった小型丸底壺である。24・25は、深い皿状を呈した高杯である。

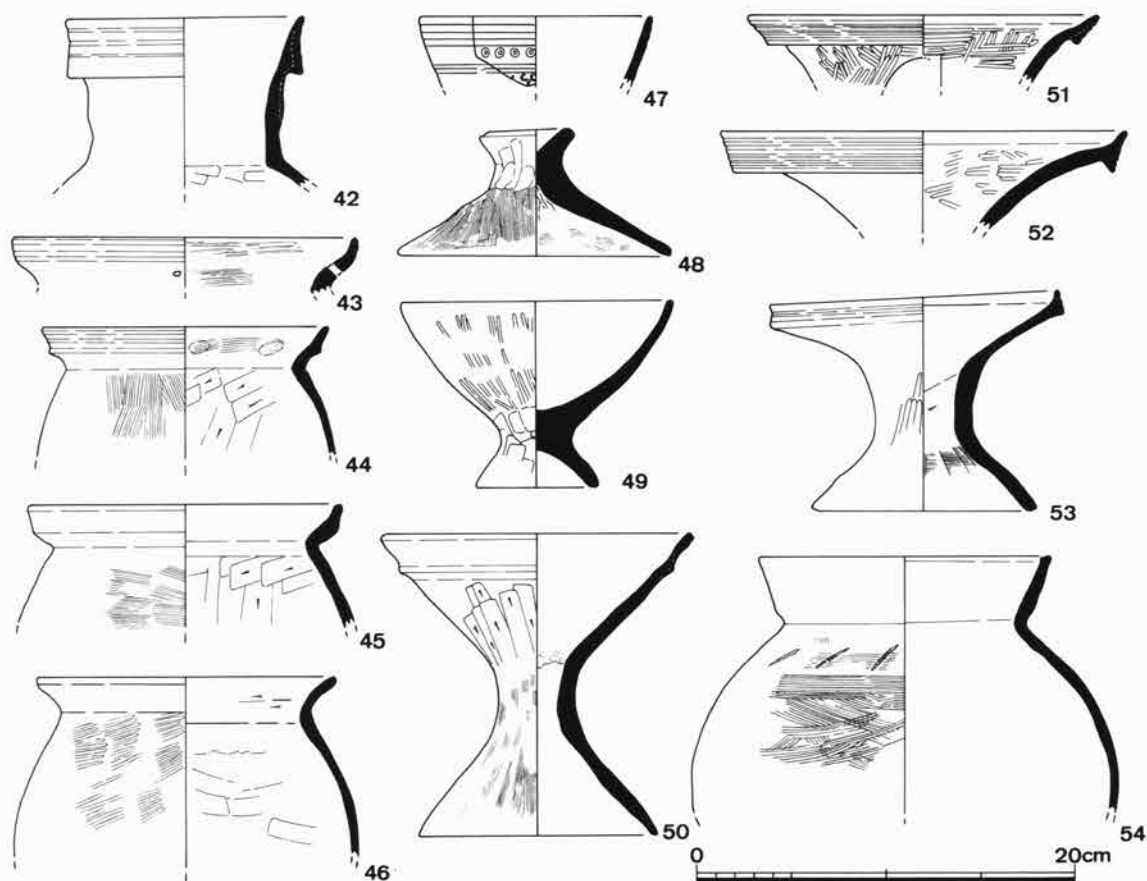
S H04出土遺物(26・27) S H04の遺構内からは他の遺構に比べて比較的まとまって土器が出土したが、整理作業が進んでいないため、今回はその一部を提示するにとどめる。26は、「く」の字形に屈曲した後、斜め上方に立ち上がる複合口縁形を呈した甕で、頸部と口縁部の屈曲部が明瞭であり、山陰系の甕の可能性が考えられる。27は、深い椀状を呈した鉢で、底部には裾開きの短い脚が付くと思われる。

S D11出土遺物(28) 28は、浅い椀状の体部から口縁部が内湾気味に立ち上がる鉢で、体部内・外面には細かいハケ調整を施している。

S D12出土遺物(29) 29は、ナデ肩の体部から口頸部が筒状の頸部をへて外反した後、斜め上方に直線的に立ち上がる二重口縁壺で、頸部と口縁部の境の外面にはキザミ目文を加飾している。

S X03出土遺物(30・31) 30は、単純「く」の字形を呈する口縁部で、口縁端部を内側に肥厚させた布留式甕である。31は、ナデ肩の体部から複合口縁形を呈した甕である。

S D15出土遺物(32~41) S D15からは弥生時代後期の土器を一部含むが、古墳時代中期後半を主体とする土器が出土した。鉢33は、半球形の体部で、口縁部が直立気味に短く立ち上がる。底部は、裾開きの短い脚が付く。鉢35は、深い椀状を呈し、底部が平底である。37は、半球形



第28図 桑原口遺跡出土遺物実測図(3)

の体部で、口頸部が水平気味にのびる頸部から斜め上方へ短くのびる複合口縁形を呈し、口縁部外面には3条の擬凹線文がめぐる。33・35・37は、弥生時代後期のもので、周辺遺構からの混入品と思われる。32は、天井部が水平気味で、口縁部と天井部の境には明瞭な稜線がめぐる。天井部外面には、ていねいなヘラケズリ調整が認められる。甕39～41は、球形気味の体部から口縁部が単純「く」の字形に外反しており、体部外面にはハケ、内面にはヘラケズリ調整を施す。高杯34は深い皿状を呈し、38は椀状を呈する。36は、扁球形の体部で、口頸部が内湾気味に高く立ち上がる口縁部を持つ。

包含層出土遺物(42～54) 先に述べたように、包含層からは多くの土器が出土しており、その大半は未整理のため、今回は一部の紹介にとどめる。壺42は、筒状の長い頸部から口縁部がわずかに外反し、外面には粘土帯を貼り付けて面をつくる。口縁部外面には3条の不明瞭な凹線文がめぐる。壺47は、口縁部片で外面には円形竹管文と「S」字状竹管文を加飾している。43～45は、複合口縁形を呈する甕で、口縁部外面に擬凹線を施したもの(43・44)、擬凹線を施さないもの(45)がある。甕46は、単純「く」の字形を呈し、体部外面に粗いタタキ目が認められる。甕54は、口縁部が「く」の字形を呈し口縁端部がわずかに肥厚したものである。器台(50～53)は、斜め上方に立ち上がる受け部から口縁部が短く斜め上に立ち上がる。口縁部外面に擬凹線を施すもの(51～53)と、施さないもの(50)がある。このうち51は、受け部の上にさらに受け部を設けた装飾器台の口縁部片で、透かし穴が設けられている。48は笠状を呈した蓋、49は深い椀状を呈し、底部が裾開きの短い脚部を付けた台付鉢である。

(石井清司)

## 6. まとめ

桑原口遺跡は、宮津谷の中央部、大手側右岸の低台地上に営まれた集落遺跡である。遺跡の広がり、今回調査地周辺を踏査したところ、南北約150m・東西約100mの範囲内にほぼ納まることが判明した。なお、北西部への展開状況については、来年度一部の面的調査を予定しているA地区の調査結果を得て確定することとしたい。

今回、面的調査を実施したB地区では、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての遺構・遺物が、良好な遺存状況のもとで、複雑に切り合った状態で検出された。これらの資料は、1970年の発掘調査の成果と合わせ、この地域における弥生時代末から古墳時代前期にかけての集落の変遷、あるいは土器の編年を研究する上で、貴重な資料になると考えられる。

(奥村清一郎)

### (3) 大 俣 城 跡

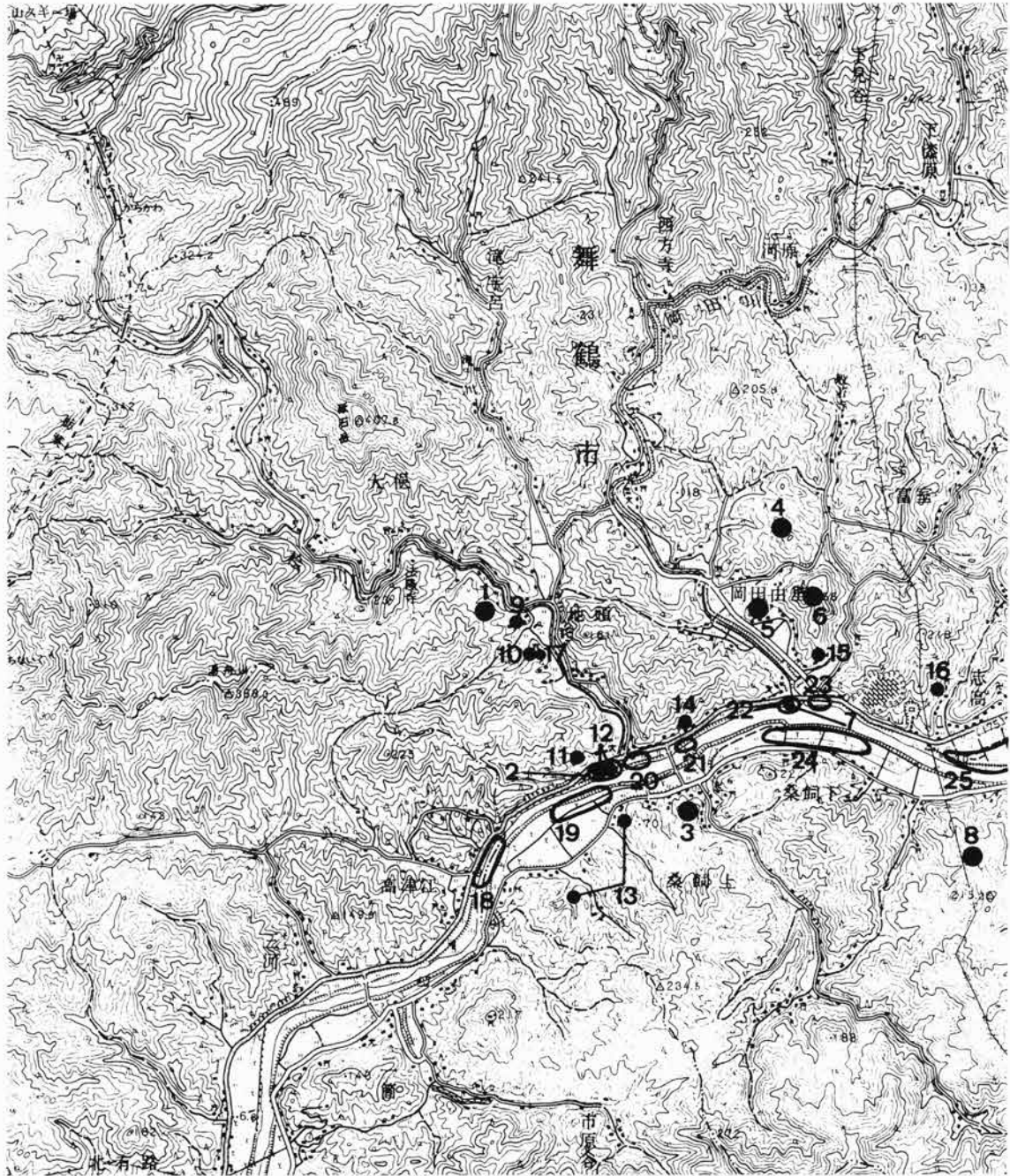
#### 1. 位置と環境(第29図)

大俣城跡は、舞鶴市大字大俣小字別荘平に所在し、舞鶴市と加佐郡大江町との境界に聳える湯舟山から東へ派生する尾根の先端部に位置する。その部分は、鞍部の存在によって独立した小山の形状をなしている。北西方向に標高408mの砥石岳を臨み、眼下を檜川がゆるやかに流れている。檜川は、湯舟山と砥石岳に挟まれた谷筋を蛇行しながら東へ進み、やがて南下して由良川と合流する。

由良川は、府北部最大の河川で、本流の全長は約146km、流域面積は1,880km<sup>2</sup>に及ぶ。北桑田郡美山町に源を発し、丹波山地一帯の水を集めながら西進し福知山市に達する。以後、方向を転じながら大江町・舞鶴市を流れ、若狭湾に注ぐ。舞鶴市域では、大江町界より西神崎で湾に入るまでおよそ16kmを測り、その間、檜川・滝川・宇谷川・岡田川・久田美川・八戸地川など多くの支流を併合する。古くから日本海沿岸部と内陸部とを結ぶ水路として重要な役割を担ってきたが、一方で水位の上昇による洪水の害が跡を絶たなかった。洪水を引き起こす要因としては、谷底平野の幅が狭いこと、川の流れがゆるやかな蛇行を示していること、川底が緩勾配であることなどが挙げられる。川の両岸では、このような度重なる洪水によって、土砂が堆積して生じた自然堤防がよく発達し、堤防上では幾多の集落が生活を営んできたと思われる。昭和30年代半ばに八雲橋付近の川底から縄文土器が採集されて以来、下流域で数多くの住居跡や遺物が発見されている。

例えば、周辺では高津江遺跡・地頭遺跡・地頭東遺跡・岡田由里遺跡が遺物散布地として知られており、実際に調査が行われた例としては、桑飼上遺跡・桑飼下遺跡・志高遺跡などがある。桑飼上遺跡は、弥生時代中期から奈良時代にわたる集落遺跡で、竪穴式住居跡34基・掘立柱建物跡14棟、その他多数の溝・土坑などを検出している。東西800mにわたる自然堤防上に、集落が断続的に形成されたことが確認されている<sup>(注4)</sup>。桑飼下遺跡も自然堤防上の集落遺跡で、縄文時代後期の炉跡48基を検出したほか、打製石斧を主とした縄文時代後期の石器約1,300点が確認されている<sup>(注5)</sup>。志高遺跡は、縄文時代早期から明治時代にわたる包含層が自然堤防上に存在する代表的な複合集落遺跡である。とりわけ、弥生時代中期から後期にかけての集落の実態が、丹後地方で初めて明らかにされる遺構を検出したことは特筆される<sup>(注6)</sup>。このように居住地として利用されてきた自然堤防も、明治40(1907)年の大洪水以後は茶園や畑地に姿を変え、集落は洪水を避けるため多くが山麓に移動している。

大俣城跡は、桑飼上遺跡の対岸にあって、由良川に注ぐ檜川を、合流地点からおよそ1.5kmさかのぼった右岸に位置する。標高85mの山頂を削平して主郭を形成している。麓までの比高差は、約40mを測る。主郭から檜川を見下ろすと、川に沿うようにして街道が走っている。この街道は、川の上流に向かってしばらく並走した後、普甲峠を越えて宮津市街地へ抜ける。街道沿いには小



第29図 大俣城跡と周辺の遺跡(1/50,000)

- |             |            |            |            |
|-------------|------------|------------|------------|
| 1. 大俣城跡     | 2. 地頭城跡    | 3. 宇谷城跡    | 4. 岡田由里城跡  |
| 5. 岡田由里別城跡  | 6. 荒張城跡    | 7. 水無月山城跡  | 8. 原城跡     |
| 9. 別荘古墳     | 10. 西飼古墳   | 11. 山根古墳   | 12. 城1・2号墳 |
| 13. 上村1・2号墳 | 14. ニヤ古墳   | 15. 枝宮古墳   | 16. 薬師古墳   |
| 17. 二の宮経塚   | 18. 高津江遺跡  | 19. 桑飼上遺跡  | 20. 地頭遺跡   |
| 21. 地頭東遺跡   | 22. 水無月山遺跡 | 23. 岡田由里遺跡 | 24. 桑飼下遺跡  |
| 25. 志高遺跡    |            |            |            |

さな集落が点在し、本城跡の麓においても「館」や「庄内屋敷」など城に関連があると思われる集落の名が見られる。城主に関しては、浮橋左近・岩田蔵人・荒木幸盛らの名が挙がっているが、<sup>(注7)</sup>特定するには史料が乏しく、築城年代も明らかにされていない。

中世山城の成立時期は、一般に14世紀、南北朝期にさかのぼるとされる。中でも「悪党」と呼ばれた楠木正成の千早・赤坂城砦群はよく知られており、当初は戦略上の必要性から山の奥深い天険要害の地に築かれることが多かった。以後、国人層を中心として各地で盛んに山城が築かれるようになると、その多くが、山麓の支配村落との連絡に便利な低い山や丘陵を拠点とし、曲輪や土塁・堀などの軍事的な施設も次第に整えられていくようになる。舞鶴市域でも、建武4(1337)年、「岡田庄荒針城」で戦が展開された旨の記述が史料の中にある。<sup>(注8)</sup>その後、戦国時代末期までのおよそ250年間、市域のいたるところで築・廃城が繰り返されたと推察される。舞鶴市教育委員会の調査によって確認された山城は167か所にのぼるが、<sup>(注9)</sup>その多くが築城年代・城主などが判然としていない。大俣城もそうした山城の一つである。<sup>(注10)</sup>

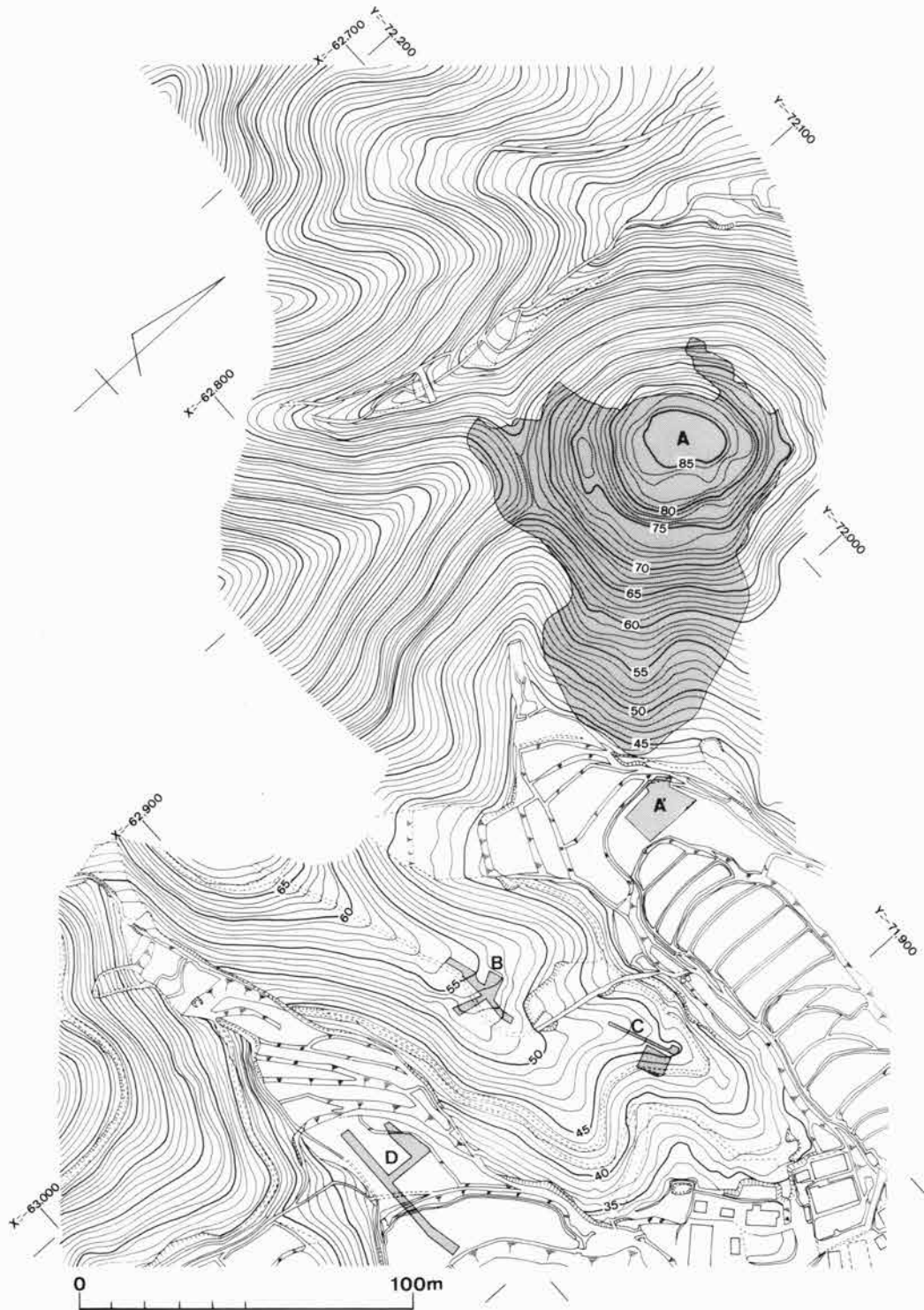
## 2. 調査の経過

今回報告する地区は、A及びA'の二地区である(第30図)。

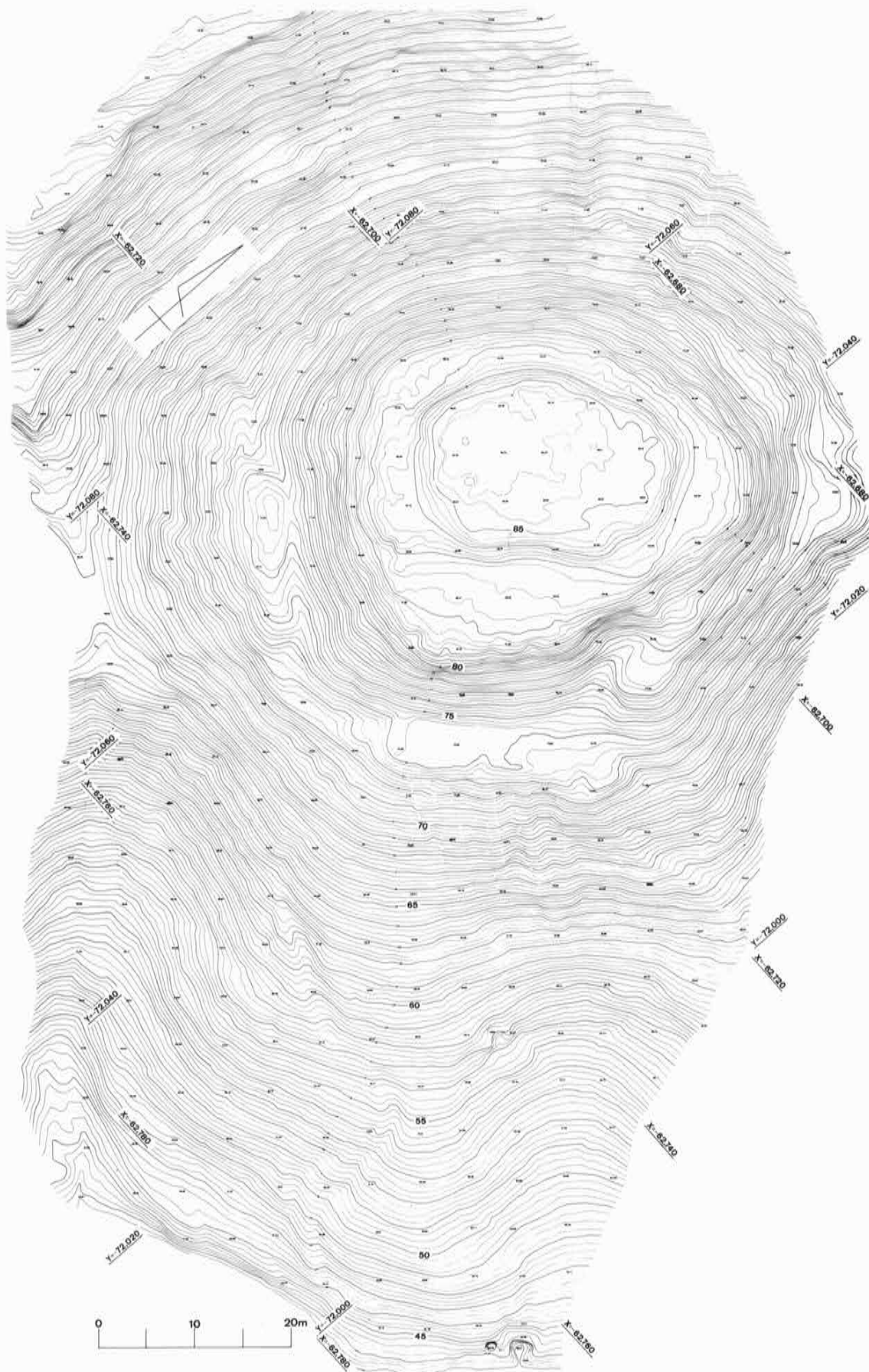
A地区は、遺構の残存状況が良好な中世の山城跡である。調査は、平成6・7年度の二年度にわたって実施した。平成6年度は9月14日から調査に着手し、積雪のため、翌年1月27日に一時終了した。主郭と帯曲輪を中心に調査を行い、掘立柱建物跡や溝・土坑などを検出した。曲輪Ⅲ及び虎口部分については、表土と一部堆積層を除去し、遺構の精査は次年度に委ねることとした。平成7年度は4月17日から調査を再開し、曲輪や虎口のほか、堅堀・横堀・土塁など、主として防御施設について調査を進めた。その結果、大俣城跡は小規模ながらも随所に工夫の凝らされたたいへんまとまりのよい山城であることが判明した。それらについては、調査概要の中で触れることにする。時期的には、戦国時代後半の山城に特有の榊形虎口や畝状堅堀が見られることから、16世紀後半に盛期を迎えたと思われる。しかし、その点については出土遺物の評価も併せた上での詳細な検討が必要であろう。今回の調査では、城跡の大半が予定路線内にあったことから、山城の全体構造を解明する上で貴重な資料を得ることができた。現地説明会を8月30日に開催し、9月8日にすべての作業を終了した。調査総面積は、約5,500m<sup>2</sup>であった。

A地区の南東部の谷部平坦地にあたるA'地区では、A地区に先立って調査を実施した。約200m<sup>2</sup>のトレンチ内に、A地区よりも年代のさかのぼる中世の遺構・遺物を検出した。詳しくは、後述する。

なお、B・C・Dの三地区は、いずれも大俣城と関連がない、もしくは関連が不明であることを確認しており、それについては既報の通りである。<sup>(注11)</sup>したがって、本稿で繰り返し記述することは避け、A及びA'地区についての調査概要を以下に記すことにする。



第30図 調査地配置図



第31図 A地区地形測量図(調査前)

### 3. 調査の概要

#### (1) A地区

調査着手前に地表面観察を行ったところ、遺構の残存状況が極めて良好で、曲輪・虎口・堀・土塁などがほぼ完存しているのではないかとの印象を得た(第31図)。また、山城のほぼ全容が明らかになる調査例は府内ではこれまでになく、大きな成果が期待された。調査方法としては、主郭と想定される山頂部の平坦面から人力による掘削を行い、漸次下段の平坦面(曲輪)へ下りて行くことにした。斜面部では、堅堀の存在が予想されることから人力掘削を基本としながらも、作業に危険を伴うところ及び遺構が希薄と思われる範囲では、適宜重機掘削を併用した。

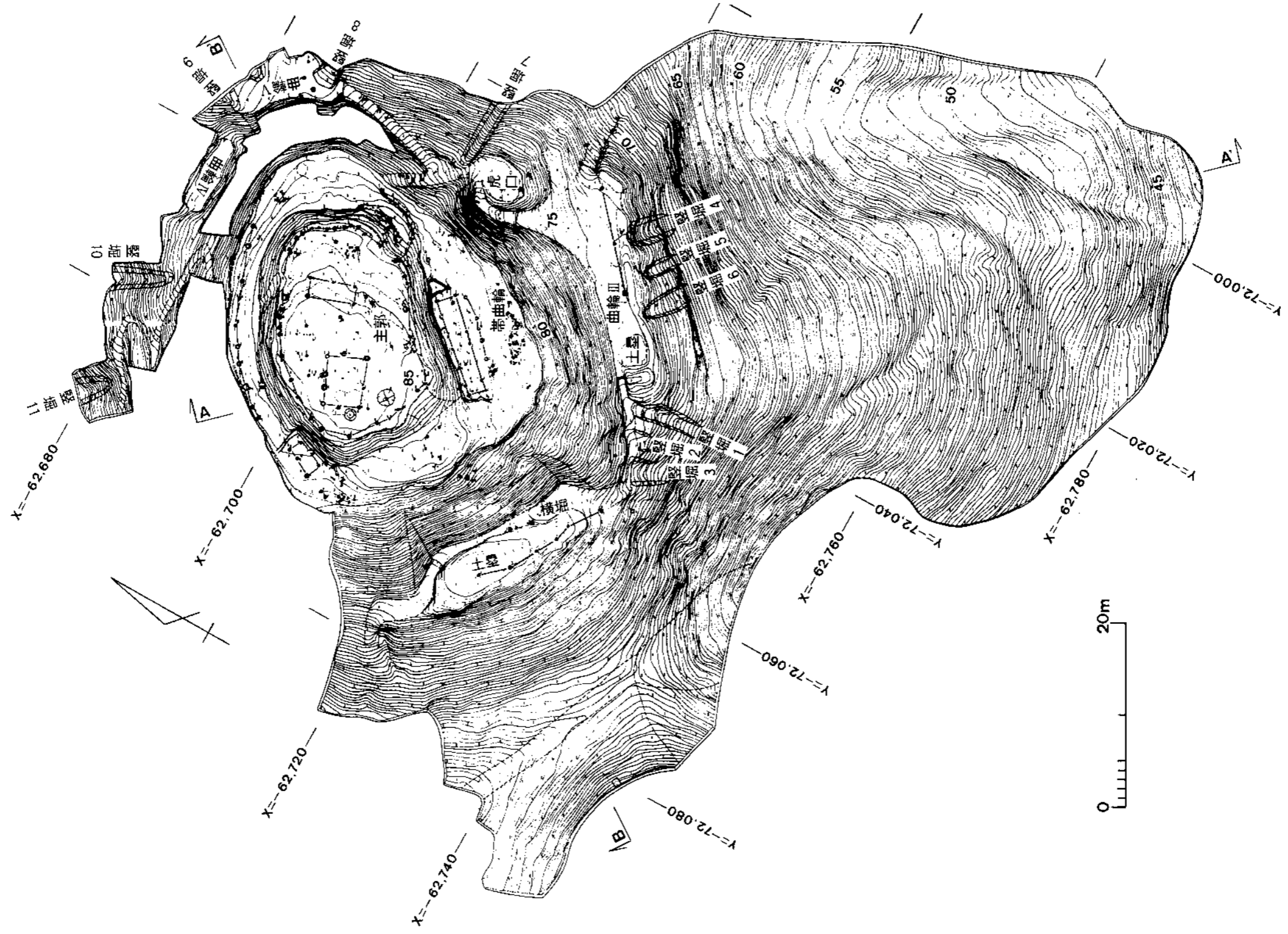
調査の結果、A地区は、最頂部にある曲輪(主郭)を帯状に別の曲輪がとり囲み、さらに周囲に数段の腰曲輪を配する円郭式の山城であることが判明した(第32図)。土塁や堅堀・横堀などの防御施設についても、地表面観察では気付かなかった新たな知見を得ることができた。また、曲輪間の連絡路や虎口の構造が明らかにされたことは注目に値する。以下、主郭から順に検出された遺構について説明を加える。

#### ①検出遺構

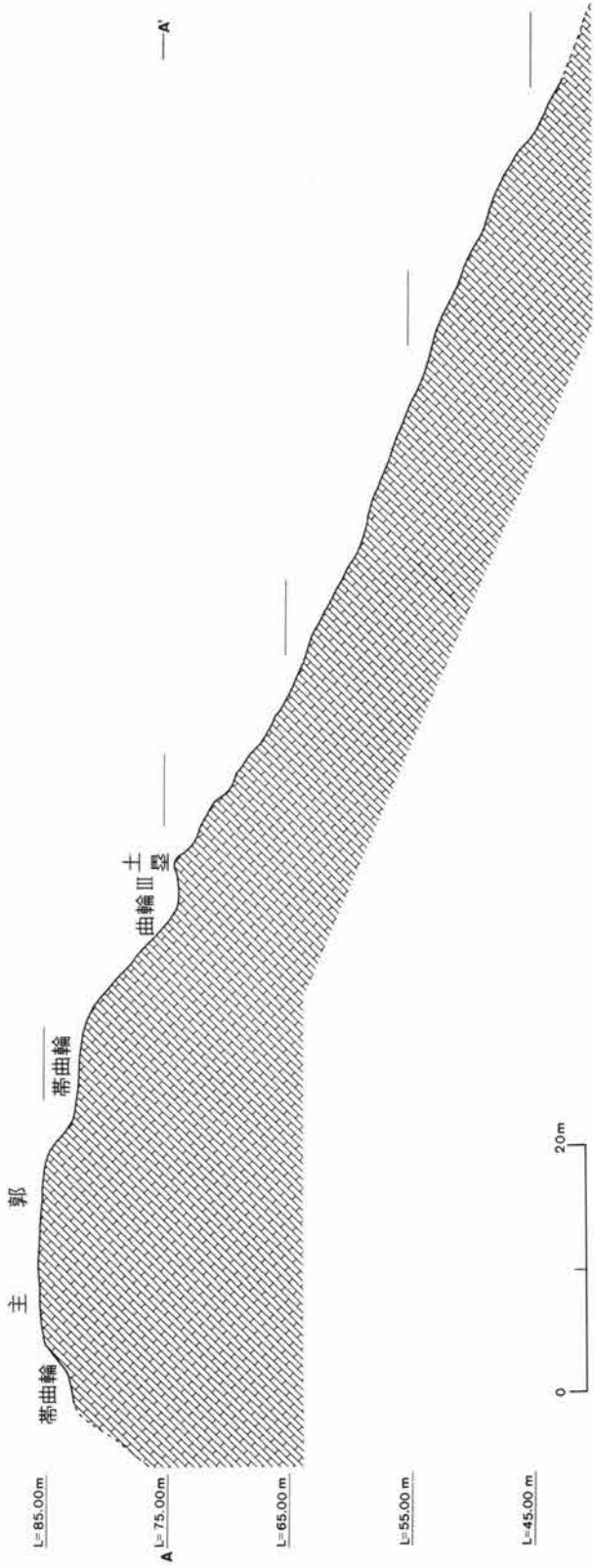
a. 主郭・帯曲輪(第35図) 山城の最高所に位置する主郭は、長軸約25m・短軸約15mを測る楕円形の曲輪である。土層の堆積状況は、厚さ5~10cmの表土層(黒色有機質土層)、厚さ10~20cmの黄褐色粘砂質土層、そして地山の黄褐色礫混じり粘質土層である。地山面を精査した結果、曲輪内部で掘立柱建物跡2棟(S B01・S B02)と土坑2基(S K01・S K02)、柵列跡(S A01)を、斜面部で柵列跡(S A02)と通路状遺構3か所を検出した。出土遺物は、染付椀、白磁皿、丹波焼壺、瀬戸・美濃焼椀(灰釉・天目)・同じく皿(灰釉)、土師器蓋・皿、瓦質土器播鉢、銭貨などである。すべて、第2層(黄褐色粘砂質土層)中から出土しており、S B01付近に集中する傾向がある。

主郭を囲む帯曲輪は、外周約110mを測る。南西部で台状に高まりを見せるほかは、ほぼ平坦面である。南西部の斜面直下には横堀と土塁が控えており、この高まりには何らかの防御的意図が感じられる。この部分における主郭との比高差は約1.0mで、他では約1.5~約2.2mを測る。曲輪の幅は、最小約2.5m・最大約10mと格差が大きい。これは、単に地山を削り込むことによって平坦面を造り出した部分もあれば、盛り土をすることによって平坦面を拡張した部分もあるためである。基本的に帯曲輪の平坦面は固い地山を削り込むことによって形成されており、その作業にはかなりの困難が伴ったと思われる。層序は主郭と同様、表土下10cm前後で黄褐色粘砂質土層となり、20cm前後の堆積を見る。この層からは、染付椀・皿、白磁皿・小杯、青磁盤、瀬戸・美濃焼椀(灰釉・天目)・同じく皿(灰釉)・茶入、土師器蓋・皿・壺、瓦質土器播鉢、銭貨のほか、銅製匙・椀(底部のみ)、砥石、基石、炭化穀類などが出土している。出土点数、種類ともに主郭をはるかに凌いでいる。また、遺物の多くが曲輪南東部から出土している。この黄褐色粘砂質土を除去すると地山面になる。この面で遺構の確認に努めた結果、掘立柱建物跡2棟(S B03・S B04)と溝2条(S D01・S D02)、柵列跡(S A03・S A04)、焼土(S X02)を検出した。また、南東部の盛り土層から集石遺構(S X01)を確認した。

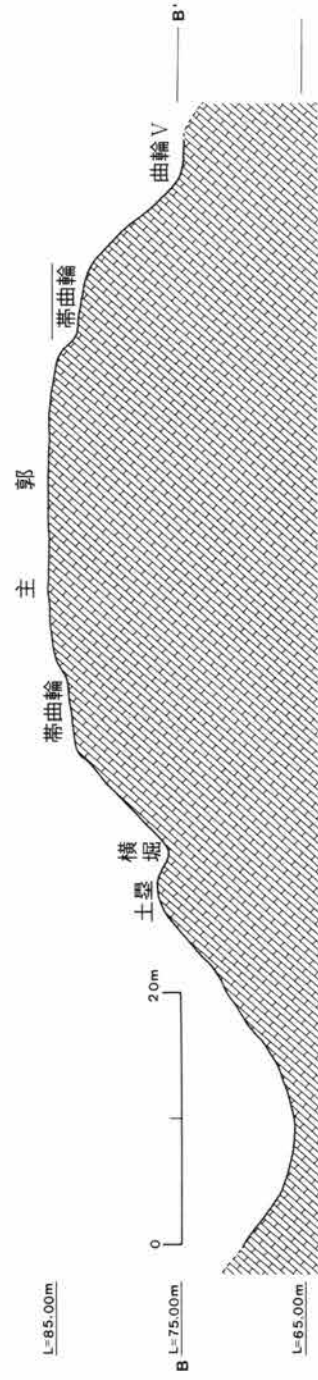




第32图 A地区地形測量区(調査後)



第33図 縦断面図

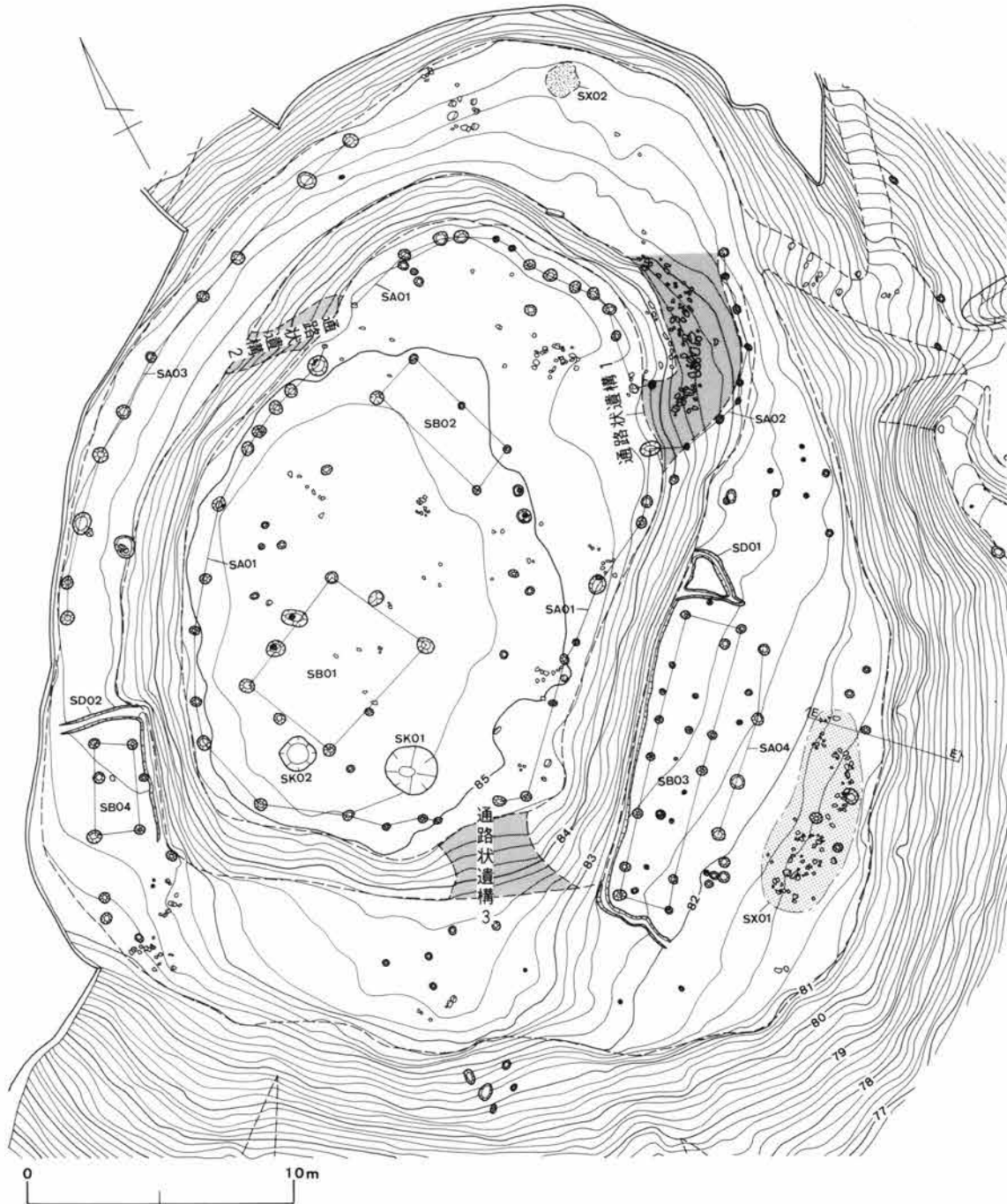


第34図 横断面図

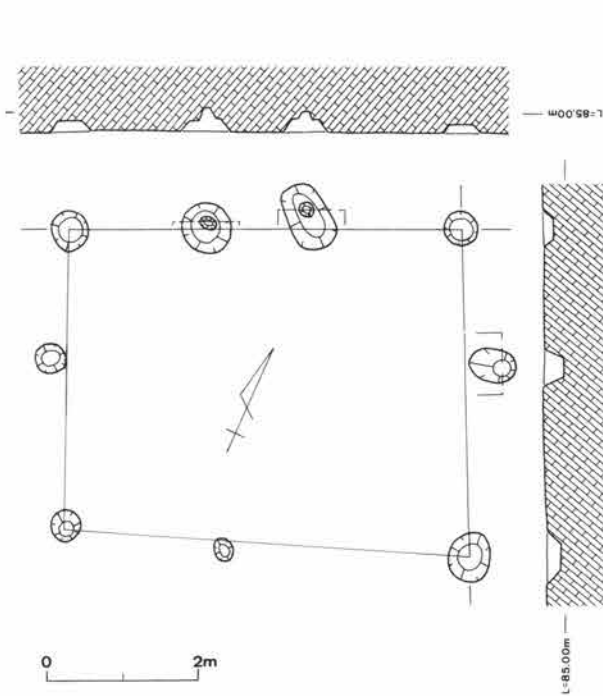
掘立柱建物跡 S B01(第36図) 主郭西半部に位置する3間×2間の建物跡である。規模は約5.4m×約4.3mで、柱間は不等間隔である。柱穴の形状は、円形及び楕円形を呈し、径30～50cm(円形のみ)・深さ15～35cmを測る。建物跡の軸線は、座標北から西へ約22°振る。

掘立柱建物跡 S B02(第37図) 主郭東半部に位置する1間×2間の建物跡で、規模は約2.0m×約5.0mである。柱穴は円形で、径20～30cm・深さ15～30cmを測る。建物跡の軸線は、座標北から西へ約19°振る。

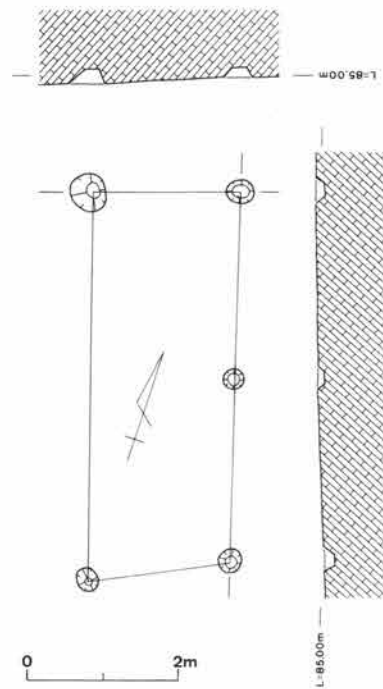
S B01・02ともに柱穴から遺物が検出されなかったため、この点から2棟の時期差について論



第35図 主郭・帯曲輪平面図



第36図 SB01平面図・断面図



第37図 SB02平面図・断面図

じることはいないが、軸線がほぼ平行していることや位置関係から判断して同時期に存在した可能性が高いように思われる。また、主郭内の出土遺物がSB01付近に集中していることや、建物の規模に差異が見られることから、SB01がこの曲輪の主屋に相当したと考えてよい。

**土坑SK01** SB01の南側で検出された。長軸約1.9m・短軸約1.6m・深さ約0.8mを測る楕円形の土坑である。埋土中から遺物は検出されなかった。

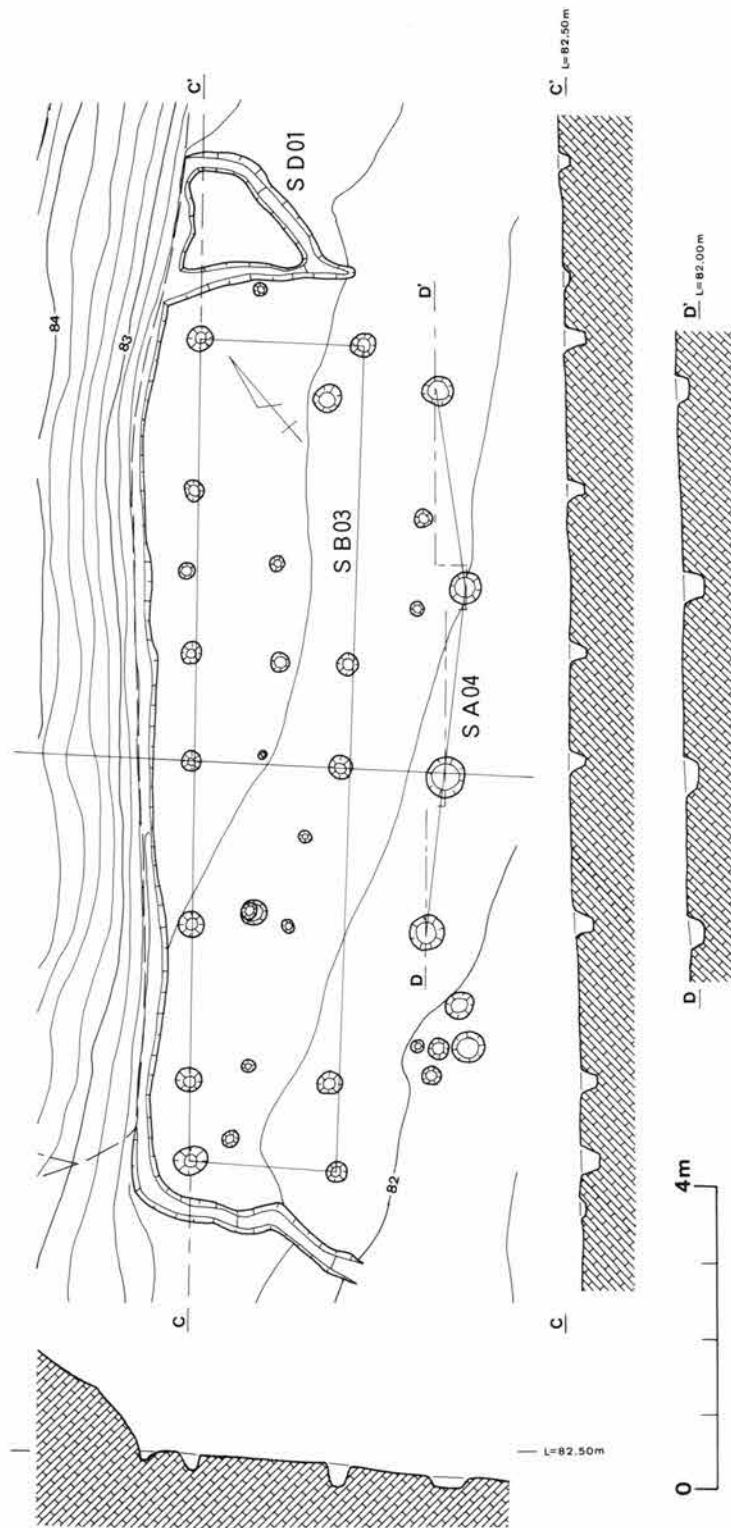
**土坑SK02** SB01の西辺に近接する。長軸約1.0m・短軸約0.9m・深さ約0.4mを測る不整形の土坑である。SK01同様、埋土中から遺物は検出されなかった。

SK01・02ともに調査前の段階ですでに陥没の痕跡が認められたこと、また時期を特定する遺物が検出されていないことから、後世において掘削された、あるいは二次的攪乱を受けた可能性もある。ただ、SB01との位置関係から判断して、この建物跡に付随するものとも考えることもできる。水溜めとして使われたものか。

**柵列跡SA01** 主郭外周部で検出された。柱穴の形状及び大きさ・深さに統一性はなく、間隔も不揃いである。曲輪内部を防御するためのもので、通路状遺構の部分を除き一周する。

**柵列跡SA02** 通路状遺構1の帯曲輪側で検出された。通路の屈曲に合わせて、SA02もゆるやかな弧を描く。最も主郭よりの柱穴は、他と比較して大きく深く掘られており、上面が偏平な石と対をなしていることから、門が建っていたと思われる。この柵列によって主郭への侵入が大きく制限を受けるため、単に通路の区画を示すものでなく、防御用としての効果が大きい。

**通路状遺構1** 主郭東部から帯曲輪へ連絡する。勾配は比較的ゆるやかであるが、ほぼ直角に屈曲している。主郭側の壁面には拳大から人頭大の石を貼り、帯曲輪側には柵列(SA02)を設け



第38図 S B03・S D01・S A04平面図・断面図

ることによって通路の形状をなしている。

また、柵列の外側では、地山を削り込むことによって帯曲輪南東部から北東部へ抜ける通路平坦面を確保している。

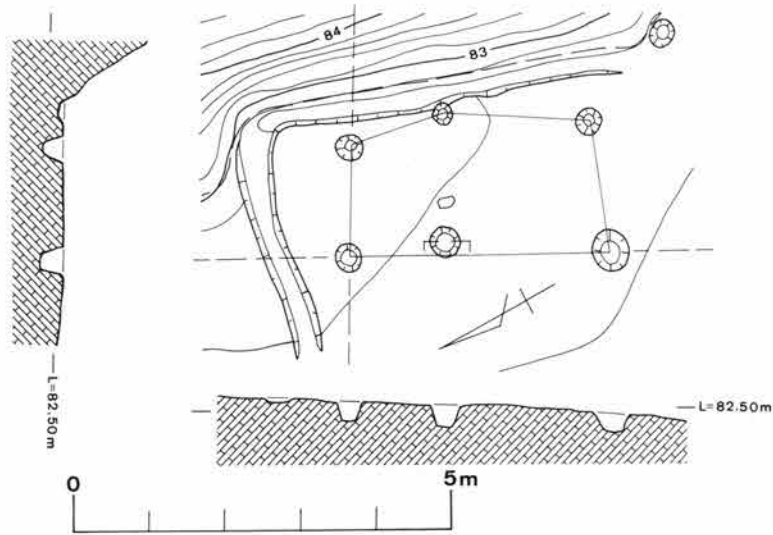
**通路状遺構 2** 主郭北部から帯曲輪へ連絡する。通路幅が狭く、若干蛇行しながら下る。通路を降りたところから、16世紀後半の土師器皿を2枚、口縁を合わせた状態で検出した。中には何も納められていなかった(図版第21)。この通路は、単に地山を削りこむことによって造り出されており、通路状遺構 1 より簡素な造りである。

**通路状遺構 3** 主郭南部から帯曲輪へ連絡する。通路の中では最も勾配がゆるやかで、直線的に下る。造りは、通路状遺構 2 同様地山を削り込んだだけの簡素なものである。

**掘立柱建物跡 S B03**(第38図) 帯曲輪南東部に位置する6間×1間の細長の建物跡である。主郭側の壁面に沿って検出された。柱穴は円形で、径20~30cm、深さは最深のもので40cmを超える。柱穴の並び方や柱

間に規則性が感じられ、建物の性格を考える上で興味深い。

**掘立柱建物跡 S B 04**(第39図) 帯曲輪西部に位置する2間×1間の建物跡である。岩盤が露出する壁面を削り込むことによって平坦面を拡張している。柱穴は円形で、径25～40cm、深さは最深のもので約50cmを測る。



第39図 S B 04・S D 02平面図・断面図

**溝 S D 01**(第38図) 幅10～20cm・深さ約5cmを測る。S B 03の周囲をめぐる。雨落ち溝か。

**溝 S D 02**(第39図) 幅約20cm・深さ5～10cmを測る。S B 04に伴うもので、S D 01同様雨落ち溝と思われる。

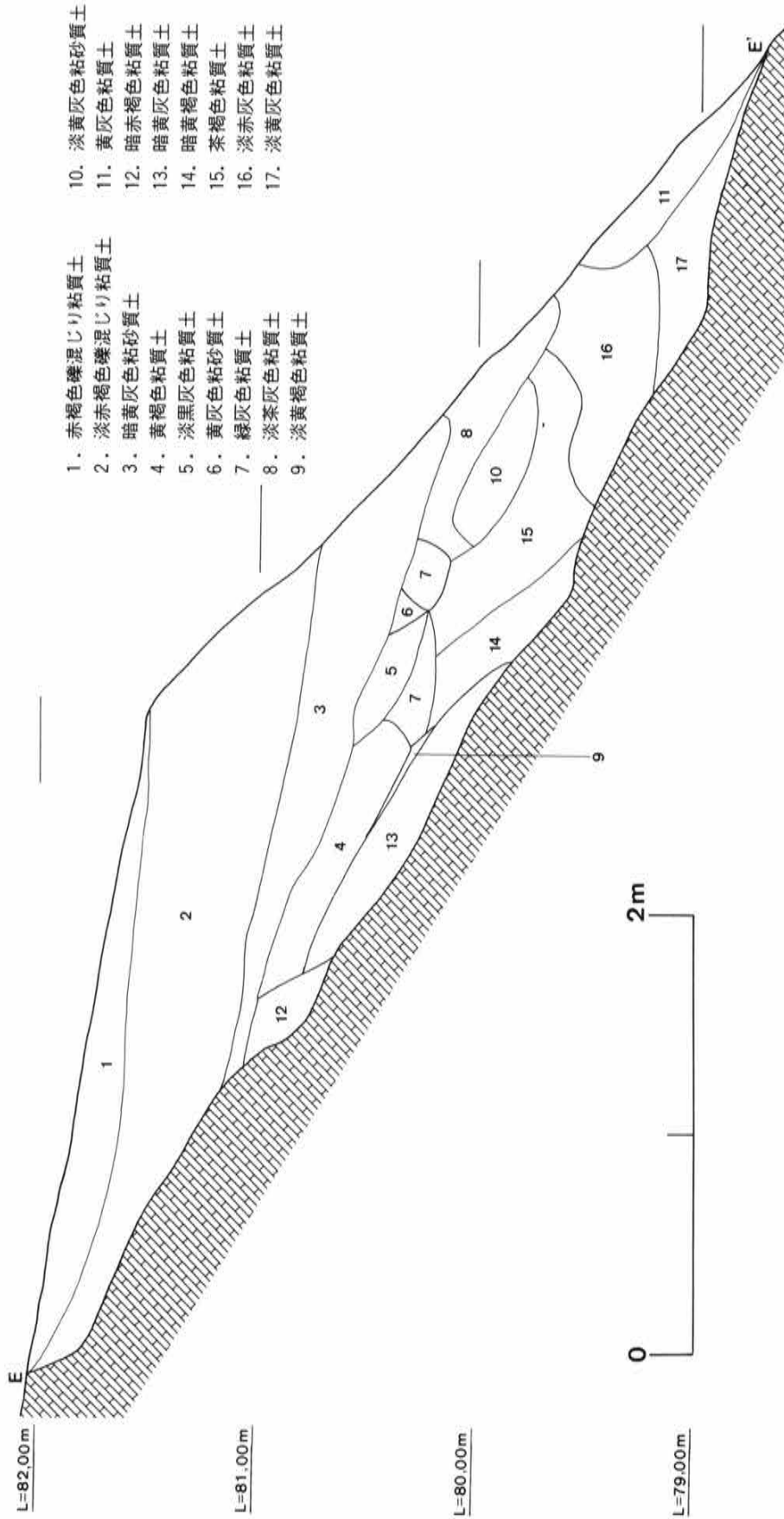
**柵列跡 S A 03** 帯曲輪北西側の外周部で検出された。斜面からの侵入を防御するためのものであろう。

**柵列跡 S A 04**(第38図) S B 03の前面を遮蔽する。柱穴の径は40～55cmを測り、S B 03の柱穴よりひと回り大きい。この柵列の前方から盛り土による平坦面となるが、これらの柱穴はすべて地山を掘りこんでいる。なお、この柵列はさらに南西方向にのびていたと想定される。

**集石遺構 S X 01**(図版第20) 帯曲輪南東部の縁辺付近で検出された。この辺りは、盛り土をすることによって平坦面を造成・拡張している(第35図; E-E')。石は、すべて盛り土最上層の赤褐色礫混じり粘質土層中にあり、中には河原石も見られる。大きさは、拳大から人頭大とさまざまである。縁辺に沿って面をそろえた石列が一部見られることから、縁辺部のみ簡単に石を組み、あとは土中に混淆させて平坦面を補強したものであろう。このように、盛り土中に石を混ぜることによって土留めの役割を果たし、曲輪平坦面を拡張する例は、池田城(広島県)や大井谷城(島根県)など、西日本各地で散見される。なお、盛り土下の地山を若干削り込んでくぼみをつくっているのは、盛り土をする際の足場として利用したためであろうか(第40図)。

**焼土 S X 02** 帯曲輪北東部で検出された。径1.2m前後を測り、不整形に広がる。付近には、範囲が不明瞭な焼土の広がりが見られる。焼土層からは、炭化材のみが検出された。この部分は、帯曲輪の中でも特に視界が開けており、直下に山城に関係すると思われる集落が控えていることから、狼煙の跡と推測される。

以上、主郭及び帯曲輪の検出遺構について概観してきたが、ここで、帯曲輪の機能について若干の考察を加えたいと思う。帯曲輪は、もちろん主郭を包囲するひとつの曲輪であるが、その機



第40図 帯曲輪盛り土部分土層断面図

能から次の3区に分けることができる。a区—帯曲輪南東部の最も広い平坦面(SB03や盛り土部分を中心とする範囲)、b区—帯曲輪南部から南西部にかけて台状に高まる区域(SB04を含む範囲)、c区—SA03から帯曲輪北東部の焼土が点在する範囲まで。まず、a区は、出土遺物の最も豊富な帯曲輪の中であって、その半数以上を占める極めて生活色の濃い区域である。とりわけ、SB03の内部及び付近から椀(染付、天目)、皿(白磁、瀬戸・美濃灰釉、土師器)、壺(丹波焼)、播鉢のほか、銅製の匙・椀や茶入、碁石などが出土している点は注目される。盛り土部分からは炭化した穀類や炭が出土しており、煮炊きしたようすがうかがえる。また、a区南西端直下の斜面で石臼や茶臼の破片を検出したが、これはa区で使用されていたものと思われる。以上の点から、a区は帯曲輪において生活の中心となった場所であり、SB03は主郭の2棟も含めた上で最も使用頻度の高い建物であったと推測される。b区は、周囲の平坦面より1m前後高く、台状地形を呈する。直下に横堀と土塁を臨む位置にあり、南西方向の尾根筋からの侵入に備えた見張り台としての機能が考えられる。台上部平坦面で柱穴が検出されており、まともではないが見張り用の構築物の存在も想定される。SB04は一段低いところに位置するが、やはり見張り用として機能したものであろう。c区の柵列が設けられている部分は、曲輪幅が狭く、縁辺に向かってやや傾斜している。曲輪というより通路という表現が、むしろ適している。柵列の途切れる辺りから幅が広がり、先にも述べた焼土の点在する広場空間につながる。この広場は、麓の集落に臨んでおり、焼土を狼煙跡と解釈すれば、この部分は集落との通信機能を果たす空間であったと思われる。それに伴い、SA03のある部分は、見張り機能を有するb区からの連絡路として機能したと考えることもできる。まとめると、a区は生活・居住機能を有する空間、b区は見張り機能を有する空間、c区は連絡・通信機能を有する空間であったと想定される。

**b. 曲輪Ⅲ(第41図)** 帯曲輪盛り土部分の直下に位置する腰曲輪である。帯曲輪との比高差は約7mを測る。南側を逆「L」字状の土塁と柵列(SA05)で防御し、土塁下には畝状堅堀(堅堀4～6)を擁する。東側は虎口と通路状遺構5につながり、西側は土塁を突き抜けて(図版第24)横堀に連絡する。西側のこの部分は、通路幅が70cm弱と狭い上、通路底に段差を設けるなど防御面での工夫が見られる(図版第25)。土塁と壁面に挟まれたこの通路を西へ抜けると、別の畝状堅堀(堅堀1～3)が控えている。この曲輪からの出土遺物が主郭・帯曲輪に比べてはるかに乏しいこと、また土塁・堅堀などで防御を固めていることから、軍事的色彩の強い空間といえる。

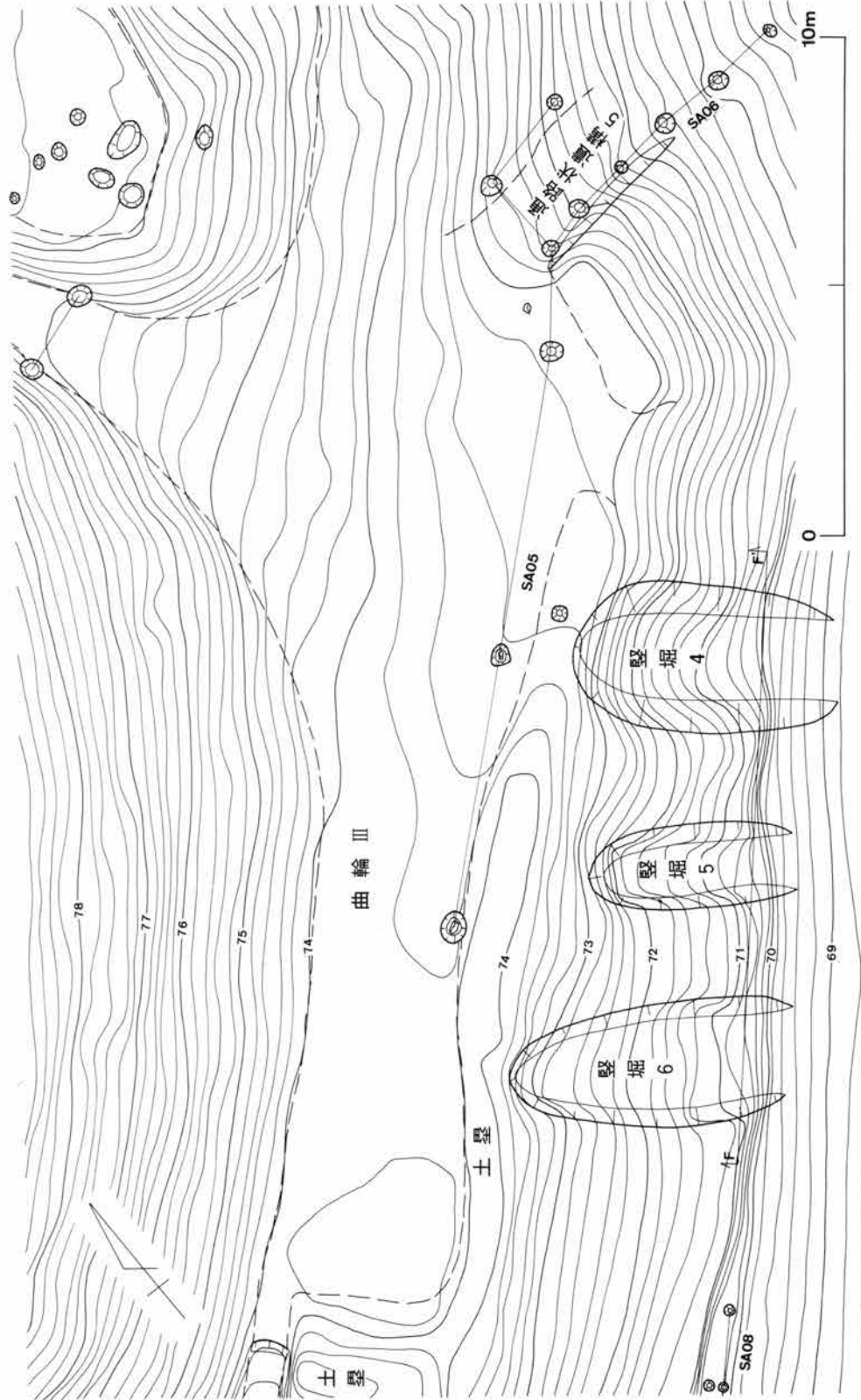
**c. 曲輪Ⅳ・Ⅴ(第42図)** 曲輪Ⅳは、東西幅約8.8m・南北幅約2.5mを測る長方形の曲輪である。顕著な遺構は検出されず、出土遺物も極めて少ないが、炭化した穀類の塊が出土していることから、兵が駐留した防御的空間であったと推測される。

曲輪Ⅴは、曲輪Ⅳの東側に造られており、一段低いところに位置する。曲輪Ⅳとの比高差は、約2mを測る。曲輪の両脇に2条の堅堀(堅堀8・9)を配することによって守りを固める。奥の壁面を削り込むことによって曲輪空間を広げており、特に通路状遺構4との境で削り込みが顕著に見られる。これは、堅堀8が曲輪内部まで深く侵入していることと連動するもので、これに呼応して通路も屈曲している。敵兵の攻撃に備えて、意図的に工夫したものであろう。曲輪中央部



から斜面を下る通路状遺構6は、幾つかの曲輪(調査対象地外)を経て麓の集落(館)へ至る。曲輪内から土器の出土は見られず、わずかに炭化した木片を検出したにとどまる。

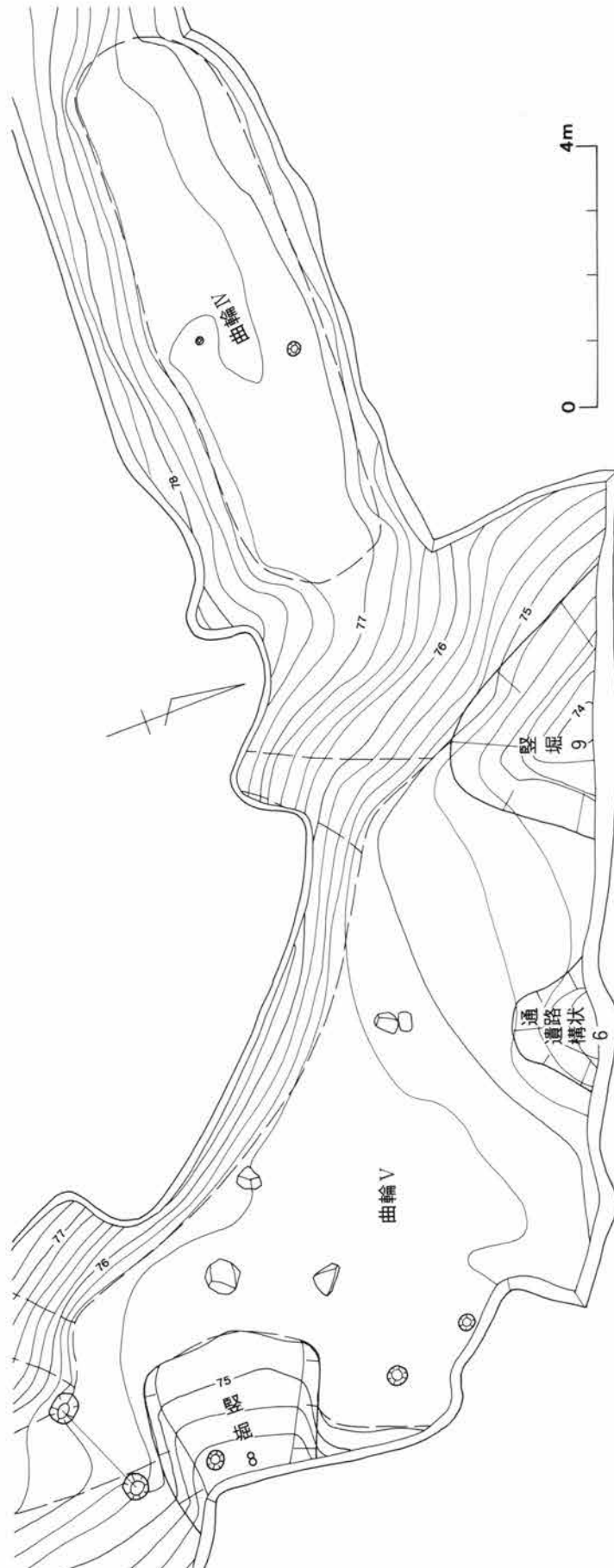
曲輪Ⅳ・Ⅴともに眼下に集落を見下ろす位置にあることから、集落と主郭・帯曲輪を結ぶ中継



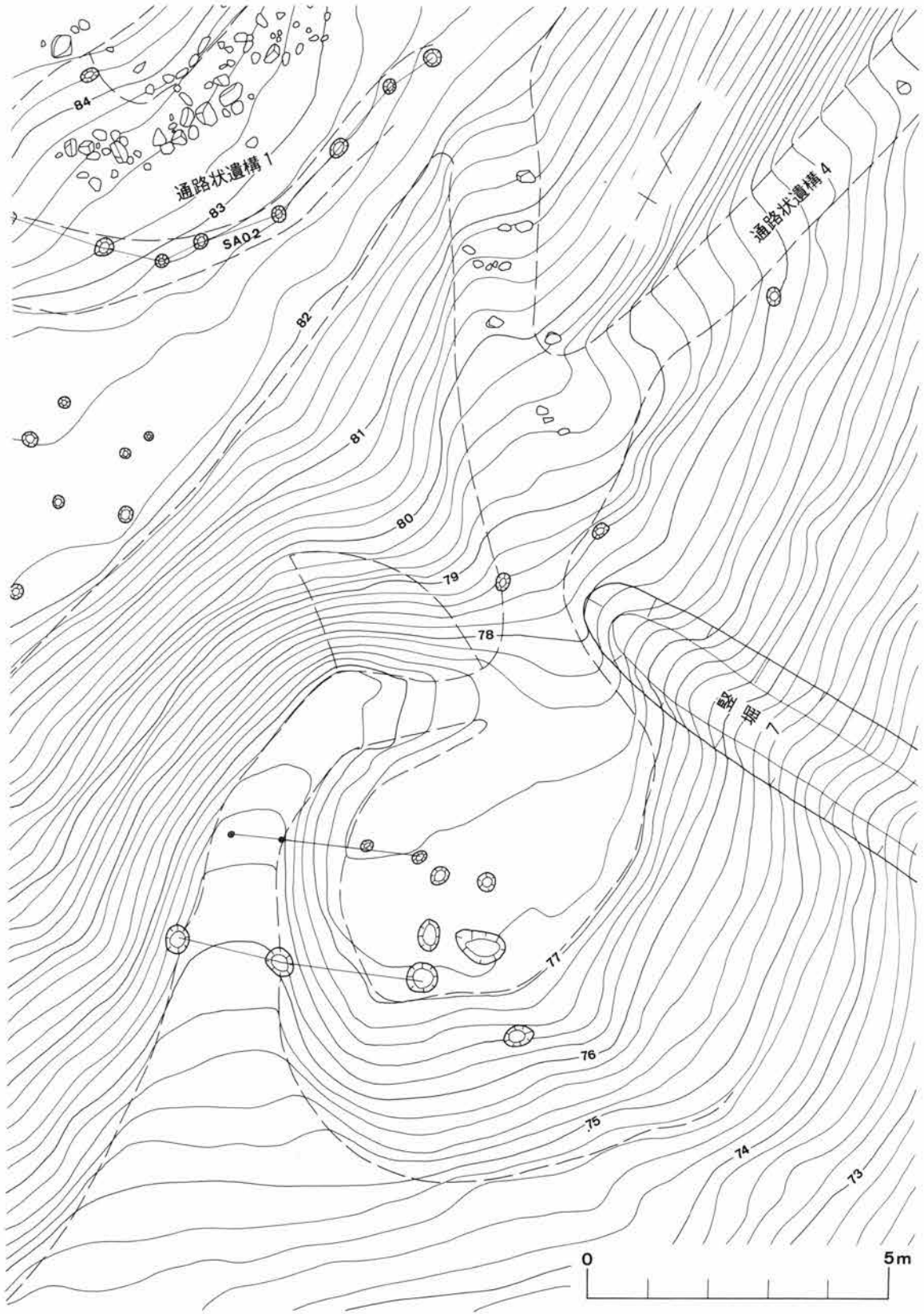
第41図 曲輪Ⅲ・土塁・竪堀4～6(畝状竪堀)平面図

地としての役割を果たしたのではないかと思われる。出土遺物は、曲輪Ⅲと比べてもさらに少なく、生活の痕跡は希薄である。やはり、防御空間であったと考える。

d. 虎口(第43図) 曲輪Ⅲと帯曲輪及び曲輪Ⅴを連絡する重要な部分にある。曲輪Ⅲ側から門柱跡と思われる対になる柱穴を検出した(図版第22)。この通路部分は上部からの流入土による堆積が激しく、地表面観察の段階では、通路底と台上部平坦面の比高差が約40cm、通路幅が約80cmにすぎなかった。通路部分の堆積状況は、約5cmの表土層に次いで、20cm前後の黄褐色粘砂質土層、その下に明赤褐色粘質土層が80cm程度続くというものであった。遺物の多くが第三層から出土しているが、この場所で使用されていたとは考えにくい。第三層を除去すると地山面になり、先に述べた柱穴はこの面で検出された。径はそれぞれ25cmと35cm、深さは45cmと56cmを測る。これらの柱穴から約2m離れて小穴がやはり対をなしており、矢倉門のような構築物を想定することもできる。その背後では通路が二度折れ曲がり、屈曲部に攻撃用の広



第42図 曲輪Ⅳ・Ⅴ平面図



第43図 虎口平面図

場空間を備えている。いわゆる梃形虎口に類する。屈曲部の上部では通路が二方向に分かれ、それぞれ帯曲輪と曲輪Vに連絡する。帯曲輪へ向かう通路で、石を並べた階段状遺構を検出した(図版第24)。

e. 竪堀 合計11条の竪堀を検出した。溝はいずれもゆるやかな「U」字状を呈しており、地山を掘り込んでいるものが8条(竪堀1～3・7～11)、そうでないものが3条(竪堀4～6)あった。以下、各竪堀について概略を述べる。

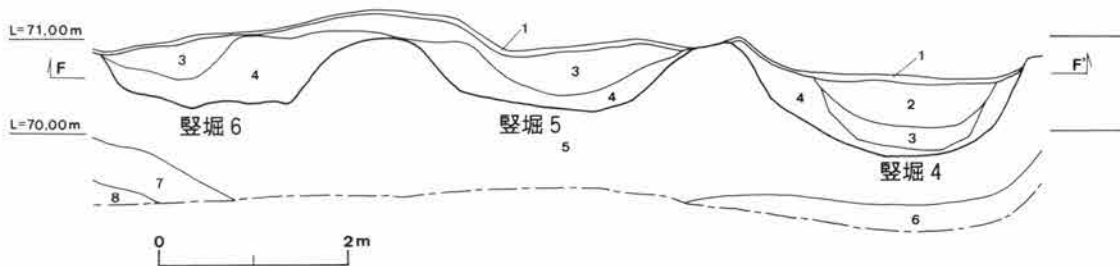
竪堀1～3 いわゆる畝状竪堀と呼ばれ、地表面観察では確認されなかった。曲輪Ⅲの脇に配置されており、曲輪Ⅲへの横からの侵入を防いでいる。竪堀の上端が、横堀から曲輪Ⅲへ抜ける通路まで達していることも、防御的效果を高めている。堀の肩がすでに風化して崩れているため、正確な深さはわからないが、地山を掘り込んでいるので滑りやすく、登るのは困難である。なお、堀の下端はさらにのびていたと思われるが、作業に危険が伴うため掘削を断念せざるを得なかった。

竪堀4～6(第41・44図) 竪堀1～3同様、畝状竪堀である。曲輪Ⅲの前面を防御している。この斜面には曲輪造成の際の排土が厚く堆積しているため、堀底は地山に達していない。その分、登りやすくなってはいるが、堀幅や深さは竪堀1～3を凌いでおり、横移動は困難である。断面観察のため途中で堀を切断したが、長さは15m前後であったと推定する。竪堀1～3との時期差については明らかでない。

竪堀7(第43図) 虎口の東側斜面で検出された。地山を「U」字状に削り込んでおり、検出長は約9mを測る。堀の下端が調査対象地外にあるため、全体を明らかにすることはできなかった。この竪堀も、調査前の段階では確認されなかった。

竪堀8・9(第42図) 曲輪Vを防御するための堀で、曲輪の両脇を固めている。竪堀8は、上端が開いており、竪堀1～3と形態が類似する。他の竪堀は、上端を丸く閉じる。これは、目的の相違によるもので、竪堀1～3及び8は、その上端が通路を遮るように掘られたため、他と異なる形状を呈したと思われる。竪堀8・9ともに、堀の大部分が調査対象地外にあるため、上端部のみの調査にとどまった。

竪堀10・11 山城の北西部斜面から検出された。この斜面は傾斜が急なため、それぞれ上端から約8mと約5mを調査するにとどめた。おそらく、20m程度の規模を有していたと推測する。



第44図 竪堀4～6(畝状竪堀)断面図

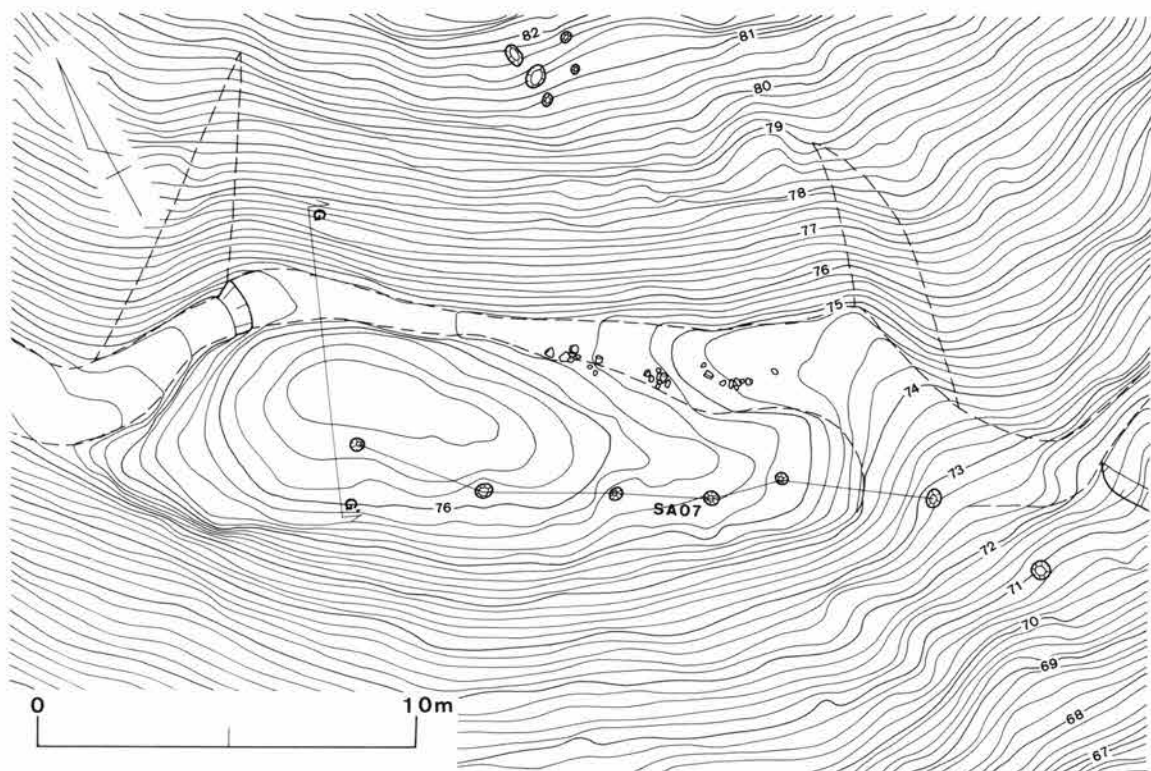
- |           |          |             |                  |
|-----------|----------|-------------|------------------|
| 1. 黒色有機質土 | 2. 明紫色砂礫 | 3. 暗紫色礫土    | 4. 黄褐色粘砂質土(礫混じり) |
| 5. 褐色粘砂質土 | 6. 赤褐色礫土 | 7. 暗黄灰色粘砂質土 | 8. 淡赤褐色粘砂質土      |

特筆すべきは、豎堀10から大量の出土遺物が見られたことである。その内容は、椀(天目)、皿(白磁、瀬戸・美濃灰釉、土師器)、播鉢などで、一括して投棄されたものであろう。

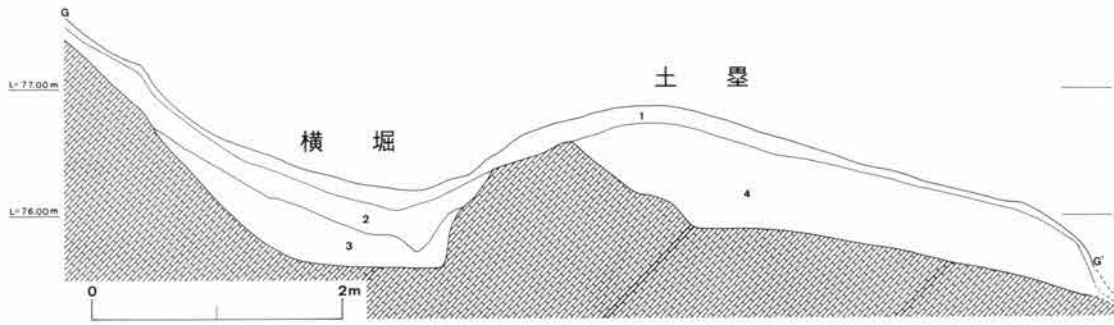
以上、五つのグループに分けて説明したが、これは場所による分類で、別の観点から分けることも可能である。例えば、先にも述べたが、地山を削り込んで造ったもの(1~3・7~11)と堆積土を掘り込んだもの(4~6)。堀の上端が開いているもの(1~3・8)と丸く閉じるもの(4~7・9~11)、地表面観察で確認されたもの(4~6・8~11)と確認されなかったもの(1~3・7)。そして、畝状豎堀(1~6)とそうでないもの(7~11)などである。残念なことに、築造時期によって分類することはできない。地表面観察で確認されなかったものが古いとは断定できないし、遺物が築造時期を指し示すものとはなり得ないからである。

なお、豎堀は総体的に東半部斜面に多く、東側を意識した築城意図がうかがえる。

f. 横堀(第45・46図) 断面が箱形を呈するいわゆる箱堀で、全長約35mを測る。横堀中央部では壁面を深く削り込んでおり、その際の排土は土塁の盛り土にも利用されたものと思われる。堀にはかなりの土砂の堆積が観察され、厚さ約70cmの堆積土を除去すると堀底に到達した。堀底は城道を兼ねていたと思われ、両端を屈曲させたり段差を設けたりと工夫を凝らしている。堀の西端は斜面に流れ落ち、東端は曲輪Ⅲに連絡する。堀底の幅は約1~2m、土塁頂部との比高差は約1.2mを測る。土塁は、一部地山を削り残し、平坦部に盛り土をすることによって構築されている。土塁上からは柵列跡(SA07)を検出したが、これは、南西方向の尾根筋からの攻撃に備えたものであろう。堀底から検出した礫群は、土塁裾部を固めたものと考えられる。なお、土塁下に存在した自然の鞍部は人工的に削り込まれており(第34図)、それによって斜面の傾斜はより



第45図 横堀・土塁平面図



第46図 横堀・土塁断面図

1. 黒色有機質土 2. 黄褐色粘砂質土 3. 黄褐色礫土 4. 茶褐色粘砂質土(礫混じり)

険しくなっている。この斜面を登るのはかなり困難で、防御効果は極めて高い。

g. 通路状遺構 4・5 通路状遺構 4 は、虎口上部と曲輪 V を結ぶ連絡路である。全長約 13m を測り、通路幅は、1.2m 前後である。この通路は、地表面観察では確認されなかった。造りは、地山を削り込んだだけの簡単なものであるが、この通路が確認されたことで、麓の集落から曲輪 V を経て他の曲輪へ至る道筋が明らかになったことは注目される。曲輪 V との境で対をなす柱穴(門柱跡か)を検出し、その背後に控える堅堀 8 の上端を迂回するように屈曲するという特徴がある(第 42 図)。

通路状遺構 5 は、曲輪 III の東側から斜面を下る。調査範囲を越えるため追跡調査ができなかったが、通路状遺構 6 と同様、山麓まで連絡していたと推測される。斜面側で柵列跡(SA06)、曲輪 III 側で門柱跡を検出した(第 41 図)。

以上、検出遺構について概略を述べたが、今回の調査で、各曲輪間の連絡機能や虎口の構造が明らかになり、戦国期の山城の一形態を例示できたのは大きな成果であったといえよう。

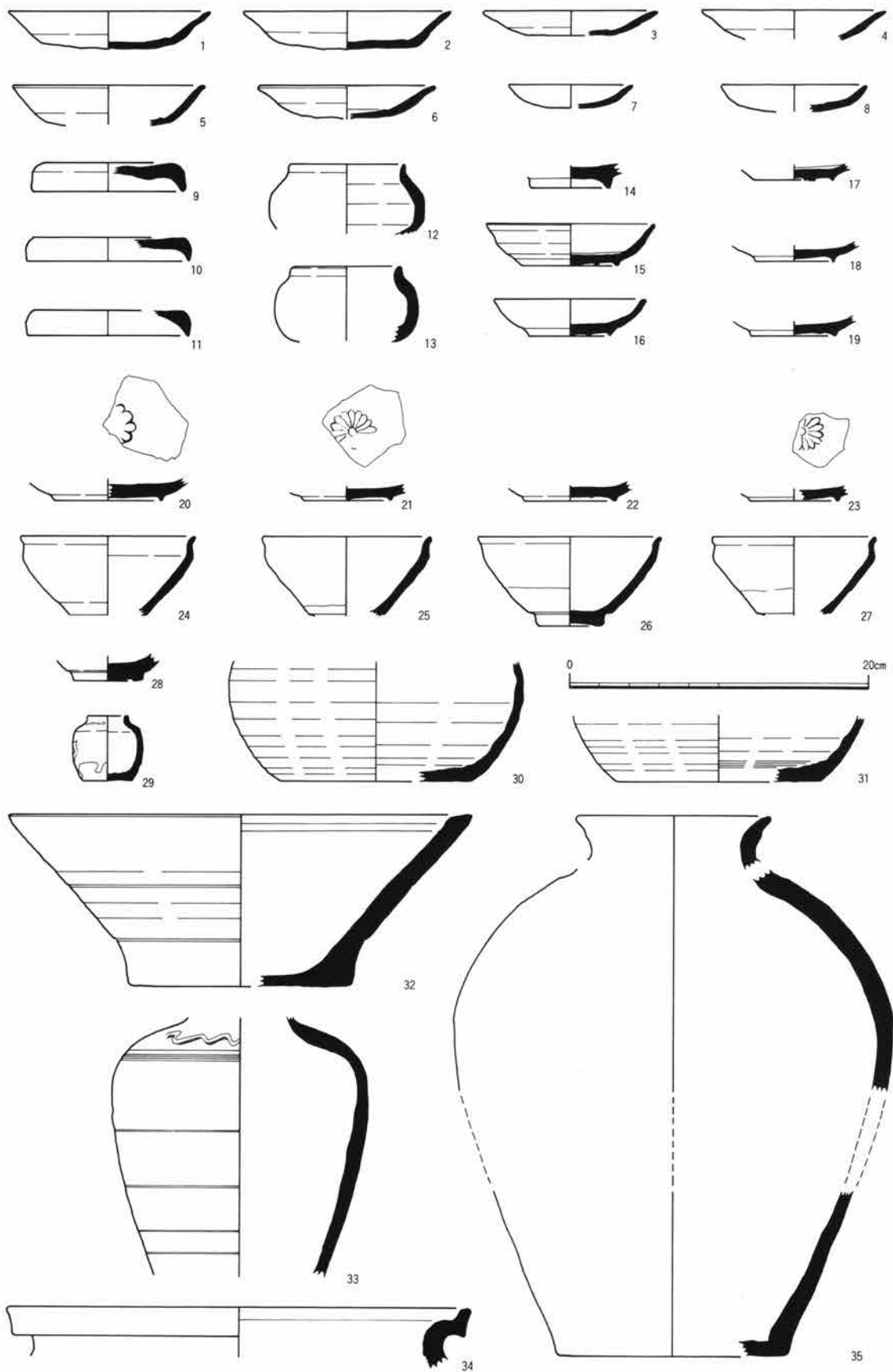
(大岩洋一)

## ②出土遺物

### a. 土器類

1～8 は土師器皿である。大皿(1～6)と小皿(7・8)がある。いずれも手捏ね成形である。大皿は内面の底部と口縁部の境目に 1 条の凹線がめぐっている。9～11 は土師器蓋、12・13 は土師器壺である。砂粒を比較的多く含む胎土が共通することなどから、両者が組み合わせるものと考えた。器面には、ていねいなナデ調整が施されている。

14 は、瀬戸美濃焼の灰釉丸椀である。付高台で、高台の剥落した部分にはヘラ描きによる細い沈線がみられる。高台を貼りつける際の目安としたものであろう。全面施釉で、底部外面にトチンの痕が残っている。灰釉椀としては、他に蓮弁文椀の破片が 1 点出土している(131)。15～23 は、瀬戸美濃焼の灰釉丸皿である。いずれも全面に施釉されており、底部外面には輪トチンの痕が残る。15～19 は、比較的厚い釉が掛けられ、見込みには釉がたまっている。釉調は、15～17 がオリーブ緑色、18・19 が黄緑色を呈する。20～23 の見込みには菊花状の印花文が施されている。釉は薄く、淡緑色を呈する。灰釉皿はすべて丸皿で、端反り皿は出土していない。24～28 は、瀬戸美濃焼の天目茶椀である。24・25・28 にはサビ釉が施されている。高台の形状は、26 が浅い内

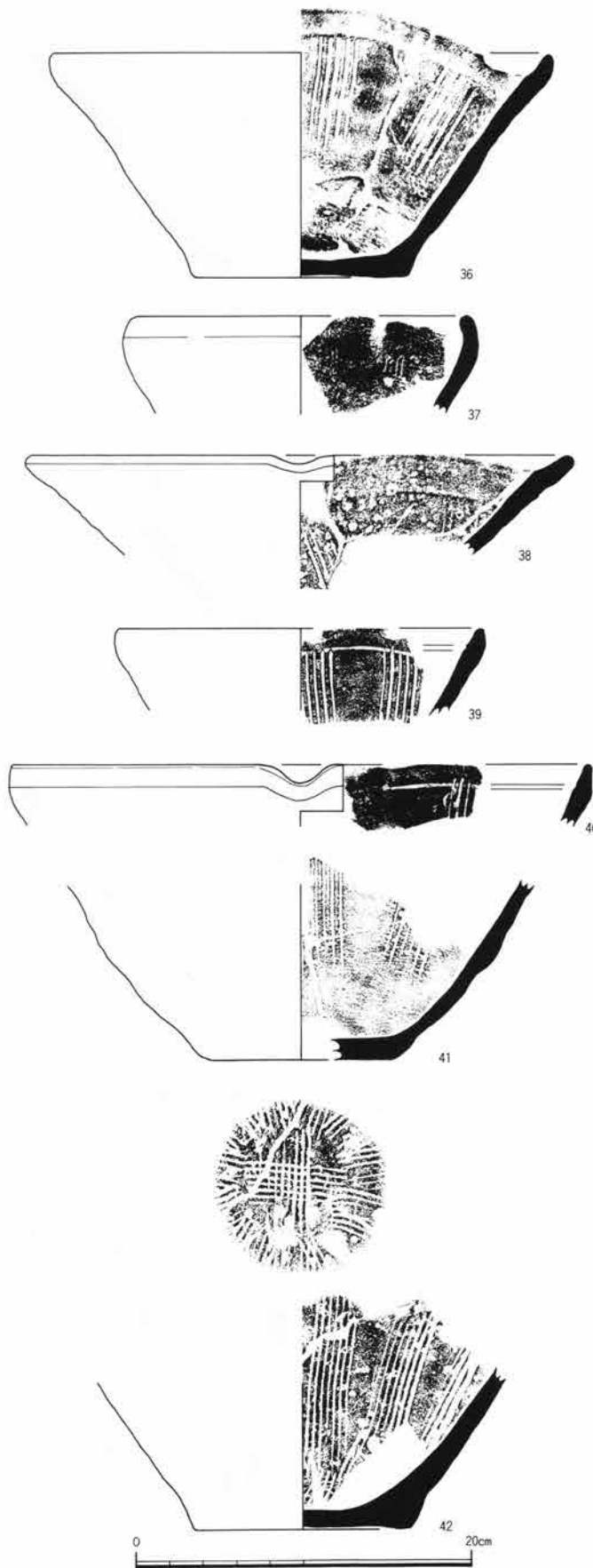


第47図 大俣城跡出土遺物実測図(1)

反り高台、28が浅い輪高台である。29は、鉄釉茶入である。底部は回転糸切りで、外面の底部付近は露胎である。30・31は、鉄釉瓶である。底部外面は回転ヘラケズリが施され、露胎であるが、30は部分的に施釉されている。内面の底部付近にはサビ釉が施されている。瓶の頸部の破片(132)が出土しており、いずれかと同一個体の可能性がある。

32は、越前焼播鉢である。口縁部内面に1条の凹線がめぐっている。越前焼としては他に、甕の体部片が1個体分出土している。33は、古瀬戸瓶である。肩部に櫛描きによる波状文と直線文が施され、胴部にはヘラ描き沈線が4条施されているが、釉が厚いために明瞭ではない。34は、丹波焼甕である。これとは別個体と考えられる丹波焼甕の体部片が1個体分出土した。35は、丹波焼壺である。

36～53は、在産産播鉢である。36は、口縁部内面に段を持つ。37は、口縁部が内湾して丸く納めており、他と大きく器形が異なる。36・37のすり目は5条を1単位とするもので、36では底部内面にも直交する2方向に施されている。36の体部内面のすり目は12単位程度に復原できる。38～42は、6条1単位のすり目を持つ。38は口縁部内面に段を持ち、39・40は口縁部内面に1条の沈線がめぐっている



第48図 大俣城跡出土遺物実測図(2)





第49図 大俣城跡出土遺物実測図(3)

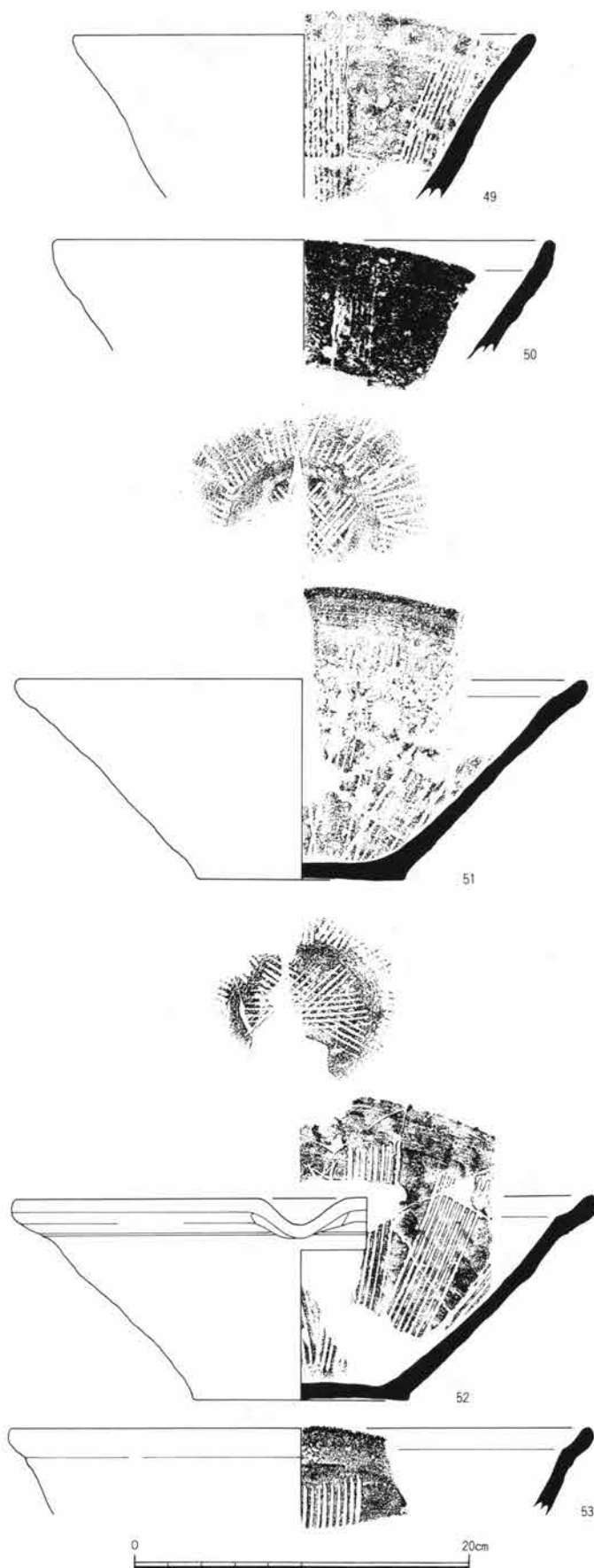
る。なお、40・41はすり目の工具痕跡が一致するので同一個体の可能性がある。43～47は、7条1単位のすり目を持つ。44は、口縁部内面に1条の凹線がめぐると、他は口縁部内面に段を持つ。44のすり目は、全周で12単位程度に復原できる。放射状のすり目に加えて、45には斜交するすり目が、46・47には波状の装飾的なすり目が施されている。48～52は、8条1単位のすり目を持つ。52には星形と思われる記号が刻まれている。53は、9条1単位のすり目をもつ。

54～67は、白磁皿である。底部の比較的厚いもの(54～56)と薄いもの(57～67)がある。前者のうち、54・55は畳付から高台内が露胎であるが、56は畳付のみ露胎である。後者はいずれも畳付のみが露胎である。底部が碁笥底になる白磁皿は出土していない。68・69は、白磁小杯である。変形の杯で、同一個体の可能性が高い。白磁としてはこのほかに、椀(133)、壺(134)の底部などが出土している。70は、青磁盤である。体部内面には鑿状工具により蓮弁が表現されているが、彫りが浅いため不明瞭である。

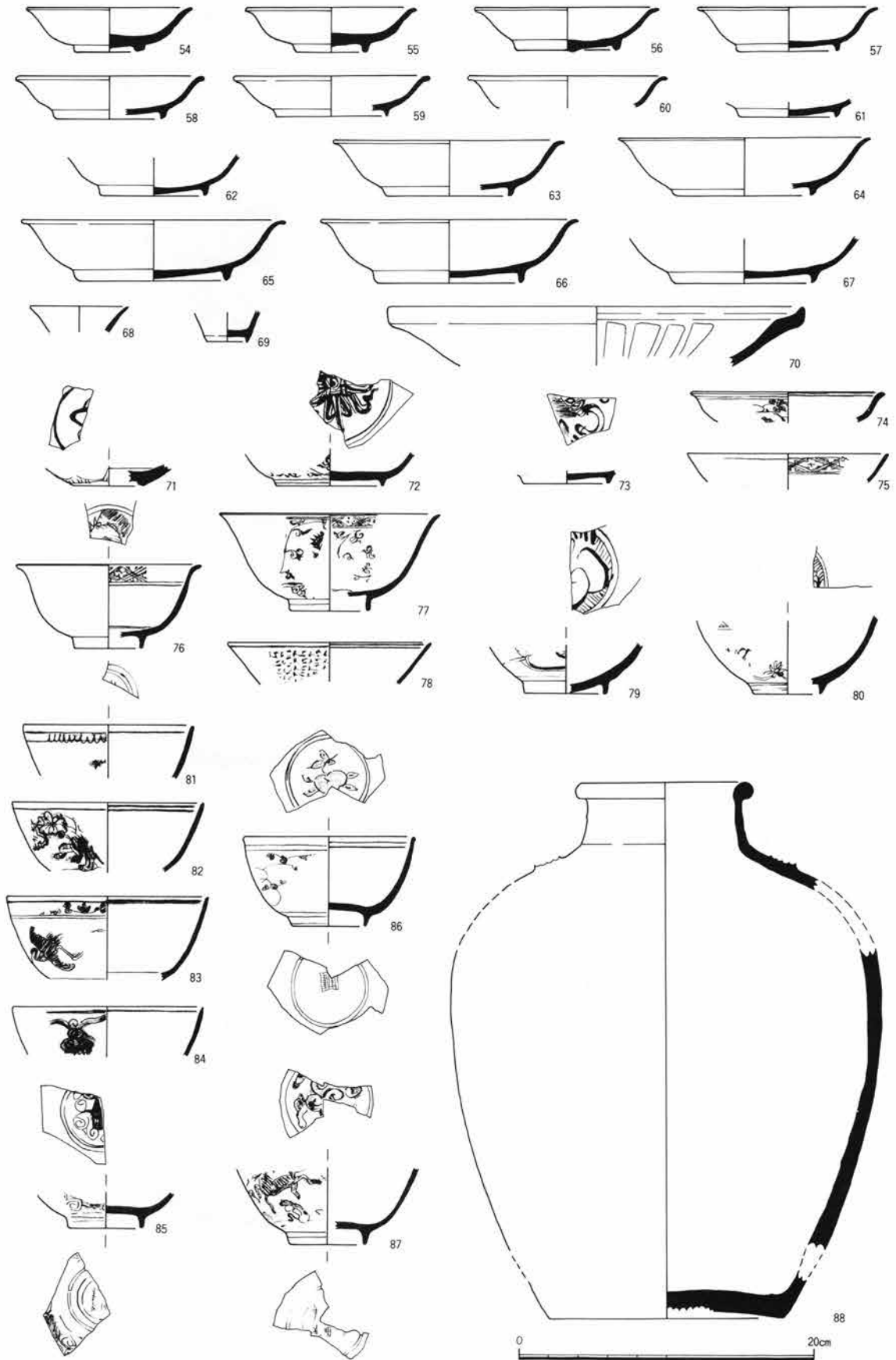
71～75は、染付皿である。71は碁笥底の皿で、底部は露胎である。同一個体と思われる口縁部の破片が出土している(135)。72～74は、端反り皿である。72には十字花文、

73には玉取り獅子が描かれている。75は、口縁部が内湾し、口縁部内面に四方禳文が描かれる。

76～87は、染付碗である。76は平らな底部と大きく外反する口縁部を持ち、腰が張った器形である。口縁部内面に四方禳文が描かれ、高台内には二重の圈線と字款の一部と見られるものが書かれている。体部外面は無文である。純白の磁器質の胎土で、焼成もきわめて良好である。77は、比較的高い高台からわずかに外反する口縁部に大きく開く器形を持つ。外面には宝相華唐草文が、内面には四方禳文と唐草文が描かれている。畳付は釉が拭き取られ、平滑に仕上げられている。胎土はやや黄味を帯びている。78～80は、蓮子形の碗である。見込みから滑らかに大きく開く器形で、腰が張らない。79の畳付及び高台内の中央に砂が付着する。81は、わずかに内湾する体部を持ち、口縁部外面に2条の界線と波状文がめぐる。全体の器形は蓮子形になると思われる。82～87は、饅頭心形の碗である。外面には鶴(83)、如意雲(84)、唐草(86)、飛馬(87)などが描かれ、高台内に「大明年造」(87)などの字款が書かれている。なお、84と87は同一個体の可能性がある。染付碗にはこのほかに、口縁部内面に四方禳文が描かれ、外面に雲文の陰刻されたもの(136)がある。



第50図 大俣城跡出土遺物実測図(4)



第51図 大俣城跡出土遺物実測図(5)

88は、褐釉壺である。耳を付けた痕跡が見られ、耳壺であることがわかる。黒色粒を含む緻密な胎土に褐釉が薄く掛けられる。

**A地区出土土器類の組成** 付表1はA地区で出土した土器類の接合後の破片数を計測したものである。総破片数588片のうち日本製が61.39%、中国製が38.61%を占める。器種別では白磁皿と土師器皿が突出して多く、この両方で全体の43.37%を占める。貯蔵具に丹波焼と越前焼が見られることと、土器煮炊具を欠くことは、この地域の特色を示している。そのほか、在地産の播鉢の多いことが目立つ。

**出土遺物から見た大俣城の廃絶年代** 土師器皿は、内底面にユビナデによる凹線状の圏線がめぐるので、京都では16世紀後半によくみられる。瀬戸美濃焼では、灰釉皿が口縁部の内湾する丸皿のみで、端反り皿は見られない。天目茶碗はサビ釉の施されるものと施されないものがある。瀬戸美濃焼は大窯Ⅱ期・Ⅲ期に相当する。中

付表1 A地区出土土器組成表

器種		破片数	% (小分類)	% (大分類)		
日本製	土師器	皿	125	21.26		
		壺	4	0.68		
		蓋	8	1.36		
		その他	1	0.17		
		計	138			23.47
	瓦(土師)質土器	播鉢	96	16.33		
		小壺	2	0.34		
		計	98			16.67
	瀬戸美濃焼	鉄釉	天目茶碗	22	3.74	
			茶入	1	0.17	
			瓶	10	1.7	
		灰釉	碗	2	0.34	
			皿	47	7.99	
			計	82		
丹波焼	壺・甕	26	4.22	4.42		
越前焼	甕	13	2.21			
	播鉢	1	0.17			
	計	14			2.38	
備前焼	德利	1	0.17	0.17		
古瀬戸	瓶	2	0.34	0.34		
小計		361		61.39		
中国製	白磁	碗	1	0.17		
		皿	130	22.11		
		小杯	3	0.51		
		壺	1	0.17		
		計	135			22.96
	青磁	盤	5	0.85	0.85	
	染付	碗	58	9.86		
		皿	12	2.04		
		計	70			11.90
	褐釉	壺	17	2.89	2.89	
小計		227		38.61		
合計		588	100	100.00		

国陶磁器では、染付皿は量が少ないが小野C群とB<sub>1</sub>群が主体である。染付碗は小野E群が破片数で半数を占めている。中国陶磁器は小野Ⅲ期の様相である。

これを一乗谷朝倉氏遺跡と比較してみると、中国陶磁器は1573年の焼亡時とされるⅢc期の様相に近いが、灰釉皿が丸皿のみであることはやや新しい要素と考えることができよう。一方、これを1585年に滅んだ根来寺と比較して見ると、根来寺では染付皿は小野E群が主体を占めるのに対して、大俣城では内湾する口縁部の内面に四方襷文が描かれる(=E群の器形にB<sub>2</sub>群の文様を描いた)もの(75)が1点認められるのみであることから、これよりも古く位置付けることができよう。したがって、大俣城は1580年前後に廃絶したと考えることができる。(森島康雄)

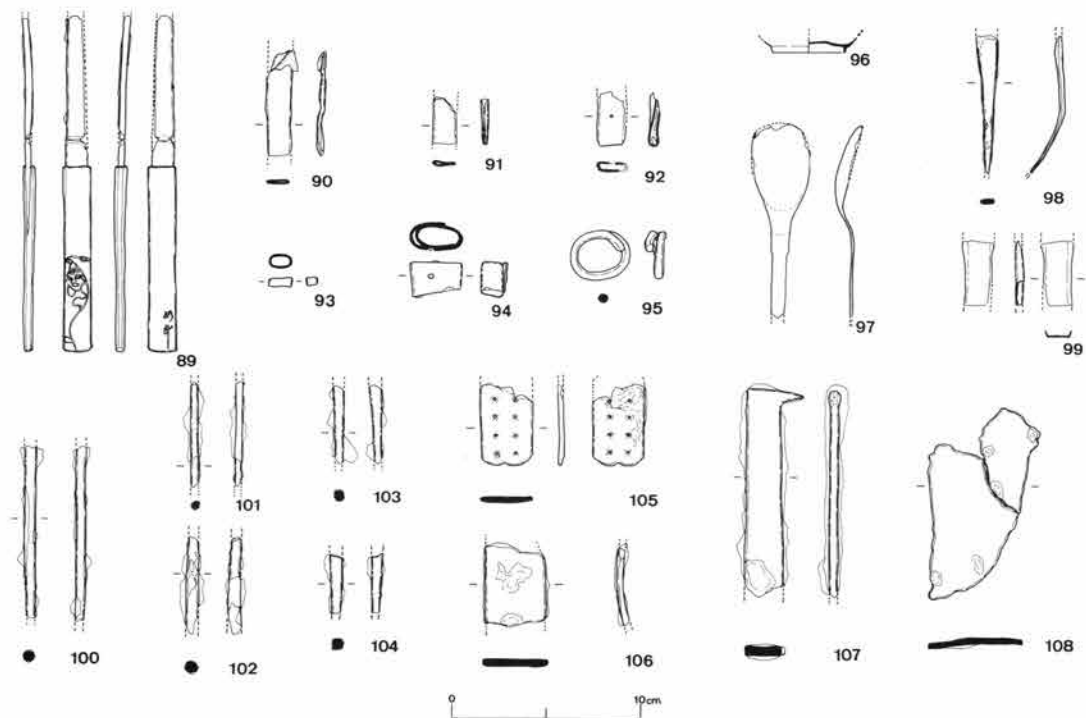
b. 金属製品(第52図)

今回の調査では、銅及び鉄製の金属製品が出土した。残存状況はあまり良好とはいえ、また、用途不明のものも多い。

**銅製品** 小柄89は、銅製の柄に鉄製の刀身を挿入している。残存長は約17.6cm、柄部分は長さ約9.8cm・幅約1.6cmである。柄の表には人面、裏には「如竹」銘が刻まれる。江戸時代中期頃のもの<sup>(注15)</sup>とみられ、大俣城跡とは直接関係しない遺物と考えられる。帯曲輪の表土中から出土した。銅製品90は、銅板を折り曲げて成形したもので、小柄の一部と考えられる。幅約1.4cmで、無文である。帯曲輪 a 区から出土した。銅製品91も、同様のもので、小柄の一部とみられる。幅約1.3cmである。帯曲輪 a 区から出土した。銅製品92も銅板を折り曲げて成形したもので、小孔がある。用途は不明である。帯曲輪 b 区から出土した。

銅製品93は、小環である。銅板の幅約5mmで、長径約12mm・短径約7mmの楕円形である。用途は不明である。主郭斜面部から出土した。銅製品94は、銅板を巻いたもので、小孔がある。用途は不明である。帯曲輪 c 区から出土した。銅製品95は、径約5mmの銅の棒を環状にしたもので、長径約3.2cm・短径約2.6cmを測る。用途は不明である。帯曲輪斜面部から出土した。

銅腕96は、底部のみ残存する。高台径は約3.8cmである。帯曲輪 a 区から出土した。銅匙97は、残存長約10cm・幅約3.2cmである。柄部分にくびれがあり、その部分から柄の幅が狭くなっていることから、別の柄を装着していたと考えられる。灰匙の可能性もある。帯曲輪 a 区から出土した。銅製品98は、「V」字形を呈し、残存長約7.2cmである。刀装具の筭の一部とも考えられる。帯曲輪から出土した。銅製品99は、銅板を「コ」字形に折り曲げたもので、幅約1.7cmである。



第52図 大俣城跡出土遺物実測図(6) 金属製品

用途は不明である。横堀東斜面から出土した。

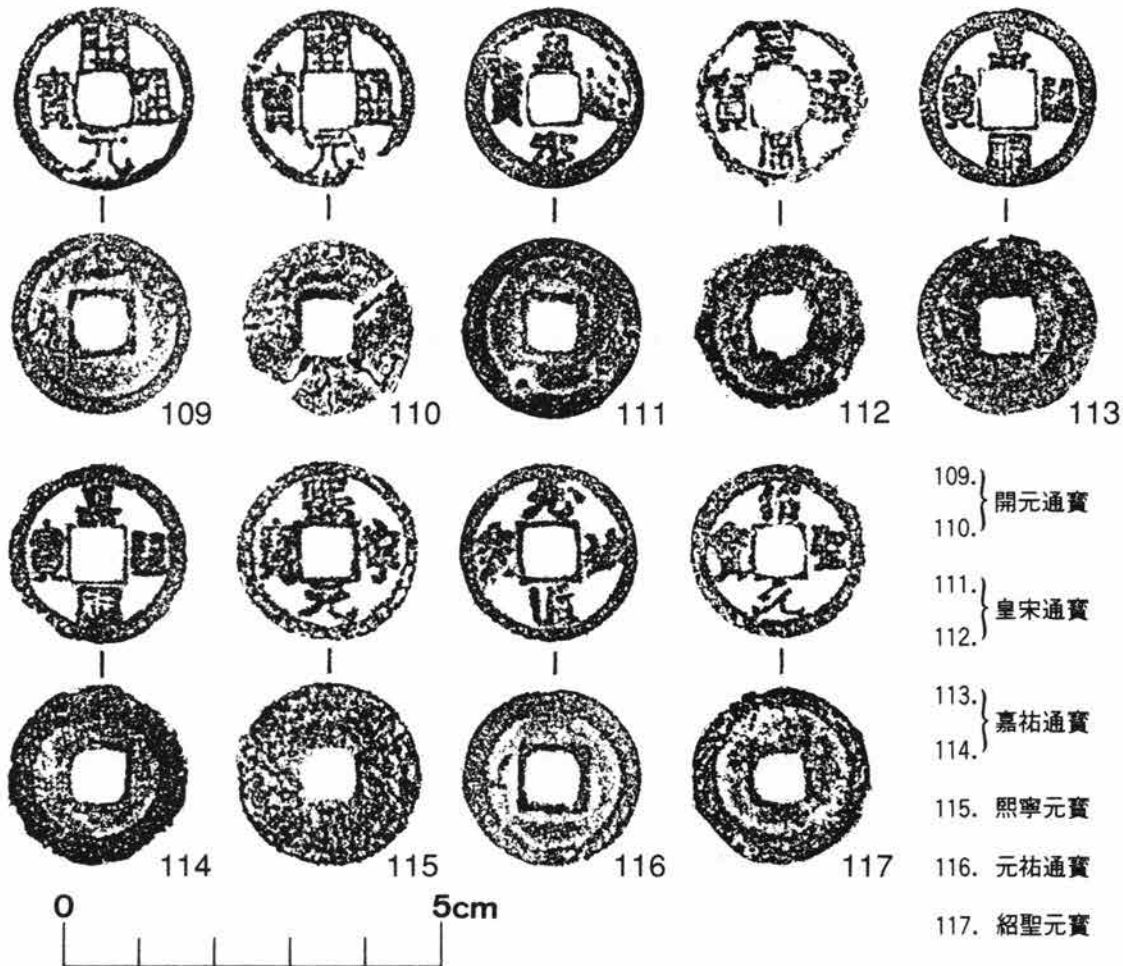
このほか、銅製品としては、古銭13点が出土している。内容は、付表2のとおりである。判読の可能な9点(第53図)のみ記載した。

**鉄製品** 鉄釘100～104は、断面多角形を呈する。100～103は帯曲輪a区から、104は主郭から出土した。

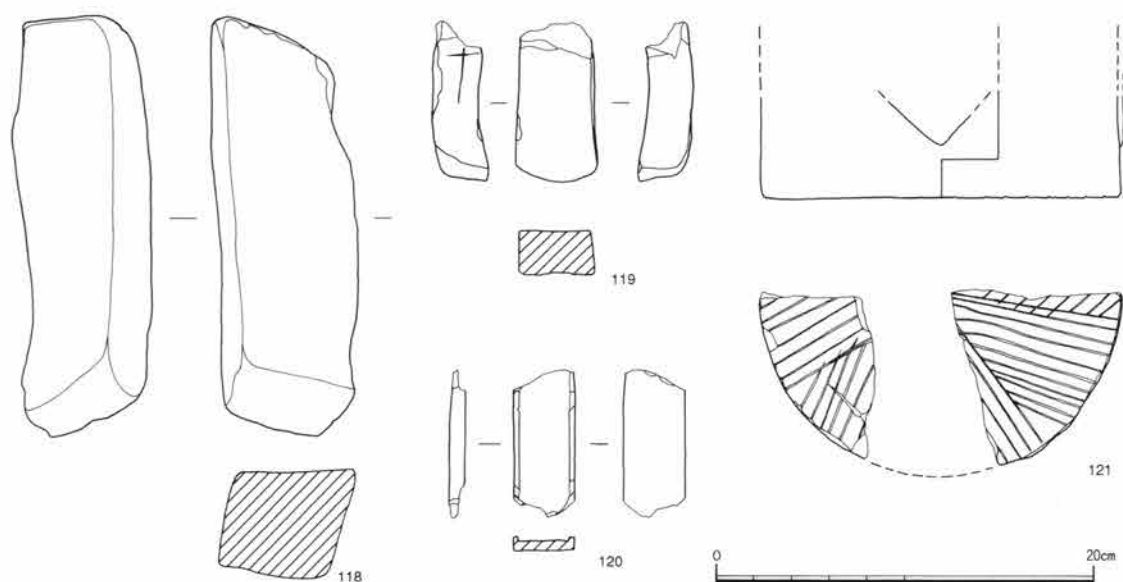
鉄製品105は、残存長約4.3cm・幅約2.9cmで、端部は2弧の連弧状になる。小孔があり、小札

付表2 出土銭貨一覧表

番号	銭名	時代	初鑄	出土地点	番号	銭名	時代	初鑄	出土地点
109	開元通寶	唐	621	帯曲輪a区	114	嘉祐通寶	北宋	1056	帯曲輪a区
110	開元通寶	唐	621	帯曲輪a区	115	熙寧元寶	北宋	1068	堅堀10
111	皇宋通寶	北宋	1039	主郭	116	元祐通寶	北宋	1086	主郭
112	皇宋通寶	北宋	1039	帯曲輪a区	117	紹聖元寶	北宋	1094	主郭斜面部
113	嘉祐通寶	北宋	1056	主郭					



第53図 大俣城跡出土遺物実測図(7) 銭貨



第54図 大俣城跡出土遺物実測図(8) 石製品

とも考えられる。帯曲輪 a 区から出土した。鉄製品106は、幅約3.5cmの板状であり、用途は不明である。帯曲輪 a 区から出土した。

鉄製品107は、残存長約11.4cm・幅約1.8cmの長形状で、端部に尖頭状の突起がある。用途は不明であるが、火打金の可能性も考えられる。帯曲輪 a 区で出土した。鉄製品108は、残存長約10.2cm・最大幅約6cmで、半月形の板状を呈する。用途は不明である。帯曲輪 a 区から出土した。

(引原茂治)

### c. 石製品

118・119は砥石である。118は2面、119は3面を砥石として使用している。120は硯である。121は茶臼の上臼である。すり目は不等間隔で、すり目に切り合いがあるなど、雑な作りである。接合しないが、同一個体と思われる破片(137)が出土している。

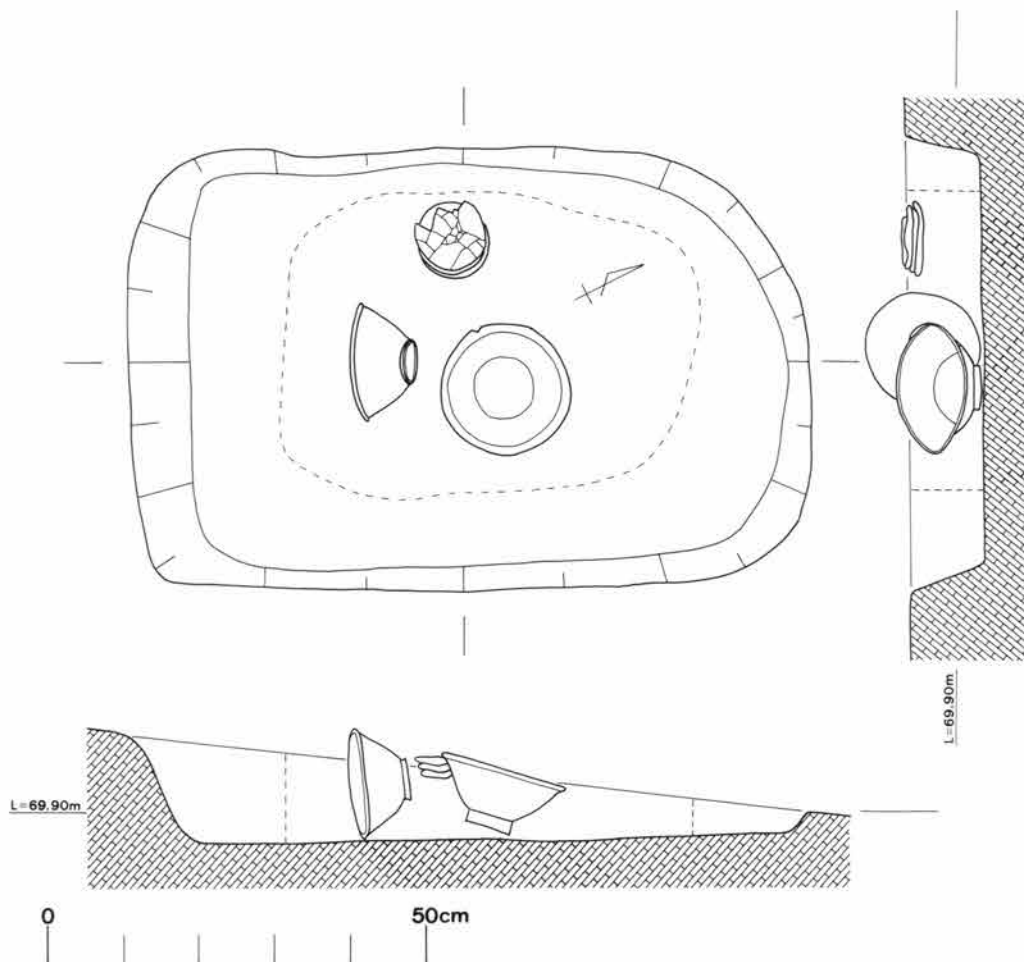
(森島康雄)

## (2) 周辺部の調査

### ① A地区検出の中世墓について(第55図)

A地区トレンチの南西部、トレンチ外との境界付近で検出された。この辺り一帯は山城南西側の鞍部にあたり、築城の普請の際、人工的に斜面を削っている。その時に墓壙の上部が失われてしまったのであろう。掘形は長方形で、検出面で長辺約90cm・短辺約60cmを測る。底部付近で12世紀の中国製の白磁椀2点と土師器皿3枚を検出した(図版第30)。これらの周囲に土色の変化が認められ、土器を納めた木箱の痕跡と思われる。人骨は検出されなかった。時期的な面から判断して大俣城に関連するのではなく、築城のはるか以前に営まれたものであろう。

(大岩洋一)



第55図 中世墓平面図・断面図

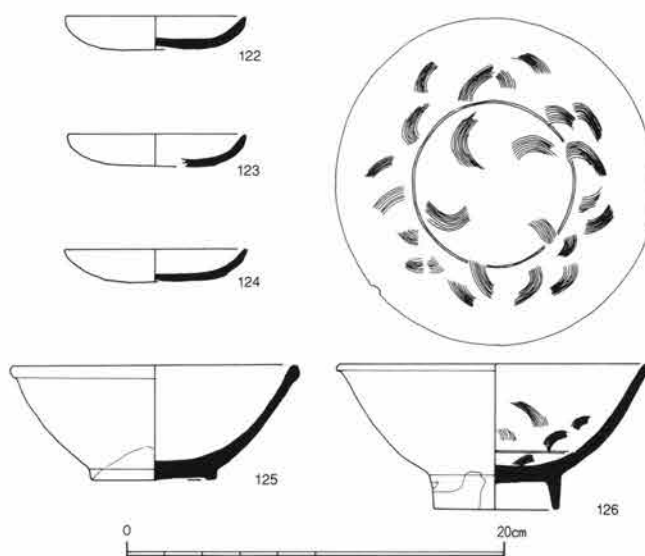
※破線は、土色変化(木箱の痕跡か)を示す。  
 ※断面図の遺物は、見通し図である。

出土遺物 122～124は、土師器小皿である。手捏ね成形で端部は尖り気味に終わる。12世紀中頃に位置付けることができる。125は、白磁碗Ⅳ類である。見込みに釉薬が掛かっていない部分がある。126は、白磁碗Ⅵ類である。口縁端部は丸味を持って終わる。胎土は黄味を帯びる。

(森島康雄)

②A'地区(第30図)

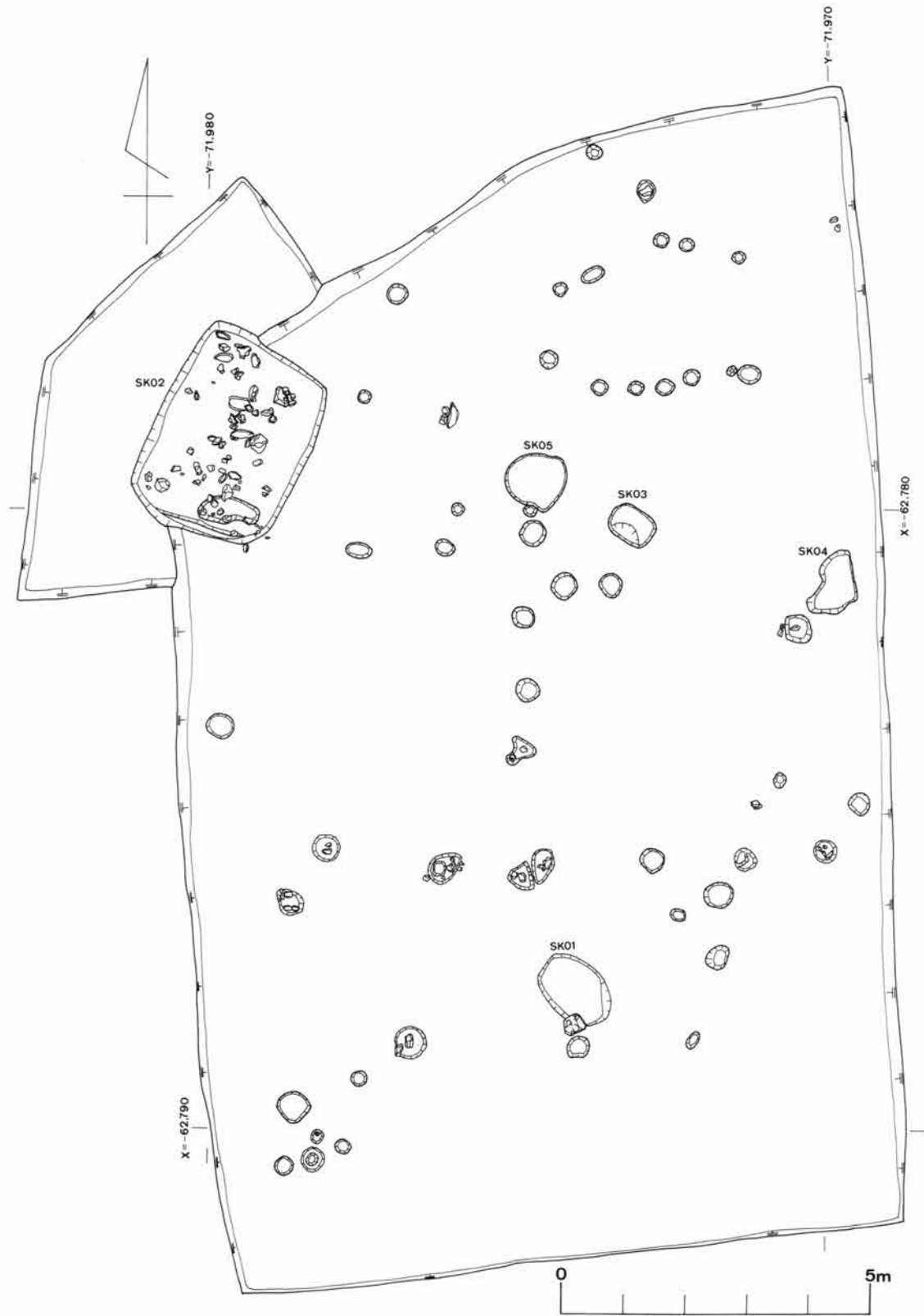
A地区南東方向の谷部平坦地にあたる。一帯は、本来ゆるやかな斜面



第56図 A地区中世墓出土遺物実測図

地であったと思われるが、後世水田や畑地として利用されたため、段状地形を呈している。A地区に近接し、山城に関連する遺構の検出が期待された。約200m<sup>2</sup>のトレンチを設定し、掘削及び





第57図 A'地区遺構平面図

遺構精査に努めた結果、柱穴・土坑などを検出した。柱穴はいずれも遺物を伴っておらず、建物跡などにまとまるようすもみられなかった。土坑は5基検出され、S K02とS K04の2基は遺物を伴っていた。

主な検出遺構(第57図)

土坑S K02 検出面で長辺約3.2m・短辺約2.2mを測る長方形の土坑である。トレンチの北西隅で検出されたが、トレンチ外に広がりを見せたため、若干調査面を拡張した。検出面が北西方向に向かって高くなるため、土坑底部との比高が、南西部の約20cmに比べ北西部は約60cmと大きくなる。底部より拳大から人頭大の礫がまとまりのない状態で検出され、火を受けているものも散見された。遺物は、火舎の破片を1点見るのみである。室町期の所産か。なお、土坑の性格は不明である。

土坑S K04 深さ約15cmの浅い土坑であるが、中から瓦質土器の鍋や羽釜の破片を検出した。13世紀のものか。S K04の周囲からは、東播系のねり鉢や土師器皿なども出土している。土器を廃棄したのかもしれない。

(大岩洋一)

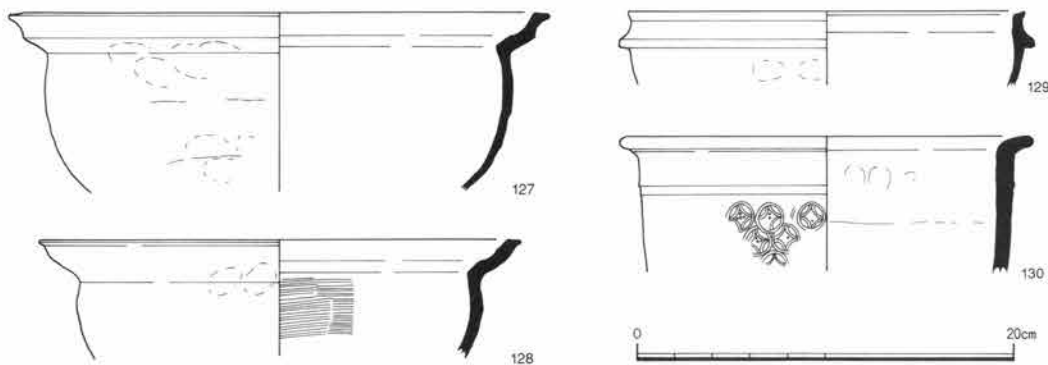
出土遺物 127・128は、瓦質土器鍋である。口縁部は受け口状を呈し、端部は外方に摘み出される。128の体部内面にはヨコ方向の粗いハケメが施される。129は、瓦質土器羽釜である。炭素の吸着が悪く、色調は灰白色を呈する。体部内面にはヨコ方向の粗いハケメが施される。127～129は、S K04から出土した。13世紀の遺物と考えられる。130は、土師質の火鉢と思われる。体部外面に七宝文のスタンプを押す。S K02から出土した。

このほか、A'地区の包含層からは、土師器皿、東播系須恵器鉢(138・139)、青磁碗(140・141)、石鍋(142)、丹波焼壺・播鉢(143)などが出土している。

(森島康雄)

小結 遺物の内容から判断して、この周辺で鎌倉～室町時代にかけて生活が営まれたと推測される。したがって、大俣城に直接関係するものとは思われず、大俣城が築かれる頃には他へ場所を移していたのであろう。

(大岩洋一)



第58図 A'地区出土遺物実測図

#### 4. まとめ

今回の調査における成果を簡単にまとめることにする。

まず、城の構造についてであるが、当初の予測通り、曲輪・土塁・堅堀・横堀などで構成されており、それらと虎口や連絡通路が互いに結びついて効果的に機能していることが判明した。曲輪については、主郭・帯曲輪とその他の曲輪との間に機能の違いが認められた。主郭・帯曲輪からは生活遺物が多く出土し、建物跡が存在することから居住空間であったと考える。ただし、日常の居館は山麓の集落にあったと思われ、これらの建物跡は、その規模から判断して兵が交替で駐留する見張り用の番所・仮の寝所といえる程度のものであったと解釈する。

主郭は、山城の最高所に位置し、見張り台の要素を持った曲輪といえる。帯曲輪は、先に述べたとおり、3区に分けることができ、最も生活に利用されたのがa区である。基石が出土していることから、緊急時以外は娯楽に興じていたようすがうかがえる。また、茶臼や茶入・天目茶碗などから、茶を嗜んでいた姿を思い浮かべることができる。主郭・帯曲輪間では、通路状遺構が3か所検出されている。これらの時期差について、確かなことはいえないが、a・b・c区にそれぞれ連絡することから、同時に存在し機能した時期があったと考えてよいのではないだろうか。主郭・帯曲輪とは対照的に、曲輪Ⅲ・Ⅳ・Ⅴでは出土遺物も乏しく、建物跡などの生活遺構も希薄であることから、防御空間であったと考える。

曲輪Ⅲは、南東方向に面し、堅堀や土塁・柵列で防御を固めている。曲輪Ⅳ・Ⅴは、北から北東方向に面し、やはり堅堀を備えている。この方向の斜面には、さらに数段の曲輪の存在が確認され、麓の集落が襲撃され山城に逃げ籠もる時を想定して防御用に造られたものであろう。これら居住空間と防御空間を結びつけるのが虎口空間であり、城道を二度屈曲させ横矢を効かせるなど、容易に帯曲輪へ侵入させないよう工夫している。通路をこのように屈曲させる工夫は、他の場所にも見られる。例えば、横堀の両端部や通路状遺構4と曲輪Ⅴの境がそうである。これは、武器の主流が弓矢から鏑に移行し、戦法もゲリラ戦からより組織化された集団戦へと変化<sup>(注16)</sup>したことに対抗して考え出された防衛手段である。

堅堀11条の中では、畝状堅堀の存在が注目される。平山城<sup>(注17)</sup>(綾部市)ほどの規模も統一性もないが、堅堀1～3と堅堀4～6との間に見られる相違が興味深い。いずれも曲輪Ⅲを防御するためのものであるという点では共通するが、堅堀4～6は、堆積土を掘り込んでいるという点で他の堅堀と異なる。この堆積土は曲輪Ⅲを造成した際の排土で、一部を土塁の構築に使用し、残りを斜面に廃棄したものである。土塁下の柵列(SA08)は、土塁を築く際の土留めとして設けられたもので、堅堀4～6が掘られる時にはすでになかったと思われる。堅堀1～3は地山を削り込んでおり、風化のため失われた部分が多い。堀の上端は横堀と曲輪Ⅲを結ぶ通路に達しており、この通路を横堀の堀底と一体のものと理解するなら、堅堀1～3は、横堀と組み合わせて使用された機能したもの(畝状堅堀群第Ⅱ類)と考えられる。堅堀4～6が単独で使用(畝状堅堀群第Ⅰ類)されているのとは明らかに異なる。一般に畝状堅堀は、単独使用されるもの(第Ⅰ類)から横堀とセットで使用されるもの(第Ⅱ類)へ発達<sup>(注18)</sup>するといわれることから、両者の畝状堅堀の築造時期に隔

たりがあったことは十分予想される。

また、横堀であるが、東端が屈曲した後、土塁を突き抜けて曲輪Ⅲに達している。このことから、本来防御施設であるはずの横堀が城道としても機能し、曲輪Ⅲへの連絡通路として活用されたことがわかる。一方で、この通路は敵兵にも利用されやすく、その弱点を補ったのが堅堀1～3であったと考える。平常時には堅堀1～3の上端部に木橋がかけられ、敵兵の侵入時には取りはずして堅堀が機能するようにしたのであろう。ところで、曲輪Ⅲの土塁は調査着手時には開口しておらず、横堀からの連絡は遮断されていた(図版第25)。調査中に開口部が土塁の盛り土とは明らかに異なる土で閉ざされていることが判明した。つまり、当初は土塁が開口して横堀と曲輪Ⅲが互いに連絡し合っていたのを、ある時期に蓋をして、横堀が遮断線としてのみ機能するように改修したのであろう。

次に、大俣城の機能した時期について考察する。出土遺物は15世紀から16世紀後葉(天正年間)までのものを含んでいる。したがって、築城の時期を15世紀とすることも可能であるが、裏付けとなる史料があるわけでもなく、推測の域を出ない。しかし、大俣城の盛期については、遺物・遺構の両面からある程度予測がつく。まず、遺物では16世紀第3四半期に属するものが最も多い。そして、遺構では畝状堅堀が判断の基準となる。近畿地方では、畝状堅堀は16世紀第2四半期に登場し、永禄年間を中心とする第3四半期に流行する。他の遺構の特徴、例えば枳形虎口の採用や折曲道の多用、横堀の機能変化などもほぼこの時期に該当する。これらの点から、大俣城は16世紀第3四半期に盛期を迎えたと考えられる。

大俣城のある丹後国は、14世紀末に一色満範が守護に補任されて以後、代々一色氏の支配下にあった。しかし、15世紀中頃から若狭国守護武田氏との間で丹後をめぐる勢力争いが絶えず、一色氏の居城建部山城や加佐郡普甲山を舞台にして戦が繰り広げられたという。両氏の抗争は16世紀中頃まで続くが、おそらくは在地領主層をも巻き込みながら一進一退の攻防が展開されたのであろう。大俣城の麓を走る街道は普甲峠へとつながっており、この地の土豪達にとってもこれらの争いは無縁ではなかったはずである。大俣城が築かれる契機は、このあたりにあったと推測する。永禄元(1558)年、一色義道が丹後国主となり支配権を握るが、織田信長と敵対関係に陥り、暫くの間緊張状態が続く。当時、隣国の丹波国では、やはり丹波国主波多野氏と守護代内藤氏との間で争いが絶えず、永禄8(1565)年には、守護代内藤宗勝が戦死するなど不安定な情勢であった。丹波・丹後両国で軍事的緊張が一層高まったこの時期に、在地勢力による築城や城の改修・補強が国内各地で進められたことは想像に難くない。歴史的な面から見ても、大俣城の盛期はこの頃にあったと思われ、遺物・遺構両面から考察した結果と合致する。天正6(1578)年、信長から丹後討伐の命を受けた細川藤孝が挙兵し、再び激しい攻防戦が繰り広げられるが、明智光秀の加勢を得て藤孝側の勝利に終わる。天正8(1580)年に藤孝は田辺城主となり、丹後国は細川氏の支配下に収まるが、その頃を境に大俣城もその役割を終え、機能を停止したと思われる。出土遺物からも同様のことがいえる。

今回の調査で、戦国時代後半の山城の構造が明らかにされたことは大きな収穫であった。しか

し、これがこの地域における山城の規範を示すかどうかは現時点では判断できない。今後に残された大きな課題であり、類例の増加を期待する。

(大岩洋一)

注1 調査参加者(敬称略・順不同)

今西みつ子・岩崎輝巳・岩田多美子・亀井 毅・迫田貴子・新宮ヒサノ・高橋米子・千原満理子・土井淑子・永井 治・長田いつ枝・長田日出美・野田友子・真下恵美子・松井義信・水口和子・南谷 工・宮本利美・森下要子・谷口成美・中村ひろみ・長田京子・福田玲子・真下春美・吉岡 譲・足立英之・四方千佳子・野間 篤・野間安昭・福井裕子・松下 修・淡路貴司・川田祐樹・中尾史・中尾 円・百瀬一志・森こずえ・沖上美和子・岡本美鳥・粉川綾子・戸田政男・平野善弘・椿原みさ子・梅本みゆき・斎藤和子・芝野 清・田中幸子・中武万里子・細野 豊・松田富士子・山本忠義・梅本明義・沖上和子・玉田彰司・細見英子・今井禮子・今井喜代美・吉田美喜枝・三上衛子・宮本 治・山崎ひとみ・直田正美・竹田昌代・酒井啓子

注2 玉井哲雄・中井 均・福島克彦・堀内明博・百瀬正恒・山上雅弘(敬称略・順不同)

注3 堤圭三郎他「宮守線路線地域内遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1971)』 京都府教育委員会) 1971

注4 「桑飼上遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第19冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

注5 「京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書」 舞鶴市教育委員会 1975

注6 「志高遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

注7 『日本城郭大系』11 京都・滋賀・福井 新人物往来社 1980

注8 『吉川家文書』

注9 1990年3月末現在

注10 この項の記述は、『舞鶴市史』通史編(上)を参考にした。

注11 「京都縦貫自動車道関係遺跡平成6年度発掘調査概要(2)地頭・大俣地区遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第67冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注12 「池田城跡発掘調査報告」 広島県教育委員会 1986

注13 「大井谷城跡・半分城跡発掘調査報告書」 出雲市教育委員会 1979

注14 山上雅弘「戦国時代の山城—西日本を中心とする15世紀後半～16世紀前半の山城について—」(『中世城郭研究論集』 1990)に詳しい。

注15 大岩洋一「大俣城跡の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第58号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注16 西ヶ谷恭弘『日本史小百科(城郭)』 東京堂出版 1988

注17 「平山城跡・平山東城跡」(『京都府遺跡調査報告書』第14冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

平山城では、等間隔に整然と割り付けられた計14条の堅堀が確認された。これが、府内における畝状堅堀の最初の調査例であり、今回が三例目となる。畝状堅堀の調査例としては、他に「上林城跡」(『綾部市文化財調査報告』 綾部市教育委員会 1980)がある。

注18 千田嘉博・小島道裕・前川 要『城館調査ハンドブック』 新人物往来社 1993

## 付 載

## 大俣城跡出土の炭窯と炭焼き

井之本 泰

## 1. はじめに

最近の発掘調査の増加によって、さまざまな遺構が発見されている。炭窯もそのひとつで、丹後地方では、弥栄町ニゴレ遺跡<sup>(注1)</sup>・遠所遺跡<sup>(注2)</sup>・黒部遺跡<sup>(注3)</sup>、大宮町芋谷遺跡<sup>(注4)</sup>、舞鶴市水無月山遺跡<sup>(注5)</sup>などで炭窯の出土例が報告されている。

今回、京都縦貫自動車道建設に伴う舞鶴市字地頭の発掘調査において標高85mの山頂に中世の山城・大俣城跡の遺構とともに、そのすそのから炭窯が発見された。これを受けて平成7年11月1日に埋文センターから炭窯調査の依頼があり、出土した炭窯の調査と実際に当地区で炭焼きに従事する佐藤久雄氏から聞き取り調査をおこなった。そして平成8年の2月14日に同氏による炭焼き作業を実見することができた。

ここでは、その時の炭焼き作業の工程と発見された炭窯について若干ふれることにしたい。

## 2. 地区の概要と生業

地頭は由良川の支流・桧川が合流する一帯に立地し、大俣はその桧川の谷に沿った砥石岳の南麓に位置する。また小俣は由良川の支流であるもう一方の川・滝川の中流域に集落



第1図 位置図

は点在し、山が川に迫り耕地が少ない。これらの地区では農業を主とし養蚕や炭焼きなどが盛んにおこなわれた。

おもな生業として農業のほか、養蚕もまた重要な現金収入であった。5月中から6月のかかりの田植え前までハルゴ(春蚕)、8月いっぱいのナツゴ(夏蚕)、9月から25日頃までのアキゴ(秋蚕)の年3回飼った。大江高校近くに稚蚕飼育場があり、そこでケゴを譲り受け各家々で飼育した。ほとんどの部屋で蚕を飼うためネットコロ(寝床)は蚕に占領され棚と棚の間のマナカ(半間)ほどの狭いところで寝るのが常であった。クワトリやマユボリは子供が手伝った。一日に4回桑をやり、イトアミを使い「糞抜き」(糞替え)、大きくなるとイアミを使い、5令ともなると桑をたくさん食べるため、横井戸に桑を貯蔵した。しかし、葉を積んだ



第2図 出土した炭窯  
大人が4人入ってもまだ  
余裕がある大きさと高さ

ままに置いておくと、ホメカスという茶色に葉が変色することになる。また温度調節には特に注意をはらった。桑は畑に植えた刈り桑と山端の立木の二種類があるが、おもに刈り桑が使われた。とれた繭は郡是から取りに来た。出荷できなかったドラマユ(屑繭)は真綿に引いて布団の側綿として使ったほか、婚礼の祝いや四二の祝いの「シラガ(白髪)」としても使われた。器用な人は、シミマユを糸に引いてそれで織ることもおこなわれた。また有路や河守には女工を雇う専門の製糸工場があった。「よい繭はとれるように」と毎年4月23日の大川神社のサンシンサイ(蚕神祭)に出掛けて祈願したという。養蚕は昭和12~13年まで当地区でおこなわれた。

### 3. 炭焼きの工程とその周辺

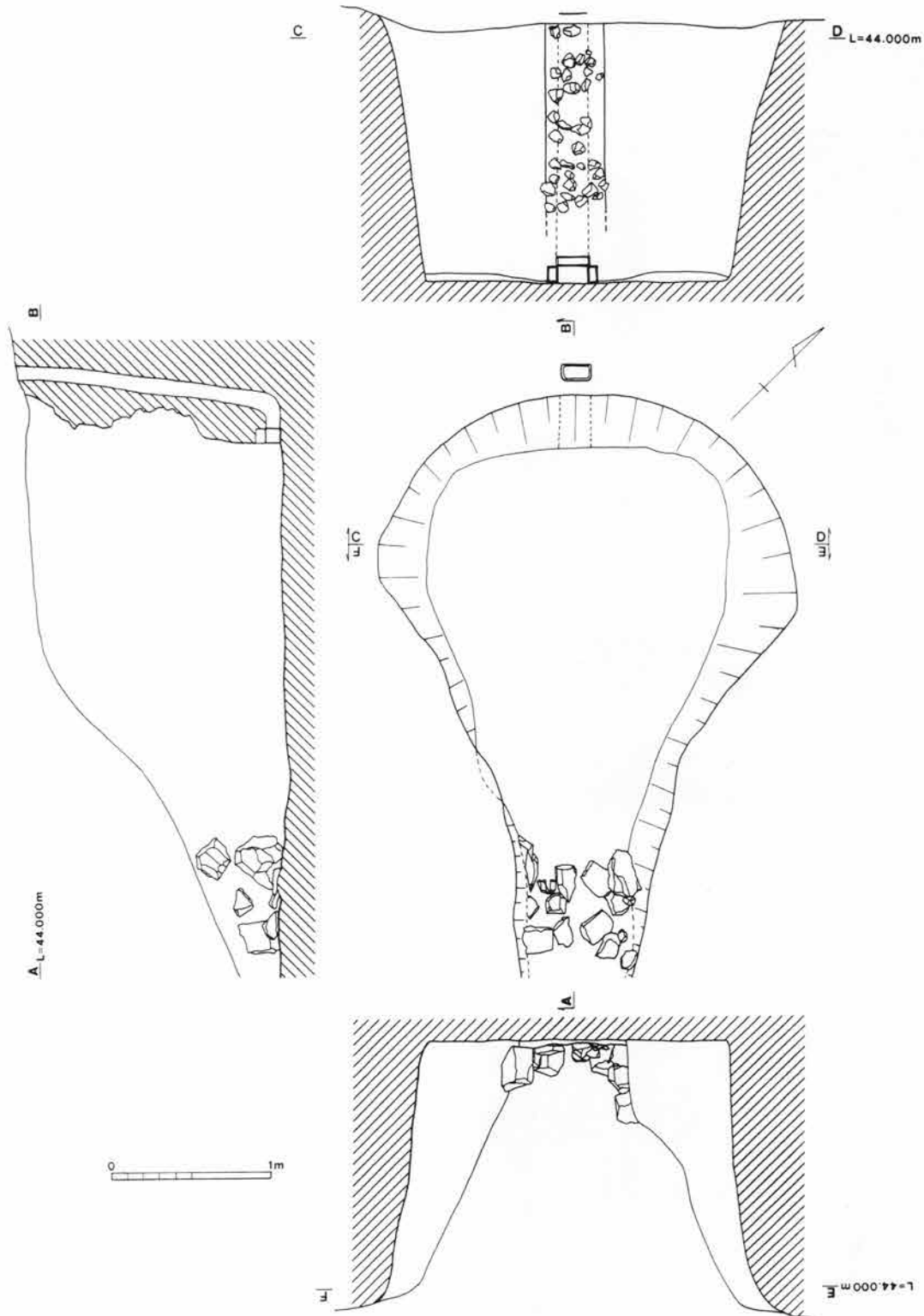
#### (1)生産の概要

薪や炭を燃料として使っていた頃は、丹後地方のおもに山間部で農閑期の副業として炭焼きが広く行われた。炭焼き専門の人もいたが、そのほとんどが11月末から翌年の5月の田植え前の秋から冬にかけて行い現金収入を得た。

例えば『岡田上村誌』<sup>(注6)</sup>によれば、「本村の豊富な原木に恵まれているため、古来から製炭業が盛んであった。年中炭焼きを行って生業としているものもあり、戦時中の最高は一万六千俵余を生産した。濫伐の結果現在では原木林も減り生産も落ちたが昭和29年には一万二千俵余を生産している。」と記されている。

この炭焼きも昭和30年頃からプロパンガスや石油や電気がエネルギー源として導入されると、年々生産が減少し、今日ではわずかにその面影をとどめているにすぎない。しかし一方では燃料という役割とは違った利用(活性炭・土壌改良剤・木酢液)が静かに注目されつつある。

炭焼きには、炭窯を使用しない伏焼きという方法もあるが、丹後地方では炭窯を使用する方法がとられている。炭窯を使用する炭には黒炭と白炭がある。黒炭と白炭の違いは前者が炭窯の中で焼けた炭をそのまま消すのに対し、後者は焼けた炭を炭窯からかき出し、スパイ(素灰)と呼ぶ



第3図 炭窯跡実測図





第4図 佐藤久雄氏



第5図 炭窯遠景 佐藤氏自宅の裏山



第6図 炭窯の背後 煙道からの煙突

灰をかけて消す。黒炭は黒色で質が柔らかいが、白炭は表面が白く灰をかぶり、質が密で固いのが特徴である。

#### (2)炭焼き伝承者・佐藤久雄氏

はじめに 炭焼きの工程の前に、佐藤久雄氏を紹介する。佐藤氏は舞鶴市字地頭小俣で大正14年6月5日に生れた。岡田上尋常高等小学校を昭和16年に卒業し、大江農蚕学校の養蚕助手として勤める。昭和20年4月に三重県鈴鹿に入隊し、長野県松本で終戦を迎えた。帰省したのち八光青年団長(岡田上村)をはじめ農事組合長、岡田上農協理事長、地頭太鼓保存会長など今日まで数々の役職を歴任された。

炭焼きは子供の時分から父清太郎、祖父久蔵らの炭焼きを手伝うことによって技術を修得した。電気やガスの普及によって昭和35年頃から売れなくなり、炭焼きを行われなくなった。ところが佐藤氏は椎茸栽培をおこなっており、ナラやクリの木を椎茸の菌を打込み使う。しかしそれ以外のカシなどの木は使うことがない。伐っても腐らすことなる。木材がもったいないので、有効利用をはかるため昭和63年から自宅近くの裏山・八幡山のふもとに炭窯を築き、再び炭を焼く煙が立ちのぼることになった。ひと冬の生産量は40俵から50俵で自家用として使われている。

場所探し 炭焼きをするには、まず炭窯をつくるための場所探しからはじまる。炭焼きはおもに自分の持山、例えば佐藤氏の場合はおもに砥石岳の北西麓の赤見谷一帯でおこなった。また他人の山や管林の払い下げなどでおこなうこともあった。

炭窯の立地条件は、水場が近くにあり、炭材の集積に便利な場所である。炭材はカシ、ナラ、クヌギを使う。これらの炭材はランク

分けがされており、もっとも火力が強く、火持ちがするのがカシで、「カシマルの上」といわれ高く取り引きされた。次に「ナラマル」、そして「ワリ」（カシナラの細かい炭）の順である。

窯を打つのもっとも適した土質は赤土である。蛇紋岩系は水が出るところが多い。イグリというザラザラしたところは石を多く含み、掘り進んで行くと大きな石にブチ当る。ハナレイシは無理して掘り進むが、“のべっと”とした岩の場合は、水が伝って炭を焼くことが出来ないため、他の場所を探すはめになる。丘陵先端のハナは水が通っていることが多く、炭窯の場所探しはなかなか難しく、一度使った古い窯を改修して再利用するほどであった。

一度窯を打つと2年ほどは同じところで炭焼きをする。かつては1年で300から400俵、2年で500から600俵ぐらい生産した。炭焼きの時期は11月末から翌年の5月の田植え前である。

### 窯打ち

①掘る 炭窯は奥行6尺(約1m80cm)、最大巾4尺(約1m20cm)、深さ4尺(約1m20cm)、窯口2尺(約60cm)のラッキョウ型に掘る。

②枠組み コシキ(窯の内部)の側面に割木の割面を立てかけ、そのすき間(10cm)に土を入れて、丸太で突き固めていく。

③枠を取る型枠の丸太を抜き取る。そしてトウグワで窯の内側を削り、全体にタタキを使ってたたきしめる。一番奥にはシカマ(煙道)を設ける。窯口に石を積み、練り土ですき間を埋める。コシキの水分が飛んで白っぽくなるまで、一昼夜をかけて空焚きをする。

④モリキ 窯のなかにぎっしりと木を立てて、それを台にして天井を次に作る。

⑤天井掛け 縦に弓なりの太い丸太をモリキといい、5本ほどドーム状に張り渡す。横に短い木を渡し、びっしりとすき間を埋めるこれをメズメという。コシキのきわは中に詰めた木でもたせる。その上から窯の形に切ったムシロをかける。さらに、練った土を団子にして置いていき叩いてかためる。天井のてっぺんを5cm、縁に向かって10cmほどの厚さにする。土のかけ方には「ネリガケ」とう練



第7図 窯の口石をイシバサミで取り除く



第8図 炭出し 鉄製のエボリで取り出す



第9図 細かい炭はオオエボリで取り出す

った土を使う方法と、土を置いて叩いて整える「ツチガケ」という方法がある。ネリガケの方が団子にするため厚さをそろえやすい。古窯の焼き土を入れておくと縮む心配が少ない。天井の2～3箇所にサヤシアナ(いこらすための穴)を開ける。

### 炭焼き

⑥クチダキ 初窯は一気に焚くと引き割れをおこすため、少しずつ温度を上げていく。引き割れは土をドロドロに溶かして流し込む。天井に誤って穴を開けた場合は作り直さなければならない。煙は焚き口から天井を伝って奥のシカマに行き、そこから煙突を通して抜ける。初窯は水分を多く含んでいるため3～4日かけておこなう。焚きはじめは、煙突の煙が綿のように上がりは



第10図 白炭の特徴であるスパイをかけて消す

じめる。その煙がやがて煙突の際が見えなくなるくらい混みはじめ、臭いが変わると着火したことになる。

⑦口をする 窯口に石を組んで水で練ったスパイ(素灰)ですき間を埋める。指の太さの木の棒でカザアナ(風穴)を5～6箇所あける。炭焼きは煙の色の出具合とカザ(臭い)によって、窯の中の状態を判断する。それは「オオクスボリ」「ネギレ」「シロ」「アオ」「サヤス」の段階を経て木が炭にかわる。オオクスボリは十分くすべることで、目や鼻をさす臭いがする。昼から夜中までもっとも時間がかかる。ネギレは、口が空いてくる。やがて煙はシロになり、天井に開けたサヤシアナの蓋と口を上の方から少しずつ開けていく。煙の色はアオにかわり、口石と煙突とサヤシアナを1時間おきに5回ほどかけて取り除いていく。急いで開けてしまうとせっかく立っていた炭が折れて倒れてしまうことになる。窯の中の炭は真っ赤に黄金色に輝く。



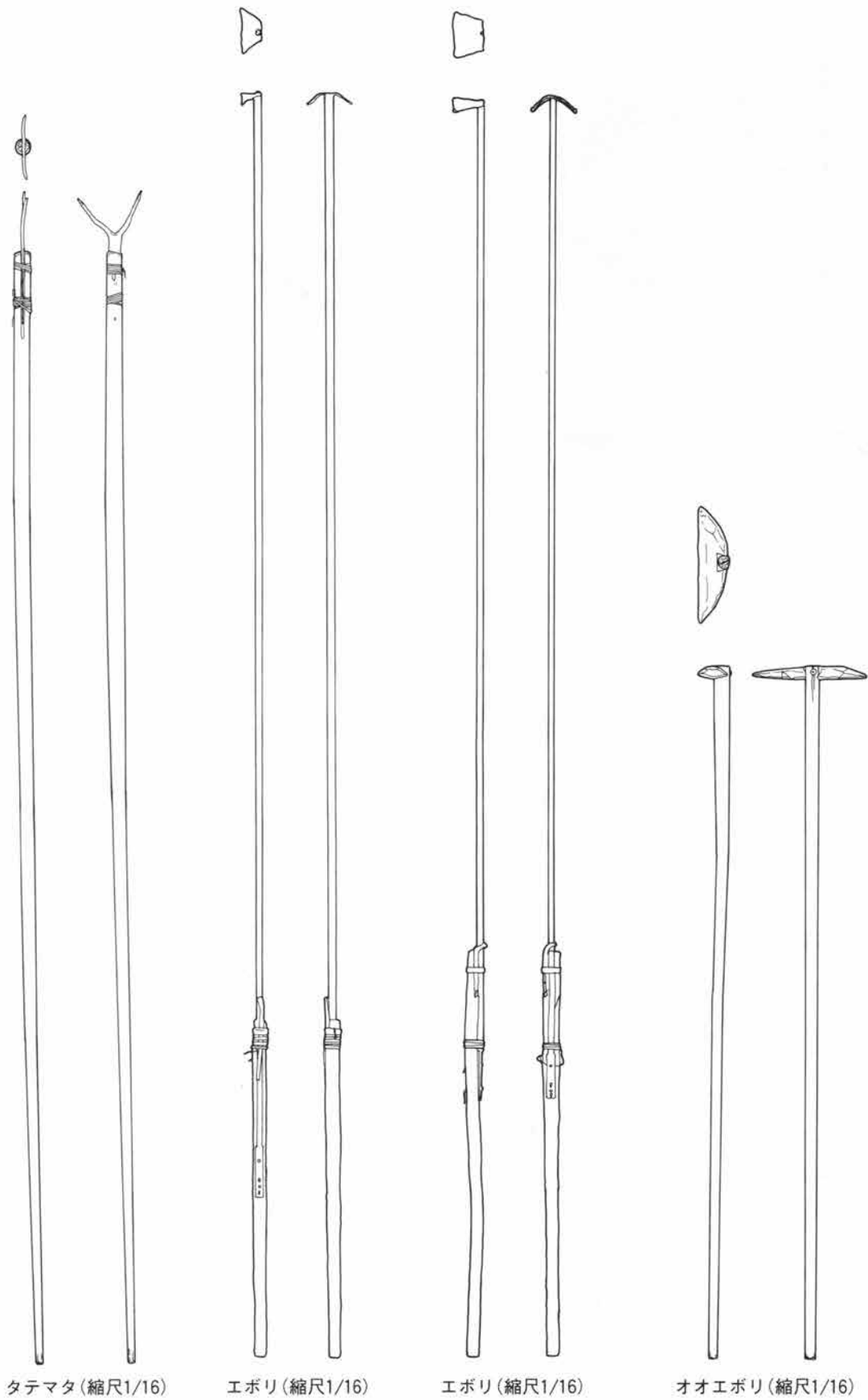
第11図 スドリを使って消えた炭を取り出す

⑧炭出し エボリで3～4回に分けて炭をかき出す。炭はオオエボリで脇に寄せてスパイをかけて消火する。すべて出し終わると、再び窯に木立てをする。

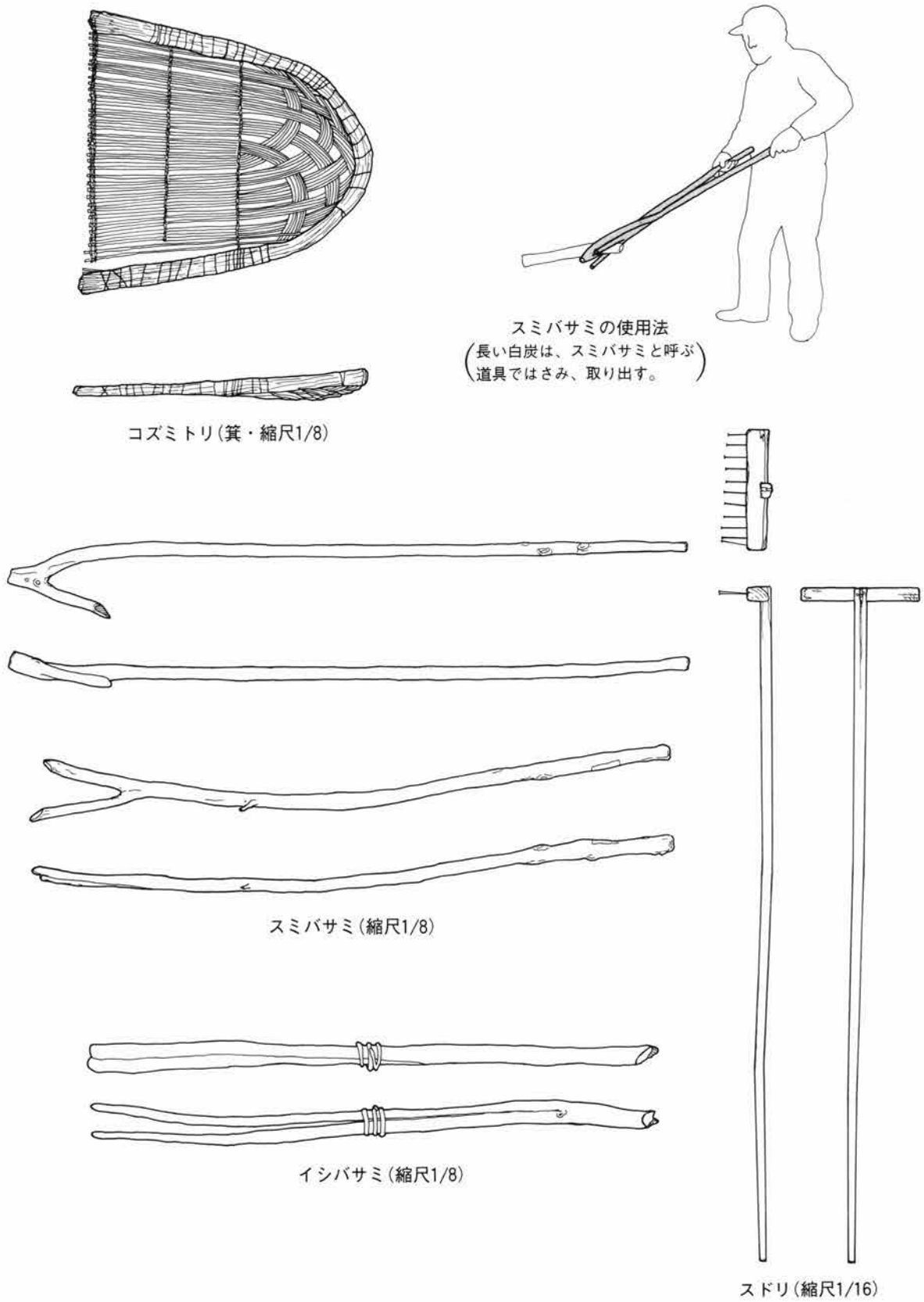


第12図 炭取り 炭の大きさをそろえる

⑨木立て 窯の奥から口に向かってオコシタテ(太い木)、ホリクベ(細い木)、クチタキ(細い枝木)という木の太さの順にしたがって



第13図 炭焼き道具図(1)



第14図 炭焼き道具図(2)

2～3本ずつ投入して、タテマタで立てていく。窯口まで詰め終わると火をつける。

⑩炭掘り 熊手に似たスドリでスパイのなかから炭を掘出す。細くなったコズミ(粉々になった炭)はシノベ竹で編んだ箕のコズミトリですくう。

⑪俵入れ かつては俵を編み、そのなかに入れて岡田上農協森林組合へ昭和35年ごろまで出荷していた。一俵(15kg=4貫目)400円で取り引きされたが、その後、個人売買となる。

儀礼と禁忌 山仕事に従事する人々は仕事の安全を祈るため、山の神に加護を求めて信仰してきた。

小俣地区においても山の神の行事が毎年12月9日におこなわれる。山の神さんの祭りはかつては子供組(男子のみ)の行事で、ゾウリ・ワラジ・コシミノ・フサ・シメナワなどのオカザリサンを藁で作し、ウメダニの祠にかかげた。現在では地区の役員によって続けられている。この日は山の神さんが罰を当てる日と伝えられ、山へ行くことはないという。

#### 4. おわりに

今回、発掘された炭窯は、奥行3 m50cm、最大巾2 m60cm、深さ1 m60cm、窯口60cmである。佐藤氏によれば黒炭を焼いた窯であろうとのことである。この窯の特徴は、窯口から人が入れるぐらいの大きさがあり、天井が高く、全体に大型であること。黒炭の場合は白炭の場合と異なり炭にする木は窯の中に人が入って詰めていく。したがって天井も高く作られている。この仕事は体を屈ませなくてはならず重労働である。

黒炭は焼成温度が300度位と白炭の800度から1000度と比べて低いので天井が大きくても保つことが出来る。しかし白炭の天井は高温で炭を焼くため膨張し、焼けた炭を窯から出す時には天井を冷やすことになる。伸縮が繰り返されると大きな天井ではひび割れをおこして保たないという。その結果、今回出土の炭窯は、黒炭を焼いた窯と考えられる。

ではいつ頃の窯かということになるが、この炭窯周辺には終戦後も大俣地区の人々が使用していた炭窯が残っていることから、その当時の使用した窯のひとつではないかと考えられる。

なお、この報告文をまとめるにあたって炭焼きの工程等については佐藤久雄氏に、また炭焼き道具の図面では岡本勝美氏に協力いただいた。

(いのもと・とおる＝京都府立丹後郷土資料館資料課長)

注1 岡崎研一「ニゴレ遺跡・丹後あじわいの郷関係遺跡平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第53冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

注2 増田孝彦「遠所遺跡群の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第39号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注3 河野一隆「黒部製鉄遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第52号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注4 増田孝彦「芋谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第60冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注5 杉原和雄『水無月山遺跡発掘調査報告書』 京都府立丹後郷土資料館 1980

注6 『岡田上村誌』 京都府加佐郡旧岡田上村役場 1955

岡田上村は地頭、大俣、小俣、滝ヶ宇呂、上村、宇谷、小原、桑飼下の八ヶ村からなる。昭和29年戸数423戸、人口2,146人である。昭和30年岡田上、岡田中、岡田下、八雲、神崎の五ヶ村が合併し、加佐町が設置される。昭和32年舞鶴市に編入され、現在に至る。

### 3. 長岡京跡左京第366次・中福知遺跡発掘調査概要

(7ANFIR-3・FDN-2・FKA・FHM-6)

#### 1. はじめに

長岡京跡左京第366次・中福知遺跡の発掘調査は、府営上植野団地(仮称)建設に伴って、京都府土木建築部住宅課の依頼を受けて実施した。調査地は、京都府向日市上植野町池ノ尻・大門・釜桂・樋爪に所在し、長岡京跡左京四条一坊十町・十一町・十四町・十五町(旧呼称左京三条一坊十二町・十三町、左京四条一坊九町・十六町)の推定地にあたる。なお、トレンチ内には、東一坊坊間東小路(旧呼称東一坊第二小路)と四条条間小路(旧呼称三条大路)の所在が予想されていたところでもある。

当該建設工事に係わる埋蔵文化財の発掘調査は、平成6年度も同課の依頼を受けて長岡京跡左京第353次調査として実施しており、今年度の調査でも関連する遺構・遺物の検出が予想された。

発掘調査は、東一坊坊間東小路と四条条間小路の交差点部分を平成7年4月24日から同年5月19日の期間に行い、それ以外の8か所のトレンチは、平成7年5月22日から同年12月22日の期間に実施した。平成7年10月20日には、第4トレンチを中心に関係者説明会を実施するとともに、当調査研究センターで発刊の『京都府埋蔵文化財情報』第59号において調査成果の公表を行った。第1トレンチから第8トレンチの総調査面積は、約3,460㎡である。なお、先に述べた交差点部分の調査で検出した側構は、平成6年度に実施した左京第353次調査でも検出しているため、前年度の概要報告で、すでに報告しており、本概報には掲載していない。

以上の経過を踏まえ、現地調査で実測した平面図及び立面図などの整理と出土遺物の洗浄・出土地点の注記・接合・実測・トレースなどの整理作業を平成7・8年度に実施した。



第59図 調査地位置図



この遺跡の発掘調査は、調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員小池 寛・竹下士郎が担当し、遺物写真は、調査第1課資料係調査員田中 彰、遺構図の調整及びトレースを寺尾貴美子、遺物実測図作成を山本弥生、遺物実測図トレースを伊達優子が中心となって行った。また、本概要の執筆・編集は、小池が担当した。

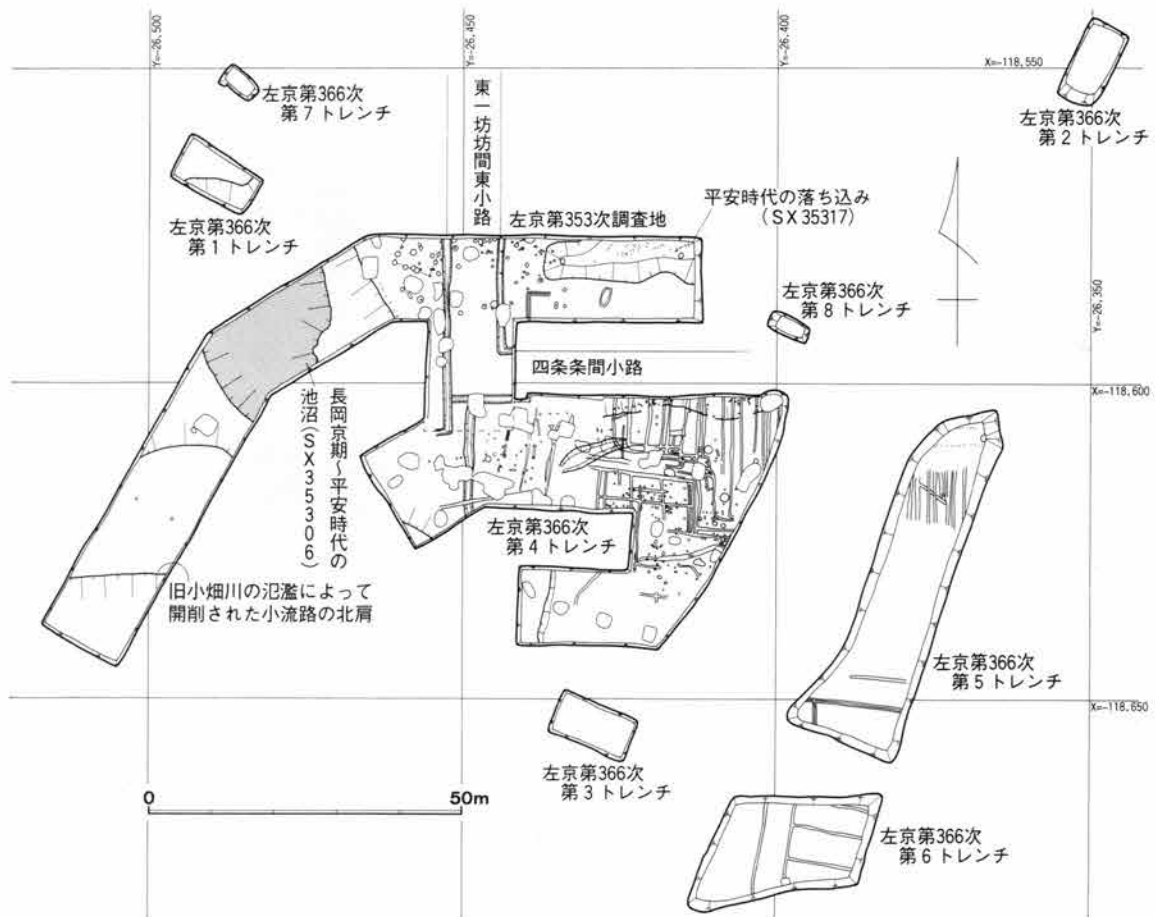
花粉分析及び樹種同定は、それぞれの専門の業者に業務委託し、その分析・同定結果を本書に掲載した。この、分析データは、当調査研究センターで保管している。

なお、この調査に係わる経費は、京都府土木建築部住宅課が負担した。

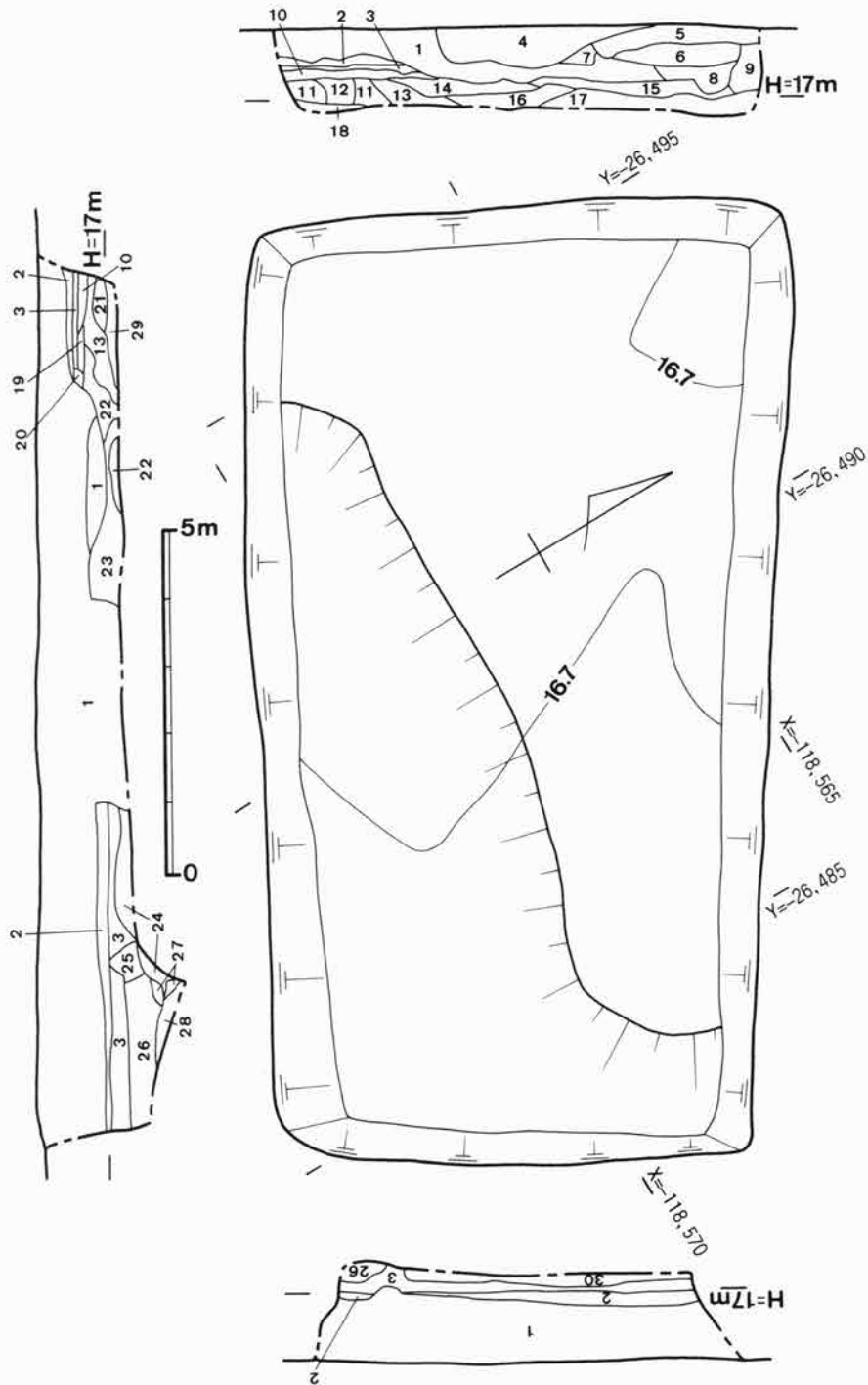
## 2. 位置と環境

調査地は、先に述べたように、長岡京跡左京四条一坊十町・十一町・十四町・十五町(旧呼称左京三条一坊十二町・十三町、左京四条一坊九町・十六町)の推定地にあたる。以下、平成6年度に実施した左京第353次調査の概要を記述し、この地の地理的・歴史的環境にかえたい。

左京第353次調査の概要<sup>(注1)</sup> 府営上植野団地建設予定地は、旧小畑川の北隣接地点にあたり、調査地は、以東に広がる扇状地形の基部にあたる。そのため、粘土・砂利の互層によって遺構検出面の基盤層を形成しているが、遺構面自体は自然流路の氾濫作用で、連続した平坦面を形成していないことが確認できた。また、部分的に確認した落ち込み S X 35306からは、流木・木葉など



第60図 トレンチ配置図



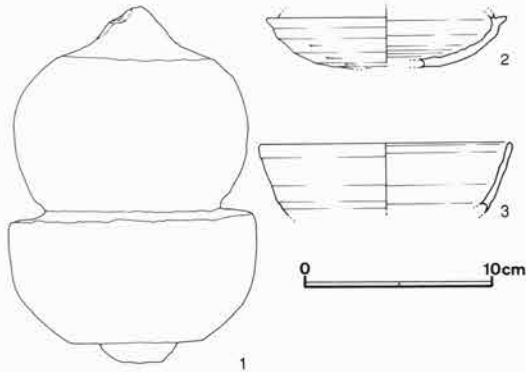
第61図 第1トレンチ実測図

- |                |                     |                     |
|----------------|---------------------|---------------------|
| 1. L.N. 1. 造成土 | 2. L.N. 2. 濁暗灰褐色粘質土 | 3. L.N. 3. 濁淡灰褐色粘質土 |
| 4. 濁淡茶褐色土      | 5. 淡黄褐色砂礫土          | 6. 暗灰褐色土            |
| 7. 淡黄褐色砂礫      | 8. 濁黄褐色砂礫           | 9. 淡茶褐色砂礫           |
| 10. 明茶褐色砂質土    | 11. 淡灰褐色砂礫          | 12. 淡茶褐色土           |
| 13. 淡茶褐色砂利     | 14. 濁茶褐色砂礫          | 15. 淡茶褐色砂礫          |
| 16. 明灰褐色砂礫     | 17. 明茶褐色砂礫          | 18. 明茶褐色砂礫          |
| 19. 淡茶褐色土      | 20. 明茶褐色土           | 21. 暗茶褐色砂礫          |
| 22. 淡灰褐色砂礫     | 23. 濁淡茶褐色粘質土        | 24. 暗灰褐色粘質土(礫含)     |
| 25. 灰褐色砂       | 26. 暗青灰色粘砂土         | 27. 暗青灰色砂礫          |
| 28. 暗青灰色粘土     | 29. 濁茶褐色砂利          | 30. 濁淡茶褐色砂礫         |

を含む有機層が堆積しており、一定期間の溜水によって形成された池沼であることを確認した。

検出した遺構は、東一坊坊間東小路(旧呼称東一坊第二小路)の東西両側溝と四条条間小路(旧呼称三条大路)の南北両側溝、長岡京期から平安時代の土器・瓦・木製品を包含する池沼 S X 35306、平安時代前期の大量の土器を包含する落ち込み S X 35317、平安時代の掘立柱建物跡群などである。特に、次の2点の所見を特記しておきたい。

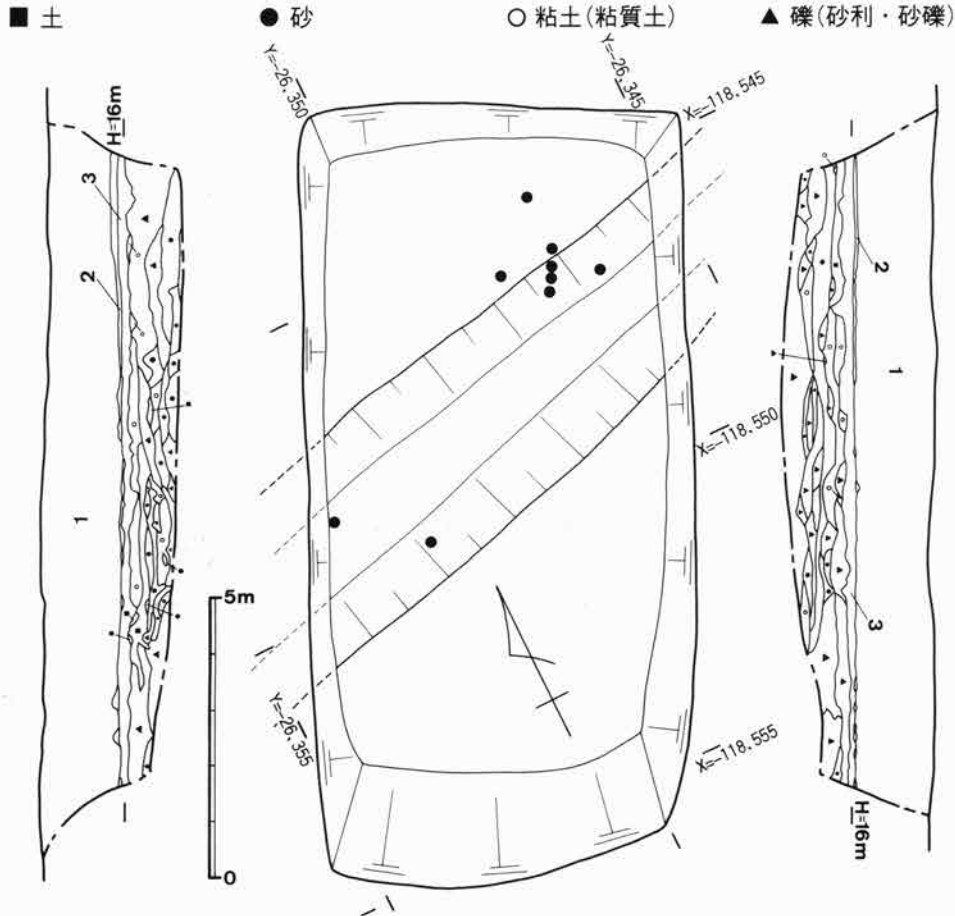
(1)長岡京の条坊である東一坊坊間東小路(旧呼称東一坊第二小路)の東西両側溝は、調査地の



第62図 出土遺物実測図(1)

1. 1 トレンチ 2・3. 2 トレンチ

北方約50mの地点で実施された左京第226次調査及び北方約40mの地点で実施された左京第252次調査で検出されている。今回の発掘調査でも両側溝が確認できたことから、少なくとも調査地までは、東一坊坊間東小路が施工されていたことが判明した。しかし、それに直交する四条条間小路(旧呼称三条大路)は、東一坊坊間東小路より以西では検出できなかった。その要因として先述した池沼 S X 35306が交差点以西の隣接地に広がっていることが考えられる。一

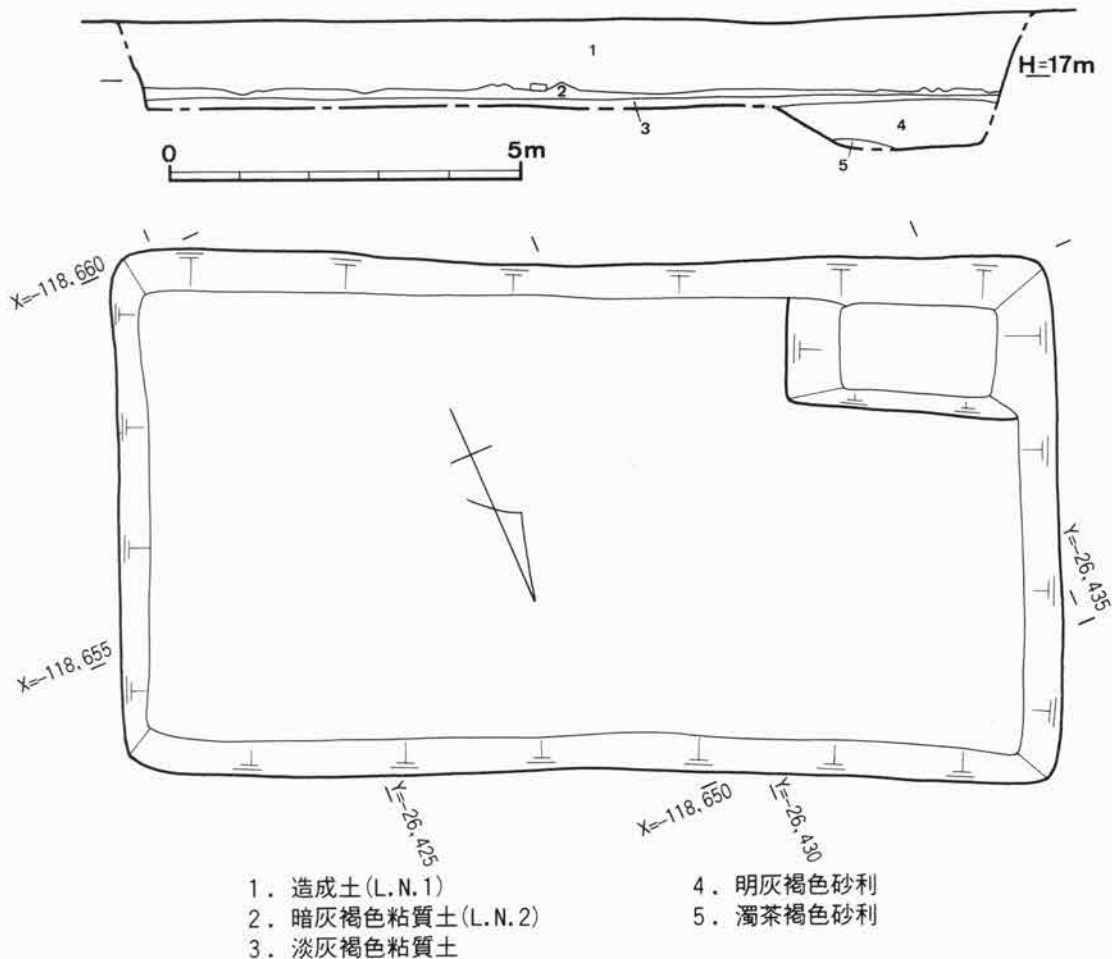


第63図 第2トレンチ実測図(平板図のドットは、杭を表わす)

方、東一坊坊間東小路の東側溝 S D 35314 は、四条条間小路の北側溝 S D 35319 と接続し、東へ流れることが確認できており、東一坊坊間東小路の西側溝 S D 35313 は、四条条間小路の南側溝 S D 35318 が埋没した後に改修されていることが判明した。このことから、長岡京造営時には、交差点で東方へ屈曲していた可能性が指摘されるとともに、東一坊坊間東小路の西側溝 S D 35313 が平安時代に改修されていることが判明した。おそらく、北方に広がっている平安時代の建物跡群に伴う生活排水溝としての機能が、新たに加わった可能性が高い。

(2) トレンチ東端で検出した落ち込み S X 35317 からは、緑釉陶器、無釉陶器、灰釉陶器、中国越州窯青磁や木簡、鳥形木製品、漆塗り調度品、檜皮、蛇紋岩製の巡方、加工された凝灰岩、軒丸瓦、軒平瓦、塼などが出土した。これらの遺物は、平安宮及びその周辺での出土遺物の組成と酷似しており、長岡京廃都後の土地利用が把握できた。特に、「料理所」「政所」「盛所」などの墨書土器の出土と、瓦葺き建物と檜皮葺き建物が混在していたことから考えると、平安貴族に調査地あたりの土地の一部が下賜され、それを運営する家司などの家政機関が設置されていたことが推定できる。また、第3次山城国府の所在地の推定にも一石を投じることができた。

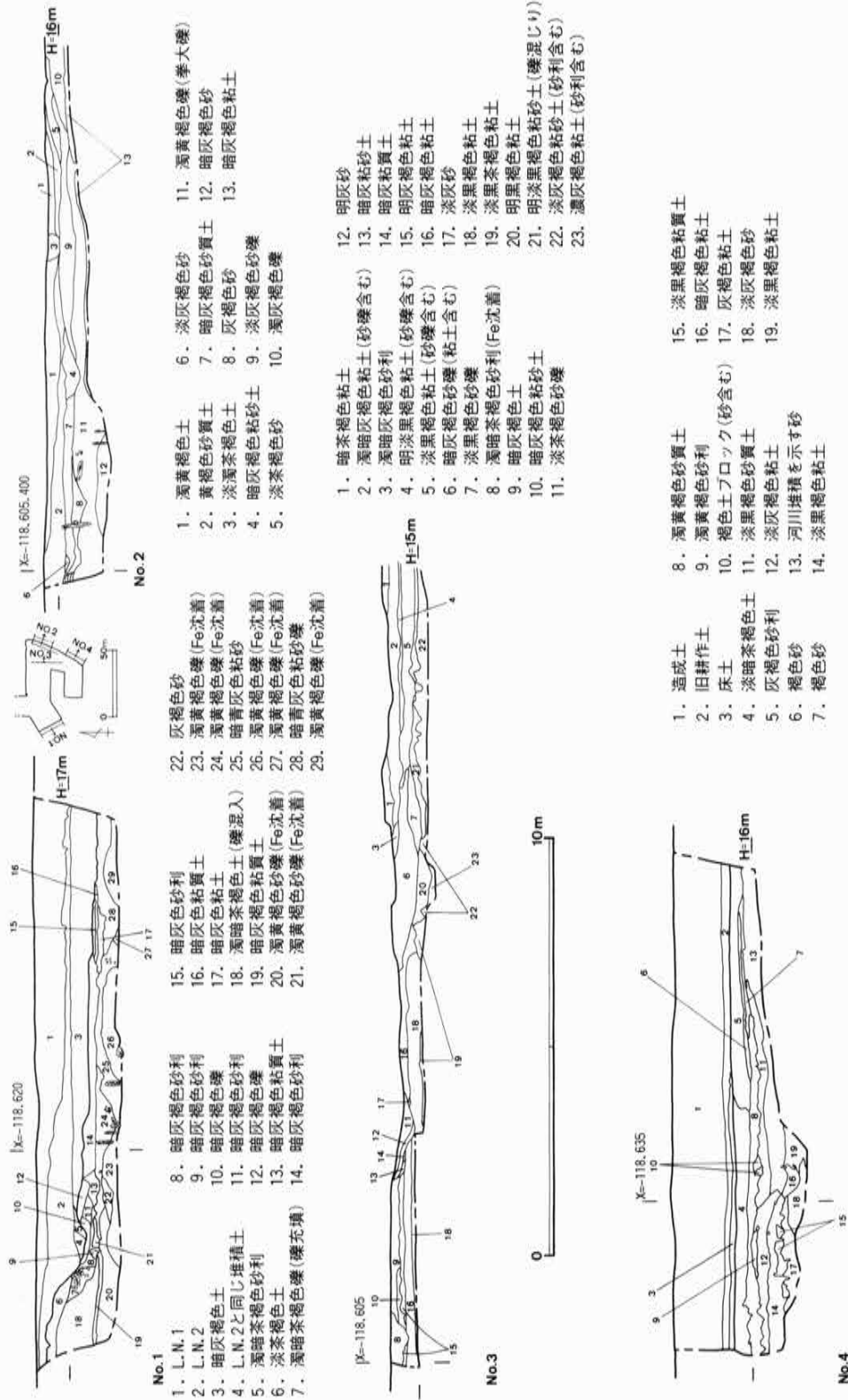
なお、調査地は、中福知遺跡の範囲外ではあるが、今回、平安時代後期の集落を検出したこと



第64図 第3トレンチ実測図



第65図 第4トレンチ遺構配置図



第66図 第4トレンチ土層断面図

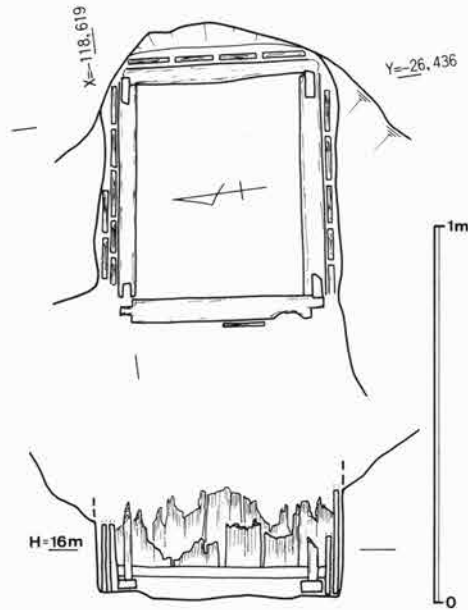
から、当該地も中福知遺跡の範囲内に含めることが妥当となった。

### 3. 調査概要

今回の調査は、団地及びそれに付随する諸施設建設予定地に合計8か所のトレンチを設定した。以下、各トレンチの調査概要を述べる。

#### (1) 第1トレンチ(第61・62図、図版第47)

調査対象地内で最も西に位置しており、トレンチ西方には、和井川が北流している。基本的な堆積土は、和井川によってもたらされた砂利・礫層であり、明確な遺構及びそれに伴う遺物は検出できなかった。しかし、トレンチの東西対角線以南には、暗青灰色粘砂土(26層)を埋土の主体とする落ち込みを検

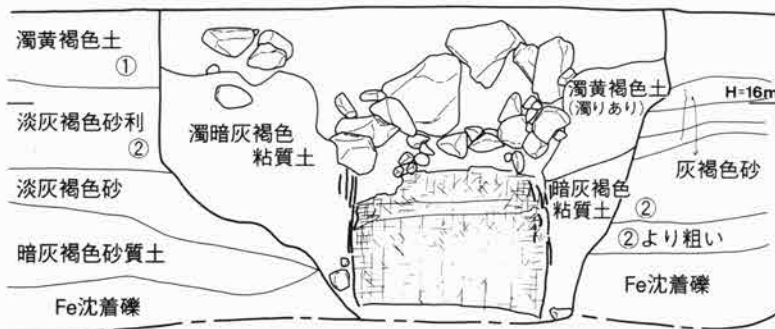
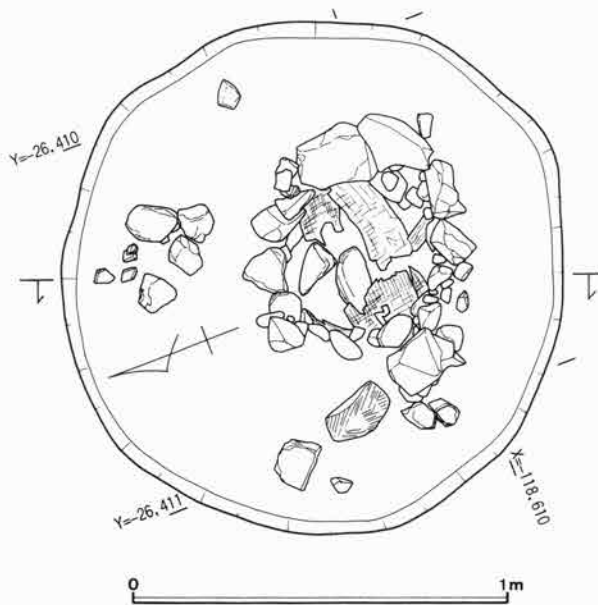


第67図 第4トレンチ井戸 S E 36668実測図

出しており、左京第353次調査で確認した近世の落ち込みの広がりを確認することができた。なお、砂利層から、五輪塔の空輪が出土している(第62図1)。

#### (2) 第2トレンチ(第62・63図、図版第48)

調査対象地内の最北部に設定したトレンチである。土層は、砂層・粘土層・礫層が交互に堆積していたが、安定した遺構面は検出できなかった。しかし、トレンチの中央部では、西方から東へ流れる自然流路と、数本の杭を検出した。砂利層から、古墳時代後期の須恵



第68図 第4トレンチ井戸 S E 36663実測図

器・杯(第62図2)と、長岡京期から平安時代頃に比定できる須恵器・杯(第62図3)が出土しているが、磨滅が著しいことから、西方からの流れ込みによる可能性が高い。

(3)第3トレンチ(第64図、図版第49)

南北方向の近世耕作溝を多数検出したが、下層に明灰褐色砂利層が堆積しており、安定した遺構面は確認できなかった。砂利層から磨滅が著しい土器細片が出土しており、西方からの流れ込みと考えられる。

(4)第4トレンチ(第65～86図、図版第50)

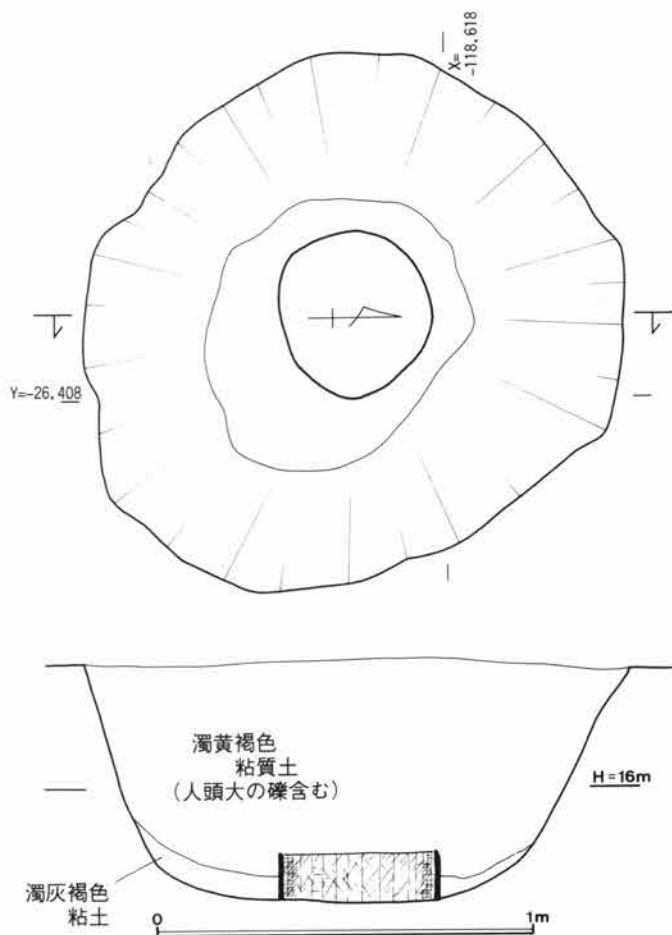
第4トレンチの北半部を中心に、中世の耕作溝群、平安時代後期の掘立柱建物跡や井戸、平安時代の溝、長岡京期の溝をほぼ同一面で検出した。また、その遺構検出面下に堆積する砂利層中から、約800本の杭と奈良時代に比定できる土器や木製品などが出土した。打ち込まれた杭の先端は、砂利層の下層に堆積する黒褐色粘土層にまで達しており、この黒褐色粘土層を遺構面とする古墳時代前期の耕作と関係する溝などを検出した。検出した遺構・遺物は多岐にわたるため、層位を概観した後、検出した遺構順に記述していく。

a. 基本層序(第66・83図、図版第63-(2))

先に述べたように、調査地が所在する地点は、旧小畑川によって形成される扇状地形の基部に

あたるため、土層の堆積状況は複雑である。そのため、すべての堆積土について記述できないが、トレンチ南西壁と東壁を中心に概観しておきたい。

南西壁(第66図No.1)では、地表面下0.8mまで造成土が堆積しており、その下層に昭和時代の耕作土が堆積している。南西壁の南端には、自然堤防状を呈する濁暗茶褐色土(18層)が0.8m堆積しており、その外表面には拳大の礫が確認できる。安定した遺構面は検出できないが、比較的平坦な堆積である暗灰褐色砂利層(14層)からは奈良時代から平安時代に比定できる須恵器片が出土している。また、14層下には砂利層・礫層・砂層が複雑に堆積しており、後述する杭群



第69図 第4トレンチ井戸 S E 36660実測図



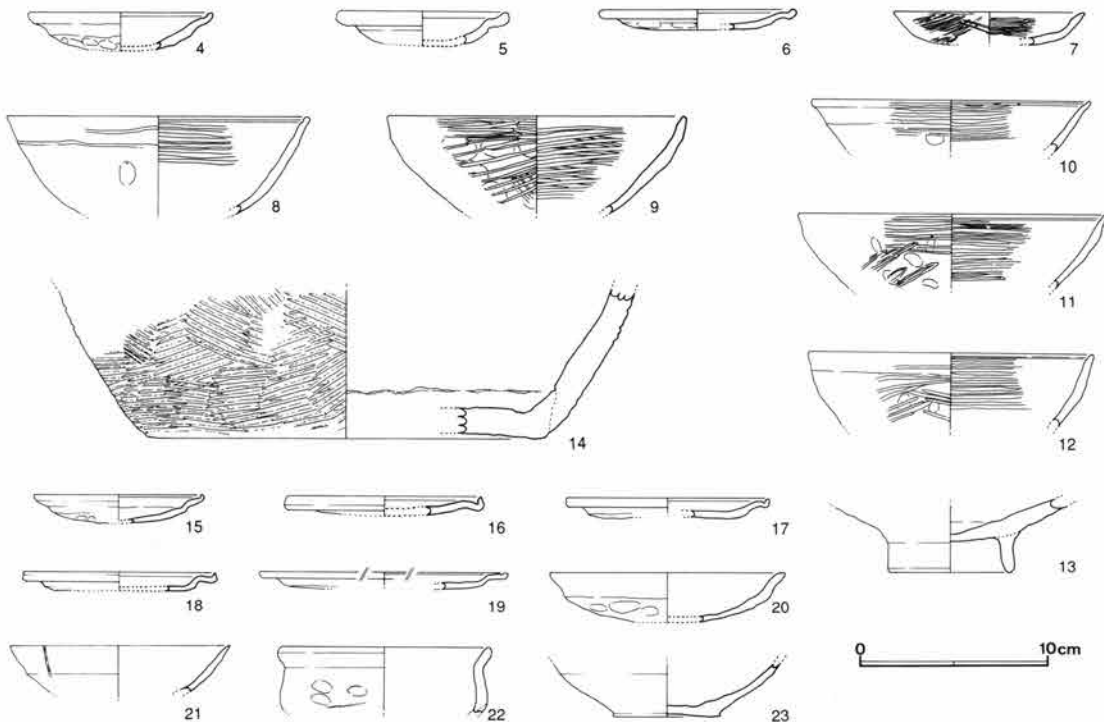
は、この14層除去後に検出した。なお、トレンチ南西部では中世の耕作に伴う素掘り溝群は検出しておらず、土層の断面でも中世の遺物を含む堆積土は確認していないことから、中世の耕地の広がり限定する際の根拠を得たといえる。

一方、東壁(第83図、図版第63-(1))では、南西壁とは異なり、整然とした層序が確認できた。地表下1.1mまでは造成土(1層)が堆積しており、その下層には0.3mの昭和時代の耕作土(2層)が堆積している。後述する中世から平安時代の遺構は、3層である濁黄褐色土からなる基盤層から掘り込まれている。また、奈良時代の杭群は、3層では確認しておらず、4層の暗灰褐色砂礫層上面で確認している。一方、4層の基盤層である5層の暗灰褐色粘土層上面で、偶蹄目の足跡を検出している。4層内から須恵器・壺(第79図170)が出土していることから、奈良時代に杭を打ち込み、氾濫を制御する堤防状施設を敷設することによって堆積した砂利層であった可能性が想定できる。古墳時代前期の遺物は、5～14層内に散在しているが、特に、遺構を検出した9層の暗灰褐色粘土と13層の黒褐色粘土に比較的集中していた。

以上が、基本的な堆積状況であるが、四条条間小路に隣接する一帯では、3層と4層間に遺物を多く含む整地層を確認しており、条坊施工段階に整地を行った可能性が指摘できる。

b. 中世(第65図、図版第50)

Y=-26, 440m以東、X=-118, 630m以北で南北・東西方向の耕作に伴う素掘り溝を多数検出した。南北方向の素掘り溝の全体的な傾向としては、ほぼ2～3mごとに複数の群を構成している。一方、東西方向の素掘り溝群は、X=-118, 610m以南に集中しており、南北方向の素掘り溝に切り込



第70図 出土遺物実測図(2)  
15～23. S E 36660 4～14. S E 36663

まれている。屈曲する素掘り溝と南北・東西の素掘り溝が錯綜する範囲が限定できることから、何らかの耕地区画が存在していた可能性がある。なお、素掘り溝からは、瓦器・碗の細片が出土しているが、明確な型式認定はできなかった。

c. 平安時代前期・後期(第65・67～69図)

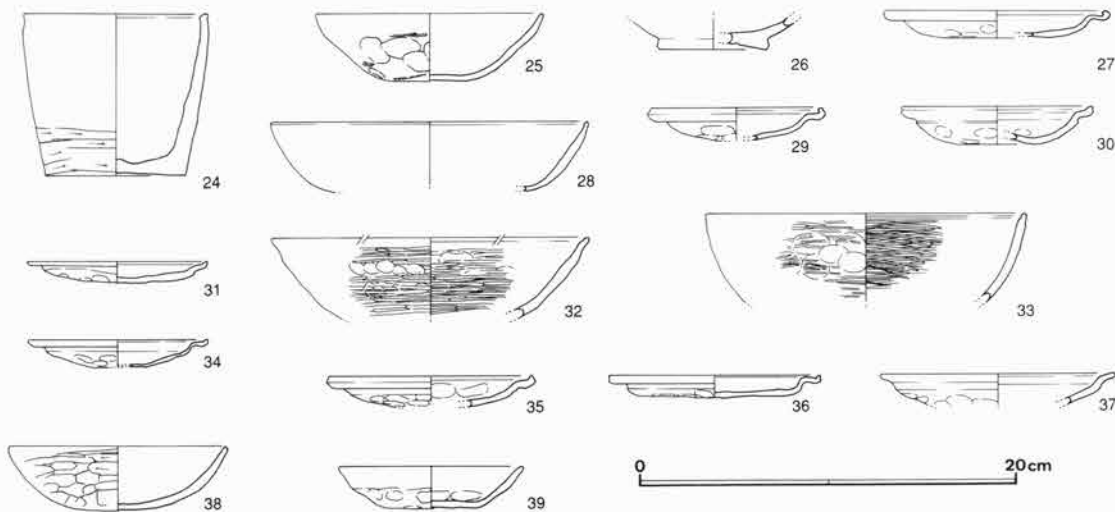
平安時代前期に比定できる遺構には、溝 S D 35313(図版第55)がある。この溝は、東一坊坊間東小路の西側溝として検出した溝と同じ位置に所在することから、左京第353次調査時に北方に展開する平安時代の建物跡群の生活排水用に浚渫された可能性を指摘したところである。基本的には、南流せずに $X=-118,607.203\text{m}$ 地点で西方に屈曲していることが判明した。西方には、左京第353次調査で検出した池沼 S X 35306が位置しており、少なくとも平安時代前期までの遺物を含んでいることから、池沼への排水を意図していることが推定できる。なお、池沼 S X 35306では、微量ながら寄生虫卵を検出しており、生活排水との関連を想定することも可能である。

一方、平安時代後期に比定できる遺構は、井戸3基と掘立柱建物跡群である。

井戸 S E 36668(第67図、図版第53-(1))は、 $X=-118,619.300\text{m}$ ・ $Y=-26,436.250\text{m}$ に中心座標をもつ方形の井戸で、南北 $0.55\text{m}$ ・東西 $0.7\text{m}$ ・残存高 $0.3\text{m}$ の規模を測る。井戸底部には横棧を分解して方形に据えており、縦板により井戸枠を構築している。井戸内底部からの一括資料は出土していないが、瓦器の細片が出土している。

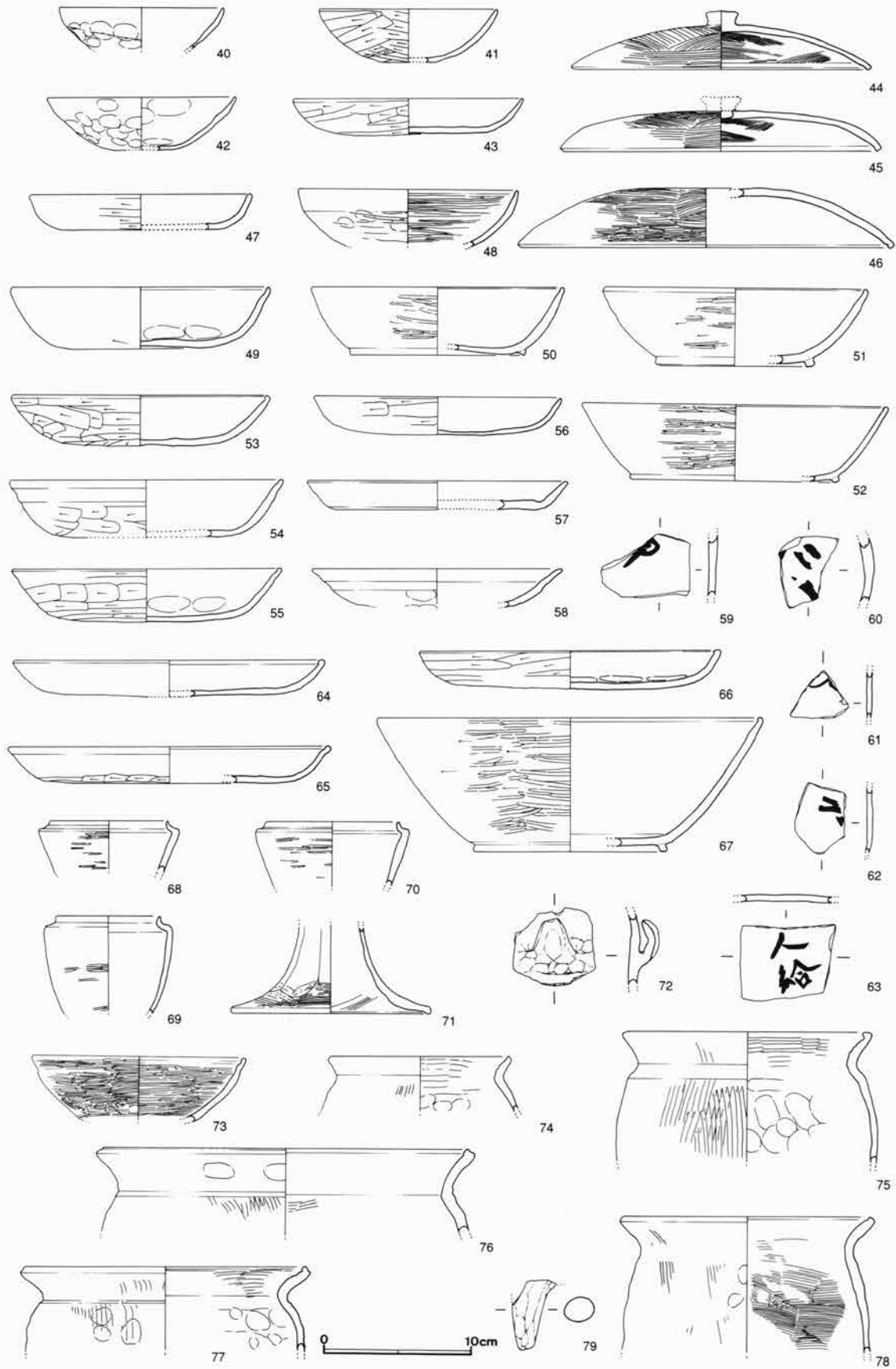
井戸 S E 36663(第68図、図版第52)は、 $X=-118,609.830\text{m}$ ・ $Y=-26,410.550\text{m}$ に中心座標をもつ円形の井戸で、掘形の直径は $1.3\text{m}$ 、残存高は $0.83\text{m}$ を測る。また、掘形の中央部に据えられた曲物の井戸枠の直径は $0.54\text{m}$ 、高さは $0.4\text{m}$ を測る。曲物の上部には、人頭大から拳大の礫を円形に組んでいる。井戸枠内と掘形内から、土師器・須恵器・瓦器(第70図4～14)が出土している。

井戸 S E 36663出土遺物 土師器・皿4～6は、平らな底部から外反し、玉縁状の口縁部をもつ。土師器・台付皿13は、台部端面に木目の圧痕が観察できる。瓦器8～12は、内外面のミガキ

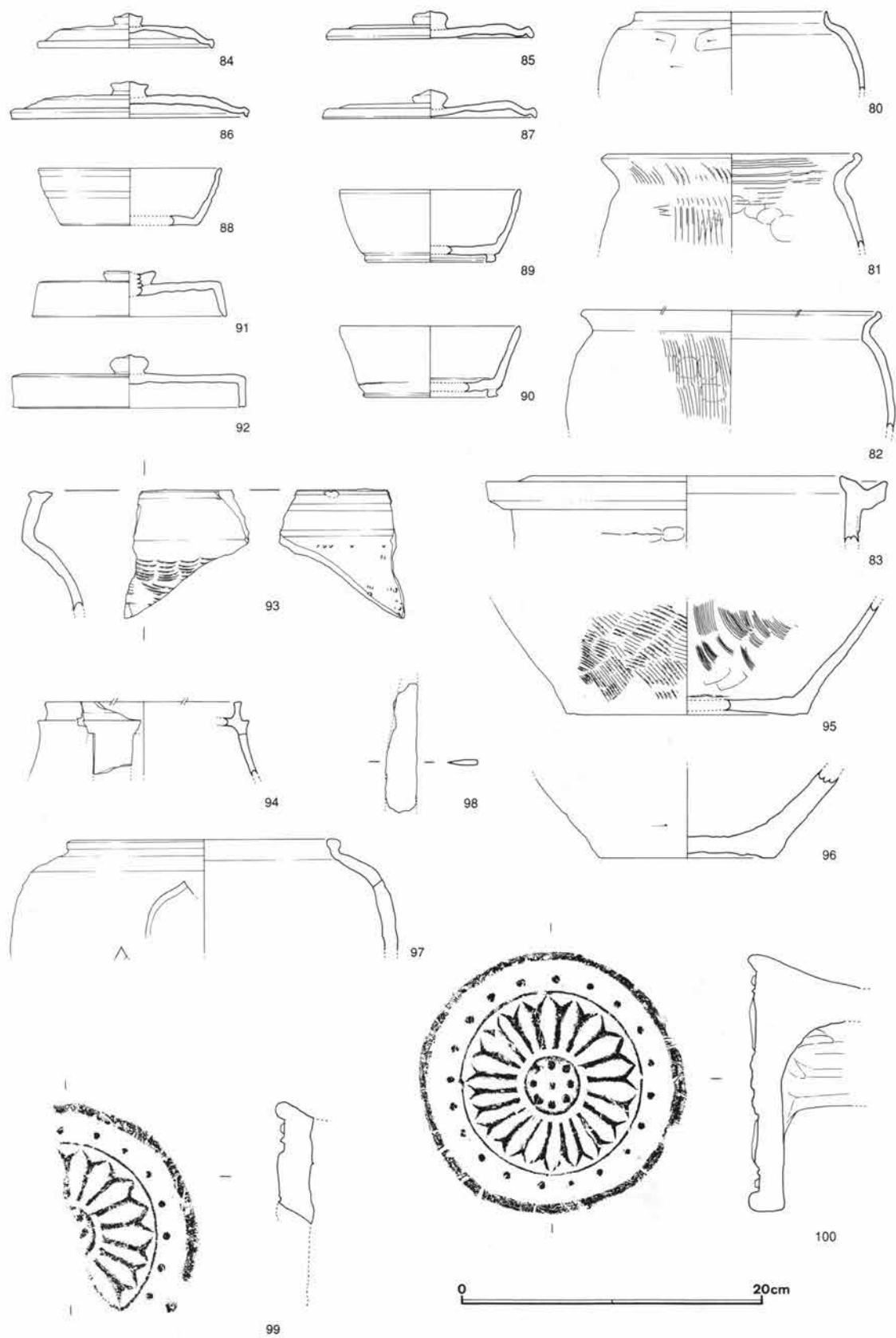


第71図 出土遺物実測図(3)

- |                |                |           |           |          |
|----------------|----------------|-----------|-----------|----------|
| 24・28.ピット11    | 25.ピット12       | 26.ピット29  | 27.ピット61  | 32.ピット66 |
| 29・30・33.ピット84 | 31・34～37.ピット96 | 38.ピット100 | 39.ピット112 |          |



第72図 出土遺物実測図(4) S X 36669



第73図 出土遺物実測図(5)  
S X36669

を比較的ていねいに施しており、外面に指頭圧痕が観察できる。須恵器・甕底部14は、外面を叩いており、内面は平滑になでている。土師器・皿の形態的特徴から11世紀前半に比定できる。

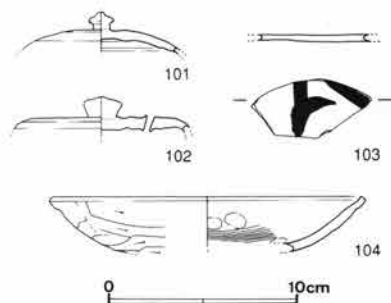
井戸 S E 36660(第69図、図版第53-(2))は、X=-118,618.240m・Y=-26,408.240mに中心座標をもつ円形の井戸で、掘形の直径は1.4m、残存高は0.8mを測る。また、掘形中央部に据えられた曲物の直径は0.43m、高さは0.14mを測る。井戸枠内と掘形内から、土師器・須恵器・瓦器・中国製白磁(第70図15~23)が出土している。

S E 36660出土遺物 土師器・皿15~19は、口径は一定しないが、平らな底部から短く外反した後、直上に尖る口縁部をもつ。中国製白磁・皿21は、淡褐色の釉調を呈しており、外面に鎬が1条施されている。土師器・皿の形態的特徴から11世紀末から12世紀前半に比定できる。

掘立柱建物跡群(第65図、図版第54) 多数のピット群をトレンチ北東部で検出しているが、後述する流路状遺構 S X 36669や中世素掘り溝が遺構面の色調などに変化をもたらしており、明確に掘立柱建物跡として確認できていないのが現状である。調査地北方で実施された左京第252次調査で検出した総柱の掘立柱建物跡群の主軸と一致する方向に柱列が並ぶことから、広範囲に建物群が広がっている可能性が指摘できる。なお、この時期の掘立柱建物跡群については、再整理して検討を行いたい。また、すでに報告されているが、井戸 S E 36660を取り囲む1間×2間の覆屋を復原したことがあるが、覆屋の大半が1間×1間であることから、覆屋として復原できない所見が得られた。ここに訂正しておきたい。

ピットから出土している遺物は、その多くが細片であり、図化できた土器は、第71図に図示した。なお、ピットの検出面は、平安時代後期以前の遺物を包含する堆積層であるため、平安時代後期に比定できる資料を抽出して概観しておきたい。先に述べたように、検出した井戸は、11世紀前半を中心とする時期と11世紀末から12世紀前半を中心とする時期に大別できる。その時期区分の根拠は、土師器・皿の形態的特徴にある。同一の基準でピット出土の土師器・皿を分類すれば、第71図31・35・37は、井戸 S E 36663出土土器に近似しており、27・29などは井戸 S E 36660出土土器に近似している。各掘立柱建物跡を明確には時期区分できないが、井戸の存続期間には集落として建物跡が機能していたと考えておきたい。

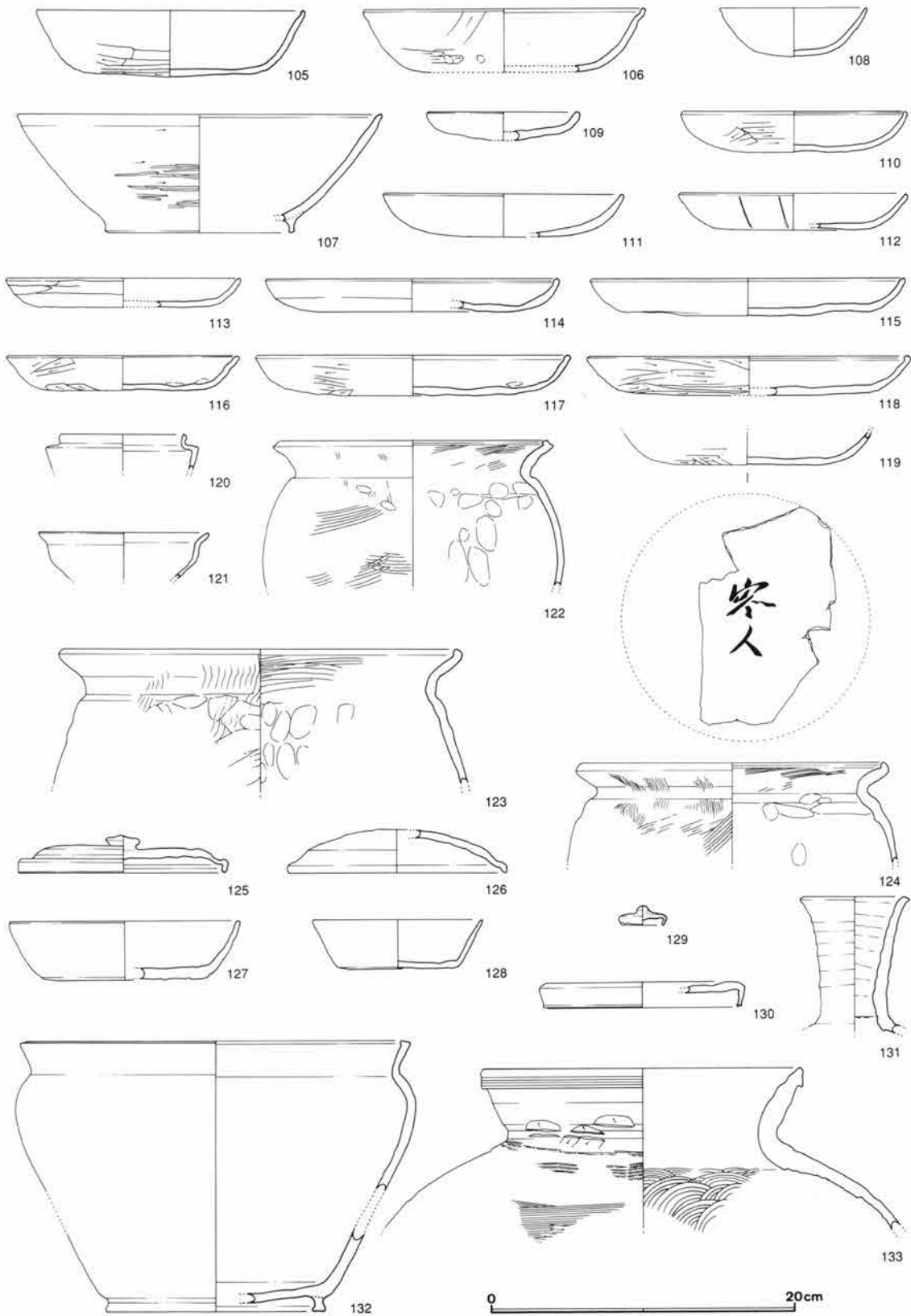
#### d. 長岡京期(第65・72~75図)



第74図 出土遺物実測図(6)  
S D 36606

長岡京期に比定できる遺構及び包含層は、第72・73図に図示した遺物が出土した流路状遺構 S X 36669と東一坊坊間東小路のほぼ中央で検出した溝 S D 36606、そして、四条条間小路付近で確認した整地層である。

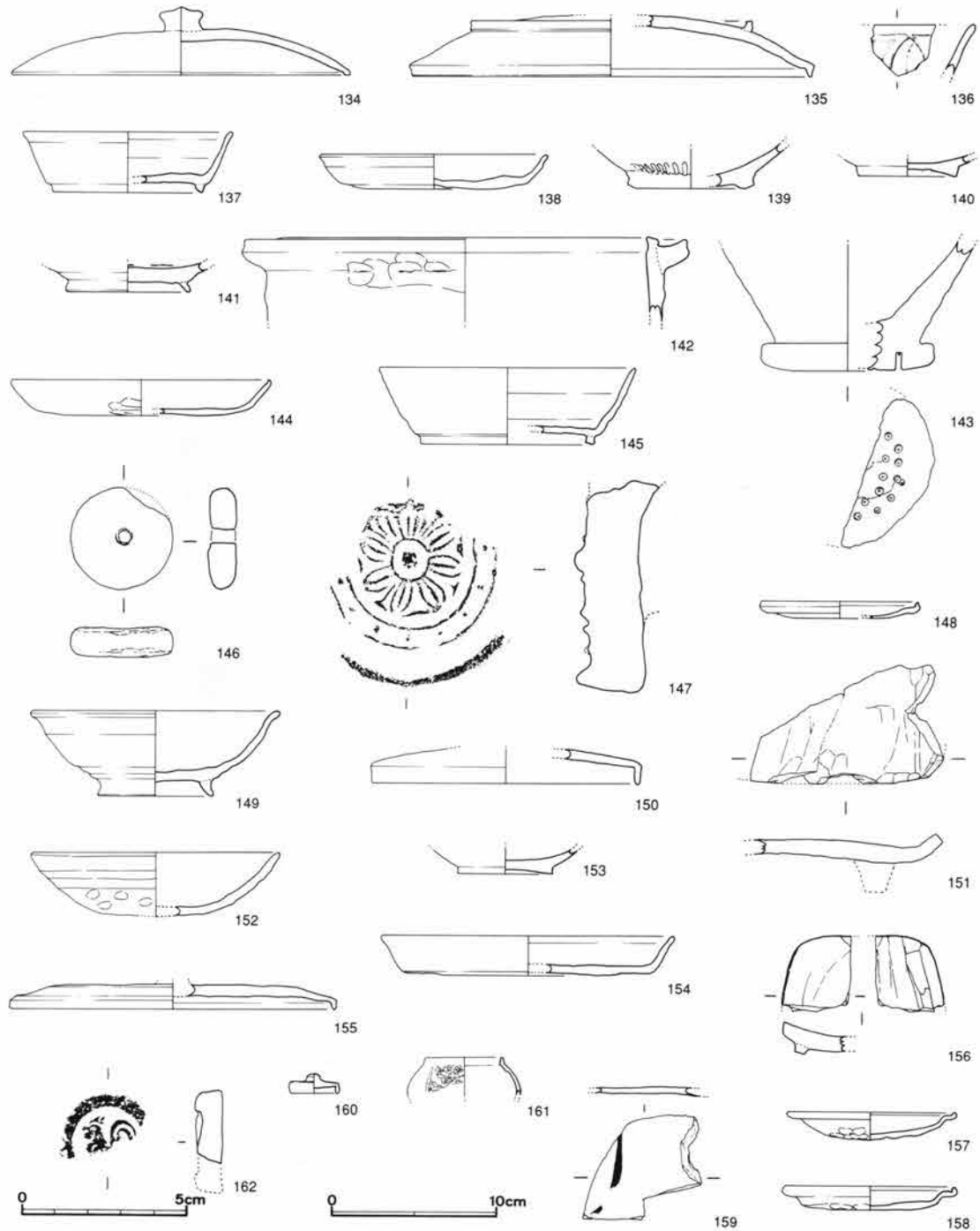
流路状遺構 S X 36669(第65・74図、図版第57-(1)) X=-118,607mからX=-118,613m、Y=-26,435mからY=-26,425mにかけて検出した流路状遺構で、主軸は、ほぼ北から東へ60°振っている。最大幅は3mを測り、最深部は0.6mを測る。遺構の両肩は蛇行し、幅も安定して



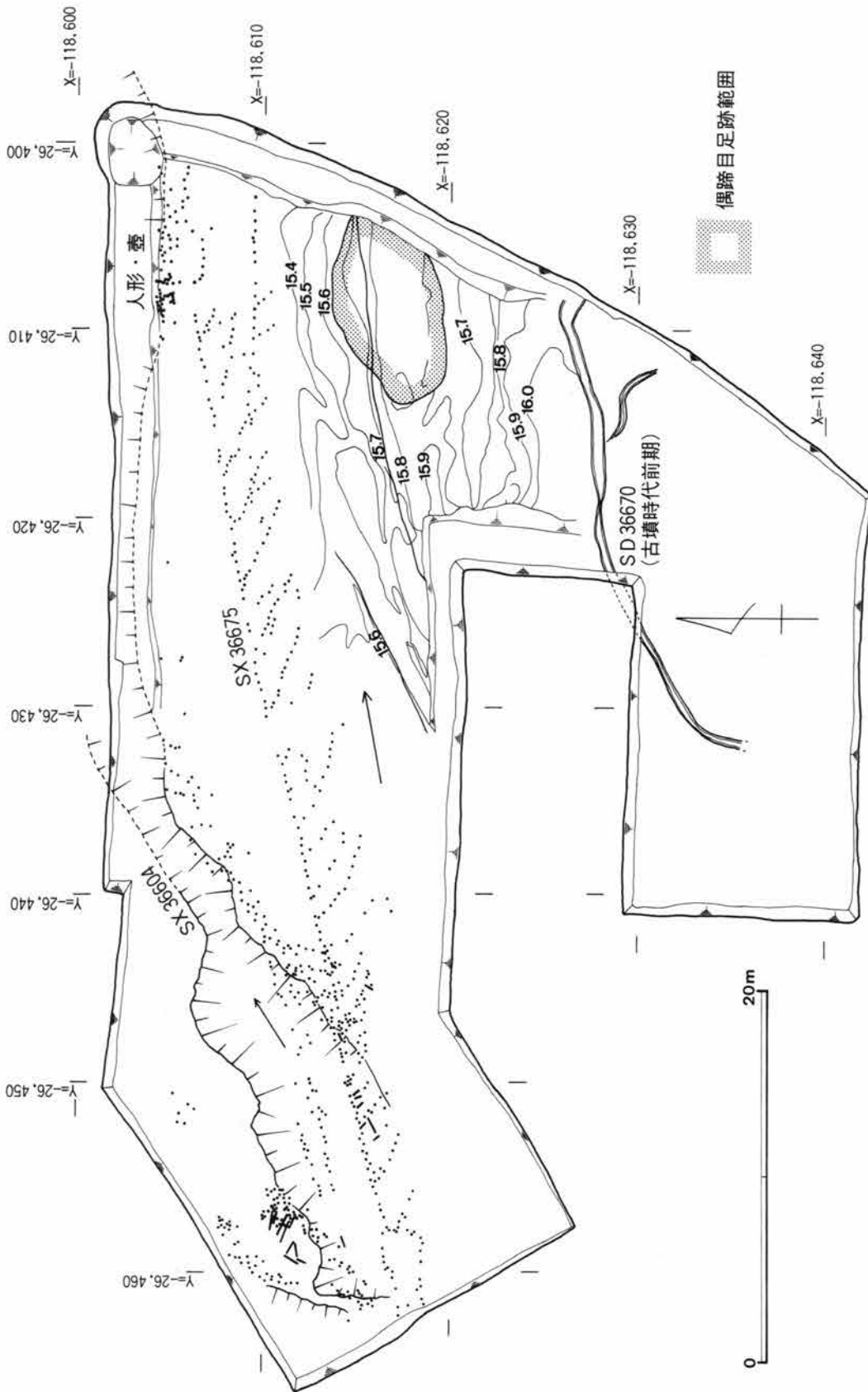
第75図 出土遺物実測図(7)  
 四条条間小路周辺整地層

いないこと、そして、後述する奈良時代の杭列と主軸が一致することから、人為的な溝とは断定できない。遺構内の埋没土は濁灰褐色粘質土であり、そこから土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・鉄製品・軒丸瓦などが出土した。

流路状遺構 S X 36669 出土遺物(第72・73図) 土師器・杯Aは、53~55に見られるように、外面をヘラケズリによって成形している。一方、杯Bは、50・51・52・67に見られるように外面を



第76図 出土遺物実測図(8)  
134~161. 第3層 162. 表採



第77図 第4トレンチ杭列実測図



ヘラミガキによって器面調整を施している。また、杯に伴う蓋は、ほぼ円筒形つまみをもち、内外面をヘラミガキによって器面調整している。椀は、外面をヘラケズリで成形する41と、おさえによって成形する40・42がある。皿は、外面をヘラケズリで成形する66と、底部のみヘラケズリを行う65がある。

高杯71は、脚部にいねいなヘラミガキを施している。壺Eは、口縁端部の屈曲が67～70の各々の個体で異なっている。甕は、口縁端部が上方へ肥厚する75～77・81・82と、尖頭状に仕上げる74・78に分けることができる。外面の基本的な調整は、縦方向のハケメである。羽釜83は、胎土が粗く、暗茶褐色の色調を呈している。

器種は不明であるが、63には「人給」の墨書が見られる。79は土馬の脚の可能性はある。

須恵器・杯蓋84～87は、器高は低く、やや扁平なつまみが付く。杯Bは、比較的器高が高く、内湾する体部をもつ89と直線的な体部をもつ90がある。壺蓋は、扁平なつまみをもつ91と口径がやや大きく、宝珠形つまみをもつ92がある。円面硯94は、残存率が不良であるが、縦長の透かし孔を脚部にもつ。

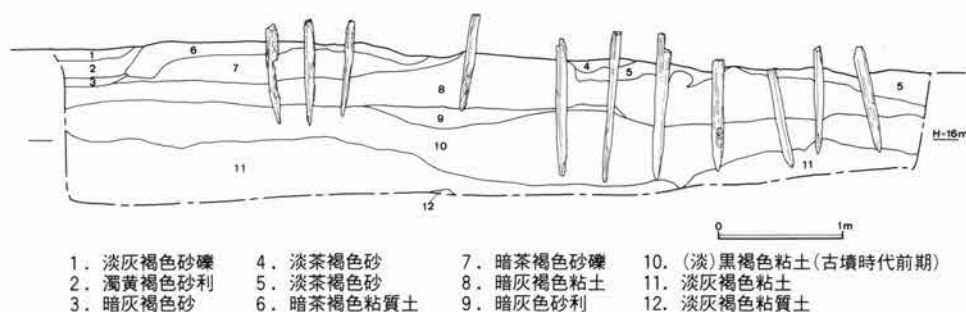
緑釉陶器・火舎97は、濃緑色の釉調を呈しており、宝珠形の透かし孔を穿っている。

軒丸瓦100は、中房の直径は3.7cmを測り、蓮子数は1+8である。瓦当内法は16.4cmで、薬研状の弁数は21を数える。また、圏線を挟んで20の珠文を配している。99も同一型式である。

溝 S D 36606 (第65図、図版第56) 東一坊坊間東小路の中央で検出した中心座標Y=-26, 448. 689 mを測る溝で、左京第353次調査では断面観察からその存在を想定していた。基本的な溝の幅は、約1.5mであり、深さは、北端で0.1m、南端で0.3mを測る。溝底部の深度から南流していたことが把握できるが、四条条間小路との接続部分が攪乱を受けており、条坊の側溝との新旧関係は不明である。なお、調査地北方の左京第266・252次調査では検出していない。

溝 S D 36606出土遺物 (第74図) 溝内からの出土土器はわずかである。101・102は、つまみの付く須恵器・蓋で、102は天井部に穿孔が施されている。

四条条間小路周辺整地層及び遺物包含層 第4トレンチの北端では、四条条間小路の南側溝の南肩部の検出が予想されたが、トレンチ北壁とほぼ同一位置であるため、明瞭な状況での検出はできなかった。しかし、南側溝南方で長岡京期の整地層を検出した。整地層は、四条条間小路周辺ではほぼ10cmの厚さで、南方に薄く堆積している。一方、先述した掘立柱建物跡群を検出した



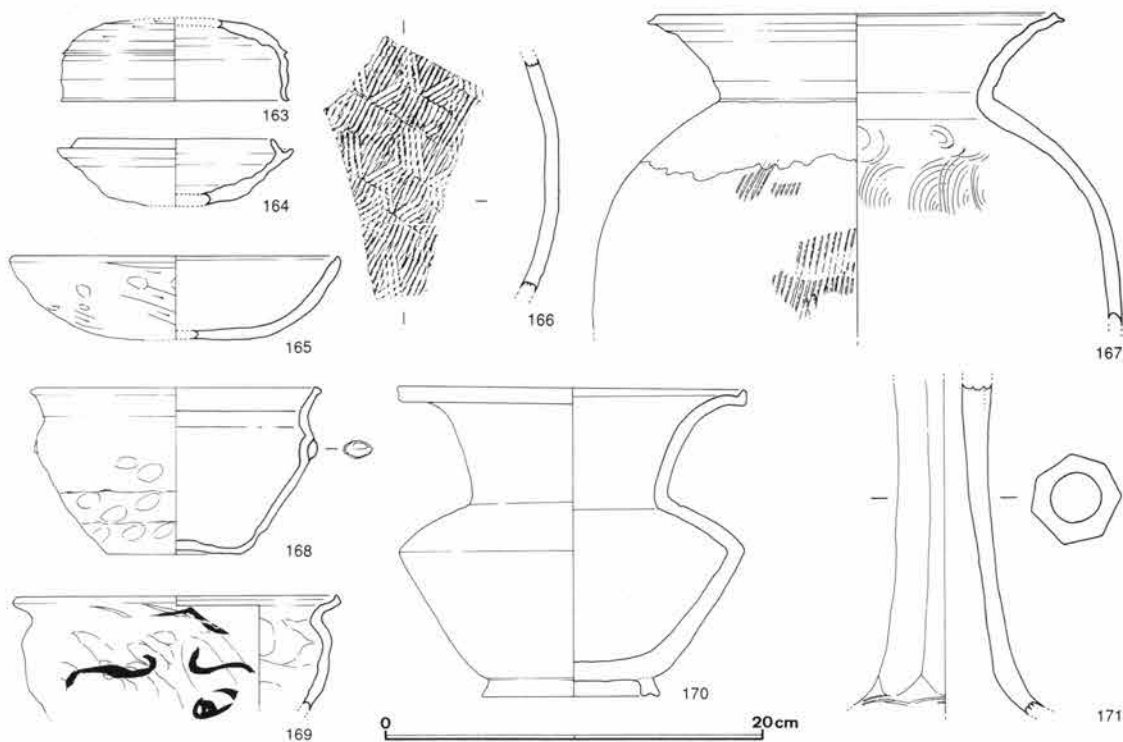
第78図 第4トレンチ杭列断ち割り断面図

地点で、不均一ではあるが平安時代から中世の遺物包含層を検出した。以下、これらの整地層及び包含層出土遺物について概観したい。

四条条間小路周辺整地層出土遺物(第75図、図版第57-(2)) 土師器・杯A105・106は、底部外面をヘラケズリにより成形する。杯B107は、体部外面をヘラミガキによって器面調整を施す。119の底部には、「客人」と判読できる墨書を記す。土師器・皿は、基本的にヘラケズリによって成形する。甕は、口縁端部が肥厚し、体部外面をハケメ、内面をおさえによって成形している。

須恵器・杯蓋は、平らな天井部の中央につまみの付く125と丸い天井部をもつ126がある。131は壺G、129は葉壺形の小壺に伴う蓋で、天井部には厚い濃緑色の釉がかかっている。鉢132は、体部中央部が欠損しており、上半部と下半部の接合点はないが、出土地点が隣接することと色調・胎土から復元的に実測を行った。甕133は、口縁端部に面をもっており、外面にはタタキ、内面には青海波文が残る。

第4トレンチ遺物包含層出土遺物(第76図) 135は、天井部と口縁部間に環状突帯がめぐる須恵器・蓋である。143は、底部外面に刺突を施す須恵器・鉢である。146は、直径6.2cm・厚さ1.6cmの土製紡錘車である。焼成は不良で、色調は一部淡黒褐色を呈している。147は、中房直径が2.4cmで、中央に直径0.8cmの蓮子を配している。不均一な八葉の単弁を配し、圏線間に16の珠文が想定できる。149は、体部が内湾し、口縁部がわずかに外反する灰釉陶器・碗である。151・156は、硬質に焼成された風字硯であるが、墨痕や朱痕は確認できない。161は、中国製青白磁・小壺である。体部外面には、型押しによる牡丹文を施す。162は、鶏文を中央に配した泥面子で、



第79図 出土遺物実測図(9)

163~167・170. S X36604 168・169・171. S X36675

直径3cmを測る。出土層位を明確に把握していないが、近世の特徴的な土製品として資料化した。

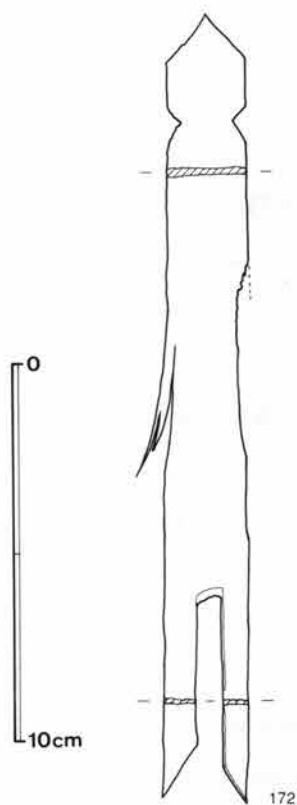
e. 奈良時代(第77図、図版第59)

中世～平安時代の遺構検出面である3層(第83図)では、杭の上端部は検出できなかったが、3層下に堆積する4層の暗灰褐色砂礫層上面で杭の上端部を検出した。なお、平面的に錯綜した杭群を分別し、打ち込まれた時期差を明確に把握することはむずかしく、また、杭群を打ち込んで構築したと考えられる堤状遺構自体は、長岡京期の整地作業または条坊施工時に削平されて、消失している。以上の理由から、打ち込まれた杭群の用途を厳格に規定することはできないが、4層自体が、氾濫性の堆積土であることと、律令祭祀に多用される人形が出土していることから、調査地の南方に流路または河道をもった旧小畑川の氾濫と密接な関連があることを視野に入れ、記述を行いたい。

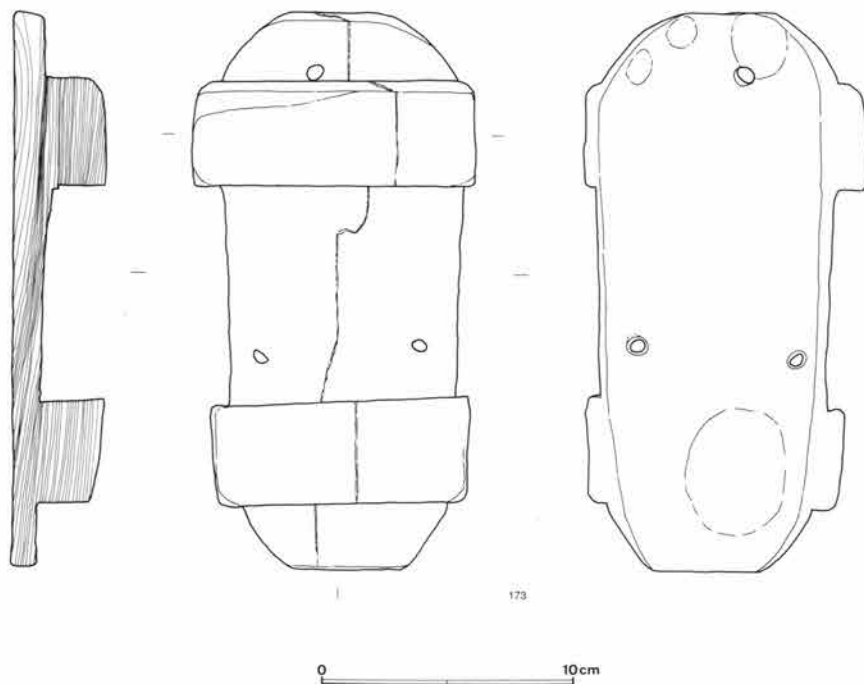
流路S X 36604(第77図、図版第61-(1)(3)・62-(1)(2)) 北から東へ57°の主軸をもち、トレンチの南西方向から北東方向に流れる流路跡である。特に、トレンチ南西部分では、丸太材を流路の主軸に平行するように配しており、堰状の施設と考えられる。

流路の幅は、一定しておらず、東南肩部には丸杭を主体とする杭を打ち込んでいる。また、北西肩部の南西端では杭列を確認したが、以北では杭列は確認できなかった。そのため、平面的に堆積土が変化する界線を流路の北西肩部として復原した。

一方、トレンチ北東端では、丸太材を多数打ち込ん



第80図 出土遺物実測図(10)  
S X 36604

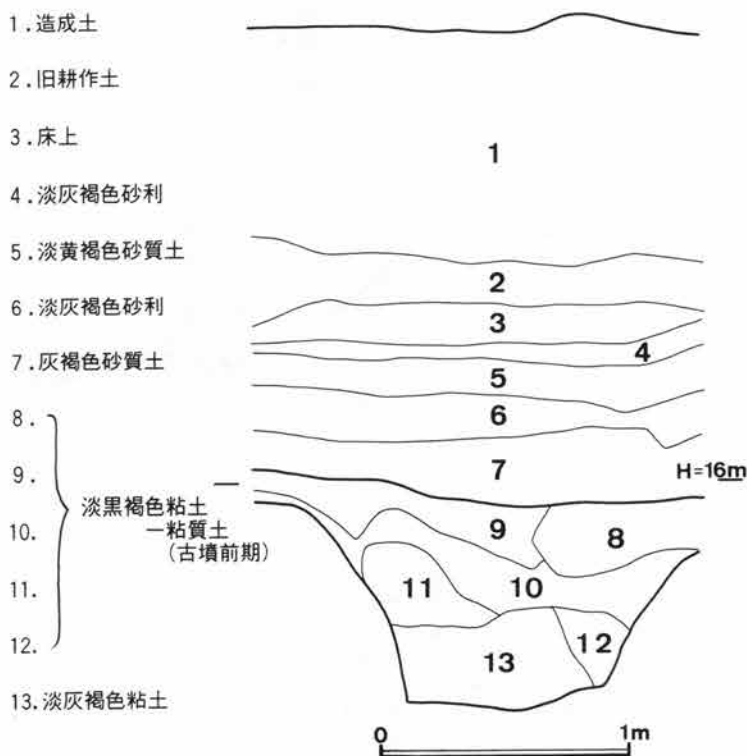


第81図 出土遺物実測図(11)  
S X 36675

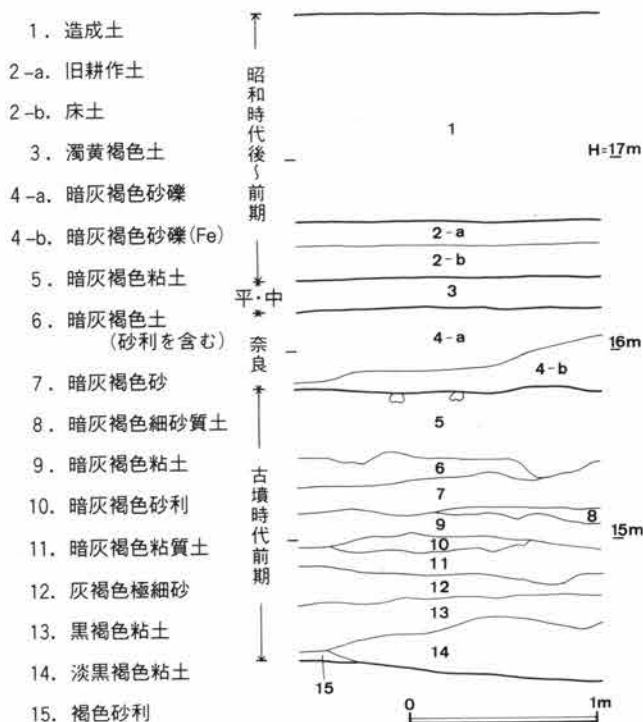
だ杭群を検出したが、Y=26,430m付近で東方向に屈折していることから、同一の流路として捉えることができる。なお、トレンチ北東端の杭群から須恵器・壺Q(第79図170)と人形(第80図172)が出土している。

この流路S X 36604と左京第353次調査で検出した池沼S X 35306とでは、堆積土に相違点も多く、また包含する遺物にも違いがあることから、隣接するものの同一の遺構として捉えることはできない。時期的には、旧流路S X 36604が埋没した後に落ち込みが形成され、それを主体として左京第353次調査で検出した池沼S X 35306が形成されたと考えられる。

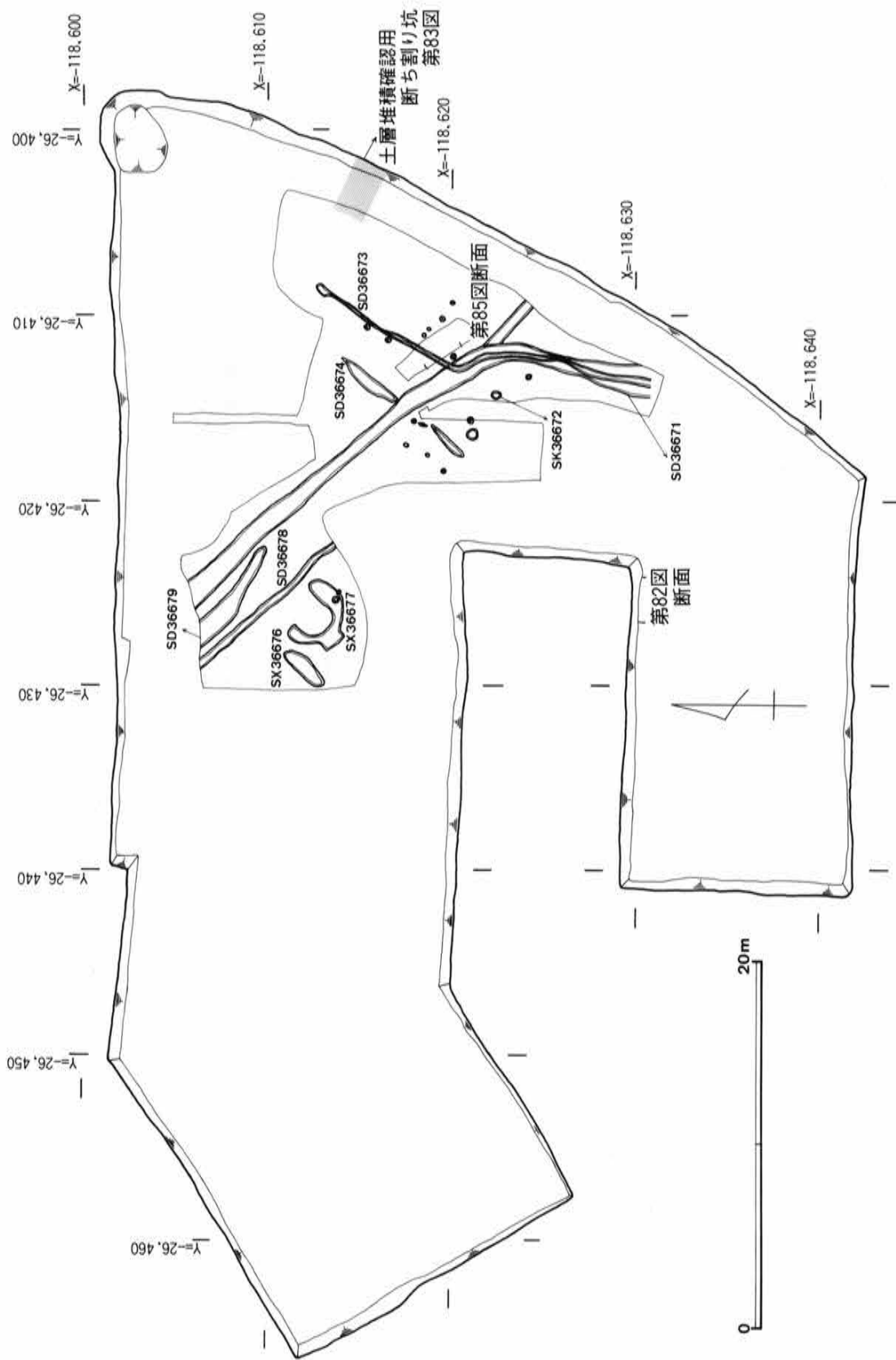
流路S X 36604出土遺物(第79図)須恵器・杯蓋163は、比較的丸い天井部の稜は明瞭で、口縁端部がやや外反する。陶邑編年のMT15前後に比定できる。杯身164は、短かく内傾する立ち上がりをもち、陶邑編年TK209前後に比定できる。166は、翼状のタタキをもつ甕の体部で、167は、焼成・胎土が良好な須恵器・甕である。170は、壺Qに分類できる須恵器で、口縁部の一部を欠くものの、基本的には完形品である。口縁部の欠損部の状況から故意に打ち欠いた可能性が高い。172は、全長21cm・幅2.2cmの木製人形



第82図 第4トレンチ北壁土層断面図(第84図参照)



第83図 第4トレンチ東壁土層断面図(第84図参照)



第84図 第4トレンチ古墳時代前期遺構配置図

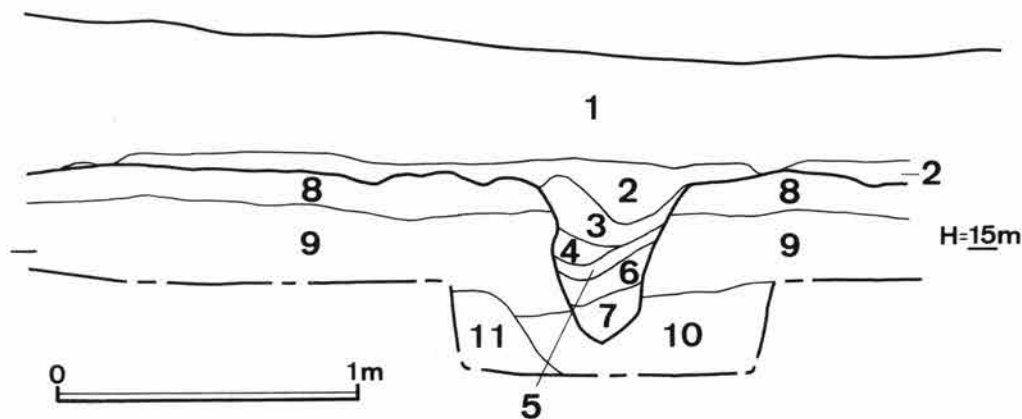
である。これらの遺物は、165も含めて上流からの流れ込みによると考えられる。

杭列S X36675(第77・78図、図版第60・61・62-(2)(3)) 先述した旧流路S X36604とは、 $Y=-26,440\sim-26,450\text{m}$ ・ $X=-118,610\sim-118,620\text{m}$ の範囲で交差している。打ち込まれた杭の新旧関係を把握することは困難であるが、調査地から東方300mの府立向陽高等学校建設に伴う発掘調査でも同様の杭群が検出されている。これらは、旧小畑川の河川改修が大規模に施工されたことを示しており、これを長岡京条坊施工の前段階の土木事業と考えれば、流路を不規則に固定しただけの旧流路S X36604より時期的には新しくなると想定できる。杭の総数は、約300本である。

杭列S X36675は、北から東へ $78^\circ$ の方向に直線的な杭列を構成している。杭は、最も大きい材で0.25m角を測り、平均的には0.15m角である。また、長さも1~1.5mを測り、検出した総数は約500本を数える。構造的には、直線的に打ち込んだ杭列から東南方向に $30\sim50^\circ$ の角度をもった枝状の杭列を打ち込んでおり、その長さは5mを測る。この枝状杭列は、やや湾曲した弧状を呈しており、南西方向からの流水に対しての護岸を目的にしていることが想定できる。なお、直線的に打ち込まれた杭列から $X=-118,605\text{m}$ ラインと、 $X=-118,610\text{m}$ ライン上を東方にのびる2列の杭列を検出しているが、後述する第5トレンチの北端で検出した2列の杭列に集約され、さらに東進し、300m東方の府立向陽高校建設時に検出された杭群に繋がってゆくと考えられる。以上のことから、枝状杭列は、 $Y=-26,400\sim-26,460\text{m}$ 間でのみ打ち込まれた可能性が高く、旧小畑川の氾濫が最も激しかったことを示唆している。また、枝状杭列は、下層の粘土層にまで達しているものもあるが、大半は、4層内で先端部分が止まっている(第78図)。

杭列S X36675出土遺物(第79図) 明確にこの遺構に伴うか否かは、4層が砂礫層であり、また、杭自体が少なくとも4層の上位層から打ち込まれているため判然としない。ここでは、主に、4層と一部3層下面から出土した遺物を概観しておきたい。

168は、胴部最大径部に2か所、形骸化した把手をもつ土師器の鉢である。内外面をおさえに



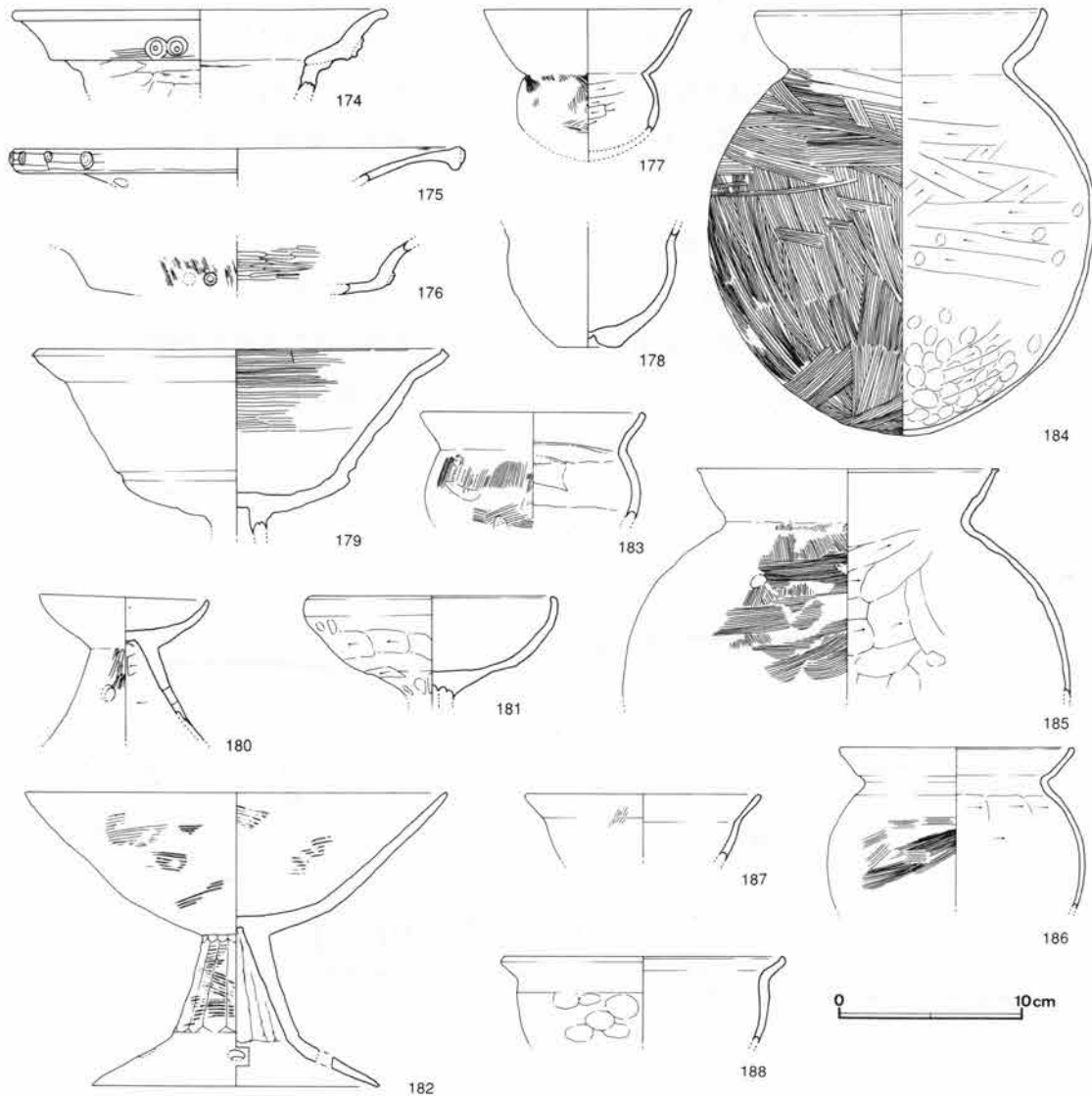
第85図 第4トレンチ溝S D36673断面図(第84図参照)

- |                                       |             |
|---------------------------------------|-------------|
| 1. 暗灰褐色粘土(布留式土器を含み、上面で奈良時代の偶蹄目の足跡を確認) | 2. 濁灰褐色粘質土  |
| 3. 濁灰褐色細砂                             | 4. 濁灰褐色粘質土  |
| 5. 濁灰褐色細砂                             | 6. 濁灰褐色細砂   |
| 7. 濁灰褐色細砂                             | 8. 黒褐色粘土    |
| 9. 淡黒褐色粘土                             | 10. 淡灰褐色粘質土 |
| 11. 明淡灰褐色粘質土                          |             |

よって成形しており、粘土の接合痕が明瞭に残存している。元来、墨書人面土器として多用される型式的特徴を有している。この土師器は、砂礫層内にはほぼ完形の状態で見出されており、律令祭祀に伴う遺物である。169は、土師器の鉢であるが、体部内外面をおさえにより成形しており、168と同じく、器表面は凸凹であり、眉・目を墨書によって描く墨書人面土器である。171は、高杯の脚部で7面の面取りを施している。

第81図173は、全長22.3cm・上面最大幅8.9cm・前下駄歯幅11.4cm・後下駄歯幅10.1cm・下駄歯高3.6cmの左足用の下駄である。前方の鼻緒孔は、中央から右に寄って穿たれており、指と踵部は、ややすり減っている。形態的な特徴としては、歯の先端部を幅広に成形しており、鼻緒孔が右側に寄っていることがあげられる。

以上が流路及び杭列の概観であるが、先述した長岡京期の遺構検出面では、杭の上端部を検出していないことと、須恵器の壺Qから、長岡京期に限りなく近い奈良時代に比定できよう。



第86図 出土遺物実測図(12)

184. S K 36672 174~183・185~188. 第9~13層

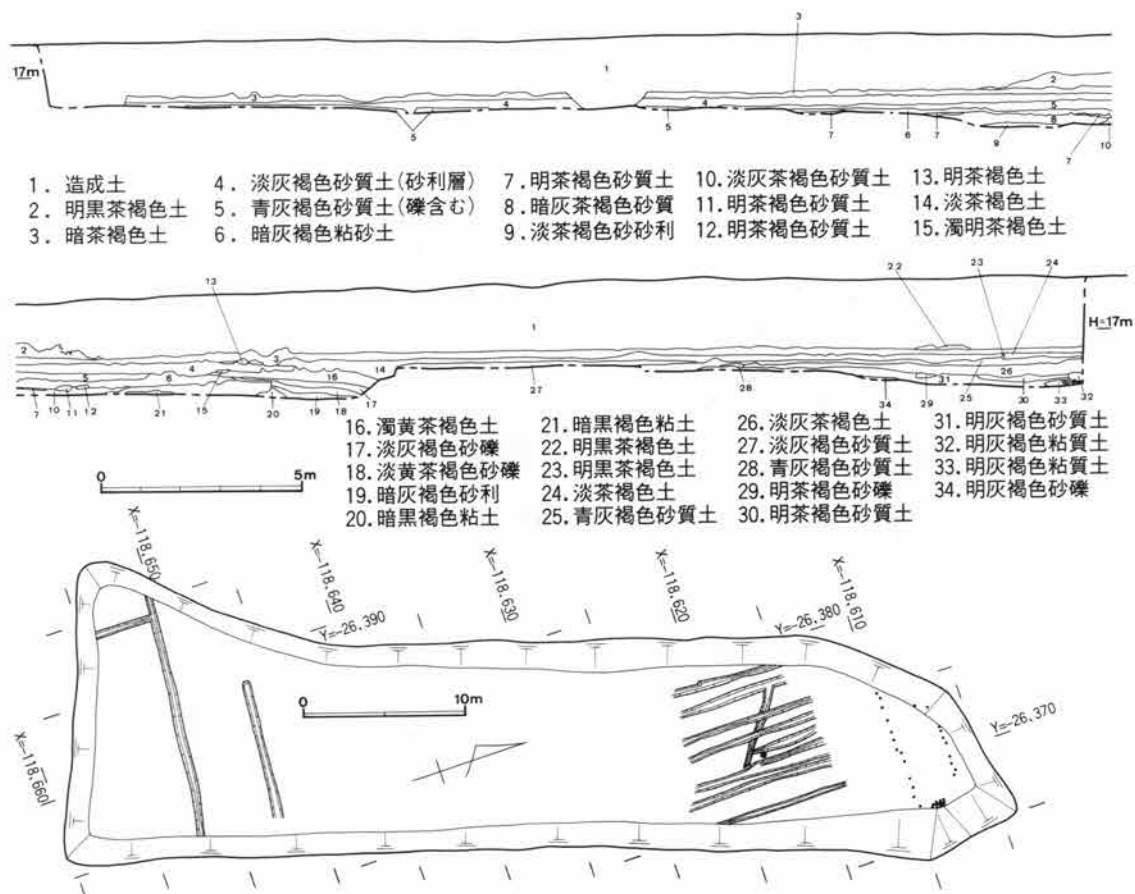
f. 古墳時代(第82～86図、図版第64～67)

基本的な堆積状況は、「a. 基本層序」に譲り、古墳時代の堆積土について概観しておく。

古墳時代の堆積土(第83図)は5～14層であるが、最上層には5層の暗灰褐色粘土と6層の暗灰褐色土が堆積しており、その下層には7層の暗灰褐色砂層が堆積している。6層に砂利を含んでいることから、6・7層は、流水によって堆積したことが推定される。また、9層の暗灰褐色粘土と13層の黒褐色粘土層間には、10・11・12層のように砂利及び砂を主体とする堆積土が確認できることから、氾濫による堆積層と考えられる。このように、古墳時代前期でも旧小畑川が氾濫を繰り返していたことが明らかになったが、礫の堆積は見られないことから、急激な氾濫ではなかったことが推測できる。

古式土師器をわずかに包含する堆積土は、9及び13層であるが、遺構は13層で検出した。

検出遺構は、溝・土坑・ピットであるが、溝の方向が一定せず、また、深度も異なることから、古墳時代前期にあっても時期が異なる可能性がある。溝S D36670(第77図)は、幅0.3mで深さは0.1mである。溝内からは遺物は出土していないが、後述する溝群の上層で検出していることから、一連の古墳時代前期の遺構群の中でも最も新しい時期に比定できる。溝S D36673は、溝S D36671と交差する地点で屈曲するが、X=-118,615m以北では途切れている。溝の幅は0.4mで、深さは0.4mを測る。溝の両壁は垂直に直立しており、溝の底部は水平に掘り込まれている。溝内の埋土は淡黄緑色砂層であり、氾濫によって埋没したことを示唆している。



第87図 第5トレンチ実測図



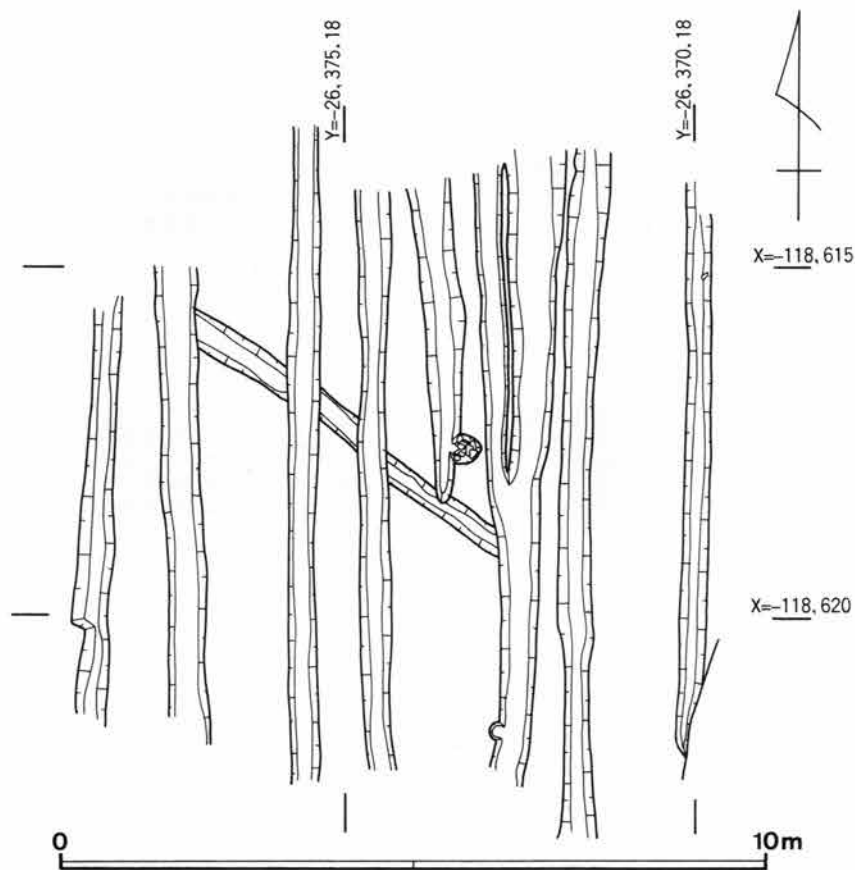
溝 S D 36671 は、南半が溝 S D 36673 と平行しているが、溝 S D 36673 が屈曲する部分で北西に主軸をもつ。溝の幅は 1.18m、深さは最深部で 0.4m を測り、淡黒褐色土を埋土の主体としている。土坑 S K 36672 は、直径 0.3m・深さ 0.25m の円形土坑で、土師器・甕(第 86 図 184) が埋納されている。土器は、横位を保っており、特に、蓋などは検出できなかった。甕内には土壌化した有機質が溜まっており、植物珪酸体分析の結果、イネを甕内に入れ、土坑内に埋納したと考えられる。その他、遺物は出土していないが、堆積土の色調の変化が見られる部分があった。それらの性格は不明であり、人為的に掘削されたかについても即断できない。

古墳時代前期の出土遺物(第 86 図) 明確な遺構から出土した土器は、甕 184 のみであり、その他の土器は、遺物包含層からの出土である。また、出土土器は、いわゆる布留式併行期の土器群であるが、一括資料ではないことから、時期幅を設定する必要がある。

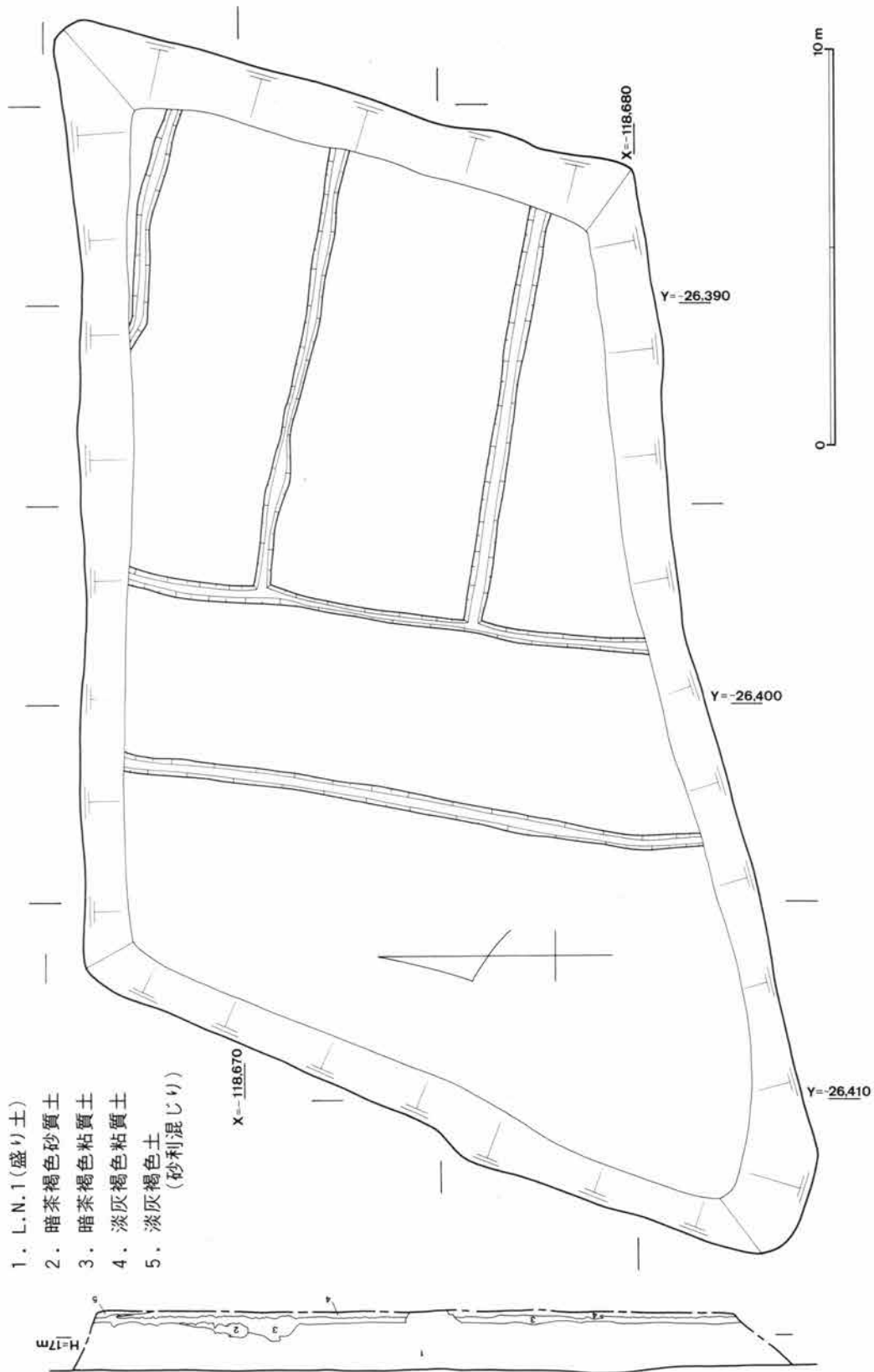
壺 174 は、擬口縁で屈曲しており、外反する口縁部をもつ。屈曲部外面には 2 連の円形浮文を付し、円形浮文下をミガキによって器面調整する。176 は、屈曲部のみの残存であるが、外面に円形浮文を付す。内面をヘラミガキにより器面調整を行っている。

小型丸底土器 177 は、球体を呈する体部と内湾する口縁部をもつ。体部外面をハケメ、内面をヘラケズリで成形する。

甕 184 は、体部は球体を呈し、口縁部は内湾し、わずかに肥厚する。体部外面の肩部はヨコハ



第 88 図 第 5 トレンチ中世素掘り溝実測図



第89図 第6トレンチ実測図

ケ、体部下半は縦方向のハケメによって器面調整を行う。一方、内面はヨコ方向のヘラケズリ、内面底部には指頭圧痕が良好に残存している。外面には煤が付着している。185は、球体を呈する体部とわずかに内湾する口縁部をもつ。体部外面は不整方向のハケメ、内面はヘラケズリによって調整を施す。186は、球体を呈する体部とわずかに屈曲し、内湾する口縁部をもつ。体部外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。

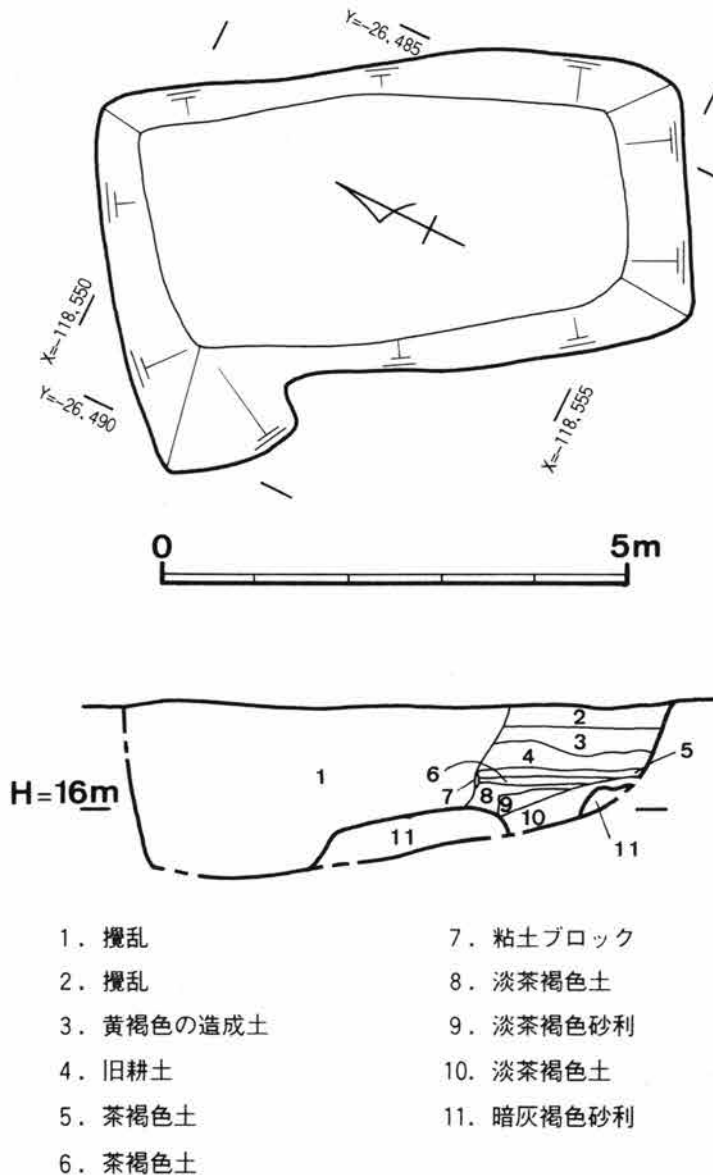
高杯175は、口縁部外面に凹線が入り、円形浮文を付す。179は、平らな杯底部から直線的に外反する杯部をもつ。口縁部はわずかに屈曲する。杯部内面は、横方向のハケメによって調整を行う。181は、内湾する杯部をもち、外面をヘラケズリにより器面調整を行う。182は、平らな杯底部から直線的に外反する口縁部をもつ。また、脚部は直線的に開き、屈曲部下方に4か所の円形透かし孔を穿つ。杯部内外面にはハケメ、脚部外面には、縦方向のヘラケズリの後ヨコハケ、内

面は絞り込み痕が観察できる。

器台180は、内湾する受け部と、外反し、3方に透かし孔をもつ脚部からなる。

鉢187は、頸部でわずかに屈曲し、外面にハケメが観察できる。188は、短く外反する口縁部をもち、体部外面をおさえにより成形する。

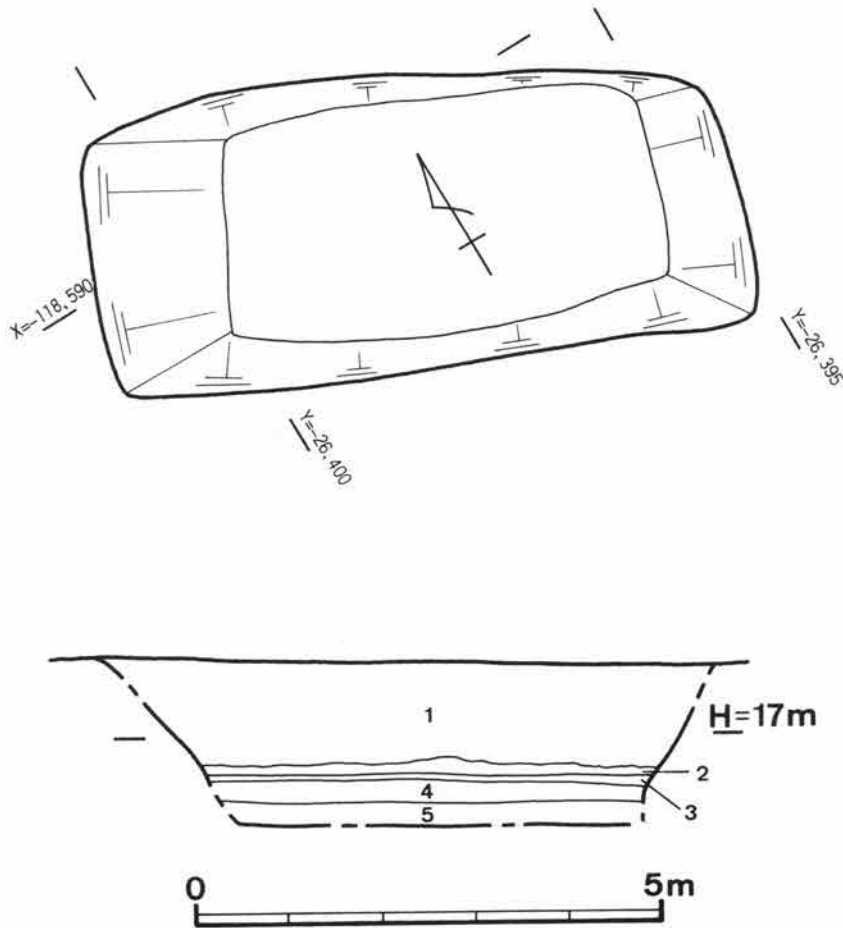
以上が、古墳時代前期の遺構・遺物の概要であるが、検出した溝や土坑から調査地及びその周辺地の土地利用を把握することはできないが、北方50mの地点で古墳時代前期の水田を検出していることから、何らかの耕作に伴う諸施設として捉えておきたい。なお、出土土器にも型式差がみられることから、これらの遺構が布留式併行期でも、同時期に掘り込まれた可能性は少なく、周辺の遺跡の存続時期を考慮する必要がある。



第90図 第7トレンチ実測図

(5)第5トレンチ(第87・88図、図版第68) 第4トレンチの東側に設定した南北に長いトレンチである。X=-118,610~-118,620で中世の耕作に伴う素掘り溝(第88図)を検出し、トレンチ北端では、4トレンチで検出した杭列S X 36675の延長である2列の杭列を検出した。また、トレンチ南端では、後述する第6トレンチとのつながりが想定できる近世の耕作に伴う素掘り溝を南北・東西方向に検出した。なお、基本的には4層の淡灰褐色砂質土と5層の青灰褐色砂質土が基盤層になってはいるが、各々、砂利と礫が混入しており、安定した遺構面を検出することはできなかった。

(6)第6トレンチ(第89図、図版第69) 第5トレンチの南側に設定した東西に長いトレンチである。基盤層には5層の砂利を含む淡灰褐色土が堆積しており、近世の耕作に伴う素掘り溝を検出した。しかし、基本的には安定した堆積層ではなく、他の遺構・遺物は検出できなかった。第



- 1. 造成土
- 2. 旧耕作土
- 3. 床土
- 4. 濁灰褐色土
- 5. 濁灰褐色粘質土

第91図 第8トレンチ実測図

6トレンチ及び南隣接地には、旧小畑川の河道が想定されており、5層以下に堆積する礫・砂利はこの河道による氾濫性の堆積土として捉えることができる。

(7)第7トレンチ(第90図) 第1トレンチ北側に設定した小規模なトレンチである。トレンチの大半は、攪乱を受けていたが、安定する遺構面を検出することはできない状況である。なお、礫や砂利の堆積物は、トレンチ西北を北流する和井川によってもたらされたと考えられる。

(8)第8トレンチ(第91図、図版第70) 第4トレンチの北東10m地点に設定した小規模なトレンチである。4層の濁灰褐色土下には礫層が堆積しており、安定した遺構面や遺物は検出できなかった。4トレンチ下層で検出した古墳時代前期の遺構面の検出も予想されたが、小規模トレンチのため、その面までは至らなかった。

#### 4. ま と め

今回の発掘調査は、建物跡自体とそれに付属する諸施設の設置地点を中心に、合計8か所のトレンチを設定して実施した。各トレンチの概要は以上に述べたとおりであるが、ここでは、中世から古墳時代に及ぶ遺構・遺物を検出した第4トレンチを中心に、調査成果などを記述しておきたい。なお、事実報告でも記述したように、中世・平安時代後期・長岡京期・奈良時代・古墳時代の遺構・遺物を検出したため、検出順に記述しておきたい。

**中世** 中世に関係する遺構は、耕作に伴う素掘り溝群である。基本的には南北方向に掘られているが、東西方向と南北方向の素掘り溝が錯綜する部分があり、何らかの土地区画を表している可能性がある。後述する平安時代後期の集落の廃絶後に耕作地化が認められる現象は、従来の中福知遺跡<sup>(註2)</sup>の調査でも確認されている。今後、その広がり把握できれば、小畑川の旧河道の付け替え時期を限定する根拠になる。

**平安時代前期・後期** 平安時代前期に比定できる遺構には、東一坊坊間東小路の西側溝を改修した溝S D35313がある。この溝は、北方に展開する平安時代の建物群の生活排水用に改修された可能性がある。X=-118,607.213mラインで西方に屈曲していることから池沼S X35306への排水を意図していることが推定できる。

一方、平安時代後期に比定できる遺構には、掘立柱建物跡及び井戸がある。掘立柱建物跡群は、数棟確認できるが、ピット内からまとまった状態での土器を検出していないことから、存続期間については不明な点が多い。しかし、井戸から出土した土器群から11世紀前半から12世紀前半にかけて集落が存在したことが推定できる。一方、検出した井戸は、曲物のみを井筒に使用する井戸S E36660が11世紀末期に比定でき、曲物の上位に拳大から人頭大の礫を円形に配する井戸S E36663が11世紀前半に比定できる。また、方形井戸S E36668は、瓦器の細片が出土するのみであり、正確に年代設定が行えない状況であるが、両者が示す年代幅で捉えておきたい。

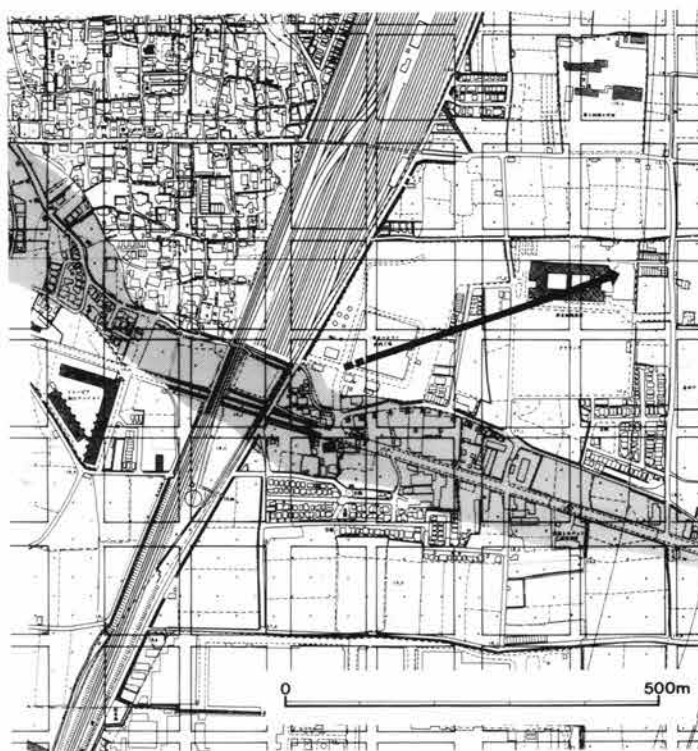
井戸S E36663の堆積土は、黒褐色粘土を主体としており、井戸が機能していた周辺の自然環境を把握するため、(株)古環境研究所に花粉分析の業務委託を実施した。詳細な分析データについては、「付載1」に譲り、ここでは、その分析結果の史的評価を行っておきたい。検出花粉中、

最も多く検出された花粉は、イネ科である。また、オモダカ属、カヤツリグサ科などの花粉も検出されており、周辺には水田が営まれていた可能性が指摘されている。一方、アカザ科—ヒユ科、ヨモギ属、アブラナ科の花粉も検出されていることから、畑地も営まれていた可能性が指摘されている。なお、同じ堆積土から鞭虫卵、毛頭虫類卵が検出されているが、寄生虫卵は低密度であることから、2次的に混入したと推測できる。井戸は、生活に不可欠な水を摂取する施設であり、機能停止時に糞便を保管する施設として転用されることはなかったことが、寄生虫卵分析で判明した。この分析結果は、井戸が「神聖」な施設として認識されていたことを傍証するデータとして重要である(「付載1」)。

以上の点から、同時代に存続した集落は、水田・畑地の隣接地に営まれた小規模な農村である可能性が指摘できる。

長岡京期 東一坊坊間東小路のほぼ中央で検出した溝 S D 36606 は、中心座標が Y=-26,448.689 m を測る。左京第353次調査では、断面でかろうじて確認できた溝であり、第4トレンチでは、平面的に確認することができた。ほぼ直線的に検出しており、検出位置が東一坊坊間東小路の西側溝 S D 35313 に隣接していることから、条坊側溝の可能性も視野に入れる必要がある。東一坊坊間東小路の西側溝は、北方隣接地の左京第353次・252次・226次調査でも検出されているが、構内から明確に時期設定できる土器が出土していない状況である。また、左京第353次・252次・226次で平安時代の遺構・遺物を検出していることから、東一坊坊間東小路の西側溝と捉えられてきた溝は、平安時代に掘り込まれた可能性も指摘できる。が、東一坊坊間東小路の東側溝との距離が5.3mとなり、条坊の小路としては狭小である。今後、南方での検出が重要な根拠となる。

一方、流路状遺構 S X 36669 は、下層で検出した奈良時代の杭列 S X 36675 と同一の主軸をもっている。出土遺物は、一括投棄された状態であり、完全に平坦面にはならなかった落ち込みに土砂とともに土器類を投棄した可能性が高い。なお、検出遺物中、第73図100に図示した葉研状の弁をもつ軒丸瓦は、北白川廃寺などの寺院系瓦であることが指摘されている。今回の調査地で検出した意義は、今後の課題としておくが、数例の破片が出土していることは、この瓦の分布を考える上で示唆的である。



第92図 旧小畑川河道と杭列位置関係図(矢印が杭列)

最後に、四条条間小路周辺には土器が混入する堆積土を確認したが、条坊施工を目的にした整地層である可能性が高い。また、整地層下では、長岡京期の遺構は検出していない。

**奈良時代** 奈良時代に比定できる遺構は、自然流路S X36604と護岸施設S X36675があり、総計800本の杭を数える。流路S X36604は、南西方向から北東方向に流れており、四条条間小路付近で東方向に屈曲している。先に述べたように四条条間小路下層では長岡京期の整地層を確認しているが、条坊施行が可能なように流路S X36604によって形成された軟弱地盤を整地した可能性がある。すべての杭を樹種同定していないが、横位に置かれた丸太材サンプル1は、マツ属複雑管束亜属であり、流路兩岸の杭のサンプル3・5はモミ属である。

一方、直線的に打ち込まれた杭列は、旧小畑川の氾濫を規制する目的で構築された護岸施設と考えられる。第4トレンチでは複雑に打ち込まれているが、東方に隣接する第5トレンチでは2列に集約される。さらに、東方300mに位置する府立向陽高等学校のトレンチでも同様な遺構を検出しており、奈良時代に大規模な土木事業が行われたことを証明するものである。この施設にも旧小畑川の氾濫を規制する目的が想定できる。

府立向陽高等学校の調査報告では、検出した杭群をヒノキ材としているが、写真図版をみる限り、同一樹種と認定できる。樹種同定の結果、サンプル4・6はツガ属であることが判明しており、府立向陽高等学校で検出された杭群もツガ属であろう。当該時期においてヒノキ材は建築部材として重宝され、また、度々転用が繰り返されたが、杭としてヒノキ材が転用されることは、あまりなかったことが樹種同定から推測できた(「付載2」)。なお、流路の基盤層上で偶蹄目の足跡を検出しており、農耕などに流路が利用されていたことがうかがわれる。

**古墳時代** 古墳時代に関係する遺構は、溝・土坑などであるが、それぞれは密集しておらず、それらの位置関係から、全体の性格を類推することはできない。しかし、完形品の布留式甕の中に植物を入れ、横位で土坑を埋納している状況は、単なる地下収納ではなく、何らかの農耕祭祀を想起させる。甕内に遺存した植物遺体は、植物珪酸体分析(「付載3」)により、イネと食用のキビ族であることが把握されている。何らかの農耕祭祀に関連するか否かの類例を集成する必要がある。

検出した溝は、氾濫によって急激に埋没した溝S D36673や淡黒褐色土を埋土とする溝S D36671などがあり、調査地を取り巻く環境に著しい違いが想定される。また、溝S D36673の断面は、ほぼ長方形を呈していることから、人為的に引水・送水する目的によって掘り込まれたことが想定できる。これらの遺構検出面で採集した堆積土の花粉分析では樹木花粉の比率が高く、「周辺は森林が比較的多く分布し、集落域や農耕地などの人為改変地が広く分布する状態ではないことが推測されている(「付載4」)。

考古学的な調査結果と花粉分析結果からの推測は、必ずしも一致せず、さらに検討が必要であるが、人為的な改変が行われたことは、溝・土坑の検出でも明らかであり、両者の見解のすり合わせが必要である。現状では、水田耕作以外の畑作が有力な候補としてあげられる。今後、古墳時代前期の調査地一帯の遺跡の動態と分析結果によって、問題点が集約されると考えておきたい。

## 5. おわりに

府営上植野団地の対象地は20,000m<sup>2</sup>にも及び、左京第353次調査と今年度の調査地は、その一部にすぎない。しかし、多くの調査成果が得られたことは、周辺の歴史的環境を考える上で重要である。調査期間中を通して、調査に従事していただいた多くの方々にお礼を申し上げるとともに、京都府土木建築部住宅課の職員の方々にいろいろご高配を賜った。また、(財)向日市埋蔵文化財センターをはじめ、関係諸機関の方々から有益な御教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

(小池 寛)

注1 小池 寛「長岡京跡左京第353次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

注2 『長岡京市史』資料編1 長岡京市役所 1991

注3 中川和哉「長岡京跡左京第252次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第43冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注4 三好博喜「長岡京跡左京第226次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第39冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

注5 (財)京都市埋蔵文化財研究所主任研究員 吉村正親氏より御教示いただいた。お礼申し上げます。

注6 高橋美久二「長岡京跡左京三条二坊第1次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1975)』京都市教育委員会) 1975、調査を担当された高橋美久二氏からは、検出状況と杭の遺存状況について御教示いただいた。記して感謝の意を表したい。



付表3 土器観察表

押図番号	器種	器形	口径	残存率
第62図-2	須恵器	杯身	—	受10
3	須恵器	杯	13.2	口5
第70図-4	土師器	皿	9.8	30
5	土師器	皿	4.8	20
6	土師器	皿	10.1	20
7	黑色土器	皿	10.0	15
8	瓦器	椀	15.9	5
9	瓦器	椀	15.6	10
10	黑色土器	椀	14.8	5
11	瓦器	椀	16.3	5
12	瓦器	椀	14.9	10
13	土師器	台付皿	脚6.2	20
14	須恵器	甕	—	底30
15	土師器	皿	8.9	10
16	土師器	皿	10.2	10
17	土師器	皿	10.7	20
18	土師器	皿	10.3	10
19	土師器	皿	13.1	10
20	土師器	皿	12.5	30
21	中国製白磁	椀	11.6	5
22	土師器	甕	11.0	5
23	須恵器	椀	—	底100
第71図-24	須恵器	鉢	9.7	40
25	土師器	椀	11.9	25
26	無釉陶器	椀	—	高台20
27	土師器	皿	11.5	13
28	土師器	杯	16.6	10
29	土師器	皿	9.0	20
30	土師器	皿	10.0	25
31	土師器	皿	9.5	75
32	黑色土器	椀	16.7	口6
33	瓦器	椀	16.8	口10
34	土師器	皿	9.3	20
35	土師器	皿	10.6	20
36	土師器	皿	11.1	25
37	土師器	皿	12.2	10
38	土師器	椀	11.4	100
39	土師器	椀	9.6	25
第72図-40	土師器	椀	11.0	20
41	土師器	椀	11.8	25
42	土師器	椀	12.6	20
43	土師器	皿	15.3	90
44	土師器	杯蓋	19.7	40
45	土師器	杯蓋	21.1	25
46	土師器	杯蓋	22.8	30
47	土師器	皿	14.7	10
48	瓦器	椀	14.6	10
49	土師器	杯	17.15	65
50	土師器	杯	16.7	10
51	土師器	杯	17.5	10
52	土師器	杯	20.3	9
53	土師器	杯	17.1	25
54	土師器	杯	18.2	20
55	土師器	杯	17.9	30
56	土師器	皿	16.5	30
57	須恵器	皿	17.6	20
58	土師器	皿	16.6	10
59	土師器	—	—	—
60	土師器	—	—	—
61	土師器	—	—	—
62	土師器	—	—	—
63	土師器	—	—	—
64	土師器	皿	20.7	25
65	土師器	皿	21.5	17
66	土師器	皿	20.0	50
67	土師器	杯	25.9	40
68	土師器	壺	7.9	口16
69	土師器	壺	6.9	口13
70	土師器	壺	8.8	口17
71	土師器	高杯	脚13.2	脚22
72	土師器	鍋?	—	—
73	黑色土器	椀	14.2	口25
74	土師器	甕	11.8	口16
75	土師器	甕	16.0	口10
76	土師器	甕	24.6	口20
77	土師器	甕	18.8	口20
78	土師器	甕	16.5	口15
第73図-80	土師器	鉢	12.7	口10
81	土師器	甕	16.5	口20
82	土師器	甕	19.5	口僅か
83	土師器	鍋	20.6	口10
84	須恵器	杯蓋	11.7	100
85	須恵器	杯蓋	13.8	55
86	須恵器	杯蓋	15.5	13
87	須恵器	杯蓋	14.2	50
88	須恵器	杯	12.2	20
89	須恵器	杯B	12.0	35
90	須恵器	杯	12.0	35
91	須恵器	壺蓋	12.9	40
92	須恵器	壺蓋	14.6	75
93	須恵器	甕	—	—
94	須恵器	円面硯	—	—
95	須恵器	甕	—	底30
96	須恵器	甕	—	底40
97	緑釉陶器	火舎	16.4	10
第74図-101	須恵器	杯蓋	—	20
102	須恵器	壺蓋	—	35

103	土師器	—	—	—	144	土師器	皿	15.3	16
104	土師器	椀	16.2	15	145	須恵器	杯	15.2	20
第75図-105	土師器	杯	17.4	25	148	土師器	皿	9.4	13
106	土師器	杯	18.6	15	149	灰釉陶器	椀	14.6	55
107	土師器	杯	23.9	30	150	須恵器	壺蓋	15.8	20
108	土師器	椀	9.6	40	151	須恵器	風字硯	—	—
109	土師器	皿	9.8	25	152	土師器	椀	14.9	20
110	土師器	杯	14.9	40	153	緑釉陶器	—	—	底40
111	土師器	杯	15.5	25	154	須恵器	皿	17.45	5
112	土師器	杯	14.7	20	155	須恵器	杯蓋	19.3	□28
113	土師器	皿	16.4	15	156	須恵器	風字硯	—	—
114	土師器	皿	19.3	20	157	土師器	皿	10.0	85
115	土師器	皿	20.6	35	158	土師器	皿	10.1	60
116	土師器	皿	15.3	40	159	土師器	—	—	—
117	土師器	皿	20.6	60	160	灰釉陶器	葉壺蓋	2.8	100
118	土師器	皿	20.8	25	161	中国製青白磁	小壺	4.7	□26
119	土師器	皿	—	底60	第79図-163	須恵器	杯蓋	12.1	20
120	土師器	壺	8.0	10	164	須恵器	杯身	10.3	40
121	土師器	鉢	11.0	10	165	土師器	杯	17.1	50
122	土師器	甕	17.4	□40	166	須恵器	—	—	—
123	土師器	甕	25.7	□20	167	須恵器	甕	21.0	□10
124	土師器	甕	20.0	□15	168	土師器	鉢	14.6	□5
125	須恵器	杯蓋	13.5	100	169	土師器	鉢	16.8	10
126	須恵器	杯蓋	14.1	25	170	須恵器	壺	18.2	95
127	須恵器	杯	14.9	45	171	土師器	高杯	—	—
128	須恵器	杯	11.0	45	第86図-174	古式土師器	壺	19.8	5
129	灰釉陶器	葉壺蓋	2.7	50	175	古式土師器	壺	24.0	□15
130	須恵器	杯蓋	12.95	10	176	古式土師器	高杯	—	—
131	須恵器	壺	6.4	100	177	古式土師器	小丸壺	11.2	55
132	須恵器	鉢	—	高台40	178	古式土師器	小型甕	—	33
133	須恵器	甕	20.7	□50	179	古式土師器	高杯	21.3	□20
第76図-134	土師器	杯蓋	19.9	35	180	古式土師器	高杯	8.9	□60
135	須恵器	突帯蓋	23.9	20	181	古式土師器	高杯	13.1	□60
136	中国製青磁	椀	—	—	182	古式土師器	高杯	22.7	45
137	須恵器	杯	12.4	20	183	古式土師器	甕	11.8	25
138	須恵器	皿	13.4	25	184	古式土師器	甕	15.5	95
139	中国製白磁	椀	—	高台34	185	古式土師器	甕	15.5	15
140	緑釉陶器	—	—	高台20	186	古式土師器	甕	12.4	□20
141	須恵器	椀	—	高台90	187	古式土師器	小型鉢	12.6	□20
142	土師器	鍋	21.9	□17	188	古式土師器	甕	15.0	□15
143	須恵器	鉢	—	底45					

※各遺物に付した番号は、挿図・図版ともに共通している。

※口径の単位はセンチメートルであり、「脚」は「脚端部形」を表している。

※残存率は、各個体全体の百分率であるが、「口」は「口縁端部」、「底」は「底部」、「高台」は「高台部」、「脚」は「脚部」、「受」は「受け部」の残存率を示している。

## 付 載 1

# 平安時代後期井戸 S E 36663 寄生虫卵・花粉分析・種実同定

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに(図版第75~77)

トイレ遺構等の糞便堆積物は、寄生虫卵密度、花粉組成、種実組成に特異性が認められる。これらの分析を総合的に行うことによって、糞便の堆積物がわかり、トイレ遺構を示唆することが可能となる。また、寄生虫の特異な生活史や食用とされた花粉や種実によって、食物や食生活の検討を行うことが可能である。

上植野団地遺跡においては、遺構内堆積物の分析を行い、トイレ遺構の検討を行った。

### 2. 試料

試料は、S E 36663 最下層の堆積物 1 点である。

### 3. 寄生虫卵分析

#### (1) 方法

寄生虫卵の分離、抽出は金原(1992、1994)を踏襲し、試料に以下の処理を施して行った。

- 1) サンプルを採量する。
- 2) 脱イオン水を加え攪拌する。
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
- 4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置。(2・3度混和)
- 5) 水洗後サンプルを2分する。
- 6) 片方にアセトリシス処理を施す。
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
- 8) 検鏡・計数を行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

#### (2) 結果

分析の結果、堆積物 1 cc 中から鞭虫卵48、毛頭虫類卵 1 が検出された。毛頭虫類は鳥類に起源する寄生虫である。

#### 4. 花粉分析

##### (1) 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 試料を採量し5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974,1977)を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

##### (2) 結果

##### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉20、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉18、シダ植物胞子2形態の計42である。これらの学名と和名および粒数を表2に示す。主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

##### [樹木花粉]

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤマモモ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレーケヤキ、エノキ属-ムクノキ、トチノキ、ブドウ属、ツツジ属

##### [樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科-イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サ  
ナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科ーヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ノブドウ、セ  
リ科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

## 2)花粉群集の特徴

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科の出現率が高  
く、オモダカ属、カヤツリグサ科、アカザ科ーヒユ科、セリ科、ヨモギ属などが伴われる。アブ  
ラナ科やソバ属も出現している。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜  
属、クリーシイ亜属が低率ながら出現する。

## 5. 種実同定

### (1)方法

試料(堆積物)100ccを0.25mmの篩を用いて水洗選別を行い、残渣を双眼実体顕微鏡で観察した。  
必要に応じて落射顕微鏡観察も行った。同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果  
は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

### (2)結果

#### 1)同定された分類群

草本15が同定された。学名、和名および粒数を表3に示し、主要な分類群を写真に示す。

以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔草本〕

a. コムギ *Triticum aestivum* L. 果実(炭化) イネ科

黒色で楕円形を呈す。前面には縦方向に1本の溝が走り、後面の胚の部分は大きくくぼむ。長  
さ3.9mm、幅3.1mm、厚さ2.8mm。

b. イネ科 *Gramineae* 穎

黄褐色で長楕円形を呈す。長さ3.2mm、幅0.7mm。

c. ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の  
微細な隆起がある。長さ1.9mm、幅1.7mm。

d. カヤツリグサ属 *Cyperus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で狭倒卵形を呈す。表面はやや粗い。断面は三角形である。長さ1.1~1.3mm、幅0.4mm。

e. カヤツリグサ科 A・B *Cyperaceae* A・B 果実

Aは茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。長さ1.3~1.4mm、幅1.0~1.1mm。Bは黄褐色で広倒卵形を呈す。断面は三角形である。長さ0.6mm、幅0.5mm。

f. コナギ *Monochoria vaginalis* Presl var. *plantaginea* Solms-Laub. 種子 ミズアオイ科  
淡褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に8~10本程度の隆起があり、その間には横方向に微細な隆線がある。種皮は薄く透き通る。長さ0.8~0.9mm、0.4~0.5mm。

g. ギンギシ属 *Rumex* 果実 タデ科

黒褐色で先端がとがる卵形を呈し、断面は三角形である。長さ2.2~2.6mm、幅1.3~1.6mm。

h. ヒユ属 *Amaranthus* 種子 ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込みヘソがある。断面は両凸レンズ形である。径1.1mm。

i. ナデシコ科 A・B・C *Caryophyllaceae* A・B・C 種子

Aは黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。径0.6~0.7mm。BはAよりも小さく、径0.4~0.5mmである。CはAよりも大きく、径1.2~1.3mmである。

j. アブラナ科 *Cruciferae* 種子

茶褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面には長方形の網目がある。長さ0.8~0.9mm、幅0.4mm。

k. チドメグサ属 *Hydrocotyle* 果実 セリ科

淡褐色で半円形を呈す。断面は楕円形である。両面に明瞭な一本の円弧状の隆起が走る。長さ0.9~1.1mm、幅0.6~0.8mm。

l. タカサブロウ *Eclipta prostrata* L. 果実 キク科

黄褐色で長倒卵形を呈し、一端は切形である。中央部はいぼ状の突起がある。長さ2.5~2.7mm、幅1.2~1.3mm。

### (3) 結果

草本種実のみが検出され樹木種実は含まれていない。ナデシコ科が最も多く、コナギ、カヤツリグサ属もやや多い。他にホタルイ属、ヒユ属、アブラナ科、チドメグサ属、コムギなどが検出された。

## 6. トイレ遺構の可能性と食生活

寄生虫卵密度が試料1cc中48個と低いため、集落域などにおける汚染の範囲内といえる。鞭虫卵のみであり、水流等で分別されて再堆積されたとみなされる。花粉群集は風媒花植物がほとんどであり、周囲の植生を反映しているとみなされる。種実遺体群集はナデシコ科、ヒユ属、アブラナ科、チドメグサ属の畑作雑草の性格をもつ人里植物とコナギ、カヤツリグサ属、ホタルイ属の水田雑草の性格をもつ水湿地植物で占められる。以上のことから、植物遺体群集は周囲に生育していた植生を反映しているとみなされ、S E 36663最下層の堆積物が糞便の累積した堆積物と

はみなされない。よって、S E 36663が直接的にトイレとして使用された可能性は極めて低い。

食用となる植物では、イネ(イネ属型花粉)、コムギ(コムギ炭化果実)、ソバ(ソバ属花粉)が検出されているが、次項で述べる農耕要素と考えられる。

## 7. 周囲の植生と農耕

花粉分析では、イネ属型を含むイネ科の出現率が高くオモダカ属、カヤツリグサ科が伴われ、種実同定でもカヤツリグサ属、ホタルイ属が検出されている。これらは水田を直接的に示唆するか水田雑草の性格をもつ水湿地植物であり、このことからみて、S E 36663の周囲に水田が広く営まれていたと推定される。種実同定ではナデシコ科が多くヒユ属、アブラナ科、チドメグサ属が検出され、花粉分析ではアカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、アブラナ科が出現する。いずれも畑作雑草の性格をもつ人里植物であり、ソバ属花粉とコムギ(炭化果実)の畑作物が検出され、S E 36663の周辺で水田に加え畑地が分布するかあるいは集落域であったとみなされる。

以上のように、上植野団地遺跡(長岡京跡左京四条一坊) S E 36663周辺では水田、畑、集落域の人口改変地が広く分布していたと推定される。樹木は二次林要素であるニヨウマツ類(マツ属複維管束亜属)とスギを主にカシ類(コナラ属アカガシ亜属)が近隣で孤立木のような疎な状態かやや遠方で森林として分布していたと推定される。

なお、寄生虫卵は低密度であり、分解に強い鞭虫卵のみであることから、周辺の農耕地で人糞施肥が行われていたことに起因する可能性がある。

## 参考文献

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard(1992)Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

金原正明・金原正子(1992)花粉分析および寄生虫。藤原京跡の便所遺構-藤原京7条1坊一, 奈良国立文化財研究所, p.14-15.

金子清俊・谷口博一(1987)線形動物・扁形動物。医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p.9-55.

金原正明(1994)便所堆積物からさぐる古代人の食生活。助成研究の報告4, 味の素食の文化センター, p.35-48.

中村純(1973)花粉分析。古今書院, p.82-110.

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料 研究の方法, 角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村純(1980)日本産花粉の標徴。大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究, 13, p.187-193.

中村純(1977)稲作とイネ花粉。考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

松谷暁子(1992)和爾・森本遺跡(4次)出土炭化麦粒および炭化茎状塊について。橿原考古学研究所紀要考古学論叢第16冊, 奈良県立橿原考古学研究所, p.19-24.

中村純ほか(1981)農耕史の花粉分析学的研究。古文化財に関する保存科学と人文・自然科学 昭和55年度次報告書, 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班編, p.147-154.

表1 上植野団地における寄生虫卵分析結果

分類群			(1cc中)
学名	和名	SE36663	
Helminth eggs	寄生虫卵		
Trichuris	鞭虫	48	
Capillaria	毛頭虫類	1	

表3 上植野遺跡(長岡京跡左京四条一坊)における種実同定結果

分類群			(100cc中)
学名	和名	部位	
herb	草本		
Triticum aestivum L.	コムギ	果実(炭化)	
Gramineae	イネ科	穎	
Scirpus	ホタルイ属	果実	
Cyperus	カヤツリグサ属	果実	
Cyperaceae A	カヤツリグサ科A	果実	
Cyperaceae B	カヤツリグサ科B	果実	
Monochoria vaginalis Presl var. plantaginea Solms Laub.	コナギ	種子	
Rumex	ギシギシ属	果実	
Amaranthus	ヒユ属	種子	
Caryophyllaceae A	ナデシコ科A	種子	
Caryophyllaceae B	ナデシコ科B	種子	
Caryophyllaceae C	ナデシコ科C	種子	
Cruciferae	アブラナ科	種子	
Hydrocotyle	チドメグサ属	果実	
Eclipta prostrata L.	タカサブロウ	果実	
Total	合計		



表2 上植野団地における花粉分析結果

分類群	和名	(0.1cc中) SE36663
学名		
Arboreal pollen	樹木花粉	
Abies	モミ属	8
Tsuga	ツガ属	3
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	37
Cryptomeria japonica	スギ	30
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ	1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	5
Myrica	ヤマモモ属	1
Alnus	ハンノキ属	1
Betula	カバノキ属	1
Corylus	ハシバミ属	1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	2
Castanea crenata-Castanopsis	クリ-シイ属	16
Fagus	ブナ属	2
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	5
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	29
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	2
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	2
Aesculus turbinata	トチノキ	1
Vitis	ブドウ属	1
Ericaceae	ツツジ科	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	8
Leguminosae	マメ科	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	
Alisma	サジオモダカ属	2
Sagittaria	オモダカ属	66
Gramineae	イネ科	312
Oryza type	イネ属型	24
Cyperaceae	カヤツリグサ科	46
Monochoria	ミズアオイ属	2
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	2
Rumex	ギシギシ属	1
Fagopyrum	ソバ属	5
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	22
Caryophyllaceae	ナデシコ科	8
Cruciferae	アブラナ科	15
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ	1
Umbelliferae	セリ科	37
Plantago	オオバコ属	10
Lactucoideae	タンポポ亜科	13
Asteroideae	キク亜科	2
Artemisia	ヨモギ属	46
Fern spore	シダ植物孢子	
Monolate type spore	単条溝孢子	7
Trilate type spore	三条溝孢子	13
Arboreal pollen	樹木花粉	149
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	9
Nonarboreal pollen	草本花粉	614
Total pollen	花粉総数	772
Unknown pollen	未同定花粉	3
Fern spore	シダ植物孢子	20

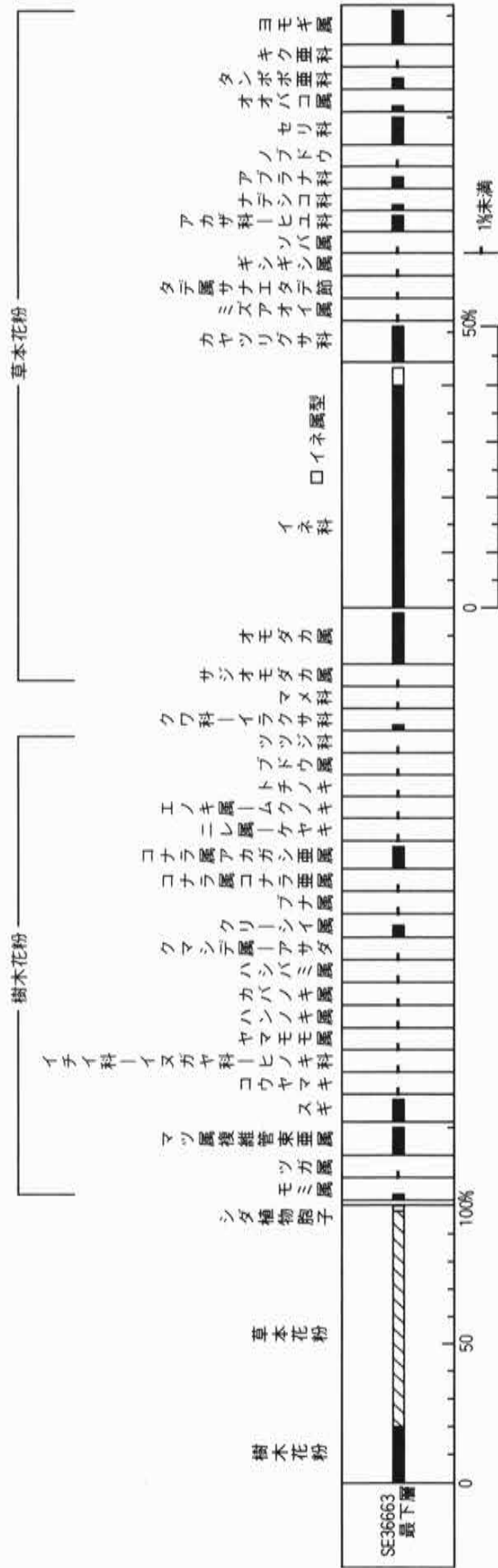


図1 長岡京跡左京第366次調査における花粉組成図(花粉総数が基数)

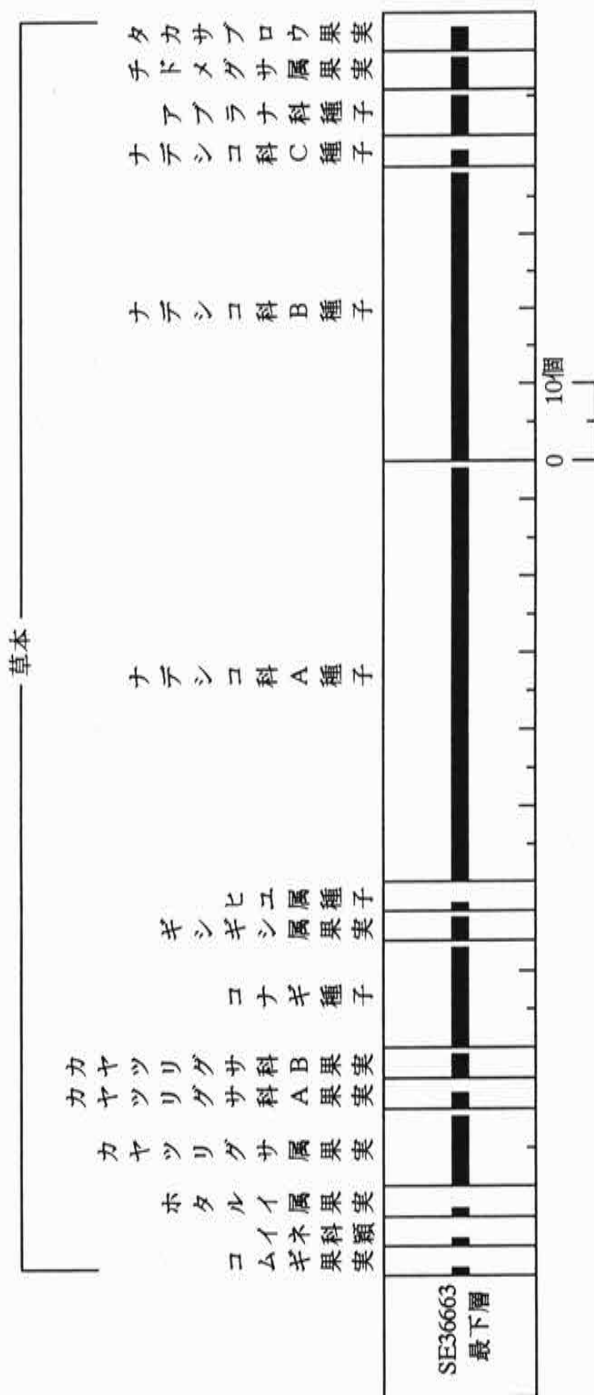


図2 長岡京跡左京第366次調査における種実検出図(堆積物100cc中)

## 付 載 2

奈良時代自然流路 S X 36604 及び  
杭列 S X 36675 検出杭材の樹種同定

藤根 久(パレオ・ラボ)

## 1. はじめに(図版第78・79)

長岡京左京366次調査では、杭材が検出された。ここでは、この杭材6点についてその樹種を検討した。また、この杭材の樹種と推定される周辺樹木植生との関係についても若干の検討を行った。

## 2. 方法と記載および結果

木材は、片刃カミソリを用いて試料の横断面(木口と同義)、接線断面(板目と同義)、放射断面(柾目と同義)の3断面をつくり、ガムクロラル(Gum Chloral)で封入し、永久標本を作成する。樹種の同定は、これら標本を光学顕微鏡下で40~400倍の倍率で観察を行い、現生標本との比較により行う。以下に各標本の記載を述べ、その結果を表1に示す。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図版1a~1c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである(横断面)。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁は内側に向かって突出している(放射断面)。エピセリウム細胞以外は、放射仮道管を含め単列で1~18細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、マツ科のマツ属複維管束亜属の材と同定される。マツ属複維管束亜属は、本州・四国・九州に生育するアカマツ(*P. densiflora*)と海岸部に生育するクロマツ(*P. thunbergii*)がある。いずれも樹高30m、幹径1m前後に達する常緑針葉樹である。

モミ属 *Abies* マツ科 図版2a~2c.

仮道管および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである(横断面)。放射組織は、柔細胞からなり単列で2~31細胞高である(接線断面)。その分野壁孔はトウヒ型で1分野に1~2個存在する。また、放

表1 出土杭材とその樹種

試料	遺構	製品名	樹種
1	4トレンチ	杭材	マツ属複維管束亜属
2	4トレンチ	杭材	コナラ属クヌギ節
3	4トレンチ	杭材	モミ属
4	4トレンチ	杭材	ツガ属
5	4トレンチ	杭材	モミ属
6	4トレンチ	杭材	ツガ属

射組織の壁は厚く、じゅず状末端壁を有する(放射断面)。

以上の形質から、マツ科のモミ属の材と同定される。モミ属の樹木には、亜高山帯に分布するシラビソ(*A. veichii*)やオオシラビソ(*A. mariesii*)、暖帯から温帯にかけて分布するモミ(*A. firma*)などがある。いずれも樹高30m、幹径1mに達する常緑針葉樹である。

ツガ属 *Tsuga* マツ科 図版3a~3c.

仮道管、放射柔細胞および放射仮道管からなる針葉樹材で正常樹脂道はもたない。また早材部から晩材部への移行は急で年輪幅は狭い(横断面)。放射組織は、放射仮道管および柔細胞からなり単列で2~12細胞高である(接線断面)。その分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~4個存在する(放射断面)。

以上の形質から、マツ科のモミ属の材と同定される。モミ属の樹木には、暖帯に分布するツガ(*T. sieboldii*)、本州以南に分布するコメツガ(*T. diversiflora*)がある。いずれも樹高25m、幹径1.0mに達する常緑針葉樹である。

クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版4a~4c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織のものがある(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のクヌギ節の材と同定される。クヌギ節の樹木には関東地方に普通に見られるクヌギ(*Q. acutissima*)と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ(*Q. variabilis*)がある。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

### 3. 考察

ここで検討した杭材の樹種は、針葉樹のマツ属複維管束亜属1点、モミ属2点、ツガ属2点、落葉広葉樹のクヌギ節1点であった。これらの杭材に利用されている樹木は、周辺に生育する樹木である。京都府北区深泥池のボーリング調査では、この長岡京が成立した前後の時期において、マツ属やスギ属、モチノキ属やアカガシ亜属が優占し、ハンノキ属やケヤキ属一エノキ属あるいはヒノキ科も多く見られることが推定されている(深泥池団体研究グループ, 1976)。また、こうした森林植生は、人間による植生破壊が進行した結果としている。こうした大きな植生破壊は、数度に渡る遷都あるいは平安京遷都以降の人間による植生干渉に関連することが予想されるが、ここで杭材として利用される樹木は、スギあるいはヒノキなどの有用材以外の樹木であることが理解される。

### 引用文献

深泥池団体研究グループ(1976) 深泥池の研究(2). 地球科学, 30-2, 122-140.

## 付 載 3

古墳時代前期・土坑 S K 36672 長岡京跡  
出土植物遺体の植物珪酸体分析

鈴木 茂(パレオ・ラボ)

イネ科植物は、別名珪酸植物とも呼ばれ、根より大量の珪酸分を吸収することが知られている。植物珪酸体は、この吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもの(機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など)で、機動細胞珪酸体については藤原(1976)や藤原・佐々木(1978)など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。こうしたことから、植物遺体より植物珪酸体を抽出・観察することにより、どのような植物の珪酸体が含まれているか検討することができ、そこから母植物について考察することが可能である。

## 1. 試料と分析方法(図版第80)

分析用試料は、長岡京跡より出土した土器の土器内底部より検出された植物遺体であるが、やや分解が進み泥炭化しており、砂や小レキも含まれている。

植物珪酸体分析は上記した植物遺体について以下のような手順にしたがって行った。

試料は泥炭化が進み、そのままの状態では植物遺体を取り出すのが困難であったことから、約100gを1mm目の篩にかけ、水洗選別により植物遺体を集めた。この植物遺体を乾燥後管瓶にとり、電気炉を用いて灰化した。なお、灰化する行程は藤原(1976)にはほぼしたがって行った。すなわち、毎分5°Cの割合で温度を上げ、100°Cにおいて15分ほどその温度を保ち、その後毎分2°Cの割合で550°Cまで温度を上げ、5時間その温度を保持して、試料の灰化を行う。灰化した試料についてその一部を取り出し、グリセリンにてプレパラートを作製し、生物顕微鏡下で観察した。

## 2. 結果および考察

観察の結果、多数の機動細胞珪酸体や一部単細胞珪酸体も認められた。そのうち、最も多く認められたのはイネで、連なった状態でも観察される。キビ族も連なった状態で認められるものもあるなど、比較的多くみられる。その他、ネザサ節型やウシクサ族も普通にみられ、ヨシ属が1個体のみ観察された。

個々の植物珪酸体はそれほど頑強にくっついているものではなく、土壤中に混入している様な場合には容易にバラバラになる。よって、連なった状態、すなわち、葉に形成されたままの状態では観察されていることは、それが灰化された植物遺体を示していると考えられる。こうしたこと

から、検出された植物遺体はイネやキビ族を主体としたものと推測される。

その他、ネザサ節型のササ類(ゴキダケ、ケネザサなど)やウシクサ族(ススキ、チガヤなど)なども含まれている可能性はあるが、観察される個数からあったとしても少量とみられる。しかしながら、連なった状態では観察されず、また、砂レキが混入していることから、この砂レキや土壌とともに周辺部より土器内に供給されたことも考えられ、これはヨシ属(ヨシ、ツルヨシなど)も同様である。

以上のように、土器底部より検出された植物遺体はイネやキビ族を主体としたものと考えられ、ネザサ節型のササ類やウシクサ族も含まれている可能性はあるが、あったとしても少量とみられる。

なお、キビ族について、食用にされるキビやアワ・ヒエであるのか、またはエノコログサ・タイヌビエなどの雑草類であるのか植物珪酸体の形態から分類することは現時点においてはできないのが現状であり、このキビ族についてどのようなものであるのかは不明である。

#### 引用文献

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法―。考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・佐々木 彰(1978)プラント・オパール分析法の基礎的研究(2)―イネ(Oryza)属植物における機動細胞珪酸体の形状―。考古学と自然科学, 11, p.9-20.

## 付 載 4

# 古墳時代前期堆積層 5・13層における花粉分析

株式会社 古環境研究所

### 1. 試料(図版第81)

長岡京跡右京第366次調査の第4トレンチ東壁下部の古墳時代前期(布留式)の堆積土2点である。サンプルAは5層で古墳時代前期の堆積物の最上位であり、サンプルBは13層で下位である(第76・83図)。

### 2. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

### 3. 結果

出現した分類群は、樹木花粉18、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉12、シダ植物孢子2形態の計34である。これらの学名と和名および粒数を表1に示す。主要な分類群を写真に示



す。以下に出現した分類群を示す。

樹木花粉：モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クレーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、トチノキ、モクセイ科

樹木花粉と草本花粉を含むもの：クワ科－イラクサ科、マメ科

草本花粉：イネ科、カヤツリグサ科、ユリ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ノブドウ、セリ科、タンポポ科、キク科、ヨモギ属

シダ植物孢子：単条溝孢子、三条溝孢子

サンプルAないしBは、樹木花粉の占める割合が草本花粉およびシダ植物孢子より極めて高い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、クレーシイ属、スギの出現率が高い。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属の出現率が高い。下位のサンプルBより上位のサンプルAのほうが樹木花粉の割合がやや高く、特にコナラ属アカガシ亜属の出現率が高い。なお、イネ属型は検出されなかった。

#### 4. 花粉分析から推定される植生と環境

樹木花粉の占める割合がやや高く、周囲は比較的森林の優勢な植生であったと推定される。森林植生はカシ類(コナラ属アカガシ亜属)を主にナラ類(コナラ属コナラ亜属)、クレーシイ属、スギの混じる森林であったと推定される。照葉樹林要素はやや減少している。草本ではイネ科、ヨモギ属が主に分布し、比較的乾燥した裸地の環境も示唆される。以上、長岡京跡右京第366次調査の第4トレンチ東壁下部の古墳時代前期(布留式)の堆積土の花粉分析から推定される植生と環境は、周辺は森林が比較的多く分布し、集落域や農耕地などの人為改変地が広く分布する状態ではなかったと推測される。

#### 参考文献

中村純(1973)花粉分析. 古今書院, p. 82-110.

鳥倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村純(1980)日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料 研究の方法, 角川書店, p. 248-262.

金原正明(1995)古墳時代の環境と開発. 考古学と自然科学, 第31・32号合併号, 日本文化財科学会, p. 21-28.

表1 長岡京跡左京第366次調査における花粉分析結果

分類群	学名	和名	第4トレンチ	
			サンプルA	サンプルB
Arboreal pollen		樹木花粉		
	Abies	モミ属	1	9
	Tsuga	ツガ属	1	3
	Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	3	13
	Cryptomeria japonica	スギ	22	44
	Sciadopitys verticillata	コウヤマキ	1	1
	Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	2	5
	Alnus	ハンノキ属		2
	Betula	カバノキ属		1
	Corylus	ハシバミ属		1
	Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	1	1
	Castanea crenata-Castanopsis	クリ-シイ属	55	33
	Fagus	ブナ属	1	1
	Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	45	62
	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	109	74
	Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	1	
	Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	5	1
	Aesculus turbinata	トチノキ	3	
	Oleaceae	モクセイ科		1
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉		
	Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1	
	Leguminosae	マメ科		3
Nonarboreal pollen		草本花粉		
	Gramineae	イネ科	38	42
	Cyperaceae	カヤツリグサ科	9	5
	Liliaceae	ユリ科		1
	Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節		1
	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	2
	Caryophyllaceae	ナデシコ科		1
	Cruciferae	アブラナ科	1	
	Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ		3
	Umbelliferae	セリ科	10	8
	Lactucoeidae	タンポポ亜科	3	2
	Asteroidae	キク亜科	6	4
	Artemisia	ヨモギ属	22	21
Fern spore		シダ植物孢子		
	Monolate type spore	単条溝孢子	13	26
	Trilate type spore	三条溝孢子	20	29
Arboreal pollen		樹木花粉	250	252
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	1	3
Nonarboreal pollen		草本花粉	90	90
Total pollen		花粉総数	341	345
Unknown pollen		未同定花粉	3	6
Fern spore		シダ植物孢子	33	55
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)

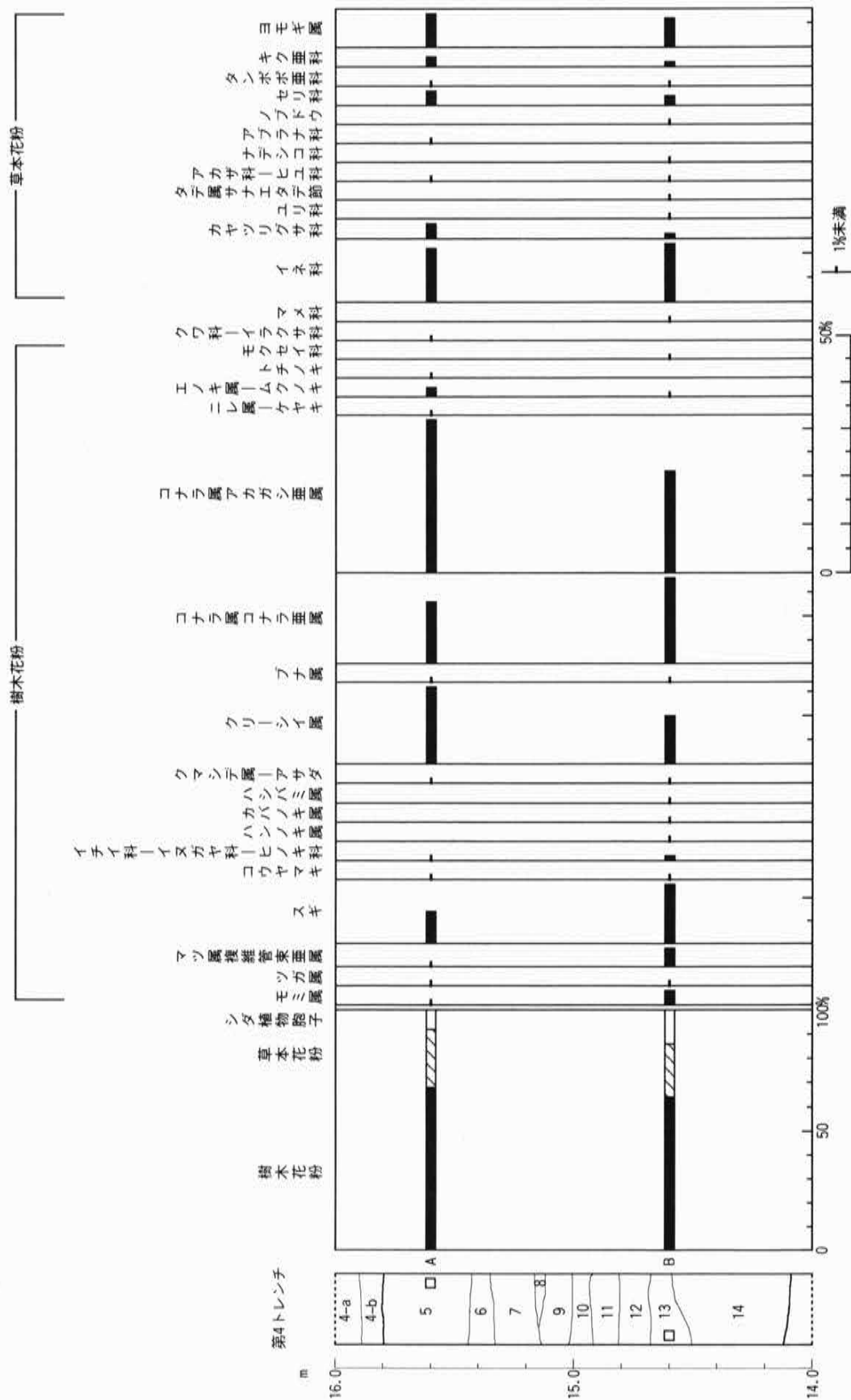


図1 長岡京跡左京第366次調査における花粉組成表(花粉総数が基数)

図

版



(1)調査前風景 (東から)



(3)第2トレンチ調査風景 (東から)



(2)第1トレンチ完掘状況 (東から)



(4)第2トレンチ完掘状況 (東から)



(3)護岸施設検出状況（拡張前、北東から）



(4)第3トレンチ拡張及び土留め工事風景（西から）



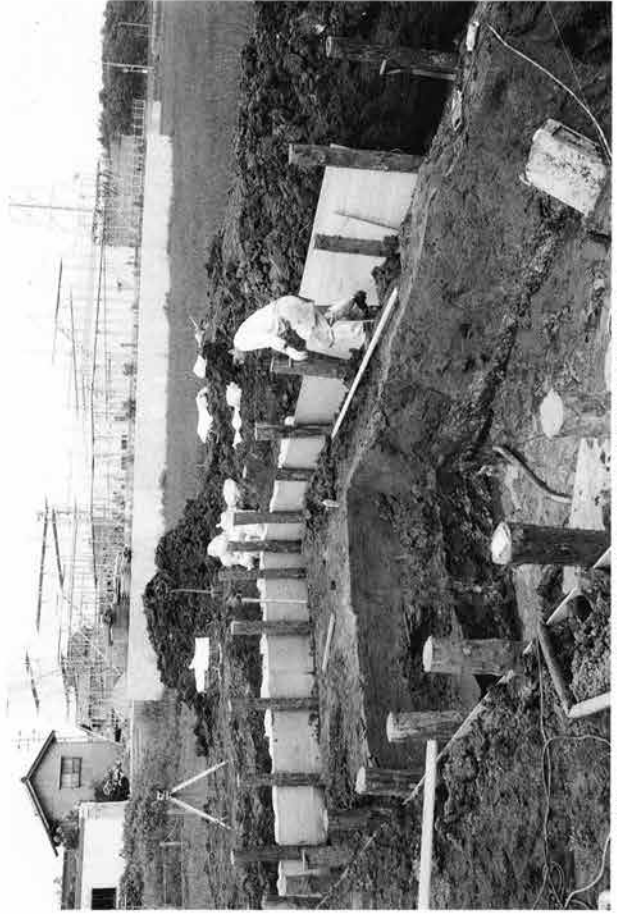
(1)第3トレンチ調査風景（東から）



(2)第3トレンチ内護岸施設検出段階（拡張前、北東から）



(3)第4トレンチ完掘 (拡張前、東から)



(4)第4トレンチ拡張及び土留め工事風景 (南東から)



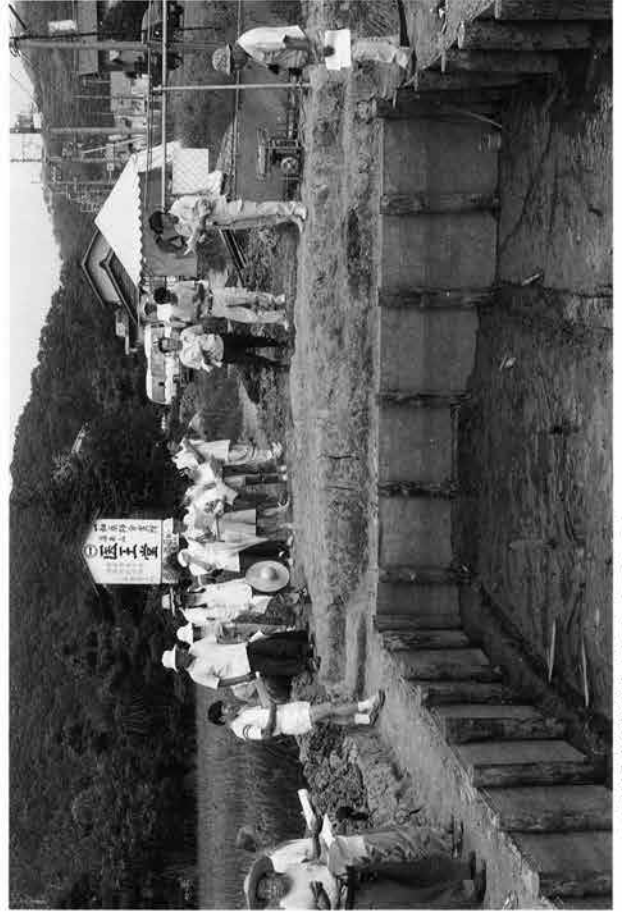
(1)第3トレンチ護岸施設 (拡張後、西から)



(2)護岸施設 (北から)



(3)木製品出土状況(第4トレンチから)



(4)関係者説明会風景(西から)



(1)第4トレンチ調査風景(拡張後、南西から)



(2)第4トレンチ完掘状況(拡張後、西から)





1



7



2



8



3



4



9



5



6



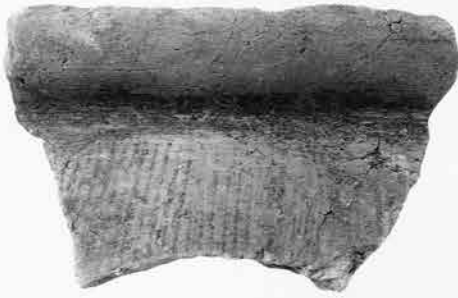
10



11



16



12



17



13



18



14



15



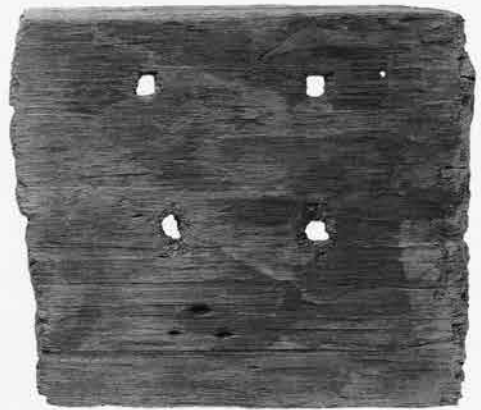
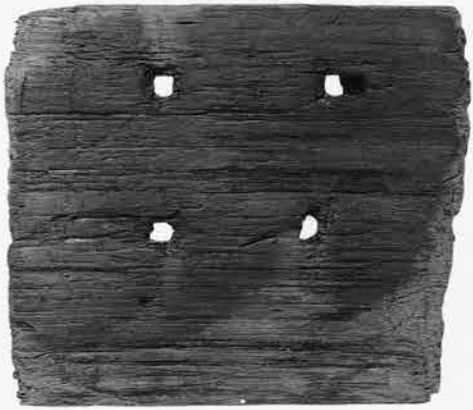
19



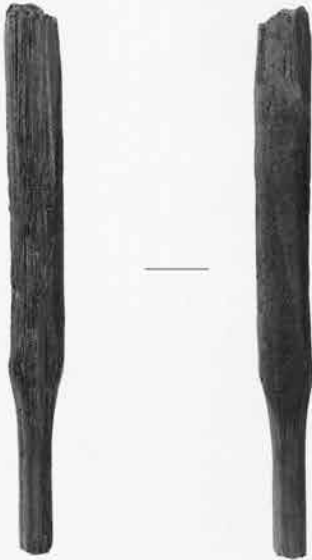
1



2



3



4



5



6

図版第9 宮津谷地区古墳状隆起



(1) 桑原口1号墳発掘状況（東から）



(2) 城山谷古墳群発掘状況（北から）

図版第10 桑原口遺跡



(1)遺跡全景（東から）



(2)B地区トレンチ全景（北から）



(1) B地区トレンチ全景 (東から)



(2) 竪穴式住居跡SH 07 (北東から)



(1) 竪穴式住居跡SH06 (南から)



(2) 竪穴式住居跡SH04 (北から)





(1)掘立柱建物跡S B 2 6 (西から)



(2)S B 2 6 柱根

図版第14 桑原口遺跡



(1)川跡SD15 (南から)



(2)落ち込みSX02 (南から)



(1) S X 0 2 遺物出土状況



(2) S D 1 5 土器出土状況



(3)調査前遠景 (南東から)



(4)調査後遠景 (南東から)



(1)調査前全景 (南から)

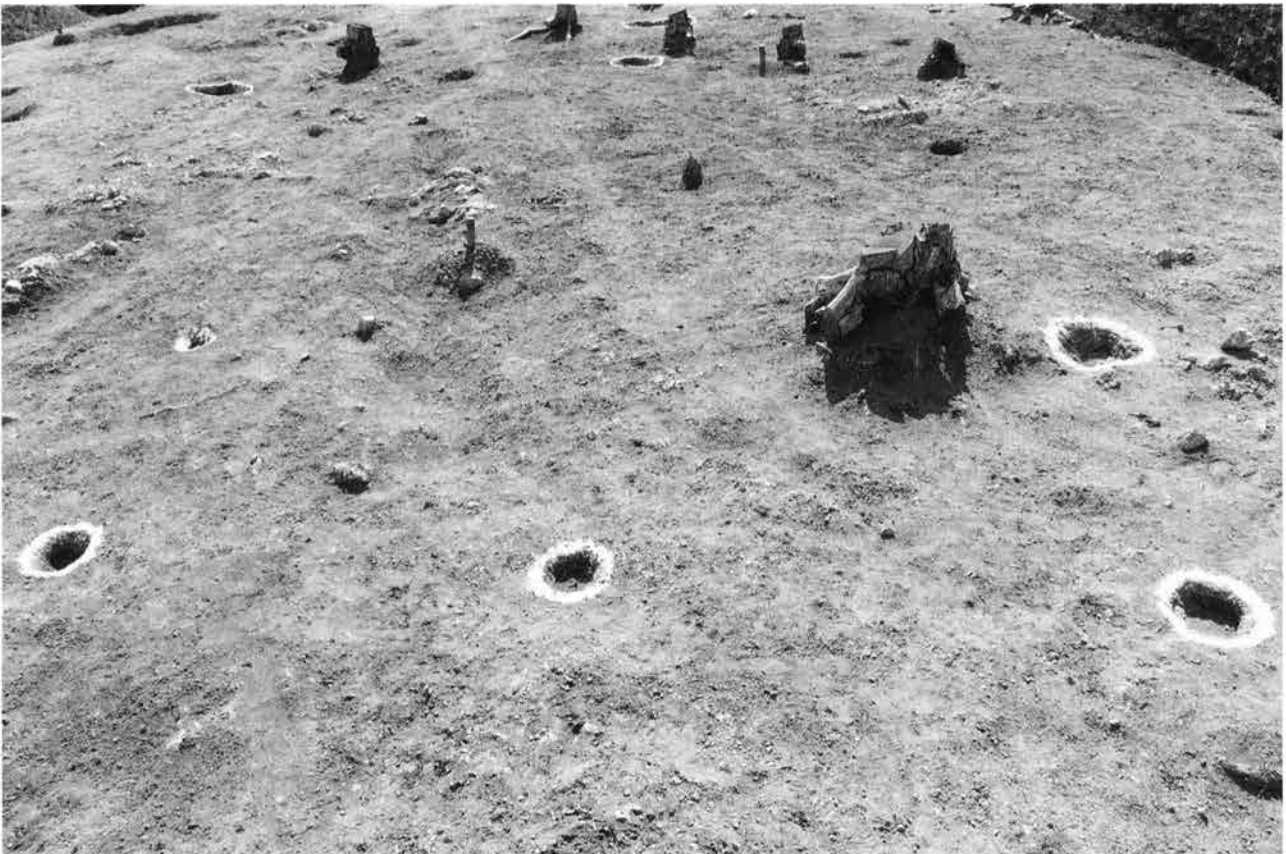


(2)調査後全景 (北東から)

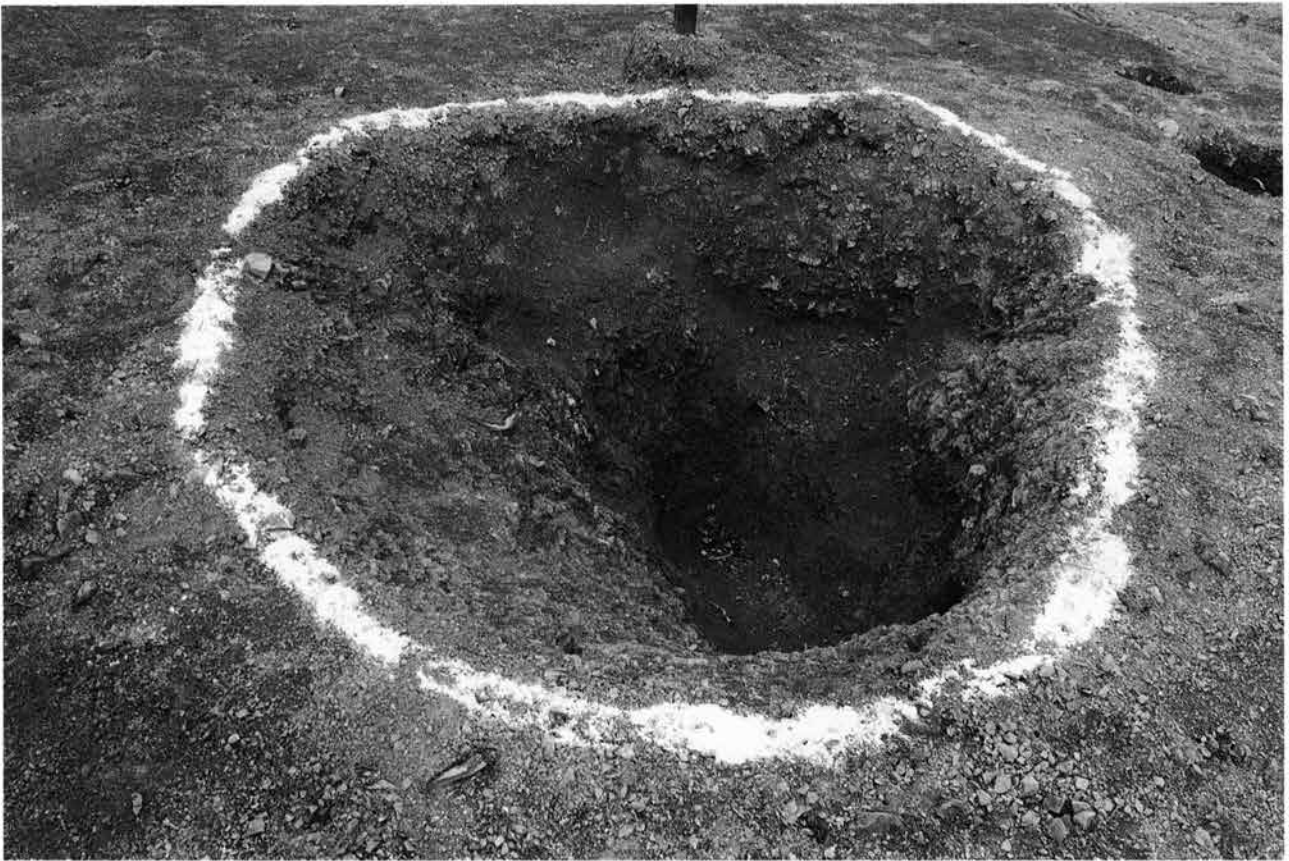
図版第17 大俣城跡



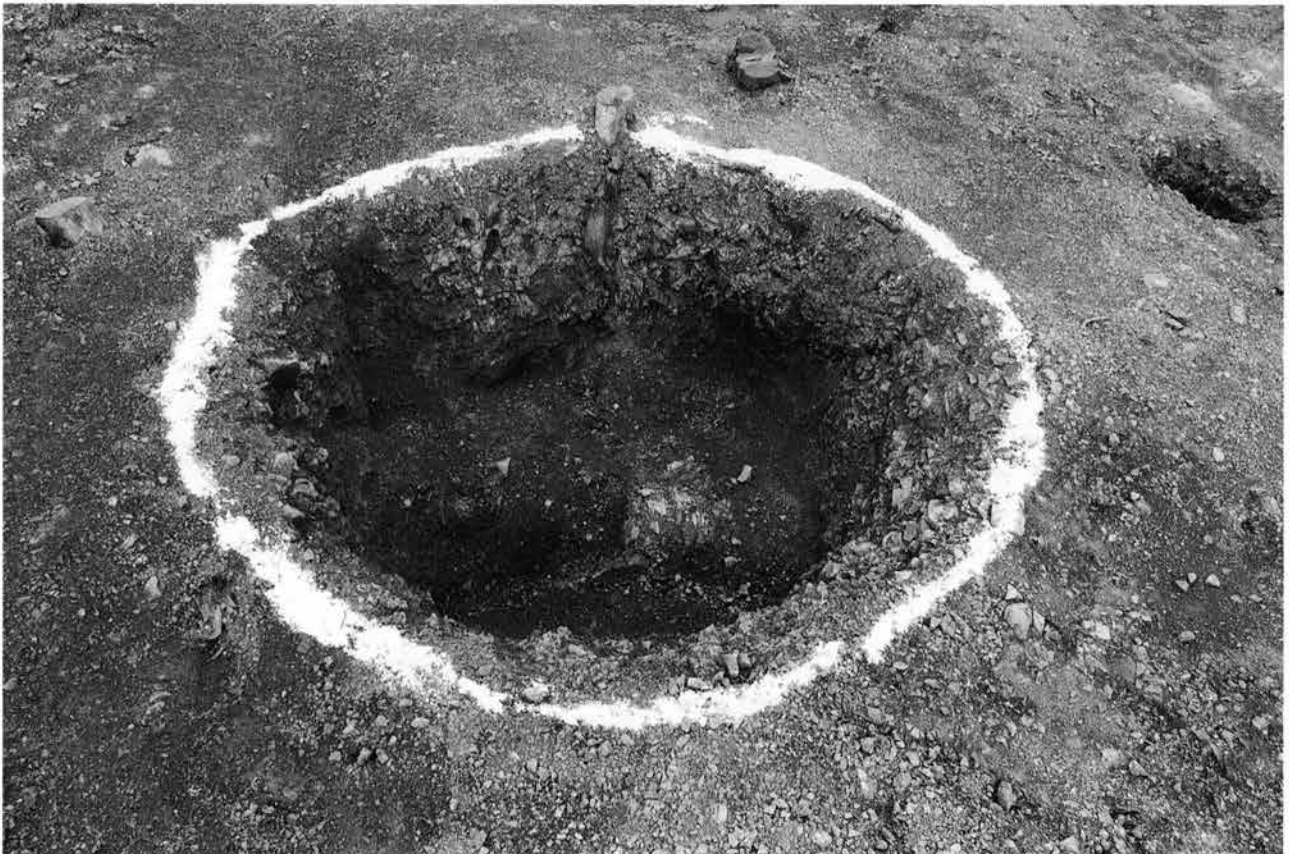
(1)SB01 全景 (西から)



(2)SB02 全景 (北東から)



(1)SK 0 1 完掘状況 (北西から)



(2)SK 0 2 完掘状況 (北から)



(1)SB03 全景 (北から)



(2)SB04 全景 (南西から)



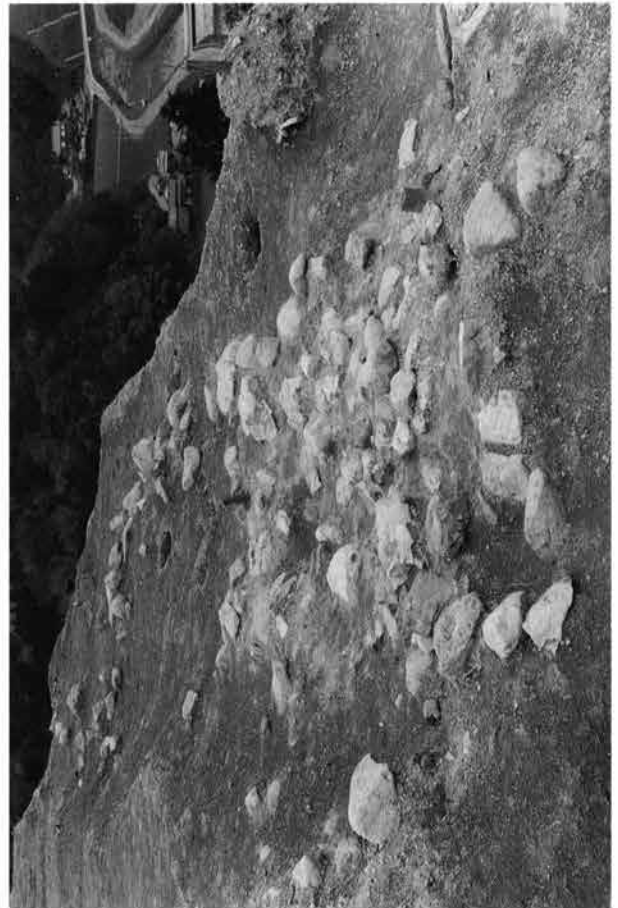
(3)帯曲輪盛り土部分断ち割り(北西から)



(4)帯曲輪盛り土部分土層断面(南西から)



(1)通路状遺構1(南から)



(2)S X 0 1 検出状況(南西から)





(1)土師器皿出土状況



(2)土師器皿出土状況



(1)虎口全景（北西から）



(2)虎口門柱跡（北から）



(1)虎口近景（南から）



(2)虎口通路屈曲部（北東から）



(1)階段状遺構（南東から）



(2)曲輪Ⅲ西側土塁開口部（南西から）



(1)曲輪Ⅲ西側土塁閉塞状況(南西から)



(2)曲輪Ⅲ西側土塁開口部通路底(南西から)



(1) 竪堀 1 (北西から)



(2) 竪堀 1～3 (北西から)



(1)横堀遠景 (南東から)



(2)横堀近景 (南東から)



(1)横堀屈曲部（西から）

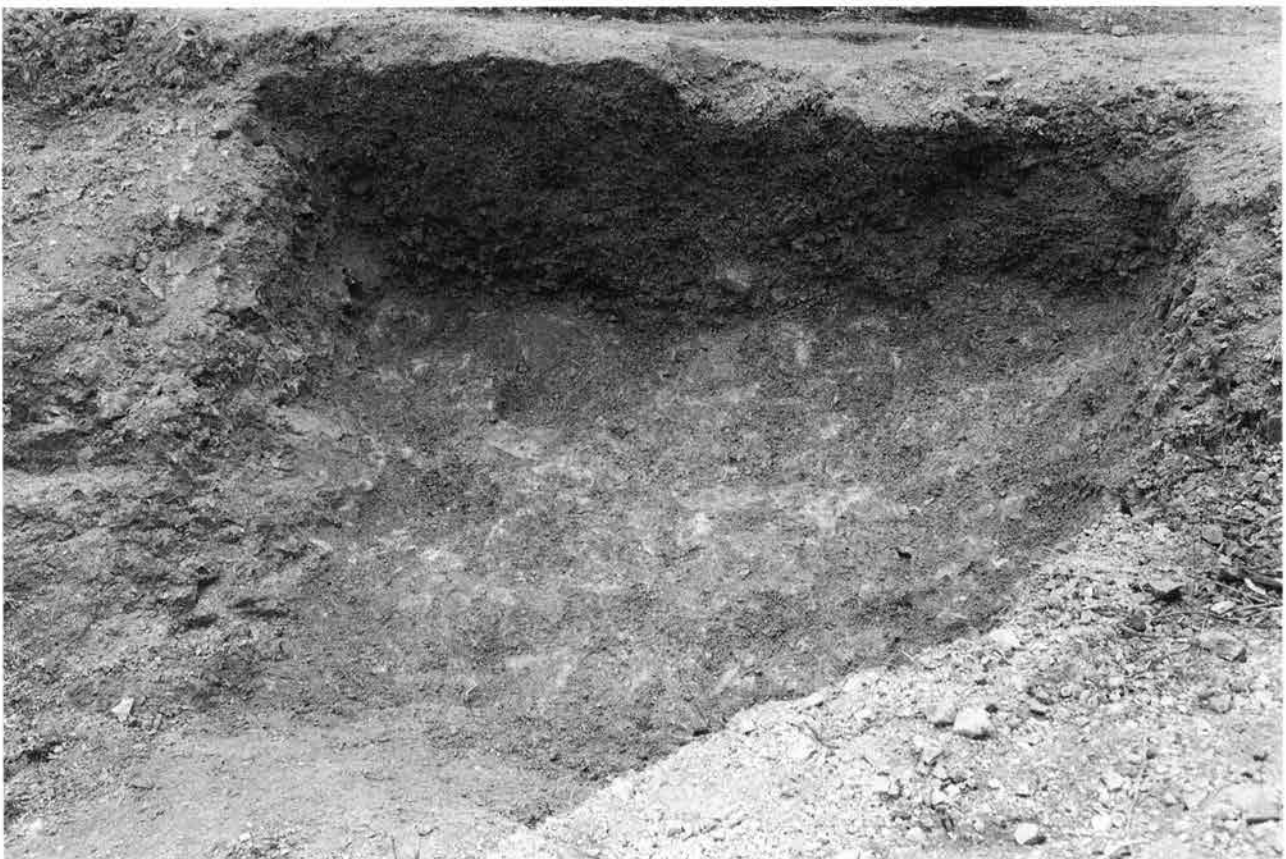


(2)横堀屈曲部（南東から）

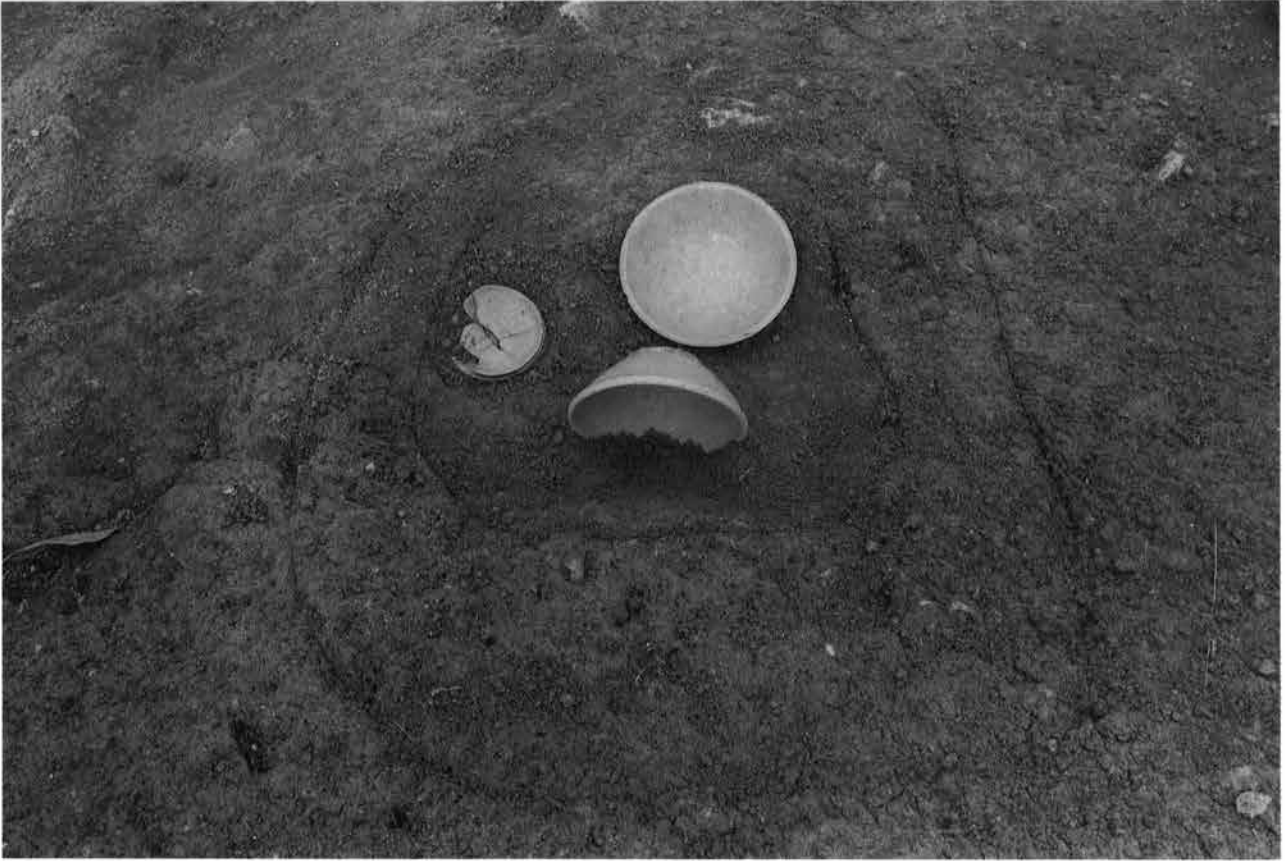




(1) 堀7 (北西から)



(2) 堀8 検出状況 (北東から)



(1)中世墓遺物出土状況（南西から）



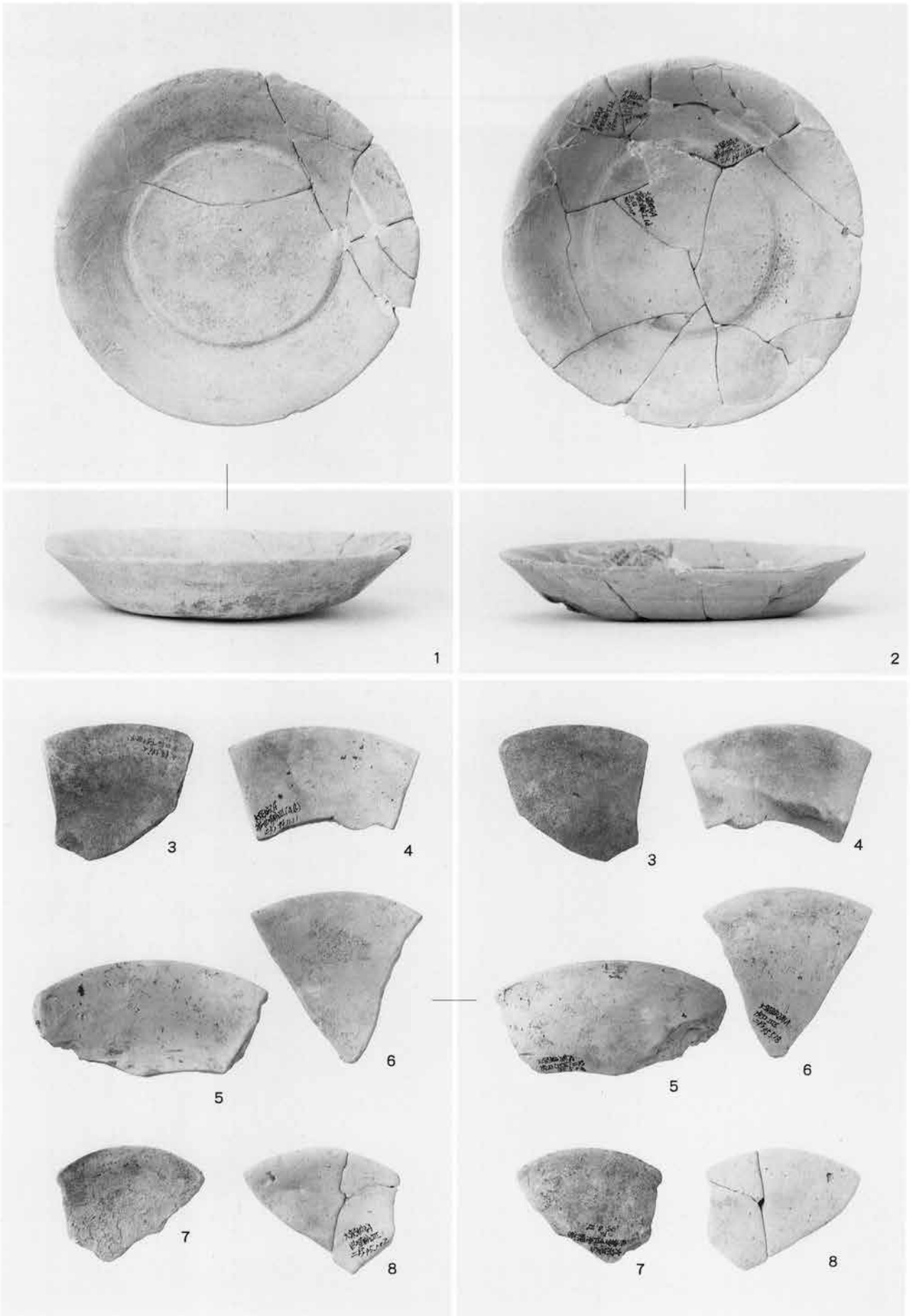
(2)炭窯（南東から）



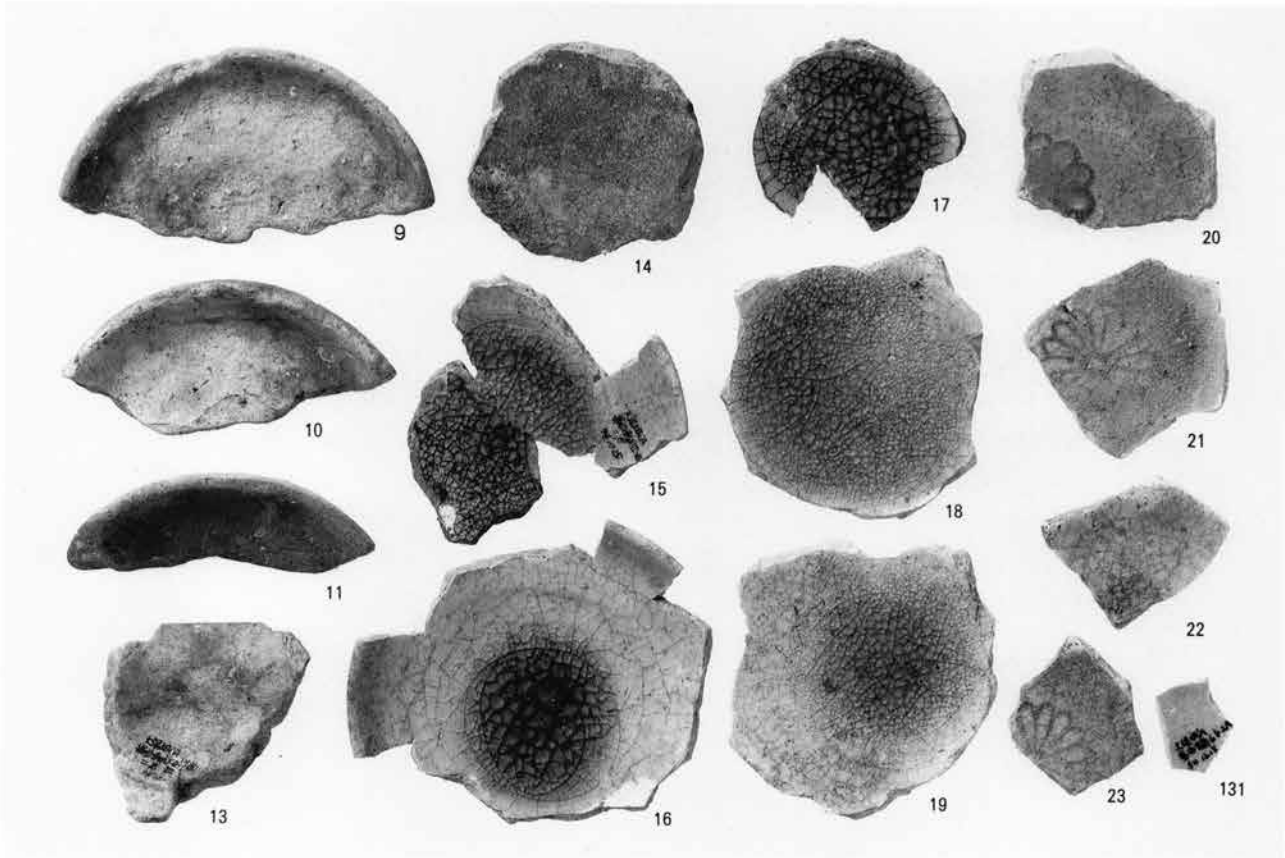
(1)A' 地区遺構面全景 (西から)



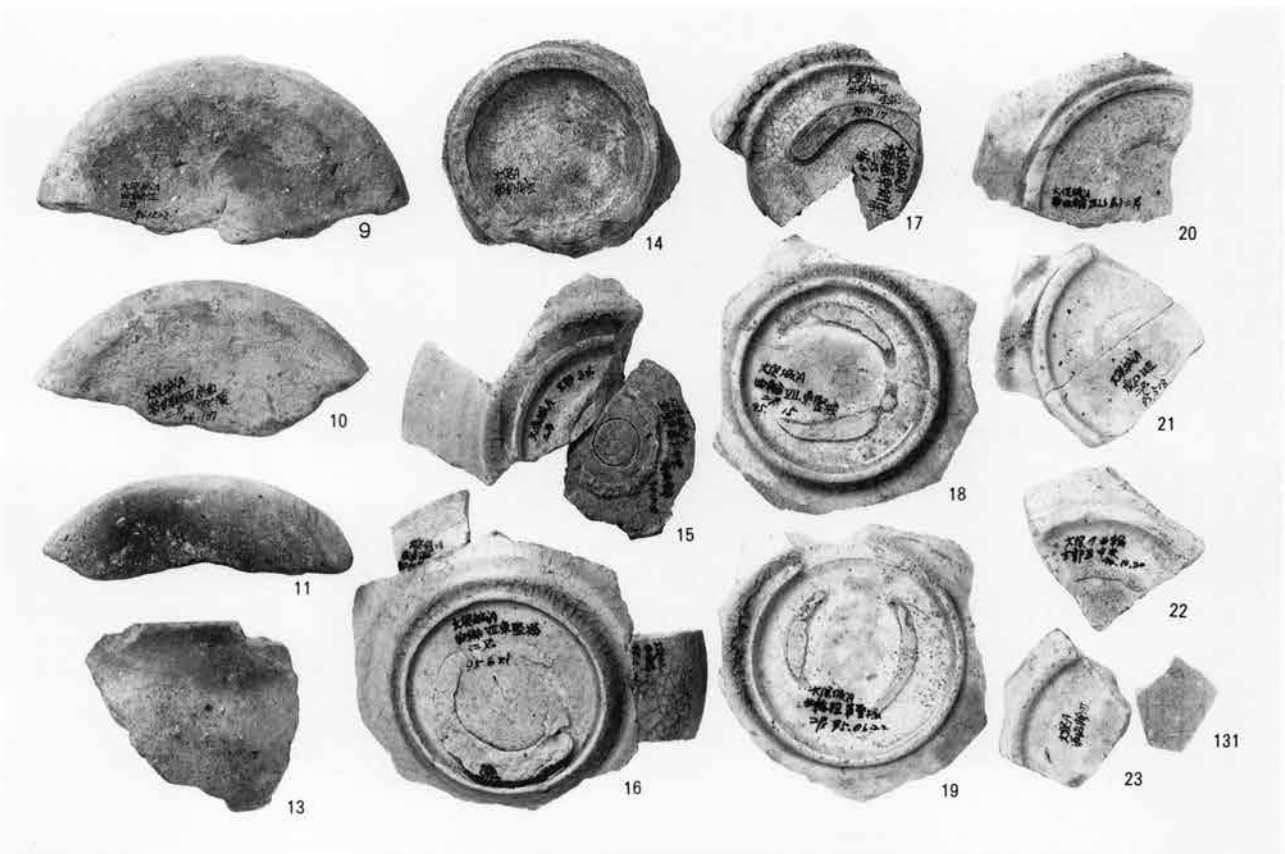
(2)A' 地区SK04 遺物出土状況



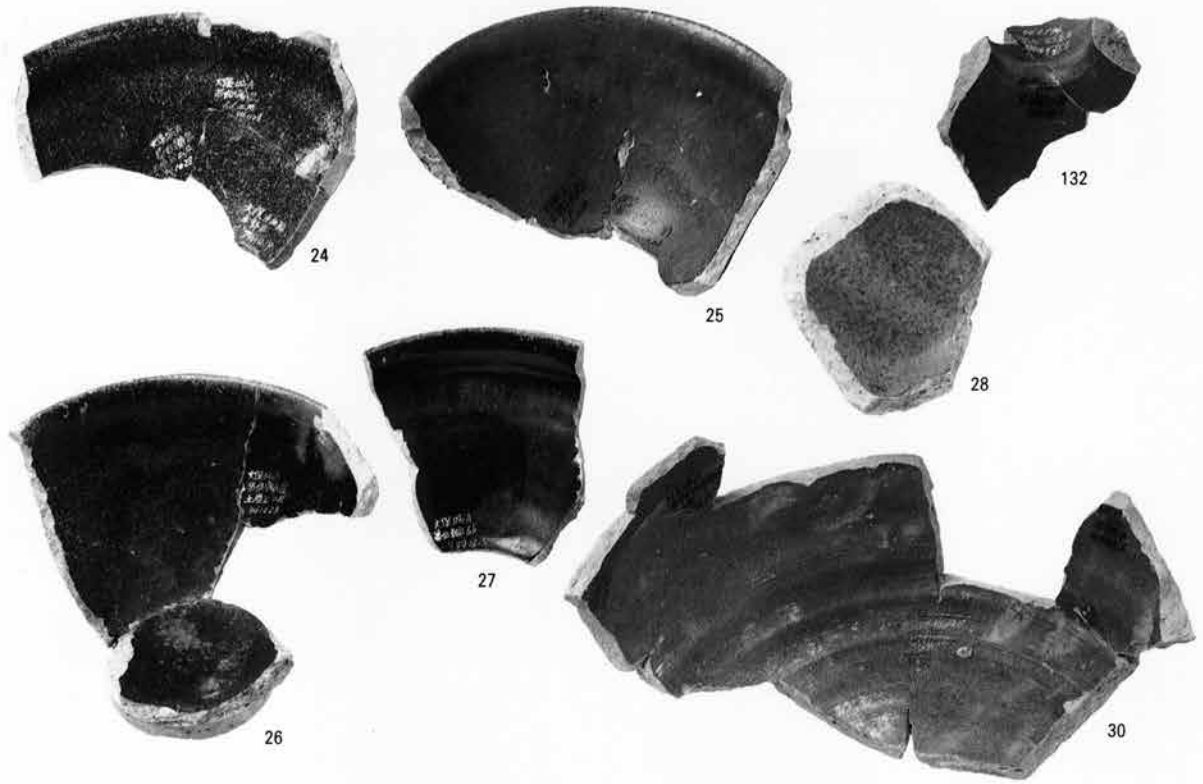
A地区出土遺物（土師器Ⅲ）



(1)A地区出土遺物（土師器壺・灰釉）



(2)同上外面



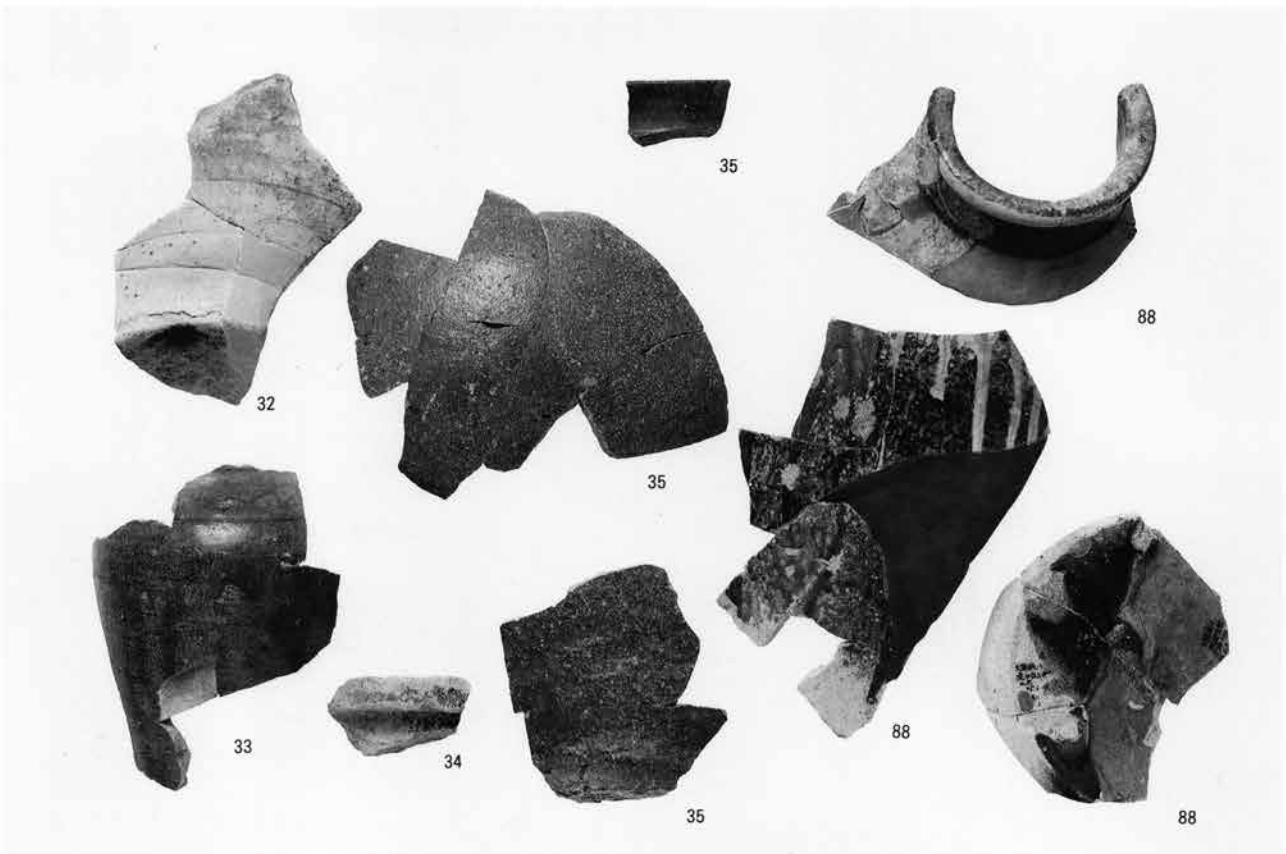
(1)A地区出土遺物（天目茶碗・鉄釉瓶）



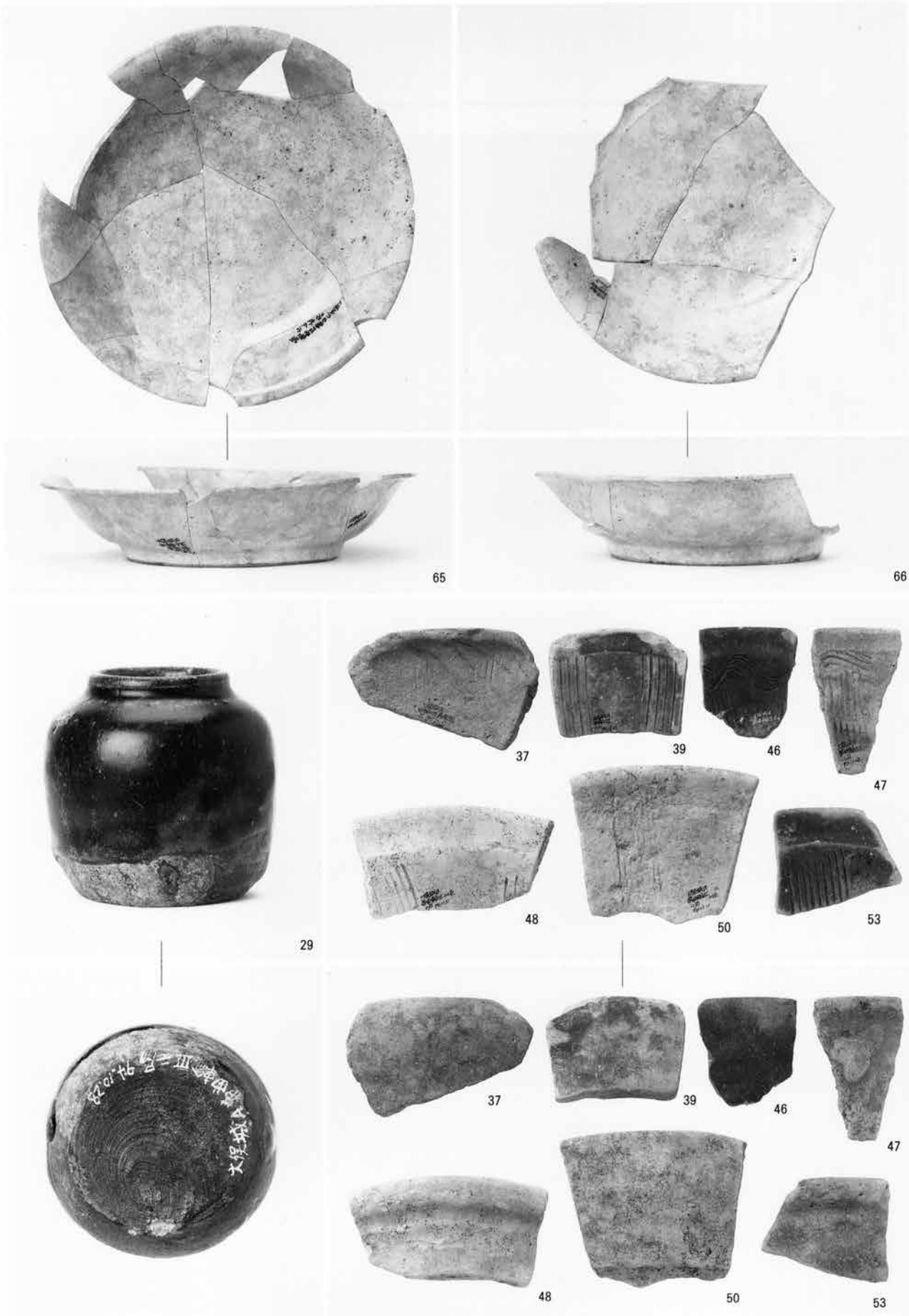
(2)同上外面



(1)A地区出土遺物（国産陶器・中国産陶器）

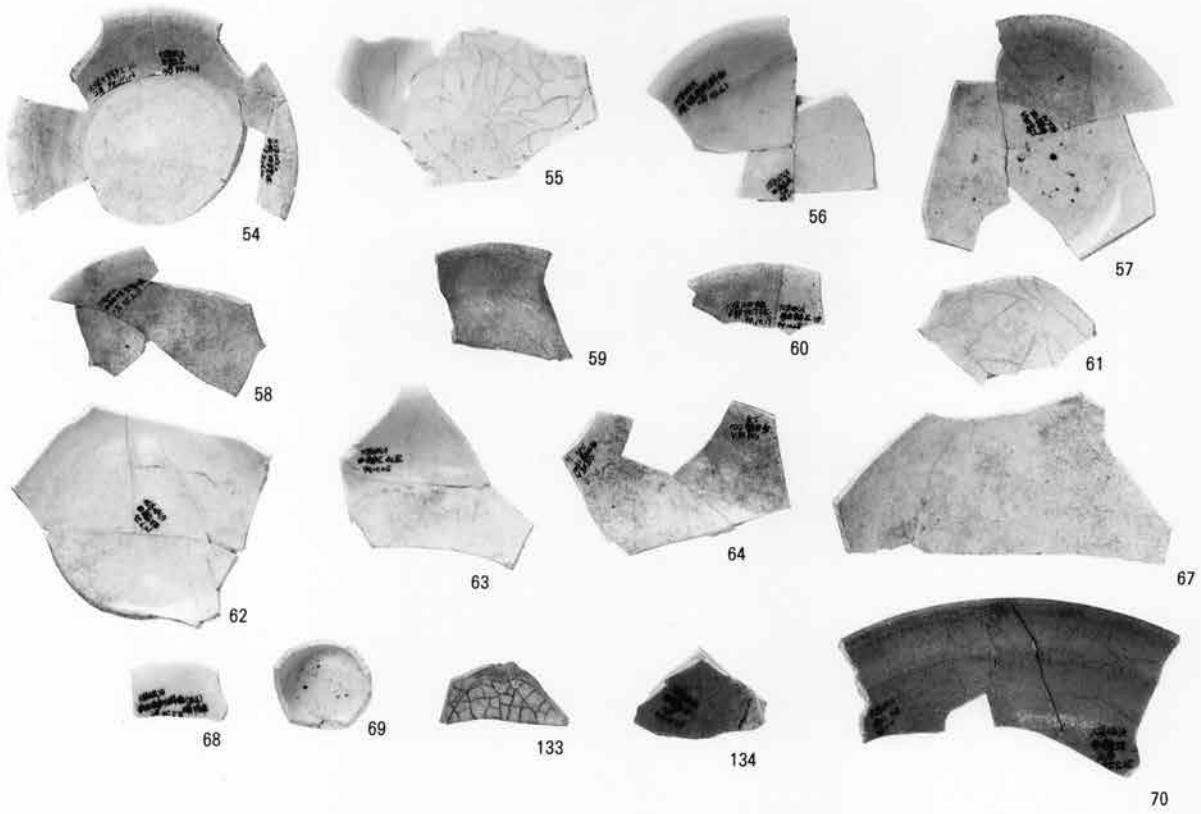


(2)同上外面

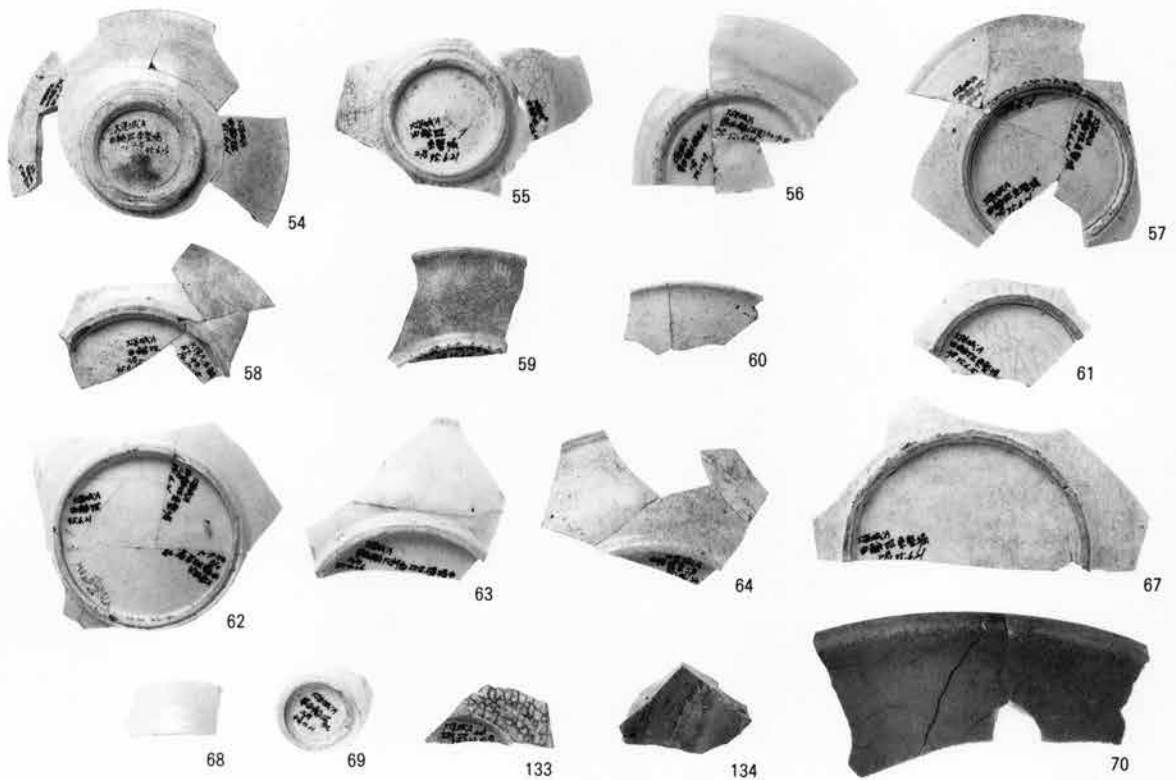


A地区出土遺物（白磁皿・鉄釉茶入・在地産搦鉢）

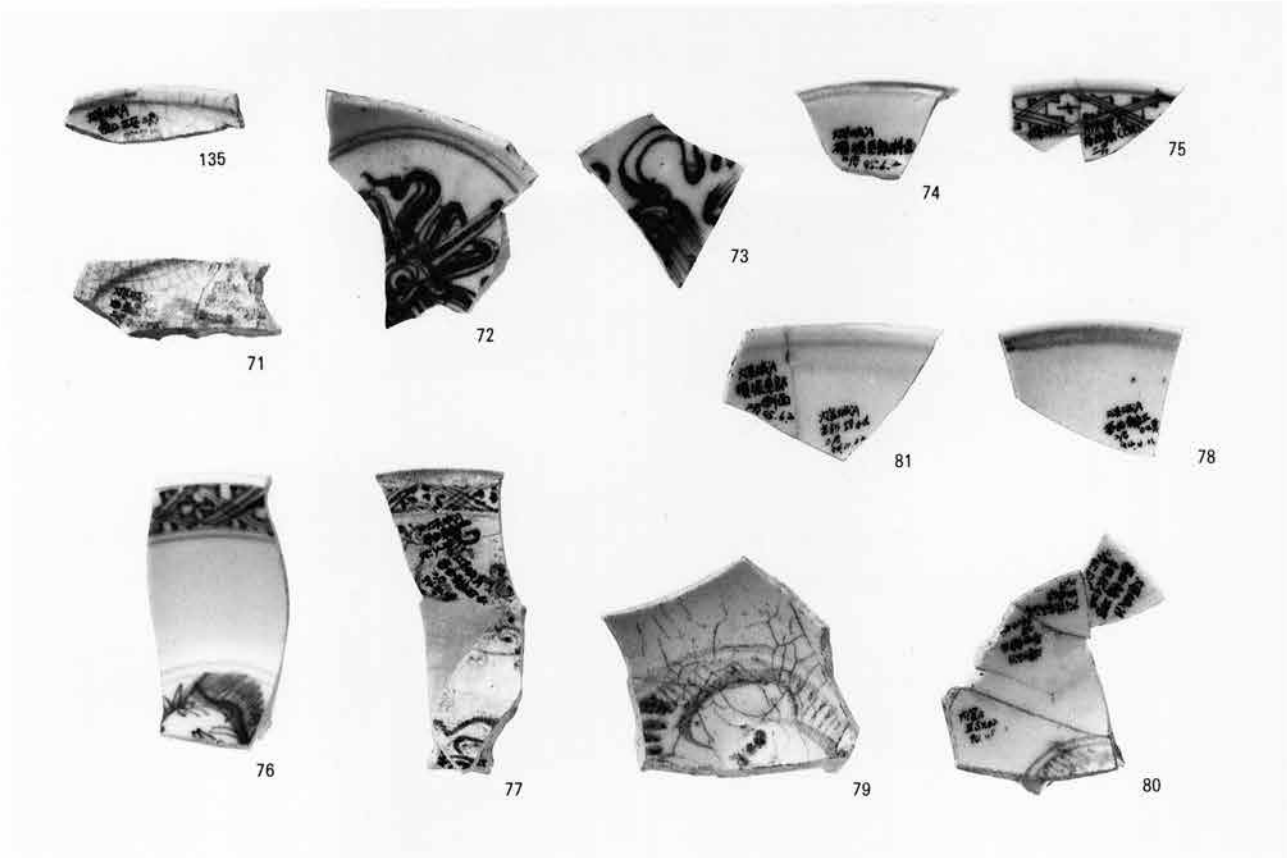




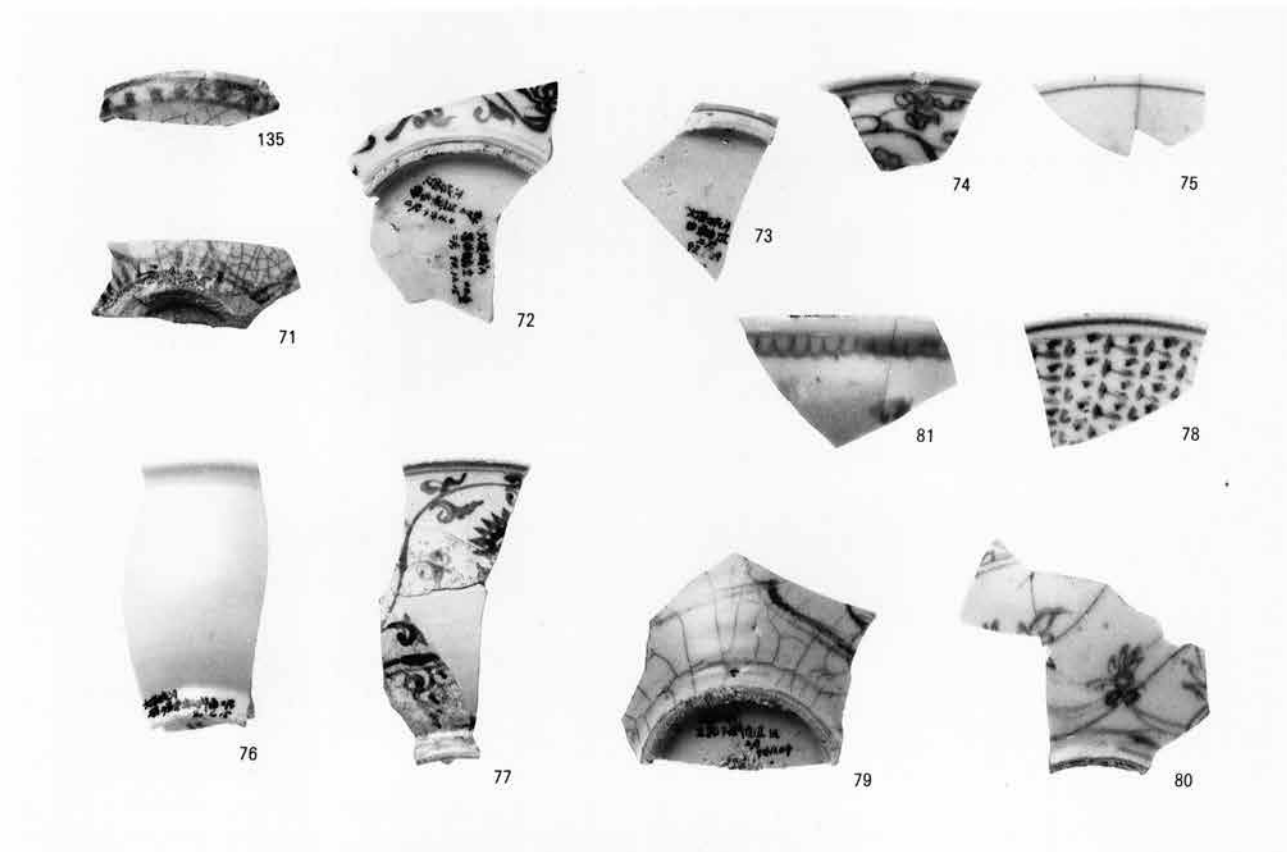
(1)A地区出土遺物（白磁・青磁）



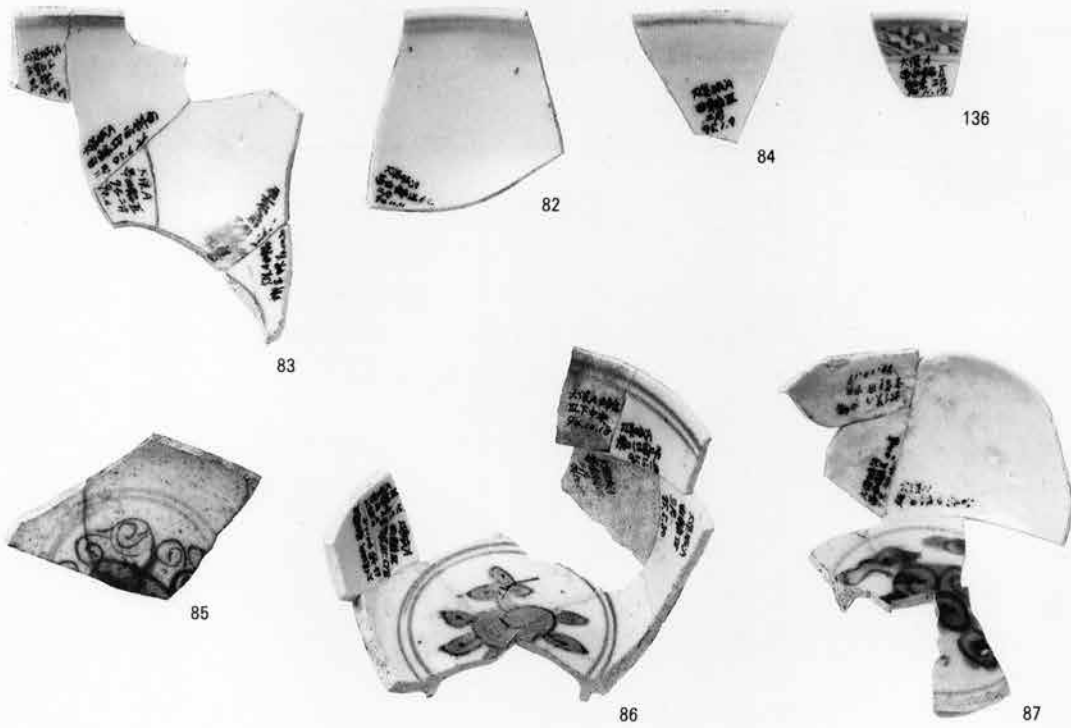
(2)同上外面



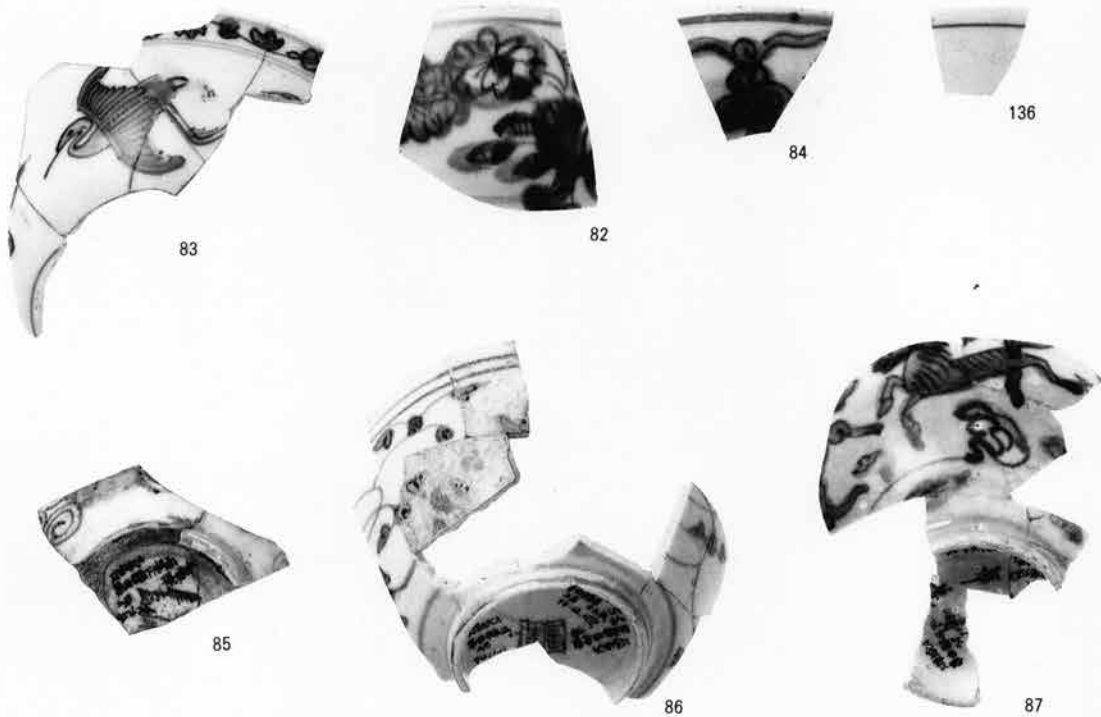
(1)A地区出土遺物（染付）



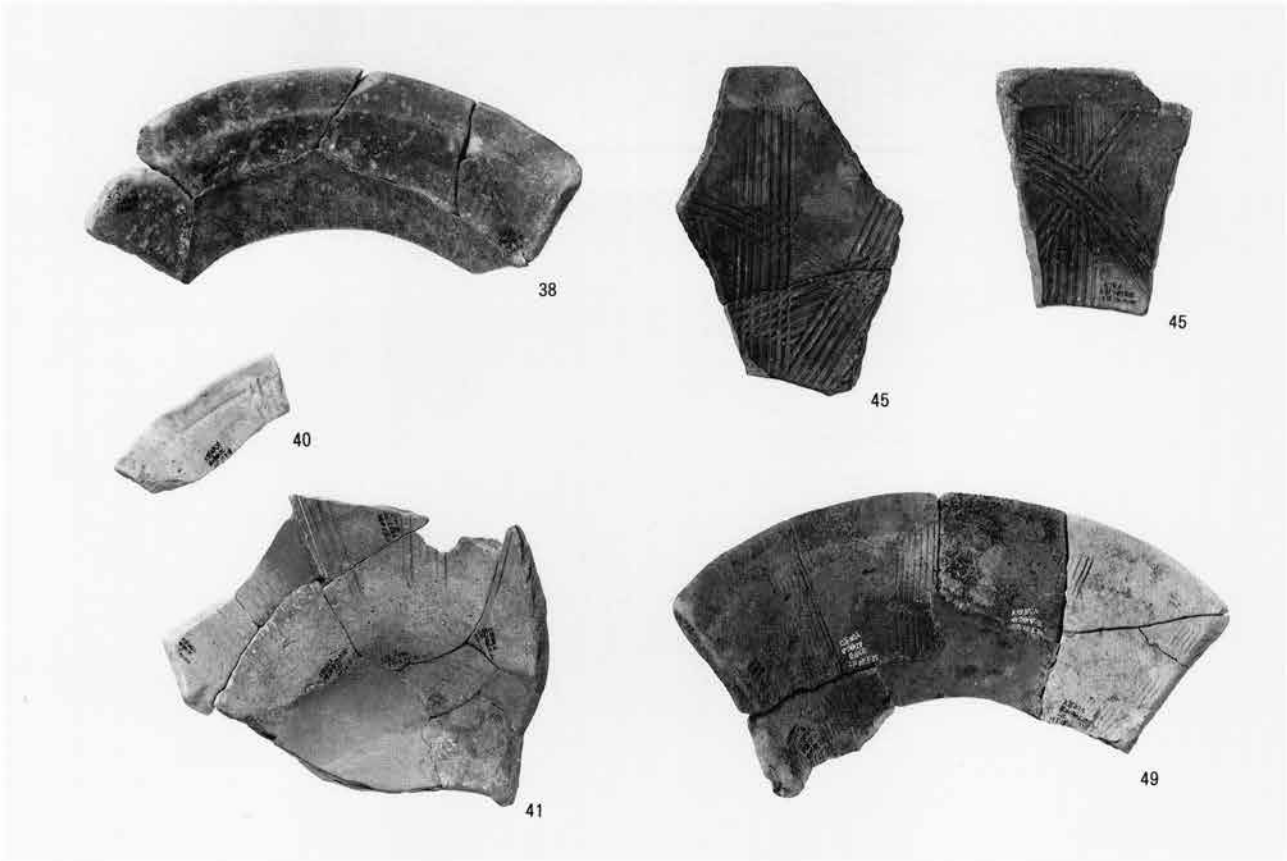
(2)同上外面



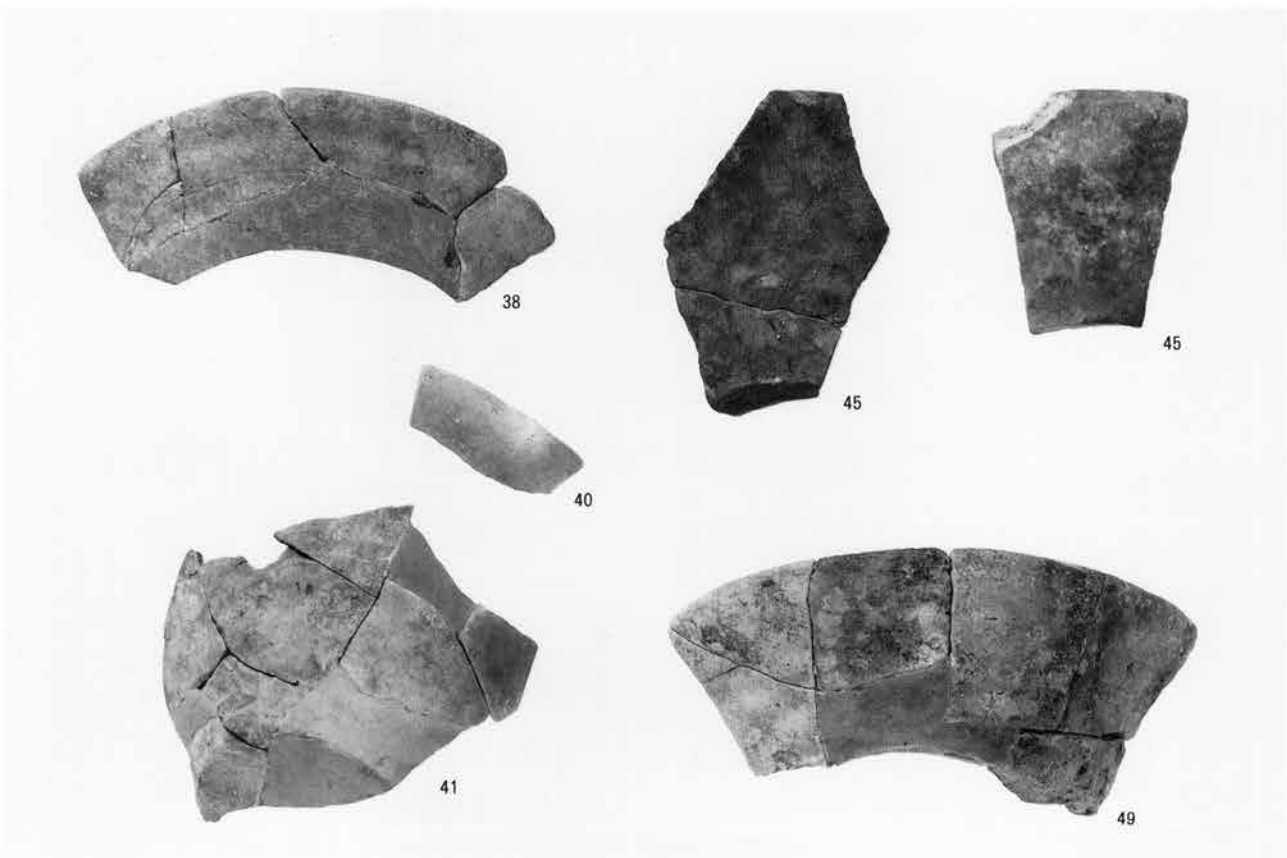
(1)A地区出土遺物(染付)



(2)同上外面



(1)A地区出土遺物（在地産播鉢）



(2)同上外面



36

43



42

44



51



52

(1)A地区出土遺物 (在地産播鉢)



109



110



111



112



113



114



115



116

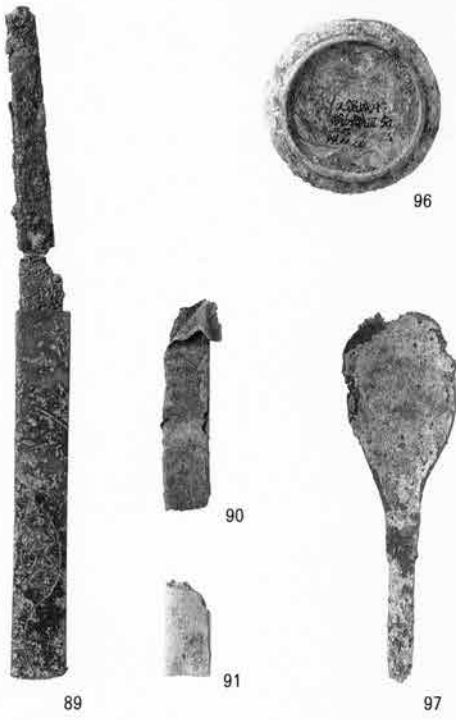


117

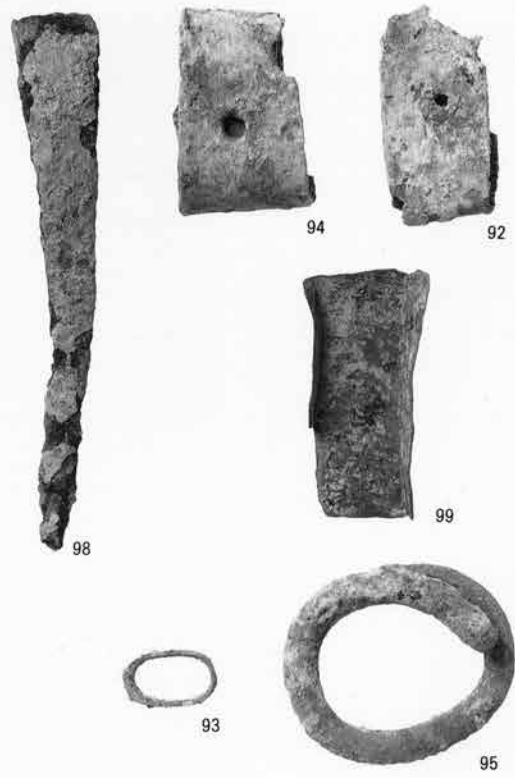


(2)A地区出土遺物 (錢貨)

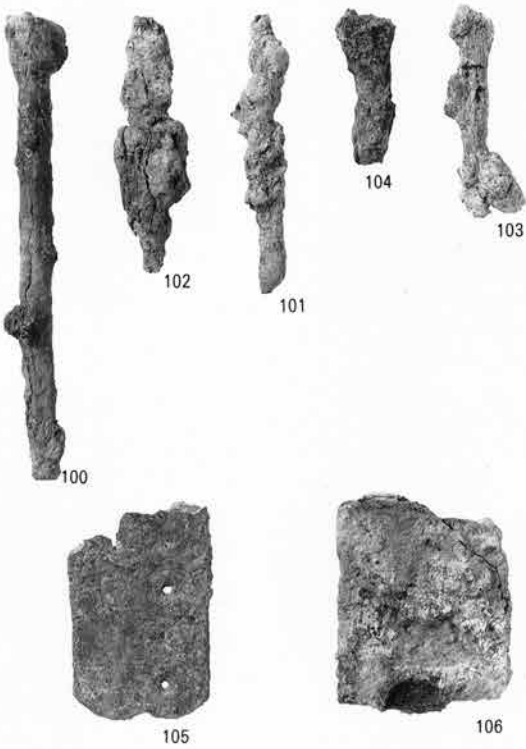
(3)A'地区出土遺物 (鉄滓)



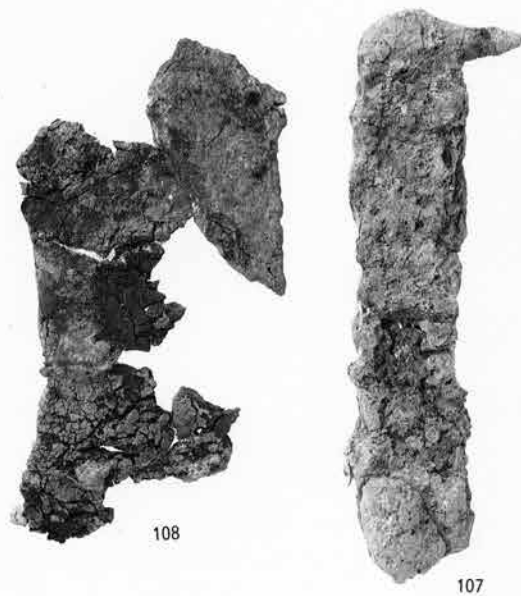
(1)銅製品(1)



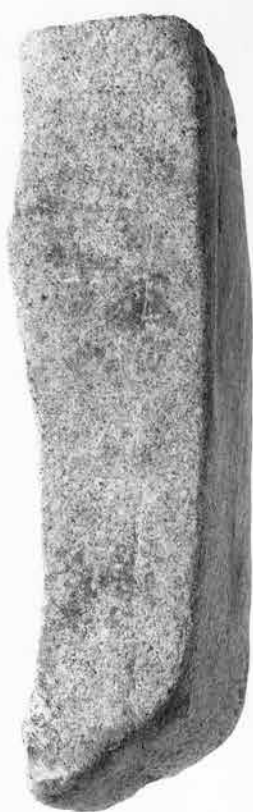
(2)銅製品(2)



(3)鉄製品(1)



(4)鉄製品(2)



118



119



121



120



121'



137





126

125



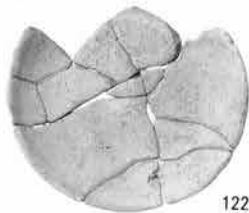
123



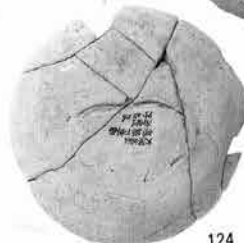
123



124



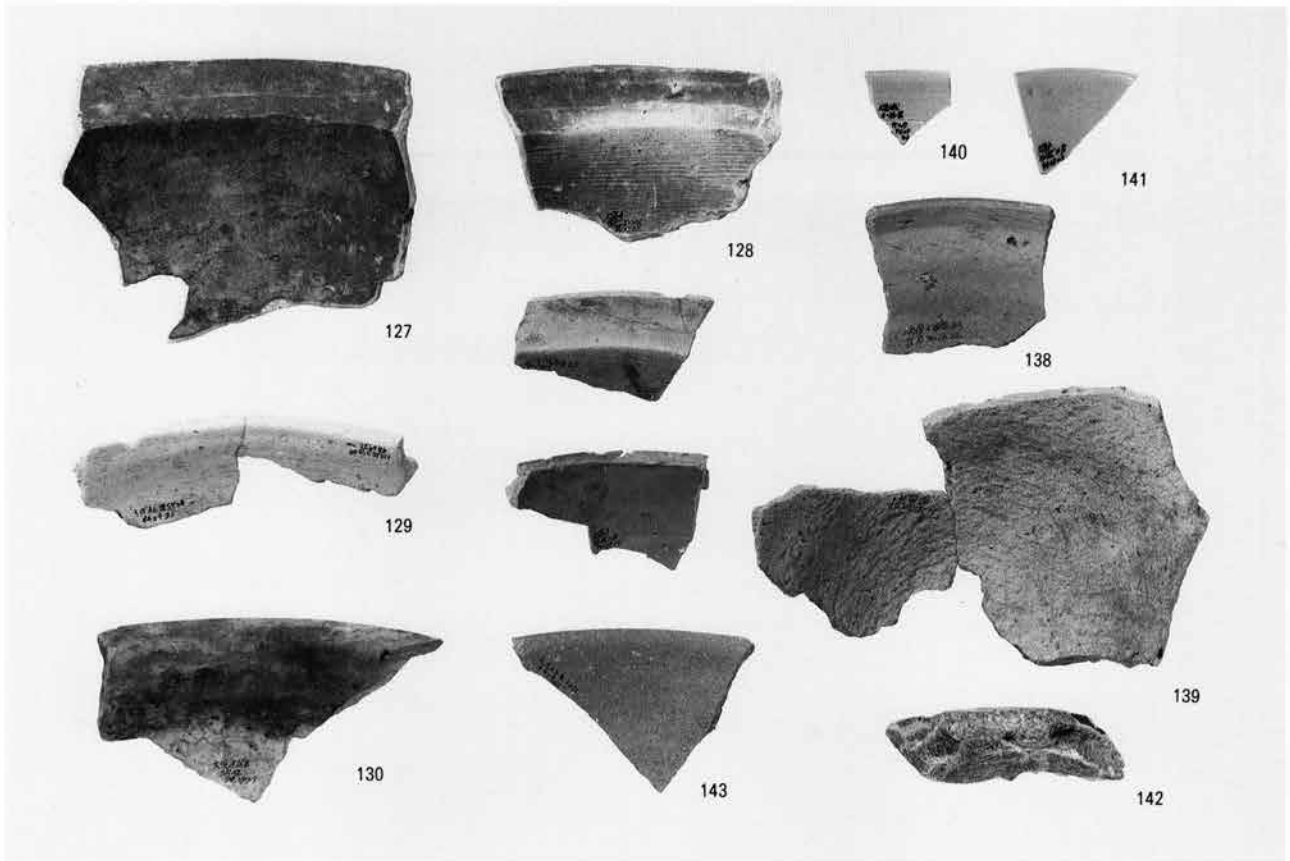
122



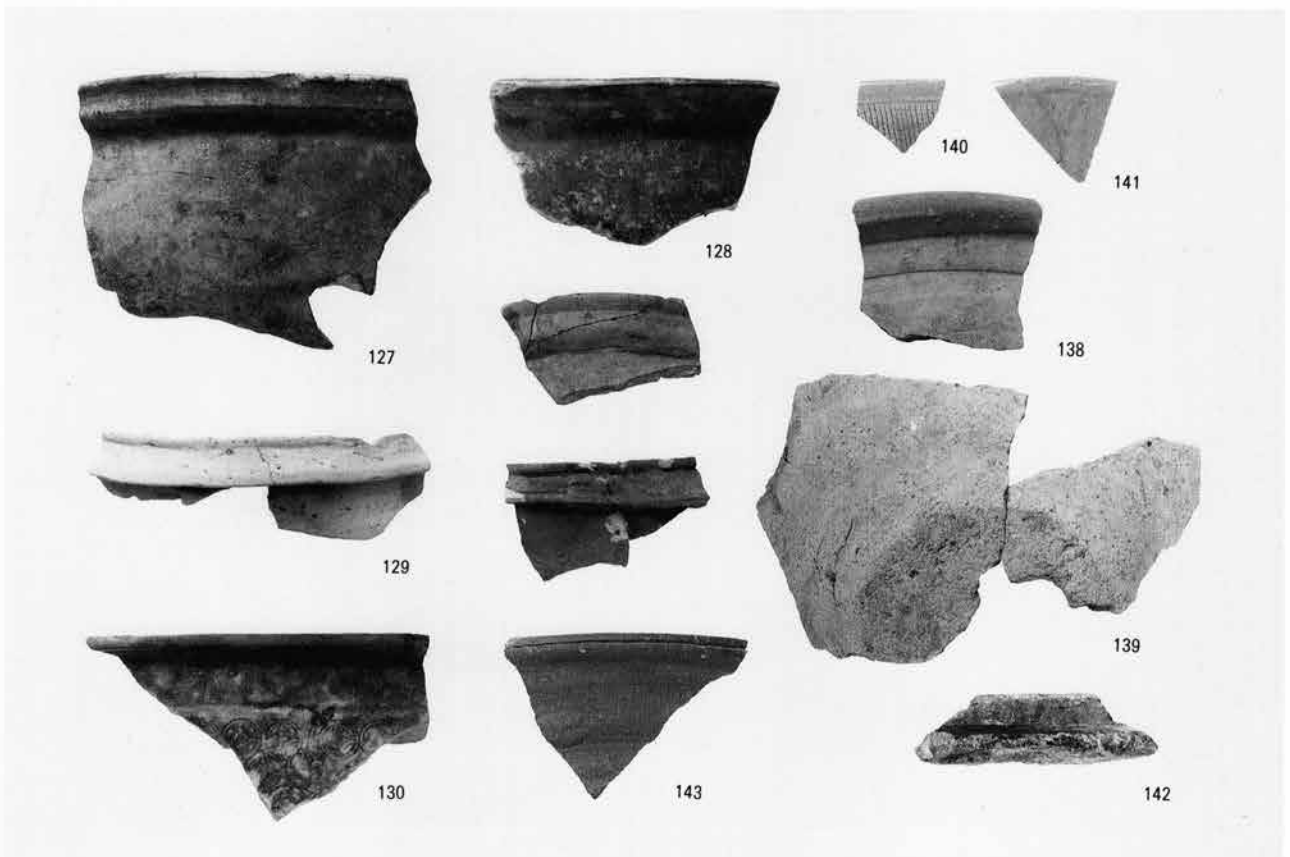
124



122



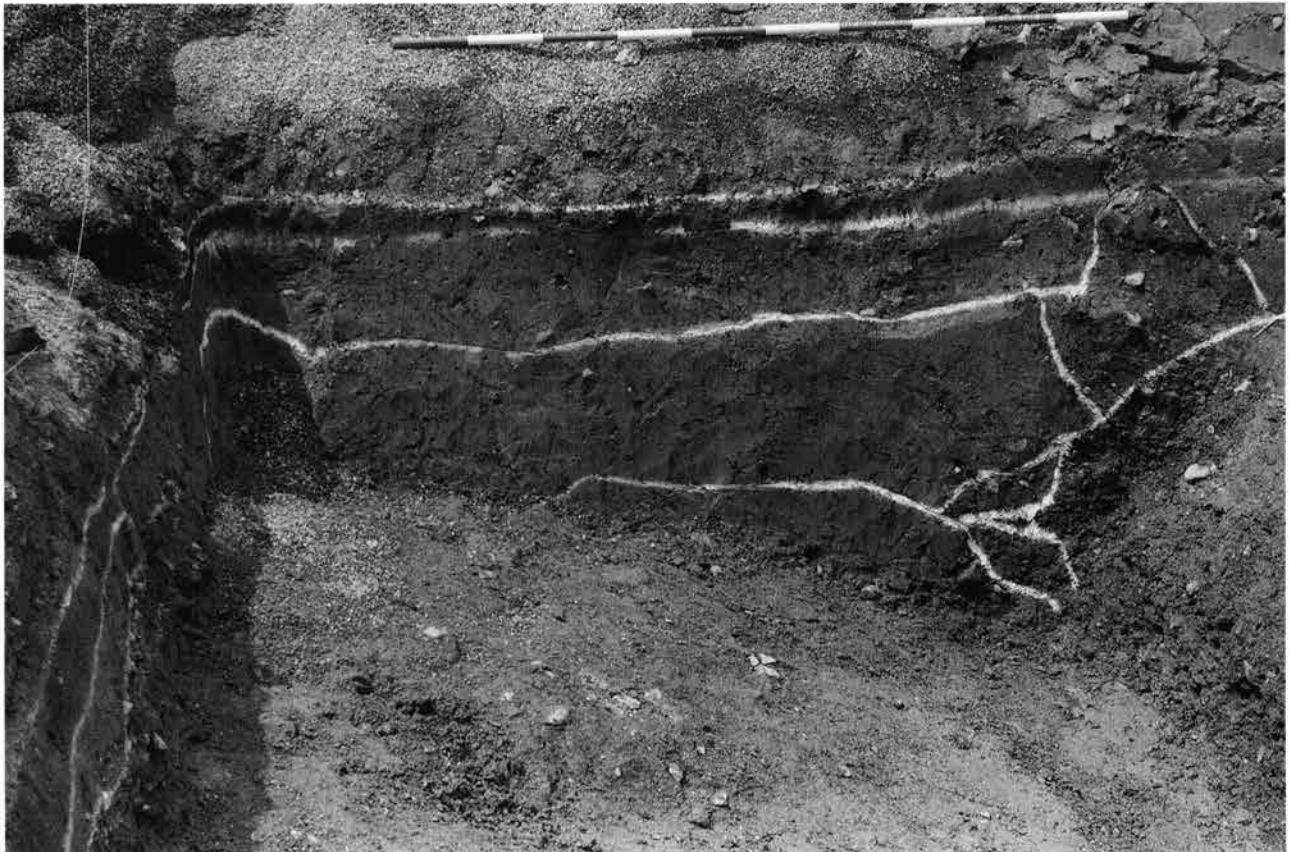
(1)A' 地区出土遺物



(2)同上外面



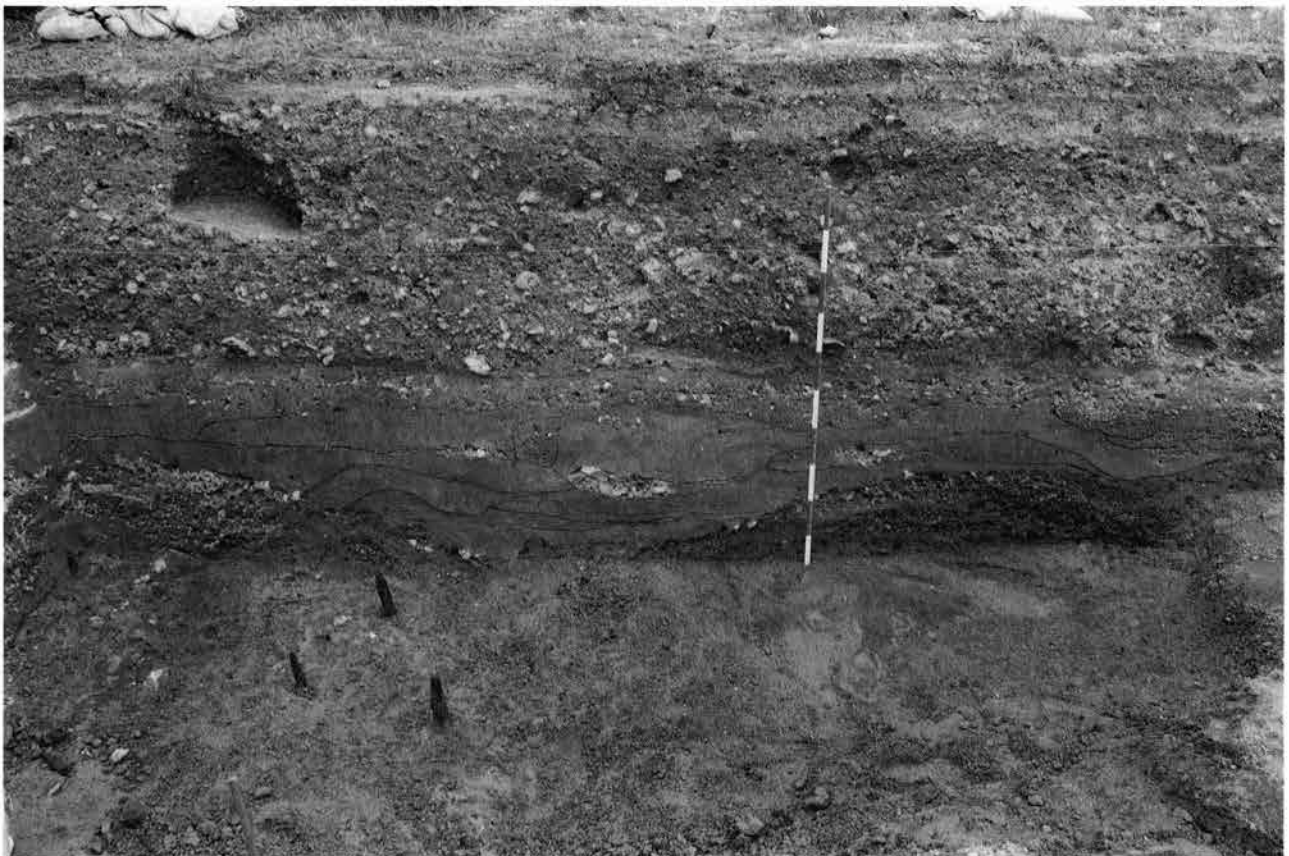
(1)第1トレンチ完掘状況(南東から)



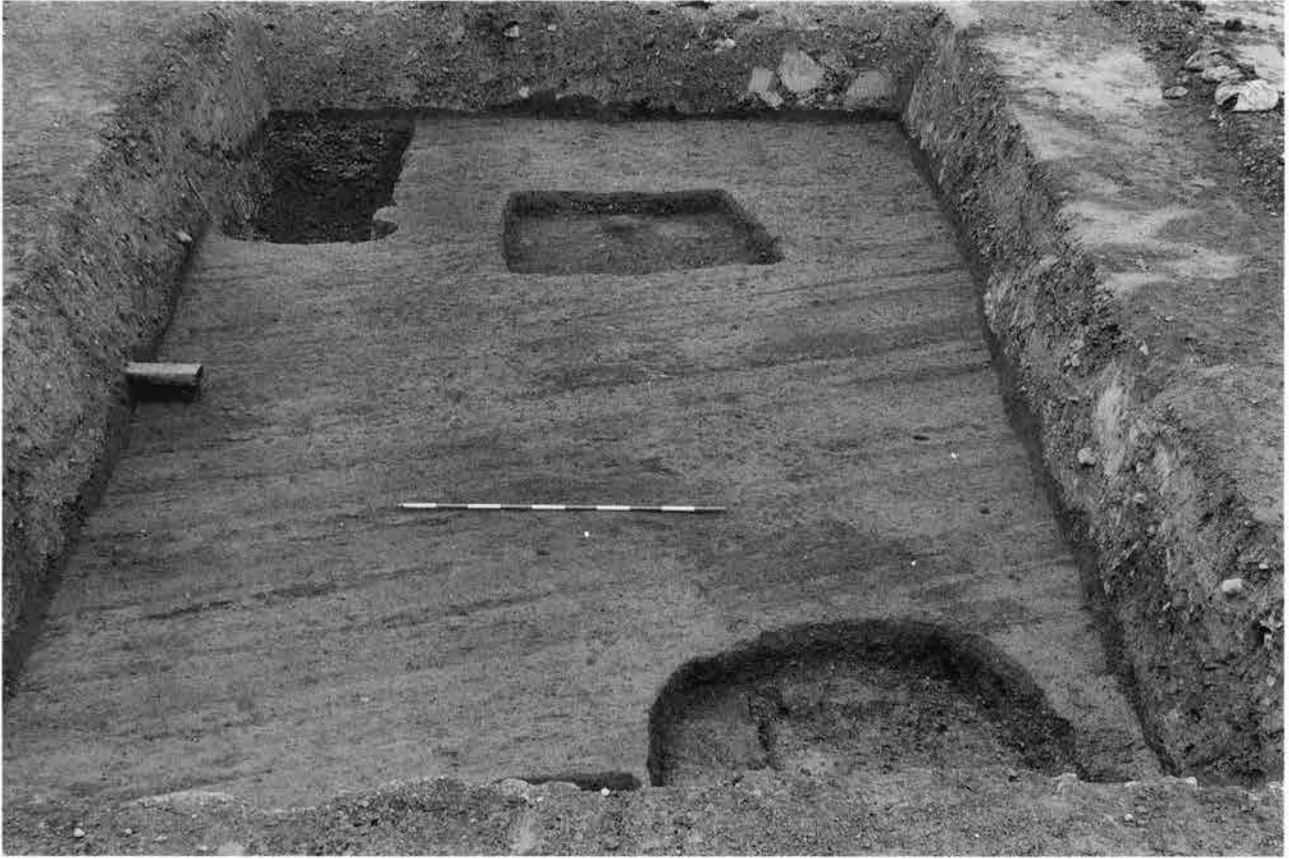
(2)第1トレンチ土層堆積状況(北東から)



(1)第2トレンチ完掘状況(南から)



(2)第2トレンチ土層堆積状況(西から)



(1)第3トレンチ近世耕作溝検出状況（東から）



(2)第3トレンチ近世耕作溝検出状況（南から）



(1)調査地遠景（東から）



(2)調査地遠景（北から）



第4トレンチ空中写真（上方が北）



(1)第4トレンチ平安時代後期  
井戸S E36663検出状況  
(北から)



(2)第4トレンチ平安時代後期  
井戸S E36663断ち割り  
(西から)



(3)第4トレンチ平安時代後期  
井戸S E36663曲物検出状況  
(西から)





(1)第4 トレンチ平安時代後期井戸 S E 36668検出状況 (西から)



(2)第4 トレンチ平安時代後期井戸 S E 36660完掘状況 (南から)



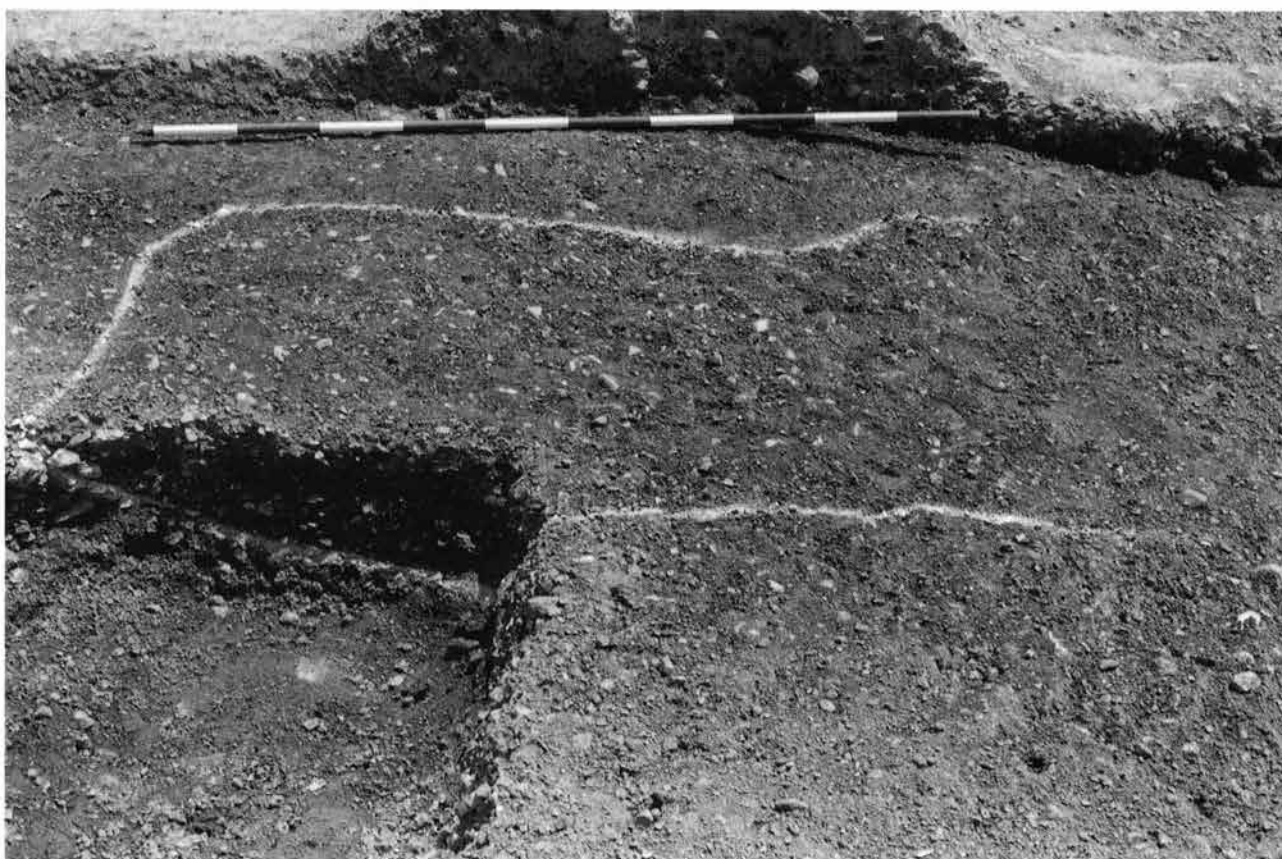
(1)第4トレンチ平安時代後期ピット群検出状況(南西から)



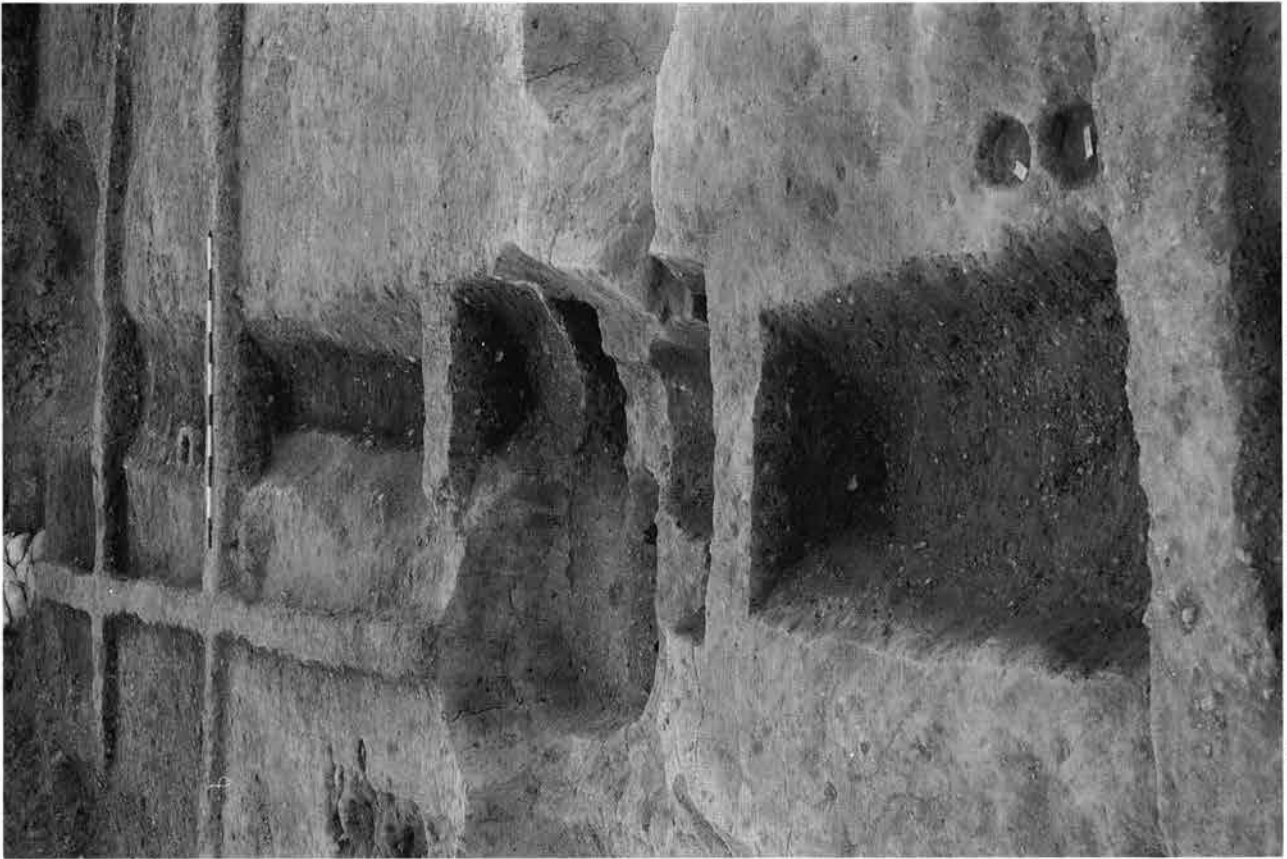
(2)第4トレンチ平安時代後期ピット柱痕検出状況(北から)



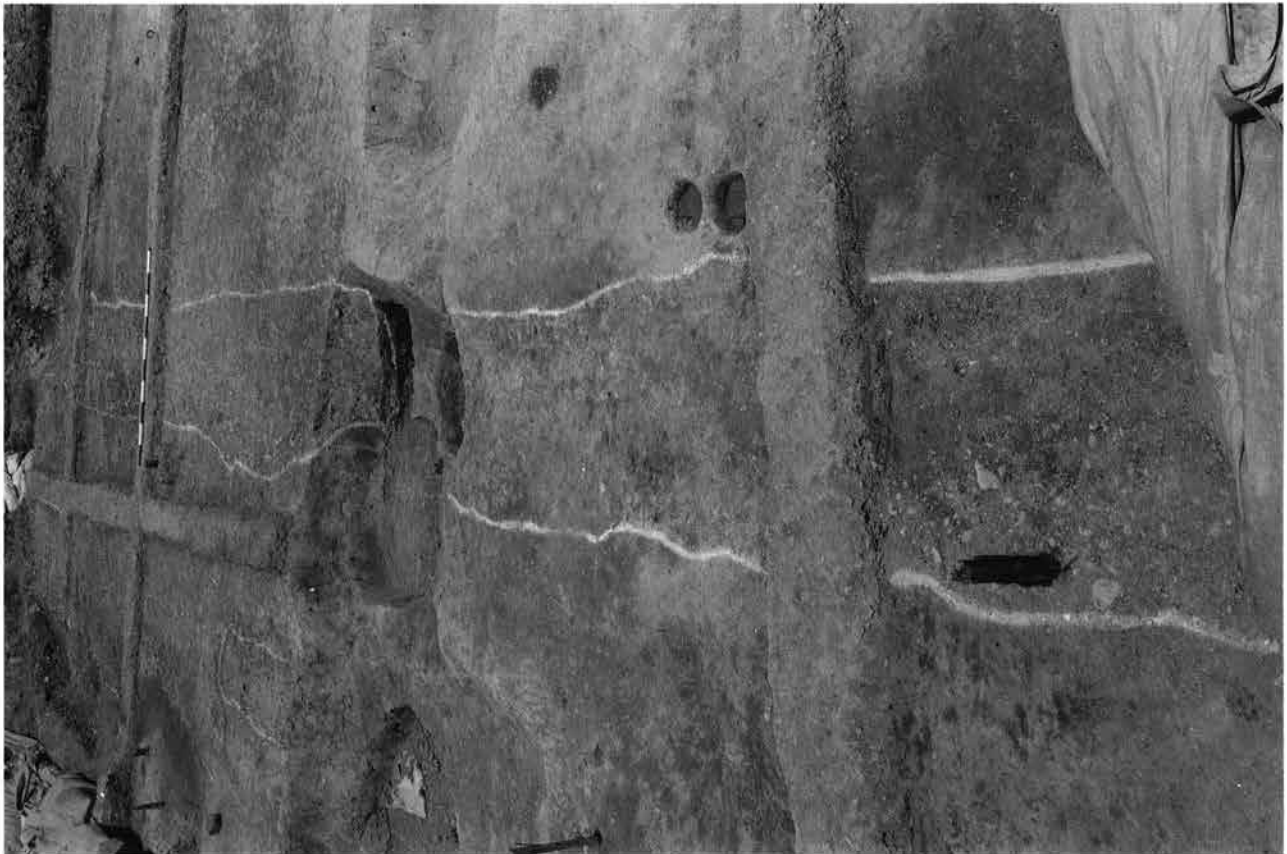
(1)第4 トレンチ平安時代溝S D35313屈曲部検出状況（東から）



(2)第4 トレンチ平安時代溝S D35313屈曲部検出状況（北から）



(2)第4トレンチ長岡京期溝 S D36606完掘状況 (南から)



(1)第4トレンチ長岡京期溝 S D36606検出状況 (南から)



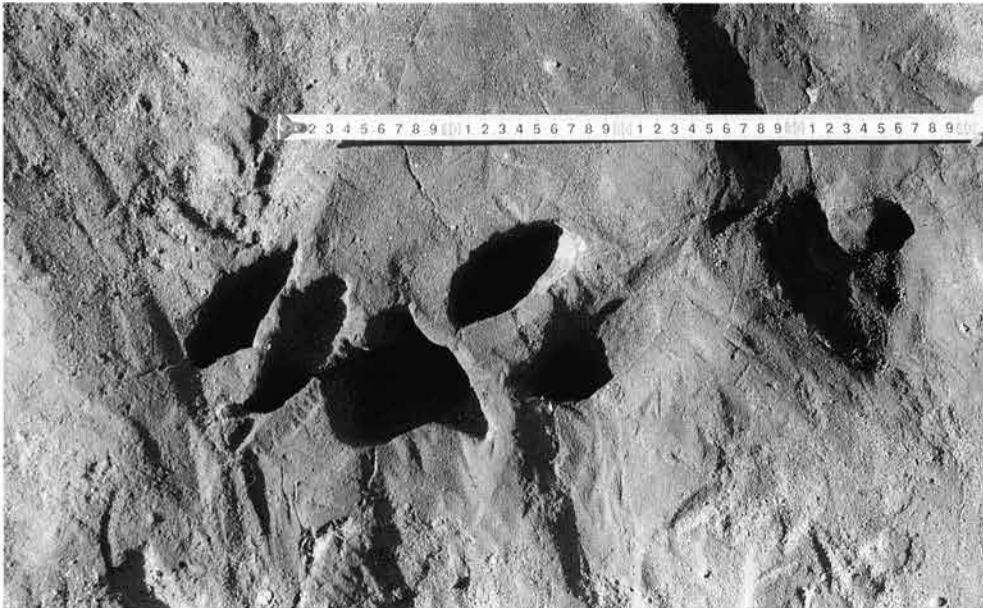
(1)第4トレンチ長岡京期落ち込みS X36669遺物出土状況(南西から)



(2)第4トレンチ四条条間小路周辺整地層遺物出土状況(南から)



(1)第4トレンチ偶蹄目足跡検出状況（西から）



(2)第4トレンチ偶蹄目足跡検出状況（西から）



(3)第4トレンチ偶蹄目足跡検出状況（北から）



(2)第4トレンチ奈良時代杭列空中写真(北東から)



(1)第4トレンチ奈良時代杭列空中写真(南西から)



(1)第4トレンチ奈良時代杭列  
S X36675検出状況  
(北東から)



(2)第4トレンチ奈良時代杭列  
S X36675検出状況  
(北東から)



(3)第4トレンチ奈良時代杭列  
S X36675検出状況  
(南東から)



(1)第4トレンチ奈良時代杭列  
S X 36604・S X 36675  
検出状況(西から)



(2)第4トレンチ奈良時代杭列  
S X 36675検出状況  
(北東から)

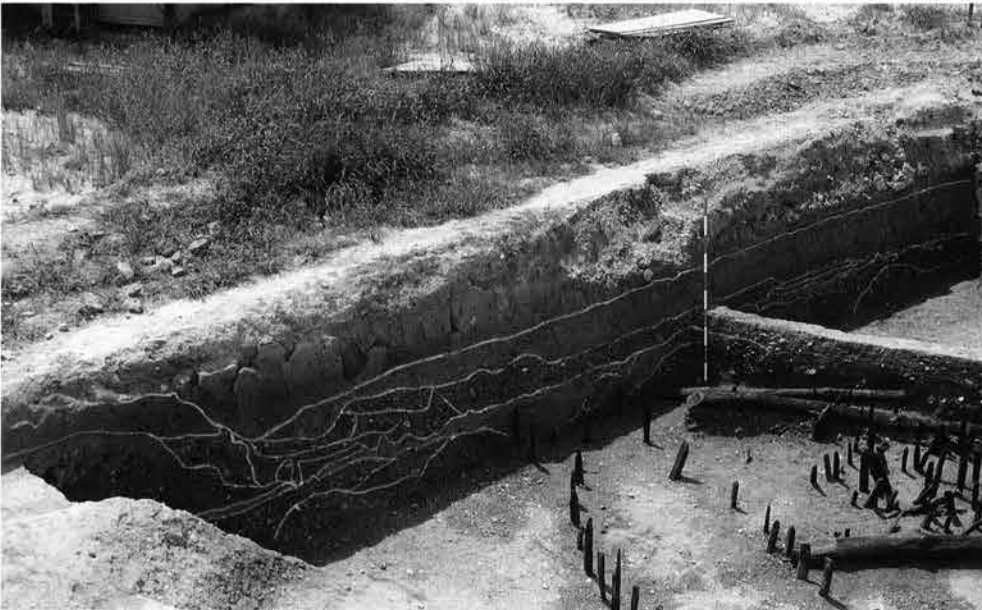


(3)第4トレンチ奈良時代杭列  
S X 36604・S X 36675  
検出状況(北東から)





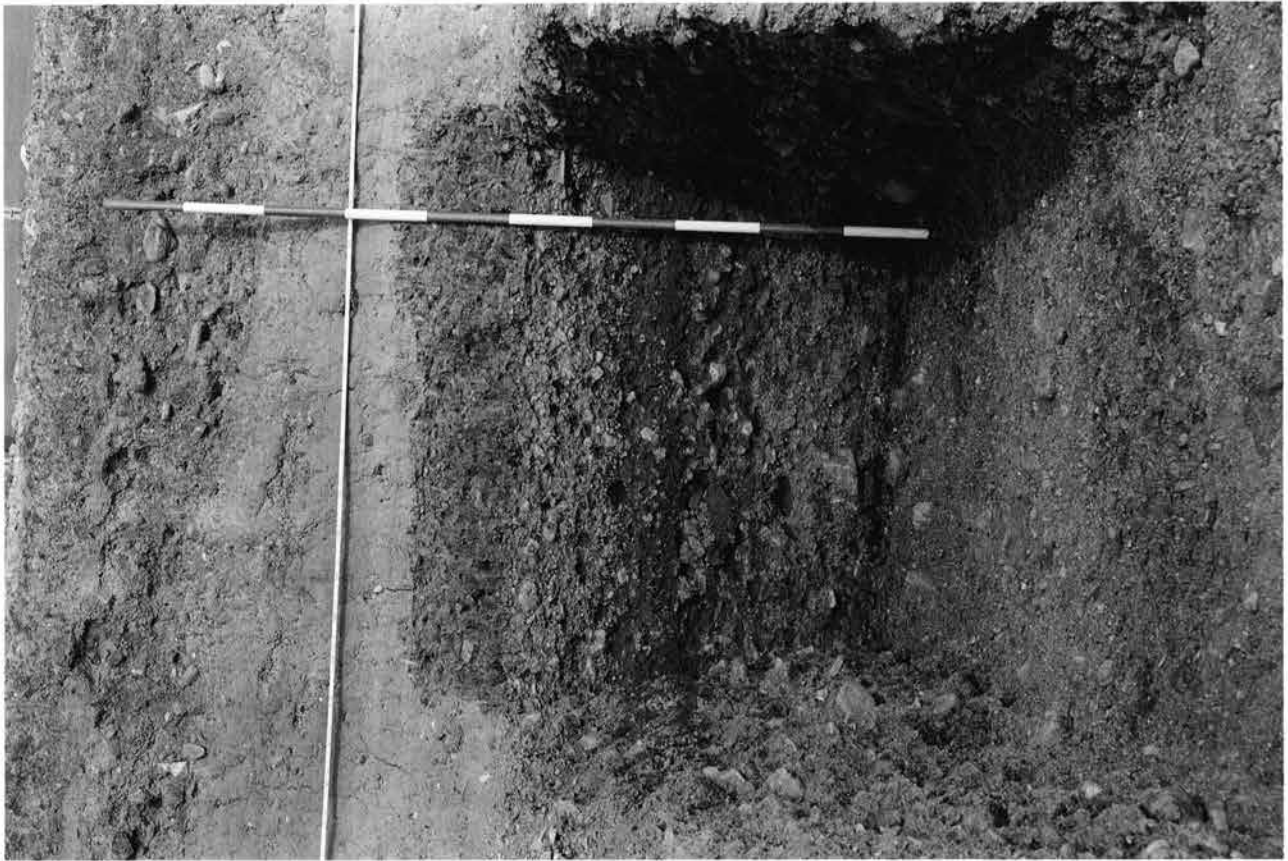
(1)第4トレンチ奈良時代杭列  
S X36604検出状況  
(南西から)



(2)第4トレンチ奈良時代杭列  
S X36604・S X36675断面  
(東から)



(3)第4トレンチ奈良時代杭列  
S X36675断ち割り  
(南西から)



(2)第4トレンチ北壁 Y = -26.440付近土層堆積状況 (南から)



(1)第4トレンチ土層堆積確認用断ち割り坑断面 (西から)



(1)第4トレンチ古墳時代前期溝S D36671・S D36673検出状況(南から)



(2)第4トレンチ古墳時代前期溝S D36671・S D36673検出状況(北から)



(1)第4トレンチ古墳時代前期溝S D36673完掘状況(南から)



(2)第4トレンチ古墳時代前期溝S D36671完掘状況(南から)



(1)第4トレンチ古墳時代前期S D36673断面(南西から)



(2)第4トレンチ作業風景



(1)第4トレンチ古墳時代前期溝S D36671完掘状況（北西から）



(2)第4トレンチ古墳時代前期遺構検出状況（南西から）



(2)第5トレンチ完掘状況(南から)



(1)第5トレンチ完掘状況(北から)





(1)第6 トレンチ近世耕作溝検出状況（西から）



(2)第6 トレンチ近世耕作溝完掘状況（西から）

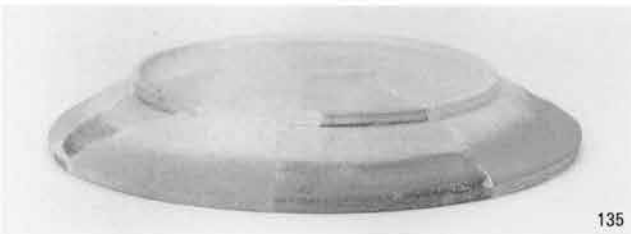


(1)第8トレンチ全景(北東から)

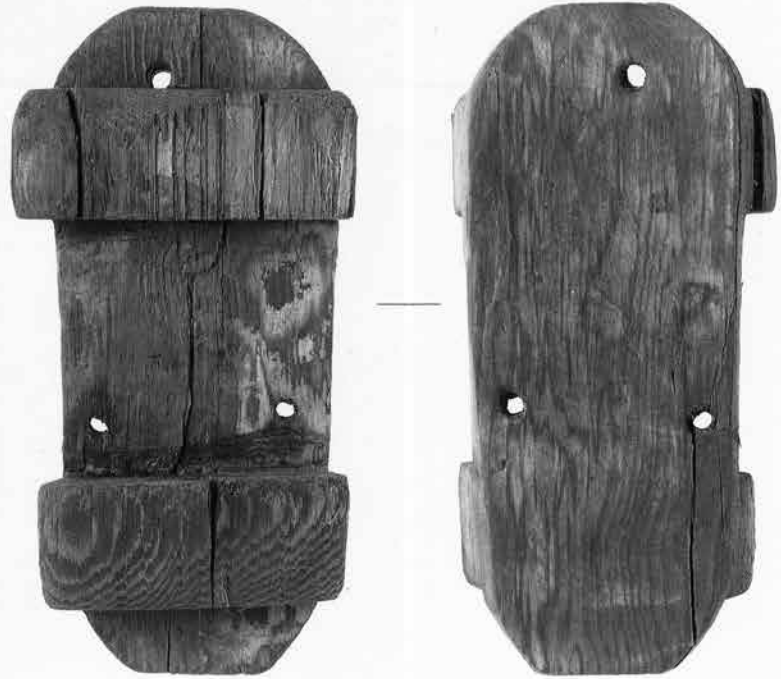


(2)第8トレンチ土層堆積状況(南から)





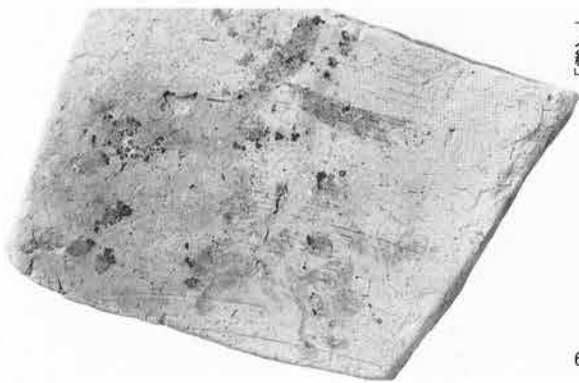




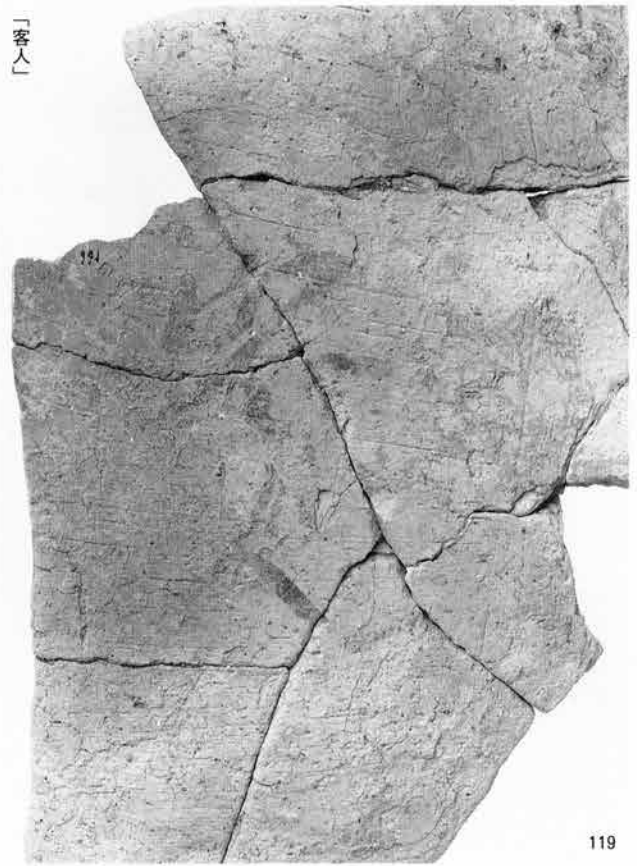
「客人」

146

「人給」



63

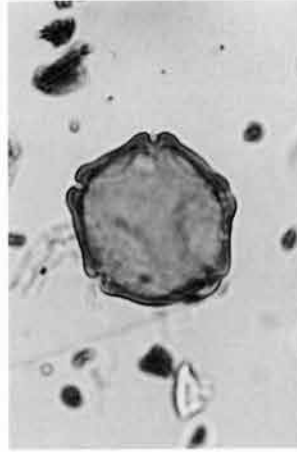


119

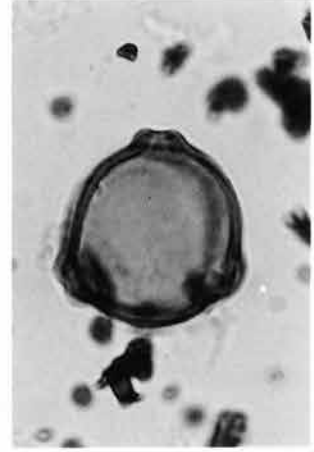
出土遺物(4)



1 ツガ属



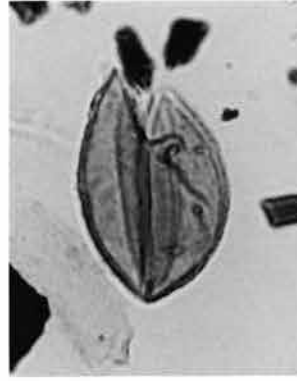
2 ハンノキ属



3 カバノキ属



4 マツ属複維管束亜属



5 スギ



6 仔イ科-イガヤ科-ヒタ科



7 クリーシイ属



8 ブナ属



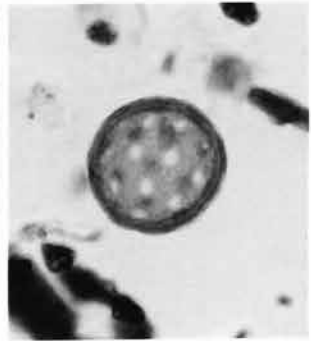
9 コナラ属コナラ亜属



10 コナラ属アカガシ亜属



11 イネ属型



12 アカザ科-ヒユ科



13 ナデシコ



14 アブラナ科

45 μm



1 ソバ属



2 ソバ属



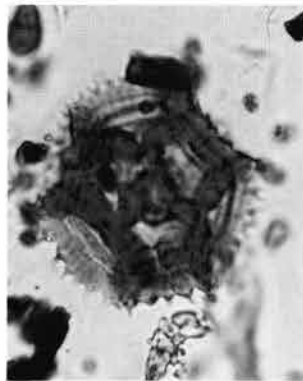
3 ソバ属



4 セリ科



5 オオバコ属



6 タンポポ亜科



7 シダ植物三条溝胞子



8 鞭虫卵



9 鞭虫卵



10 毛頭虫類卵

45  $\mu$  m





1a コムギ果実



1b 同左



1c 同左 — 0.6mm



2 イネ科類 — 0.4mm



3 ホタルイ属果実 — 0.4mm



4 カヤツリグサ属果実 — 0.2mm



5 カヤツリグサ科A果実 — 0.2mm



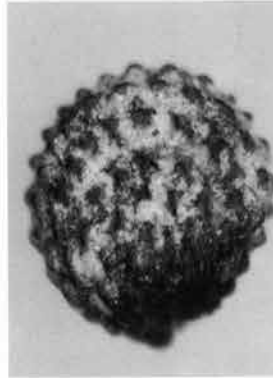
6 コナギ種子 — 0.2mm



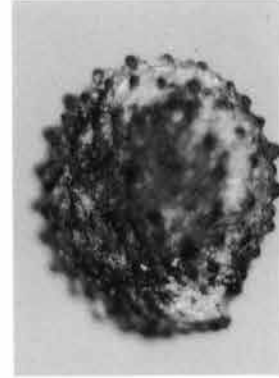
7 コナギ種子 — 0.2mm



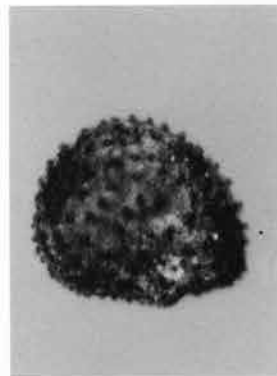
8 ギシギシ属果実 — 0.4mm



9 ナデシコ科A種子 — 0.1mm



10 ナデシコ科A種子 — 0.1mm



11 ナデシコ科B種子 — 0.1mm



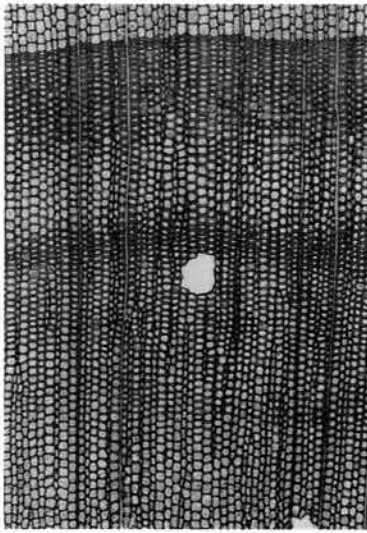
12 ナデシコ科C種子 — 0.2mm



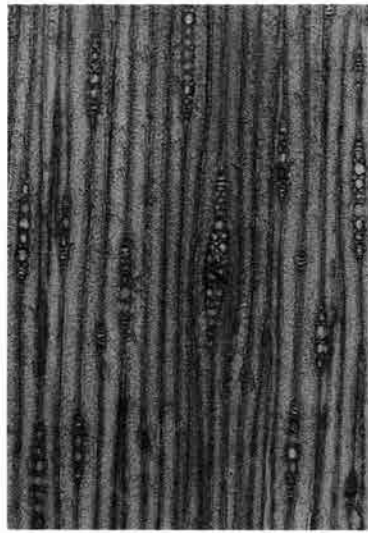
13 チドメグサ属果実 — 0.2mm



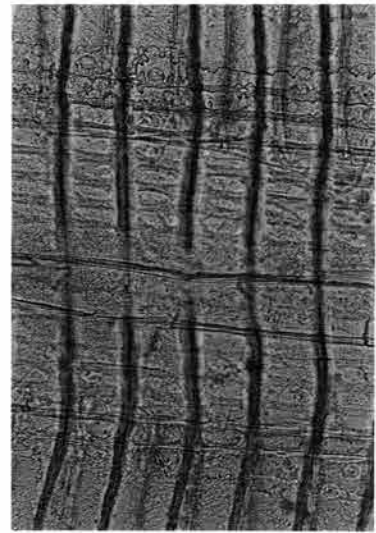
14 タカサブロウ果実 — 0.4mm



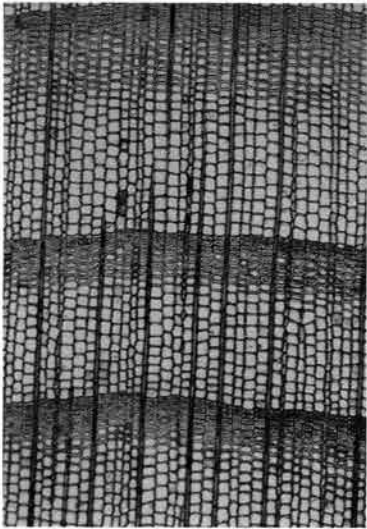
1 a. マツ属複雑管束亜属 (横断面)  
1 bar:0.5mm



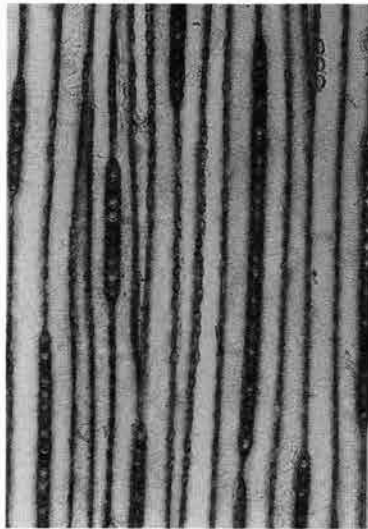
1 b. 同 (接線断面)  
bar:0.2mm



1 c. 同 (放射断面)  
bar:0.1mm



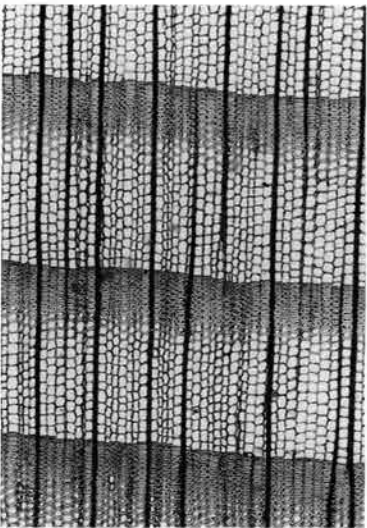
2 a. モミ属 (横断面)  
5 bar:0.5mm



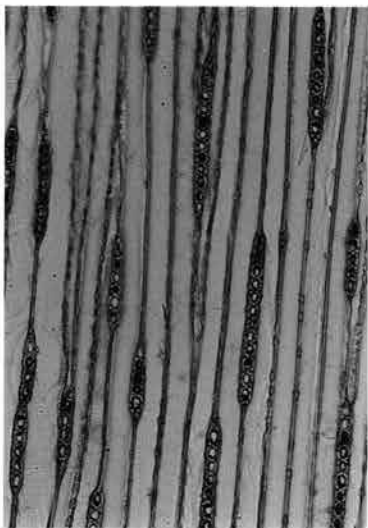
2 b. 同 (接線断面)  
bar:0.2mm



2 c. 同 (放射断面)  
bar:0.05mm



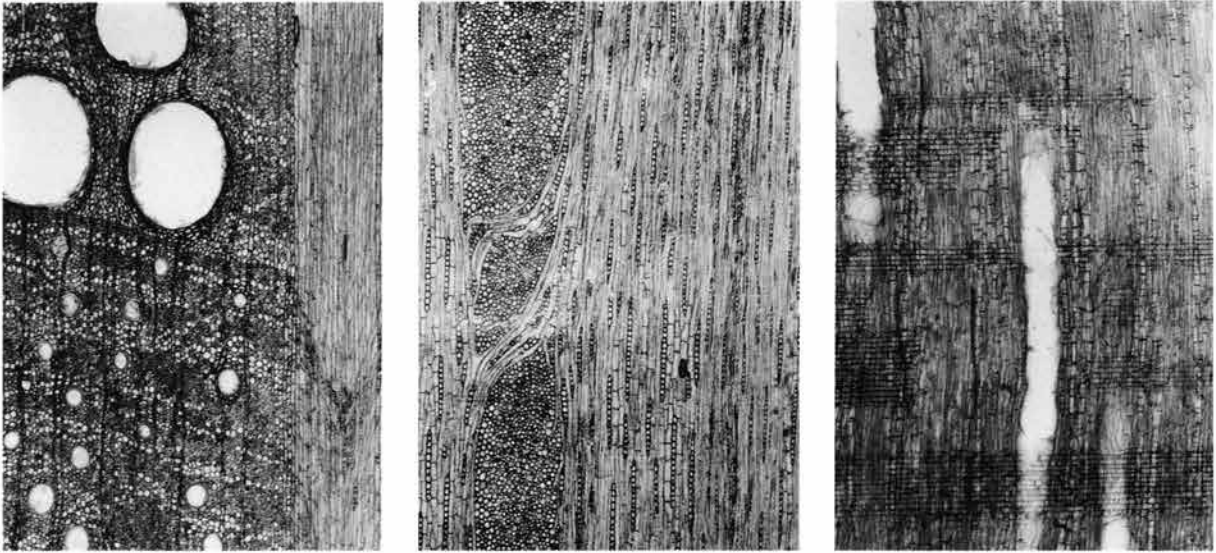
3 a. ツガ属 (横断面)  
6 bar:0.5mm



3 b. 同 (接線断面)  
bar:0.2mm



3 c. 同 (放射断面)  
bar:0.05mm

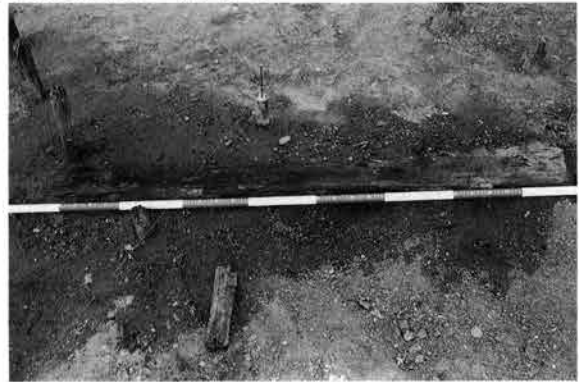


4 a.クヌギ節（横断面）2bar:0.5mm — 4 b.同（接線断面）bar:0.5mm ——— 4 c.同（放射断面）bar:0.5mm

奈良時代流路S X36604・杭列S X36675 出土木材樹種の顕微鏡写真Ⅱ（付載2）



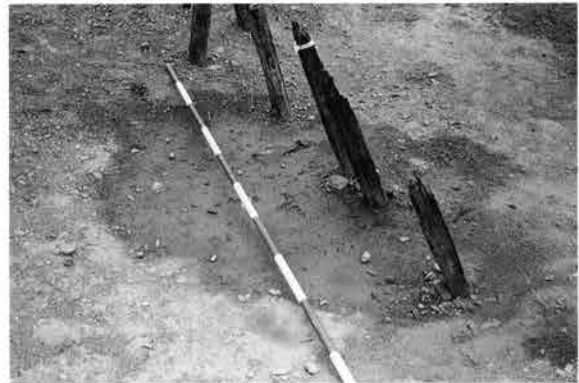
(1)試料1（流路S X36604）



(2)試料2（杭列S X36675）



(3)試料3（流路S X36604）



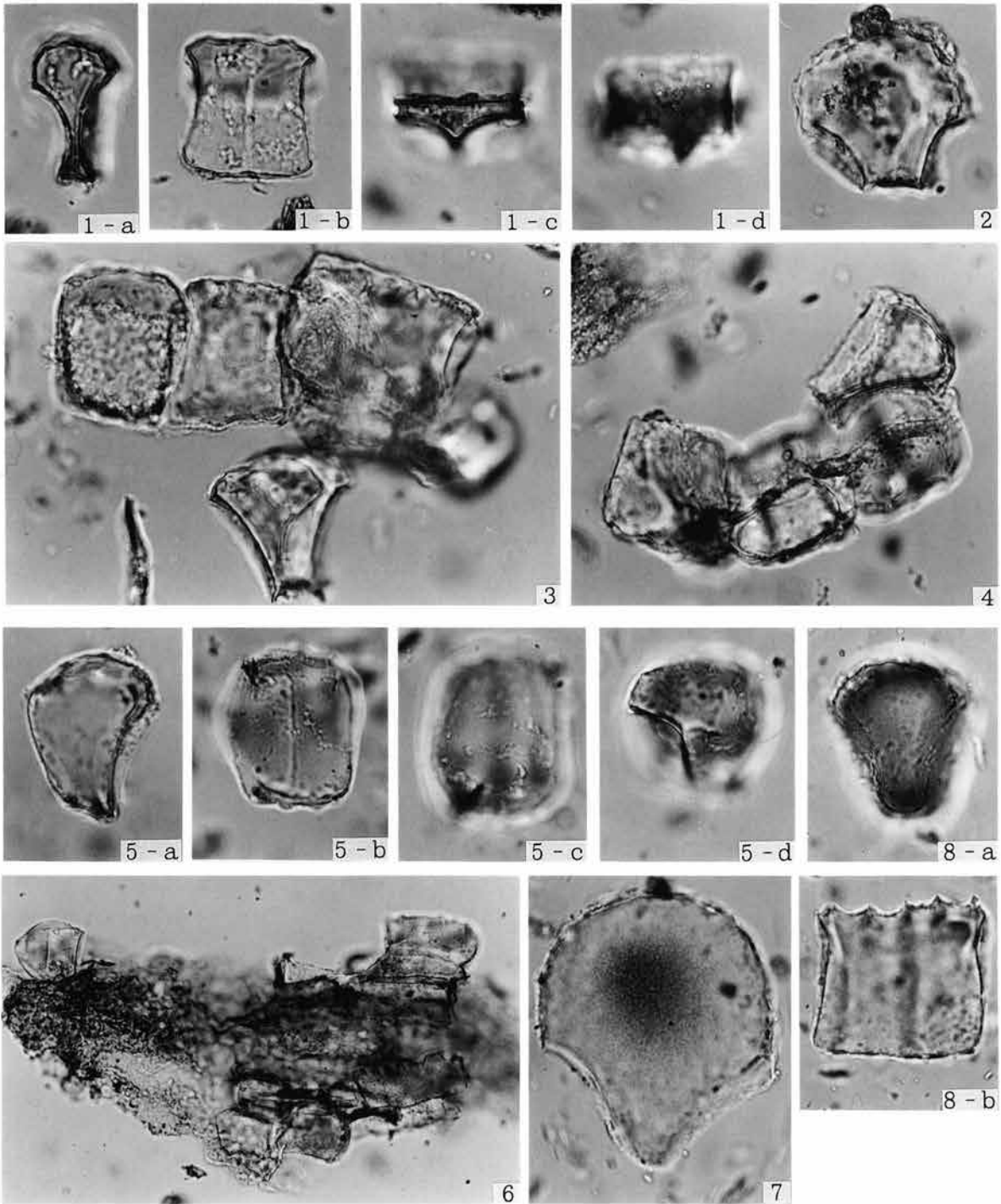
(4)試料4（杭列S X36675）



(5)試料5（流路S X36604）



(6)試料6（杭列S X36675）



bar : 30 $\mu$ m

1, 2, 5, 7, 8: ——— 3, 4: ——— 6: ———

古墳時代前期・土坑S K36672 出土植物遺体の機動細胞珪酸体 (付載3)

1・2: イネ (1-a, 2: 断面、1-b: 側面、1-c: 表面、1-d: 裏面)

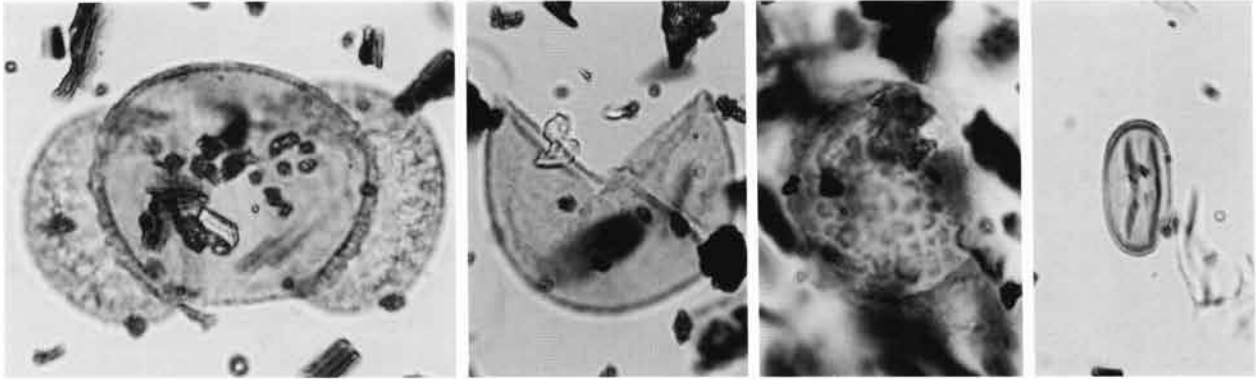
3・4: 連なった状態のイネの機動細胞珪酸体

5: キビ族 (5-a: 断面、5-b: 側面、5-c: 表面、5-d: 裏面)

6: キビ族 (葉組織内の植物珪酸体 (機動細胞珪酸体など))

7: ヨシ属 (断面)

8: ネザサ節型 (8-a: 断面、8-b: 側面)

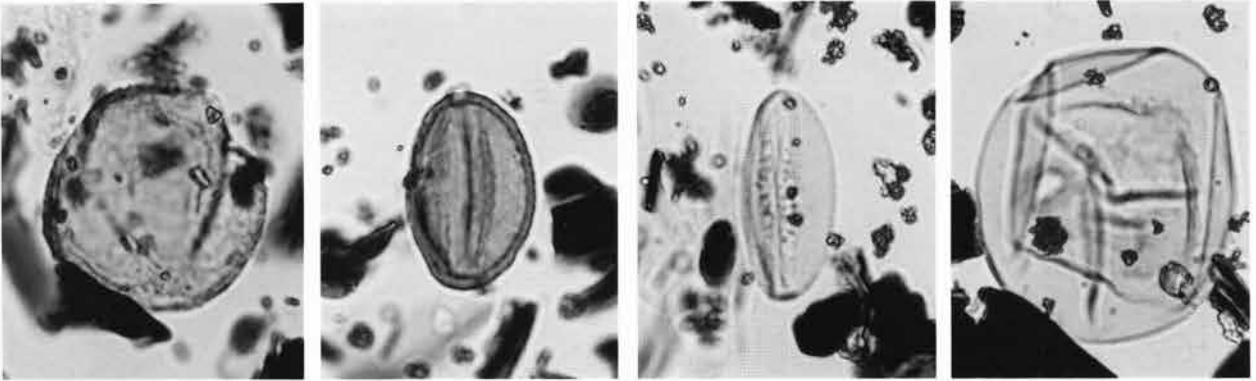


1 マツ属複維管束亜属

2 スギ

3 コウヤマキ

4 クリーシイ属

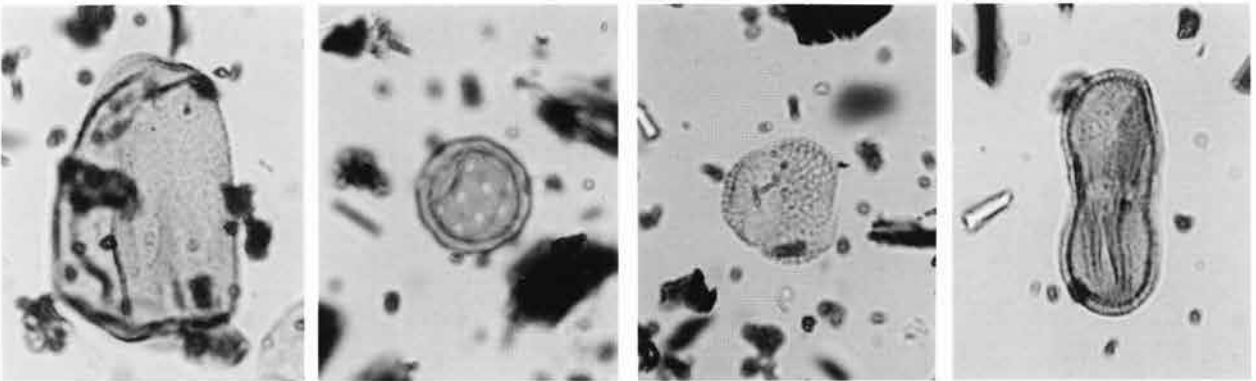


5 コナラ属コナラ亜属

6 コナラ属アカガシ亜属

7 トチノキ

8 イネ科

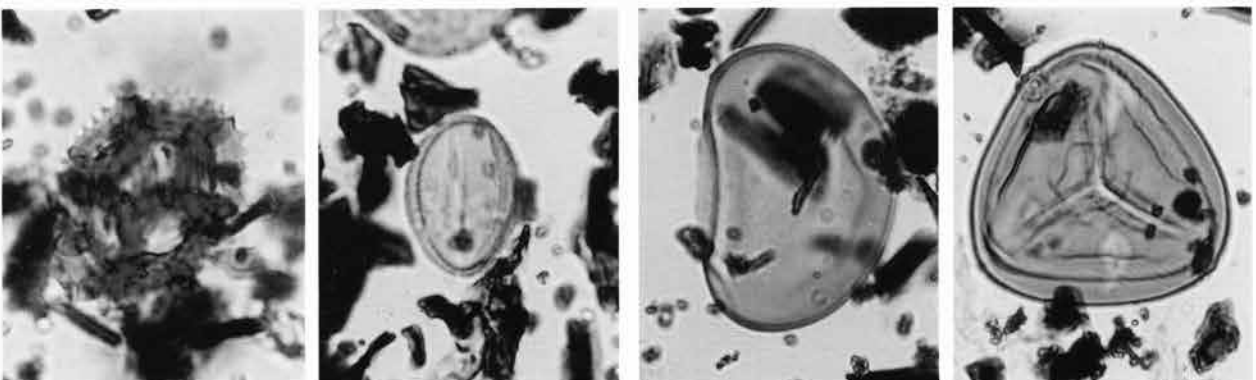


9 カヤツリグサ科

10 アカザ科-ヒユ科

11 アブラナ科

12 セリ科



13 タンポポ亜科

14 ヨモギ属

15 シダ植物単条溝胞子

16 シダ植物三条溝胞子

45 μ m

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第75冊							
編著者名	村田和弘・奥村清一郎・尾崎昌之・引原茂治・森島康雄・大岩洋一・小池 寛・井之本泰							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone	075(933)3877			
発行年月日	西暦 1997 年		3 月		26 日			
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつがさき いせき	たけのぐんあみの ちょうおおあざき づ							
松ヶ崎遺跡	竹野郡網野町大字 木津	501	37	35° 38' 55"	134° 58' 25"	19960508 ~ 19960809	280	道路改良
くわはらぐ ちこふんぐ ん	みやづしあざきた							
桑原口古墳 群	宮津市字喜多	205		35° 30' 49"	135° 11' 41"	19950615 ~ 19950712	30	道路建設
しろやまだ にこふんぐ ん	みやづしあざおだ							
城山谷古墳 群	宮津市字小田	205		35° 30' 0"	135° 11' 5"	19950523 ~ 19950602	40	道路建設
おだおた にこふん	みやづしあざおだ							
小田大谷古 墳	宮津市字小田	205		35° 30' 5"	135° 11' 8"	19950605 ~ 19950608	30	道路建設
おだえびす だにこふん	みやづしあざおだ							
小田蛭子谷 古墳	宮津市字小田	205		35° 29' 43"	135° 10' 58"	19950607 ~ 19950621	30	道路建設
くわはらぐ ちいせき	みやづしいまふく あざくわはらぐち							
桑原口遺跡	宮津市今福字桑原 口	205	31	35° 30' 52"	135° 11' 36"	19950623 ~ 19951215	700	道路建設
おおまた しょうあと	まいづるしおおあ ざおおまたこあざ べっそうだいら							
大俣城跡	舞鶴市大字大俣小 字別荘平	202	265	35° 25' 55"	135° 12' 25"	19940914 ~ 19950908	3,500	道路建設

ながおか きょうあと さきょうだ い366じ 長岡京跡左 京第366次	むこうしかみうえ のちょういけのじ り・だいもん・か まかつら・ひづめ 向日市上植野町池 ノ尻・大門・釜 桂・樋爪	208	13	34° 55' 49"	135° 42' 38"	19950424 ～ 19951222	3,460	団地建設
なかふくち いせき 中福知遺跡	むこうしかみうえ のちょういけのじ り・だいもん・か まかつら・ひづめ 向日市上植野町池 ノ尻・大門・釜 桂・樋爪	208	42	34° 55' 49"	135° 42' 38"	19950424 ～ 19951222	3,460	団地建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
松ヶ崎遺跡	散布地	弥生・奈良		溝・護岸施設		弥生土器・須恵器・ 木製品・石器		
桑原口古墳 群	古墳状隆起			なし		なし		自然地形
城山谷古墳 群	古墳状隆起			なし		なし		自然地形
小田大谷古 墳	古墳状隆起			なし		なし		自然地形
小田蛭子谷 古墳	古墳状隆起			なし		なし		自然地形
桑原口遺跡	集落	弥生		竪穴住居		弥生土器		
大俣城跡	山城	平安・戦国		曲輪・土塁・竪堀・横堀・堀 切・城道・虎口・掘立柱建物 柵列・土坑・溝・土壇墓(平 安)		土師器・瓦質土器・ 国産中世陶器・中国 製陶磁器・金属製品 銭貨・石製品		
長岡京跡左 京第366次	都城	長岡京期		条坊側溝・溝		須恵器・土師器・軒 丸瓦		
中福知遺跡	集落・耕作地	古墳・奈良・平安 鎌倉・南北朝・室 町		溝・土坑・流路・杭列・柱穴 井戸・素掘り溝		土師器・下駄・人形 瓦器・中国製白磁・ 五輪塔		

## 京都府遺跡調査概報 第75冊

平成9年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Phone (075)256-0961 (代)